

リトルバスターズ in
Angel Beats!

風並將吾

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

少年——棗恭介が目覚ますと、そこは何処かの学校の保健室の中だった。現状が掴めない恭介だったが、やがて恭介の前に『立華奏』と名乗る一人の少女が現れる。そしてこの出会いこそが、彼らの物語の始まりだった……。

『リトルバスターズ!』と『Angel Beats!』の、まさかのコラボ作品！（本編の都合上、理樹と鈴は『死後の世界』には登場しません）恭介達リトルバスターズメンバーがどのような活躍を見せるか、そして彼らがどのようなような人生賛歌を奏でてくれるのかにご期待ください！ちなみに、原作の話に沿っておりますが、オリジナルの話も交えてあったり、中身が多少変わってたりします。

目次

本編

s c h o o l	173	e p i s o d e 5	e	78	e p i s o d e 3	e p i s o d e 2	u s t e r s !	e p i s o d e 1
		G u i l d		D e p a r t u r	M u s i c	S S S		L i t t l e
241			105			31	1	B

e p i s o d e 3	l i a t i o n	e p i s o d e 2	A f f a i r	e p i s o d e l l	t e F l a v e r	e p i s o d e l 0	e p i s o d e 9	336	e p i s o d e 8	301	e p i s o d e 7
A l i v e		R e c o n c i		F a m i l y		F a v o r i	D a y		A D a y		M y s o n g
	528		472		416	364	e G a m e				

本編

episode Little Busters!

「ん……」

少年は、ふと目覚めた。

最初に見えた光景は何処かの天井みただった。

白くて、日頃しよっちゅう見るだろうと思われる天井。

そして、鼻で感じられる消毒液等の匂い。

「……病院？」

まず少年が思い浮かべたのは、その可能性だった。

しかし、近くに心電図などの医療器具がないことから、それは違うんだということに気付いた。

そして何より、ふと首を右に向けて窓から外を眺めてみたら、そこには学校のグラウンドらしきものがあつた。

「……ここは、何処かの学校の保健室なのか？」

白い布団をかけられて、白いシートの上で眠っていた、茶髪の少年は、身体を少し起

こして、周りを見て、色々と確かめてみる。

すると、左側にある仕切りみたいな所に、恐らく自分のであろう制服を発見した。

しかし、それは少年が以前着ていた制服とは、違うものであった。

黒を基本としたブレザータイプの制服という点では以前のもと同じなのだが、デザインが微妙に違っていた。

「……どういふことだ？」

少年は、一人呟く。

そんな時だった。

ガラツと、扉が開かれる音がして、誰かが少年に近づいてくるのが気配でも音でも分かった。

そしてその人物は、少年の横に立ち、

「気が付いた？」

一言、そう尋ねた。

「あ、ああ……まあな」

少年は、その人物の姿を目で確認する。

まず性別は女子。

白くて長い髪の毛、美少女を思わせるような顔つき、しかし顔にはおよそ読み取れる

程の感情はなかった。

身長は恐らく女子の平均よりも少し小さいくらい。

少女を一言で表すのなら、『天使』という言葉が正しいのだろう。

「……何か？」

「ああ、いや。何でもない」

あまりに少年が少女の顔をじっくり眺めていた為に、少女がそう尋ねてきた。

少年は素直にその事を詫びて、

「……()は？」

「保健室よ」

「やっぱりか」

先程から気になっていた質問を少女にし、そしてそれがおおよそ正しかったことを理

解した少年は、一人で勝手に納得していた。

「貴方が校舎の前で倒れてたから。ここまで連れてきた」

「……俺、外で寝てたのか？」

「ええ」

「しかも、コンクリートの上で？」

「……ええ」

少女からその事実を聞いて、少年は少し呆れを感じていた。

目の前にいる少女ではなく、そんな場所で居眠りをしていた自分にだ。

「……居眠り？」

ここで少年は、ふと気になることを発見した。

それは、どうして自分がここにいるのか。

そして、どうやってこの学校に来たのかということだ。

ご丁寧に制服まで変わっている部分があった、少年の疑問をより助長させていた。

「……なあ、アンタに一つ聞きたいことがあるんだが……えっとその前に、アンタの名前は？」

「私の名前？」

とりあえず疑問をぶつけて見る前に、少年はまず相手の少女の名前を聞く。

名前を聞いておいた方が何かと便利だからだ。

「私は立華。立華奏（たちばなかなで）」

「俺は棗恭介（なつめきょうすけ）……で、一つ聞きたいことがあるんだ。立華、いいか？」

「……（コクツ）」

少年——恭介は、奏に一言断り文句をつけた後に、こう尋ねた。

「単刀直入に、手短に聞く……ここは、どこだ？」

それは恭介が一番聞きたかったこと。

まずは自分がどんな場所に来てしまったのかを知りたかったのだ。

「ここは学校よ」

「いや、違う……俺が聞きたいのはそんなことじゃない。俺は何故『ここに』いる？」

そして恭介は、次の瞬間に奏の口より衝撃的な言葉を聞くこととなったのだった。

「……ここが、死後の世界の学園だから」

「……は？」

「つまり……貴方は死んだの」

その一言は、恭介の思考回路を一瞬フリーズさせる程の威力を持っていた。

「……死後の、世界だって？」

「その通りよ。死因は分からないけど、貴方はすでに死んだ人間なの」

「ば……バカな!? だとしたら、ここにいる俺は一体何者なんだ!？」

「貴方は貴方。『棗恭介』君って言うんじゃないの？」

「ああそうだ。確かに俺は棗恭介だ。けど、俺はもうすでに死んでるって……!？」

次の言葉を言いかけて、恭介は気付いた。

いや、思い出したという表現が正しいのだろう。

彼は間違いなく、すでに死んでいたのだ。

それは、彼自身が一番よく知っている、して、彼が経験するはずのなかった死であった。

「……そうか。思い出したよ。俺、すでに死んでたんじゃないか……少し前に、ほんのちよつと前に、俺は命を落としてるんじゃないか……!!」

「……」

奏は、恭介が悔やんでいる間、口を挟むようなことはしなかった。

代わりに、

「……しばらく、一人にさせてくれないか？ 立華。落ち着いてよく考え直したいんだ」

「分かった。私、寮に戻ってるわね」

恭介に言われて、奏は保健室から出ていく。

保健室の中には、ベッドで半身を起こしている状態の恭介だけが残された。

「……」

窓から外を覗き込む。

外は先程も見た通りグラウンドだけしか見当たらず、そこに奏が一人、夜のグラウンドを歩いている姿だけが映っていた。

「俺は、アイツらを最後まで救い切ることが、出来なかった……」

一人、恭介は保健室の中でそう呟いた。

まるで、今までのことを悔やむかのように。

寂しそうな声で、涙を流しながら。

*

楽しい学園生活だった。

毎日『ミツシヨン』と名付けられた、所謂バカ騒ぎをして楽しんで、夜の女子寮に恭介は自らの妹を放ち、そして自らが創ると言い出した草野球チームのメンバー勧誘をさせたりと、騒がしい毎日を送っていた。

彼らは自分達のことを『リトルバスターズ』と名乗った。

リーダーは恭介自身で、最初は幼なじみメンバー五人で構成されていたのだが、気付けばいつの間にか十人近くにまで発展していた。

野球が出来る程の人数になり、恭介達はその学園の野球部に試合を申し込んだ（というより、恭介が独断で勝手に申し込んでいた）。

その試合は、僅かな所で力が及ばず、惜しくも敗北。

だけど、彼らは楽しかったのだ。

試合に負けた彼らだったが、勝ちたかったという想いも多少は残っていたが、それでも試合をやって楽しかったという嬉しさが込み上げてきたのだ。

そんなわけで彼らは最高に楽しい人生を送っていた。

ただ一つ恭介にとって気がかりだったのは、自分の妹である鈴と、幼なじみの内の一人である直枝理樹という少年の心が成長しなかったことにある。

その面に関しては、これからゆっくり強くしていけばいい。

彼の頭の中で、何処か安心感みたいなものが募ってしまっていて、理樹が言った通り、「この時間が……いつまでも続けばいいのに」

という言葉には、酷く感銘を受けた程であった。

彼の人生は、満たされていたのだ。

それが崩れたのは、理樹達の修学旅行の日であった。

修学旅行といえば、その学園では高校二年生が行く行事であった。

しかし恭介は高校三年生。

大学受験や就職活動で忙しい年である。

恭介自身も、就職活動をしている身だったのだが、楽しい行事を逃すわけにはいかないと思つた為か、そのバスに乗り込んでしまった。

もちろんバス内は大騒ぎ。

他クラスの生徒が入ってきていたのが発覚しただけではなく、今度は高校三年生の生徒まで乗り込んできていたとなると、いくらなんでも騒がずにはいられないだろう。

しかし、そんな騒ぎなどどうでもいいと感じさせる程の事件が、恭介達の身に降り注いだ。

「……………うおっ!?!」

突然バスが崖から転落し、生徒達は、そのまま……………。

*

「……………くっ」

記憶をもう一度読み直し、そして恭介は、悔やむ。

……………もう今さら悔やんだところで仕方がないのだ。

なら、恭介の人生はもう既に終わってしまったのだから。

「……………くそっ!!」

ドン!

壁を思い切り強く右手拳で殴る。

しかし、返ってきたのは痛みだけ。

失ってしまった時間というものはもう取り戻せない。

「真人と謙吾が、あの二人を守ってくれているだろうから命は無事だろう……………けど、今のままの二人だと、絶対に今後生きていけるわけがない……………!!」

恭介が悔やんでいたのは、自分があのバスに乗ってしまったことではない。

それは理樹と鈴の心を強くすることが出来なかったということに対して、だ。

もし恭介がそれを果たすことが出来ていれば、この世界に来ることもなかったのだろう。

だが、実際にはそうではなかった。

結局恭介は、あの二人の心を強くすることが出来なかった。

それが、恭介をこの世界に連れてきたきっかけだった。

「……とにかく、今日はもう寝よう。今から動くのは得策じゃねえし、今は寝て体力回復だ」

気持ちの整理をするという目的もあり、恭介は眠りにつくことにする。

いろいろありすぎて逆に眠れないのではないかという不安が恭介の頭に一瞬思い浮かんだが、そんな心配をする必要もなく、恭介は深い眠りにつくことが出来たのだった。

*

「まったく、ゆりつぺも人使いが荒いぜ……」

青い髪をかきむしりながら、夜の学園を彷徨く一人の少年。

学生服に身を包んだ少年は、しかしその学生服は他の人のそれとはデザインがかなり違っていた。

普通なら制服の色は黒であるのにも関わらず、彼が着ているのは明るい茶色のブレ

ザータイプ。

何故違うデザインの制服を着ているのかについては、ここでは一先ず置いておくことにしよう。

「しかし、こんな夜中に新人勧誘をさせるとはな……誰か代わりにやってもらいたかったもんだぜ」

新人勧誘。

一回聞いたただけだと何かの部活の勧誘をしにきたようにも見えなくはないが、彼は違った。

前述した通り、この世界は『死後の世界』だ。

そして、新しくこの世界にやってきた人物の襲来場所として、高い確率で学園の外に現れる。

つまり、彼はそのことを知っていて、こんな夜中の学園にやってきたのだ。

「早いところ一人でもいいから人を見つけて……とつと寮の部屋にでも戻るか」
この学園は全寮制であるために、生徒達は寮に泊まることになる。

彼とて例外ではなく、ルームメイトとして特徴がないのが特徴の大山という生徒がいる。

そしてこの大山も、彼と同じグループに所属していたりする。

と、そうして夜中の学園を一人で歩いているその時だった。

「……うおつとー」

グラウンドに誰かの影が見えたのを確認し、咄嗟に物影に身を隠す。

そして首だけを前に出し、ゆっくりとその人物が誰なのかを確認する。

そこにいたのは。

「危ねえ危ねえ。『天使』だったのか」

少年は、その人物のことを『天使』と呼んだ。

しかし、その人物は……既に彼の視界からは完全に消えてしまった為に、これ以上の特徴を掴むことは出来なかった。

ただ一つ言えることがあるとすれば……その人物は間違いなく女子であった。

「今日のところはこのまま退散して、寮に戻っても……ん？」

その時、少年は何か気付く。

それは、『天使』以外の人影。

玄関近くで行き場もなく右往左往しているような、そんな感じであった。

そして何より、この距離でも分かる程……背が小さかった。

「……もしか、今回はミッシェンをなんとかコンプリート出来るんじゃないかね？」

そう考えた少年は、その人物に近付いていく。

慎重に、相手に気付かれないように。

別にそうする必要は何処にもないのだが、ただ少年は何となくそうしたかったのだ。

そして少年は、その人物に近づくにつれて、その人物の性別が女子であることに気付く。

制服は一般生徒のものだが、何処か一般生徒とは違う雰囲気醸し出している。

なんというか、守ってあげたくなってしまうような、そんなオーラが。

少女はやはり背が小さく、髪は腰の位置辺りまではきっていた。

頭にはコウモリ型の髪飾りがついていて、何故か制服にマントを羽織っていた。

「……ねえ、その君」

「……？」

「そう、その君だよ。こんなところで何してるの？」

少年がそう尋ねると、少女はこう答えた。

「……フーアーユー？」

「ふ、Who are you？」

その少女は、たどたどしい口調で、英語でそう尋ねてきた。

「え、えっと……外国人？」

「……」

少年は、目の前にいる少女に対して何も言えないでいる。もしかしたら、目の前にいる少女は外人で、日本語が通じないのかもしれない。そんなことを考えていた矢先だった。

「……わふ、私の英語、これであつてるでしょうか？」

「え？ あ、ああ。間違っちゃいないけど……つて、日本語？」

今度は流暢な日本語で、少年に向かってそう尋ねる。

そんな少女の反応に、少年は何だか頭がこんがらがってくるのを感じた。

「えつと……とりあえずさっきの質問に答えるな。俺は日向。君は？」

「私は能美クドリヤフカといいます。よろしくお願いします」

ペコリ、と頭を下げてきた能美クドリヤフカ（ここからはクドと略させて頂こう）に對して、思わず日向も頭を下げる。

内心、どうも話しづらいついていたのは彼の心の中に留められていたという。

「それで、日向さんに聞きたいことがあるのですが……」

「なんだ？」

「……ここは、何処なのでしょう？」

それは、誰もが一番に感じる疑問だった。

見ての通り、ここは生徒が通う学園には違いないのだが、自分が何故いきなりこんなところにいるのかが分からないので、まずこんな質問がやってくるのだ。

そんな、何度目か分からないような質問を聞いてから、日向は答えた。

「ここは見ての通り学園だ……ただし、ちよつと曰く付きの学園だけだな」

「曰く付き……なのですか？」

「ああ。ここは死んだ後の世界……『死後の学園』だ」

「死後の……学園ですか？」

にわかには信じていないような表情を見せるクド。

そんな反応も、日向は何回か見てきた為に、もう慣れてしまっていた。

そもそも、初対面の人間にいきなり『ここは死後の学園です。貴方は死んだのです』と言われて誰が信じると言うのだろうか。

「……ということは、やっぱりあれは夢ではなかったのですね……リキ」

「うん？ どうした？」

何か小さな声で呟いたクドに、日向は尋ねる。

クドは、下を向いていた顔を日向に見せて、

「なんでもないので」

と、笑顔で答えて見せた。

ただ、日向から見て、クドの笑顔は何処か無理をしているように見えなくはなかったが、今ここで何か口を挟んでしまうわけにもいけないと考えた為、そこでクドのことに ついて突き詰めるのを止めた。

「とりあえず、事情を説明する為にも、俺と一緒に来てくれないか？」

「行くって……何処にですか？」

「着いてくれば分かるって……ほら、行くぜ？ ボサツとしてると置いてつちまうぞ？」

「あ……置いてかないでくださいです！」

先を歩く日向に置いていかれないように、少し早歩きで着いていくクド。

そんな二人を見つめている影が一つ。

「……また一人、増えたのね」

先程日向が『天使』と呼んだ少女は、そこで二人のやりとりをじっと見ていて、校舎の中に入って行ったのを確認すると、少女は白くて長い髪を揺らして、女子寮の方に戻っていったのだった。

*

「んで、この状況はなんだ？」

次の日の朝。

目覚めた恭介を待ち受けていたのは、ハルバードの刃先であった。

理由は不明だが、恭介はとりあえず自分の身に危険が迫ってきていることは確かだということを悟った。

「えつと……お前は誰だ？」

「お前だな……昨日天使と仲良さげに話していた愚かな輩というのは!!」

「……は？ 天使？」

いきなりそんなことを言われたところで、恭介には皆目検討もつかなかった。

なにせ恭介はこの世界にやって来て二日目だ。

何も知らない恭介にとって、『天使』という言葉はまったくもって理解することが出来なかった。

むしろ、目の前にいる少年の頭が壊れていないのか少し確認したくなった程だ。

「とりあえず病院行ってこい。と言いたいところだが、ここは昨日の立華の話だと死後の世界とのことだったから病院はないのか……なら、アンタの頭は生まれつきでところか」

「野郎……言いたいこと言ってくれろじゃねえかよ!!」

ブウン!

振り上げられたハルバードが、恭介の首を捉えようとその刃先を光らせて襲いかかってくる。

しかし、恭介はそれを身体を転がすことによつて避けて、そのままの勢いで少年の目の前に立ち上がった。

「……やるじゃねえか」

「お前こそな……だが、俺はこのままだと丸腰でお前と戦うことになつちまう。そこでちよつとした提案だ」

「提案だと?」

「公平に、かつ本気で力比べが出来るいい方法がある。とりあえず廊下に出て、中にいる生徒を集めてこい。出来るだけ沢山だ」

「あ……ああ」

若干疑問を感じた少年であつたが、恭介の言う通り廊下に出ていき、周辺にいた生徒達を数十人集めてきた。

*

「言われた通り集めてきたが……これから何をするつもりなんだ?」

恭介が廊下に出てみれば、すでにそこには何十人かの観衆に囲まれた少年の姿があつた。

それを確認すると、恭介は、

「上出来だな」

「そりやそうかよ……んで、これからどうするつもりだ？」

もう一度、少年は恭介に尋ねる。

すると、恭介は笑顔でこう答えた。

「ランキングバトルの応用だ。俺は武器を持ってない、けどアンタは武器を持っている。これじゃお互いに不公平だろ？」

「武器を持ってないテメエが悪いんだ……だからテメエにはここで死んで……!!」

「まあ説明は最後まで聞けよ。お前だって俺と同じ条件下で実力勝負を挑みたいだろ？」

「……まあ、それもそうだな」

今にもハルバードで攻撃してきそうだった少年を、恭介は止める。

そして次の言葉を言った。

「これから周りにいる観衆から武器になりそうな物を投げてもらおう。俺達はその中から好きな道具を一つ選び、そしてそれを使って敵を倒す……ただし、直接相手の身体を自らの拳で殴るとかの行為は禁止だからな？」

「相手を殴るのが禁止となると、どうやって相手にダメージを与えればいいんだよ」

「だからさつきも言った通り……投げ込まれる武器を使って相手を倒せばいいんだっての。ただし、投げ込まれた武器は本来通りの方法で使用すること」

「なんだかよく分からねえが、とりあえずやれば分かるんだよな!」

「もちろん……」

恭介は、不敵な笑みを浮かべて少年を見る。

そして、少年は気付いていなかった。

知らない内に、恭介のペースに飲み込まれていることなど……!!

「さて、始める前にまずは互いの名前からだ……俺は棗恭介」

「野田だ……オラテメエら! さっさと武器を投げ込め!」

野田の声に反応するかのよう、周りから武器が投げ込まれていく!

「……よし、これだ!!」

意気込んで野田が数ある武器達の中から選び出した武器は……。

「く……黒髭危機一髪だど!」

野田が手にしたのは、樽にナイフを刺して、中にいる黒髭のおっさんを出してしまつた人の負けという、よくパーティーかなんかで使われるようなおもちゃであった。

そしてその武器は、野田にとってはまったく役に立たないような武器でもあった。

「俺のは……よつと」

恭介が手にした武器は……威力が強い方の部類に入る水鉄砲だった。

しかも、満タン。

変えタンク付き（もちろんこちらも満タン）。

「……もう一度確認する。これは本来通りの方法でしか使ってはいけないのか？」

野田が、もう一度恭介に確認をとる。

恭介は笑顔を崩さず、むしろ面白そうな表情を見せて、こう言った。

「もちろん！ 黒髭危機一髪なら、ナイフを刺して中にいるおっさんを飛ばさないといけない」

「……変な武器手にしちゃった!?!」

「何がともあれ……バトルスタート!」

狼狽える野田を無視して、恭介は戦闘開始の合図を告げた。

神なるロリコン

棗恭介

V S

実は想い人はただ一人

野田

「神なるロリコンってなんだよ!?!」

「……異論はねえ」

*

「まずは俺の番からだ！」

野田の攻撃。

野田は樽にナイフを一本刺した。

しかしおっさんは飛び出さない！

「今度はこっちの番だな」

恭介の攻撃。

恭介は引き金を引き、水鉄砲を射った。

「冷たっ！ てか痛い!?!」

野田に300のダメージ！

「ここからが腕の見せ所だ!!」

野田の攻撃。

野田は樽にナイフを二本刺した。

しかし、おっさんは飛び出さない！

「準備をしないとな……」

恭介は水鉄砲を射つ準備をしている。

「今がチャンスだ！」

野田の攻撃。

野田は樽にナイフを三本刺した。

しかし、おっさんは飛び出さない！

「のわあああああああああああああああああ!?!」

「自分の運のなさを嘆くがいい」

恭介の攻撃。

恭介は水鉄砲を二発射った！

「ぐはっ！ あがっ！」

野田に3000のダメージ！

野田に4000のダメージ！

「これで……どうだ!!」

野田の攻撃。

野田は樽にナイフを二本刺した。

勢いよくおっさんが飛び出してきた！

「ちっ！」

恭介に5000のダメージ！

「準備が必要か……」

恭介は水鉄砲を射つ準備をしている。

「これひよつとして取りにいかなきやならないんじゃね!」

野田は転がっていったおっさんを回収し、樽にセットした。

「さて……そろそろ終わりだ!」

恭介の攻撃。

恭介は水鉄砲を二発射った!

「冷たっ! いたっ!」

野田に300のダメージ!

野田に400のダメージ!

「ぐわああああああ!!」

野田のライフが0になった。

野田はその場に倒れた。

「軽い戦闘だったな……」

恭介 Win!!

*

「本来ならここで称号をつけるべきなんだが、今回はそんなことを言っていられる余裕もないから、それは省くことにしよう」

「……なかなかやるじゃねえか。だが、次は絶対に負けないぜ……!!」

「おっと。去る前に一つ聞きたいことがあるんだけど、いいか？」

「ああ？ 聞きたいことだあ？ そんなのはゆりつぺに聞けよ」

「……ゆりつぺ？」

「ここで聞き覚えのない名前を聞いて、恭介は疑問に思う。

「何だよ……ゆりつぺも知らないのか？」

「ああ……こつちに来て二日目だからな。俺はこつちの世界については何にも知らないんだよ」

「ふくん……なら、校長室に行くといいぜ。そこにゆりつぺがいるから、そこで詳しい話を聞くがいい」

恭介にそう告げると、野田は立ちあがり、壁に立てかけてあつたハルバードを握り、何処かへ歩いていく。

だが、ふと立ち止まり、もう一度恭介の所までズカズカと歩み寄り、ハルバードの刃先を喉元まで当てながら、

「ただし……無駄なことはするんじゃねえぞ？ ゆりつぺに手を出したらただじゃ済ま

ねえからな？」

「分かったからそのハルバードをどうにかしろ」

ハルバードの刃先を突きつけられたままだと、動くことすらできない。

とりあえずそういうわけで恭介は野田にそう要求する。

野田は、渋々ながら恭介の提案を呑み、その後は無言のまま何処かへ去って行ってしまう。

「さて、まずはその校長室とやらを視察に行くか」

恭介は、野田に言われた通りに校長室へ行こうとする。

だが、ここで一つ疑問が湧きあがる。

「そういえば、校長室ってどう行けばいいんだ？」

それは今の恭介にとっては死活問題と考えるもいよいよな程、重要な問題であった。

何せ校長室へ行けなければ話が始まらないのだから。

「さて、そうと決まれば情報収集に行くとするか……うん？」

そう呟く恭介。

しかし先程周りに集まっていた生徒達は、恭介と野田の戦闘が終わったのと同時に何処かへ立ち去ってしまった為、今現在恭介の周りには人がいない。

その筈なのだが。

「お、ちょうどいいタイミングで誰かが通りかかるとはな。ある意味ついてるぜ」

目の前から歩いてくる人物が一人。

その人物は、金髪であり……何故か頭にバンダナを巻いていた。

「おい、ちよつとそこの奴。ちよつと俺の話を……」

恭介は、その人物を呼び止める。

しかし無視してその人物は何処かへ歩き去ってしまった。

「Let's challenge!」

という、意味不明な言葉を残して。

「あれは外国人か？ 能美が好みそうなタイプだが……あれ、そういえば」

ここで恭介は、とあることに気付く。

それは、意外にも大切なことのように思えることもあった。

「今の奴も、さっきの野田って奴も……制服が違くなかったか？」

そう。

恭介が着ている制服と、彼らが着ていた制服は、まるで違うものだったのだ。

この事に多少の疑問を感じつつも、恭介は校長室へ行く為の情報収集の方が先だと考えて、とりあえず歩いてみることにした。

そうして歩いている内に、恭介は一人の少女に出会ったのだった。

「あれ……お前は確か立華じゃないか？」

「……棗君？」

その少女は、まさしく立華奏その人であった。

恭介は、ちようどいいと考えたのか、奏に校長室までの道のりを教えて貰うことにした。

「なあ……校長室までの道を教えてくれないか？」

「校長室？　そこに何か用事があるの？」

一瞬奏の眉がひそまったように見えたが、構わず恭介は続ける。

「ああ……さつきデカイハルバード持った奴に、そこに行つて『ゆりつぺ』とかいう奴に会いに行けつて言われたばかりでな」

「……そう」

恭介が理由を説明し終えた後、奏は校長室への道のりを恭介に説明する。

内心穏やかではなかったように見えたが。

「悪いな立華……今度食堂で何か奢つてやるから。それでチャラにしてくれよ？」

「一つ聞かせて欲しいことがある」

「ん？　なんだ？」

奏は、少し恭介から遠ざかり、それから表情一つ変えずに、恭介にこう尋ねた。

「もしも、この世界に『天使』と呼ばれる存在がいたとしたら、貴方をこんな理不尽な目

に遭わせた神様の使いである『天使』が本当にいるのだとしたら……貴方ならどうする？」

「え？」

それは、あまりにも突然過ぎる問いだった。

恭介にとっては無縁とも言える『天使』なんて言葉……いや、決して無縁なんかではなかった。

何故なら、数分前に野田が『天使』という言葉を出しているのだから。

「俺は、もしも本当にそんな神がいたとしても、どうするべきなのか分からない……俺の場合、果たしてこれが理不尽な死なのかも分からないから……ちよつとした判断で避けられた死だったんだ。ちよつとした我慢で避けられた死だったんだ……どっちの味方をするのかなんて、正直分からねえよ。ただ、この世界にもしも本当にそんな『天使』がいるんだとしたら……俺は会ってみたいけどな」

「……そう」

恭介の言い分を聞いた後、奏はそのまま恭介の横を素通りする。

その時、耳元で奏が恭介にこう言ったような気がした。

「……さよなら」

「え？」

その言葉が持つ意味を恭介はイマイチ理解しきれなかったが、とりあえず奏に説明してもらった通りの道筋を通り、校長室へと向かった。

e p i s o d e 2 S S S

「ここら辺か？」

奏に言われた通りの道を通り、恭介はどうとう校長室の近くまでやってきた。今さらになって、彼に緊張が襲いかかる。

「……行くか」

そうして意気込んで校長室の前まで歩みよった恭介だったが、そこで恭介は何かを見つめる。

「人か？」

それはまさしく人であつた。

そして、見たことのあるような人物でもあつた。

頭に赤いハチマキを巻き、外見から想像がつくように、かなり筋肉がついているその肉体。

その人物はまさしく、

「……もしかして、真人か？」

反応はない。

恐らく目の前にいる人物が恭介の存在に気付いていない為であろう。

しかし、恭介は確実に見覚えがあった。

あの人物はまさしく。

「井ノ原……真人」

かつて生きていた頃に、一緒に遊んでいたメンバーの一人。

かつて恭介がリトルバスターズのリーダーでいた頃にいつも一緒に行動していたメンバーの一人。

「ああ、そうか……」

真人がこの世界に来到していると言うことはつまり、あの日バスに乗っていたメンバーがこの世界に来到している可能性も高いということにもなる。

「アイツらがいるんだったら、またリトルバスターズを結成出来るかもしれない」

完璧なりトルバスターズにするのは、理樹や鈴がない時点で不可能かもしれないが、この際新生りトルバスターズでも構わないと思っていた。

いや、むしろそっちの方が面白いとまで考えていた。

やるならば、前と同じでは意味がない……恭介はそう考えていた。

「んじゃ……まずは真人に声をかけないとな」

そう決めた恭介は、まず真人に声をかけてみる。

「お〜い真人！ 真人だよ……な!？」

声をかけようとして、恭介は驚いた。

何故なら、真人が校長室の扉を開けようとしたら、横から巨大なハンマーが飛んできたからだ。

「は、ハンマー!？」

「ふんぬっ!!」

それを真人は、自力で止めた。

しかも、かなり大きなハンマーを、その両手でだ。

「おお恭介か！ 久しぶりだな……どうやらここは死後の世界らしいぜ」

「誰から聞いたんだ、それ……ていうか、このハンマーは何だ？」

恭介は、矢継ぎ早に質問を繰り返す。

まずは、真人が誰からこの世界の仕組みについて聞いたのか。

そして、このハンマーは一体何なのか。

この二点だ。

真人は、両手でハンマーを止めながら答える。

「何か、『大山』って奴から聞いた……理樹みたく地味な印象を受けたな」

「理樹みたいな奴か……ちよつくらそいつに会ってみたくなってきたな」

「んで、このハンマーは分からない。何か扉開こうと思つたら、飛んできやがった」

「……見た感じ一撃でぶっ飛ばす為の物だが、お前程の筋肉があれば止めることも可能なのか？」

「よせよ。照れるじゃねえか」

いつもは見当違いな所で照れる真人だが、今回ばかりは状況に応じていた。

「……で、いつまで俺はこのハンマーを抑えていけばいいんだ？」

「とりあえず……まずは俺が通るから少し待つててくれ」

そう言うと、恭介は真人の横を通り抜け、そして校長室の扉を開いて、中に入る。

そして、真人に一言。

「これでよしと……後は真人、手を離していいぞ」

「おうよ……つて、ぐはっ！」

手を離した瞬間。

真人はハンマーに吹っ飛ばされて、そのまま外へ突き飛ばされた。

まともに考えてみれば、そんな結果に終わるとも考えることが出来ただろうに、真人はバカだからそこまで考えが至らなかつたということ、結果窓の外へ突き飛ばされるという結果に。

「……真人がバカで本当によかつたぜ」

もしもこれが謙吾とかだったら、さすがに恭介の思惑通りにはいかなかっただろう。真人だから、恭介も安心して実行したのだ。

「いや、でもこれ死なないよな……？ まあ、いいか」

なんとも非情な台詞にも聞こえるが、ある意味恭介は真人とこの世界を信じていた。それゆえの、この台詞だったのだ。

「さて、それじゃあ話を聞かせてもらおうか……校長席で足組んでるお嬢さん？」

「ハンマーの罫を掻い潜るとはなかなかね……その為に貴方の仲間を一人犠牲にしたみたいだけど」

「生憎、アイツはあれで死ぬ玉じゃねえからな……もう死んでるけどな」

目の前にいる少女の特徴を述べると、まず髪の毛の色は紫。

その髪は肩よりも少し上の位置で切りそろえられている。

頭に黒のヘアバンドをつけており、黄緑色のリボンもつけている。

足を組んで座っているのでどの程度の身長なのかは分からないが、瞳の色はエメラルド。

そして、強気な印象を与える目つきをしていた。

その少女は、恭介にこう告げた。

「まあいいわ。何がともあれ……ようこそ、死んでたまるか戦線へ！」

「死んでたまるか戦線……?」

恭介は、小さくそう呟く。

内心、名前を聞いただけでは一体何をやるものなのかを理解出来ないと思っていたという。

「それで……『ゆりっぺ』とかいう奴は?」

恭介は、野田が言っていた『ゆりっぺ』が誰なのかを尋ねる。

すると、足を組んでいた少女は、机の上に乗せていた足を下ろして椅子から立ち上がると、恭介の目の前まで歩いて来ると、

「私がゆりよ……貴方は?」

「へ? ……ああ、俺は棗恭介だ。どう呼んでもらっても構わない」

いきなり目の前まで近付いてきた少女に内心ドキリとしながらも、恭介は自分の名前を告げた。

すると、少女は何かを納得したような表情を見せ、

「記憶はしっかりとしてみたいね。なら、この世界がどういう世界なのかも分かるわよね」

「ああ。ここが死後の世界ってことも既に教えてもらってる」

「……そう。なら話は早いわね」

ゆりは恭介の言葉に満足げに頷く。

ここで、恭介はある一つの点に気付いた。

「あれ……お前も制服が違うのか？ 普通の女子の制服は白じゃなかった筈だけど……」

そう。

ゆりもやはり違う色の制服を着ていたのだ。

この学園で恐らく普通なら着ることはないのだろう色の制服を。

「ああ、制服の話ね……ちよつと待つてなさい」

ゆりは恭介にそう告げると、一旦校長席まで戻り、机の中をゴソゴソと探る。

その間、恭介は周りをぐるりと見渡してみた。

「ここ、本当に校長室か？」

まず気になるのは、校長先生本人がいないこと。

これは恐らく目の前にいるゆり達が何らかの手段を使って追い出したからだと恭介は判断した（実際、その通りなのだ）。

次に、内装。

校長室だから部屋の中が広いのは当然なのかもしれないが、明らかに不自然に置かれたパソコン。

そして校長席のバックには……巨大なスクリーンが用意されていた。

「あった！ はいこれ」

やがてゆりが何かを見つけたらしく、それを抱えて恭介のところまで歩み寄ってくる。

恭介はそれが何かを確認する。

「……制服か？」

「そうよ。これは私達『死んでたまるか戦線』のメンバーが着る為の制服よ……うん、やっぱりこの名前しつくりと来ないわねえ。貴方……いえ、棗君、考えといてくれないかしら？」

「い、いや……それは今は関係ないだろ」

とりあえず恭介としてはいち早く話を聞きたかった。

この戦線が、一体何なのかについて。

そして、野田が言っていた……『天使』について。

「それじゃあ説明してくれないか。この戦線が敵にしている『天使』って奴が、一体何者なのか……そして、何故お前達はその『天使』と戦っているのかを」

「いいわよ」

先程まで少し笑みを浮かべていたゆりの表情が、真剣な物に変わる。

恭介は、ここからは真剣な話になるんだということを察し、あまり無駄口を挟まないように注意するのだった。

「まず『天使』が何者なのかについてよね……実のところ、『天使』のことについてはほとんど何も分かっていないのよ」

「え？」

「名前も分からない、どんなことを考えているのかも分からない。表情も豊かではないし……分かってることと言ったら、何かしらの方法で産み出された、もしくは神から授かった力を使って私達を攻撃してくるということ、彼女が生徒会長ということだけよ」

「生徒会長……か」

その情報のみだと、恭介としても全体像が思いつかなかった。

女子という点を含め、あまり表情を表に出すことはない。

この点から恭介が想像つく人物は……昨日恭介自身が出会った立華奏しかいなかった。

しかし、恭介は彼女が天使ではないことを若干考えていた。

奏にはそんな力などないだろうという、恭介の憶測からだ。

「彼女は恐らく『神』に繋がっていると思うの。神から何らかの力を授かったから、あんな

なことが出来る。そう考えているの」

「なるほど……ね。その『神』とやらが、お前達が戦っている理由の一つなのか」

「一つもなにも、それが理由よ。私達は『神』に抗う為に戦っている。私達に理不尽な人生を強要した、『神』にね」

「理不尽な人生……か」

恭介は、果たして自分の人生が理不尽なのかどうか分からないでいた。

だから、自分には戦う理由なんてないのでは、なんてことも考えていたのだ。

「貴方がどんな人生を送ってきたのかは知らないわ……けど、この世界にきた以上、貴方にも未練が残ってる筈よ。だから貴方にも戦う理由はあると思うけど？」

「……」

ゆりの言葉に、恭介はただ黙りこむだけであった。

どう答えたらいいのか恭介には分からなかったのだ。

「それに、もし『神』に抗わずに、普通の学園生活を送っていく道を選ぶのだとしたら……貴方、直に消えるわよ」

「え？」

その言葉を聞いた恭介は、少し驚いたような表情を見せた。

「消えるって……どういふことだ？」

「この世界では、普通に授業を受けたたり、模範的行動をしたりしていたら、やがては自我が消え失せて、NPCに成り下がる」

「NPCって……ゲームとかでよく聞くノンプレイヤーキャラクター……所謂農民みたいなものか？」

「ほとんど正解……貴方だつてそうはなりたくないでしょ？ 来世で蚊とかにされるのなんて嫌でしょ？」

「いや……それはまあその通りだけだよ」

恭介は、ゆりより『模範的行動をしていたら消えてしまう』ということを見せてもらった。

そして恭介は、あることを思いついたのである。

とりあえず今はそのことを置いておき、話を進めることにしよう。

「どう？ 入隊する気……なれたかしら？」

ゆりが最終確認をとるかのようにそう尋ねる。

そして恭介が出した決断とは、

「悪いな。せっかく誘ってもらったんだが、この話は断らせてもらおうよ」

「なっ……貴方、正気なの!？」

入隊を断られたのが余程衝撃的なことであつたのだろう。

ゆりが困惑したように言った。

対して恭介は冷静だ。

自分の発言に責任をしつかりと持っている様子で、それが逆に恭介が入隊を断ったという事実を強調させていた。

「……どうして？ 貴方消えたいの？ 来世で蚊にでもなりたいの？ 理不尽な人生を

強い神に反逆しなくてもいいの!？」

顔を近付けながら、ゆりは恭介に半分罵るような体勢で尋ねる。

だが、恭介は動じない。

それどころか、反論まで用意していた。

「俺はその『天使』って奴がどんな奴なのかを知らない。けど、例え相手がそれなりの力を手にしていたとして、それでも一人の少女を何人も武装集団で叩くというのが納得いかない。いくら神に反逆すると言っても……少女一人を叩くのはあまり頂けないな」

「け……けど！ 私達はその『天使』に仲間を何人か消されているのよ！ これでも一人の少女だから戦わないなんてことが言えるかしら!？」

そう。

ゆり達戦線メンバーの中には、戦いの末に消されてしまった仲間もいた。

それを言えば……流石に恭介だって入隊してくれるとゆりは考えていた。

けれど、それでも恭介は動じない。

自分の意見をねじ曲げたりはしない。

「何回でも言ってやるよ……俺はこの戦線には入らない。俺は俺で自分のやりたいことがあるから、やりたいようにやる……ただ、お前達と戦うような真似もしない。ひよつとしたら考えを改める可能性もあるから、一応この制服だけはもらって行くからな」

そう言うのと、恭介は制服を抱えて校長室を出ようとする。

だがその前に、

「待ちなさいー」

ゆりが恭介を止めた。

ドアに触れようとしていた手を止めて、恭介はゆりの方を向く。

それを確認すると、ゆりは恭介にこう尋ねた。

「やりたいことって……何なのよ？　こんな死後の世界に来てやりたいことって、何なのよ？」

恭介は、そんな問いを待つてましたと言わんばかりの笑顔を見せ、楽しそうな口調で、
まずはこう前置きを置く。

「さっきお前が言った通り……まともに授業受けてると、俺達は消えてしまうんだよな？」

「え、ええ……そうだけど」

「なら、消えない為にはそれさえまともに守ればいいんだよな？ 『授業は真面目に受けないで、模範的行動など言語道断。校則違反上等』……これらをしっかりと守れば問題なしだろ？」

それは、恭介だから出せた答えなのだろう。

他の人物なら決してこんなことは思いつかなかった筈であり、しかしそれこそがある意味で一番よい方法だった。

「俺達は誰とも敵対したりはしない。ただやりたいようにやる集団……授業なんか真面目に受けず、模範的行動など皆無に近い、校則違反上等、風紀委員に目をつけられても全く動じない！ しかも毎日がとても楽しくて、充実した毎日を送ることが出来る！

……生前はそんな奴らだったんだよ、俺達は」

「……楽しい人生だったのね」

「ああ、毎日が輝いていた。一日が二十四時間であることが惜しいとまで考えてた……けれど、この世界でも、そんな毎日を送ってみたい。だから俺は……」

恭介は両手を大きく広げて、それからゆりに向かってこう告げた。

「新生『リトルバスターズ』を作ろうと思う!! この世界でも楽しく暮らしていく為に、この世界でも『リトルバスターズ』を作るんだ！ メンバーは前の奴らに加えて新しい

奴も入れる！ そうすれば前よりも凄い『リトルバスターズ』になりそうだけ！」

そう語ってる時の恭介の瞳は、小学生にでも戻ったかのように輝いていた。

ゆりは、その瞳には勝てないと確信した。

恭介は本気だった。

ゆえに、こちらからは邪魔出来ない。

そのことを、ゆりは悟ったのだった。

「ただ、面白そうなことがあったら俺達にも伝えてくれよな？ 戦闘以外のことだった

ら……俺達も喜んで参加するからよ」

恭介はゆりにそう伝えると、校長室から外に出た。

「棗恭介君、か……なかなか凄い奴がきたわね」

小さく、ゆりは呟いた。

ここまでは格好よかったのに、最後に恭介は。扉に仕掛けられていたトラップに引つ

掛かり、校舎の外へと巨大なハンマーで叩き飛ばされたのだった……。

「……もってるわね、棗君」

*

「う………は」

真人が目を覚ますと、そこは校舎裏らしき場所であった。

しかし、自分がどうしてここで仰向けになって寝転がっているのか、真人はしばらくの間思い出せずにいた。

そして、気付く。

「そうか！ 言われた通りに校長室に入ろうとしたら、いきなり巨大なハンマーに襲われて、油断を見せた内に叩き飛ばされて……ここに落ちたというわけか」

当然、相当の高さから下に落下した為に、出血量は半端なかった。

しかし、真人は不審に思うことがあった。

「……どうして、痛みを感じないんだ？」

流石に身体のひとつが筋肉で覆われている真人と言えども、高い所から下に落下して無事で済むはずがない。

ましてや痛みを感じないなどというのはありえないと判断しても可笑しくはなかった。

しかし……事実真人は痛みを感じてはいなかった。

血は出ていたが……そこまでなのだ。

「と、言うことはつまり……俺の筋肉は、ついに有頂天を超えたということか!？」

この場にツツコミをするような人物が誰もいないので敢えて言わせてもらうが、それを言うなら『頂点』でも構わない……というか、そちらを使うべきだろう。

しかし、そんな間違いに気付くことなく真人は身体を起こし、
「……着替えてくるか」

まずは真人曰く『いつの間にか血まみれになっている……まさか、まさかこれは幽霊の仕業?! 風の制服』を脱いで、新たな服に着替えることにする。

彼がもしこの世界の仕組みを知っていたとしたら、『幽霊』という単語をそう簡単に使わなくなるだろう。

何故なら、彼ら自身が幽霊のようなものであるのは限りない事実なのだから。
というより、先ほど自分でも言っていたではないか。

『ここは死後の世界である』と。

*

「わふ〜!」

「……なあ、能美とやら」

「何でしようか?」

「何故に俺がお前とフリスビーなんてやらなければならぬわけ?」

クドと日向の二人は、現在中庭にてフリスビーをやっている。

校舎内を歩いていた日向がクドに見つかってフリスビーに誘われたのが、すべての始まりだった。

日向は断ろうとしたのだが、やがてクドが涙目になっているのを直視してしまった為に、ここで断ってしまうと何となく自らの良心が傷つくと思ったのか、こうしてクドに付き合っているという始末だ。

「他にやる相手がいないんです……みなさんを見つけるまでは日向さんが相手してくださいです」

「まつ、『天使』と戦う為の前準備だと思えばいくらかマシかねえ」

日向は、自分にそう言い訳をつけてみる。

それでもしないと、この状況が意味分からなすぎて、ここから逃げ出したくなってしまうからだ。

「それじゃあ行きますよ〜それ〜」

「うわっと〜」

クドが飛ばしたフリスビーは、日向の方へうまく放射線を描いて飛んでくる。

日向はそれを何とかキャッチすると、

「それっ!」

今度はクドに向かってそのフリスビーを飛ばす。

だが、そのフリスビーはクドの所に向かうことなく、どこか別の方向へ飛んで行ってしまった。

「……全然違う方向に飛んでいってしまったです」

「悪い悪い！ 俺が取ってくるから!!」

風に流されて結構な距離を飛んで行ってしまったfrisビーを取りに行く為に、日向はそれを追いかけて走る。

少しした所にfrisビーが落ちていた為にそれを拾ったが、

「うん？」

人の気配を感じる。

それも、一つではなく二つ。

誰だろうと思ひ、日向は気配が感じられる方へと歩いていく。

そこは校舎裏の、目立たない所だった。

そしてそこには。

「……高松、何してんだよ」

そこには、めがねをかけた少年——高松がいた。

そしてもう一人、赤いバンダナを頭に巻いた少年もいた。

日向はまだ知らないが、この少年はまさしく、真人であった。

二人が話しているだけだと別に何か重要な話があるのかと考えるかもしれないが、ただその二人は……そんな空気ではなかった。

いや、重大な話といえればそうなのかも知れないが……少なくとも、日向から見た彼らの行動は、おかしかった。

「……へえ。いい筋肉してるじゃねえか、お前」

「影で鍛えてますから……貴方こそなかなかいい筋肉を持ってますね」

「当たり前だろ。俺は筋肉一筋なんだからよ」

「……見なかったことにしよう」

上半身裸の男二人が、互いの筋肉について語り合っているという場面を見てしまった日向だったが、このことは自分の胸の中で収めることにしようと、日向は考えたのだった。

※

翌日。

学園の裏庭にて、誰かが刀を振る姿が見えた。

長い黒髪、スタイルはなかなかいい感じで、この学園特有の制服を着ている少女の名前は……来ヶ谷唯湖（くるがやゆいこ）。

その姿はなかなか美しく、そしてこの場においてはおよそ浮いているような姿であつた。

「ふむ。やはり何だか調子が狂うな」

来ヶ谷は、短くそう呟くと、刀を鞘の中に収めて、それからスカート裾を軽く叩いて、ついた土煙を払う。

それから壁に寄りかかり、空を見上げた。

今は間違いなく朝。

学生である以上、授業を受けなければならない時だ。

そんな時間に、来ヶ谷は刀の素振りをしていたのだ。

「……………は何処なんだ？ それに、恭介氏達の姿も見えないし……………何より理樹君の姿も見えない」

ここでも登場した、『理樹』。

どうやら彼女達にとって『理樹』という人物は思い入れがあるらしい。

「まあ理樹君がいなくて当然か……………私達は、死んだのだから」

来ヶ谷は、自分が既に死んでいることを自覚していた。

他でもなく自分のことである為、嫌でも理解せざるおえないと言われればそこまでなのだが。

だから、ここが死後の世界であることは少しながら理解出来たのだが、何故学園なのかという部分に関しては、多少理解に苦しむところでもあった。

と、その時だった。

「……!？」

突如として感じられた一瞬の殺気を来ヶ谷は察知し、直ぐ様鞘から刀を抜いて、一閃。本来なら空を斬る筈のその刀は、しかし確実にガキン！ という衝突音を発していた。

刀は……何かに当たっていた。

「これは……クナイ？」

目の前に落ちたそれを見てみると、黒くて鋭い刃がついた何か落ちていた。

それは間違いなくクナイ……つまり来ヶ谷は何者かに命を狙われたというわけだ。

「死後の世界で命を狙われる経験なんてないだろうとは思っていたけど……誰だ？」

先ほどは感じられなかった、来ヶ谷からの分かりやすい殺気。

それを感知してかしないでか、何処からともなく、クナイを投げただろう人物が来ヶ

谷の目の前に現れてきた。

あまりの素早さに一瞬驚く来ヶ谷だったが、それとは逆に感心もしていた。

「ほう……」

目の前にいるのは、女子生徒であった。

黒くて長い髪、高い身長、そして口元を覆う黒い何か。

その姿は、白すぎる制服さえ着ていなければ、まるで忍者みたいな格好だった。

「なかなかやり手とお見受けする。手合わせ、願いたい」

少女は来ヶ谷に向かって、一言そう言葉を投げかける。

それを来ヶ谷が聞いた瞬間に、挑戦状を叩きつけられたのだと把握した。

「構わないが……その前に名前だ。どの道この世界だと互いに死にはしない。先に名前を教えようが後に名前を教えようが関係ないと思うが？」

そんな来ヶ谷の言葉を聞いて、少女は顔色一つ変えずに答える。

「……椎名だ」

「……私は来ヶ谷唯湖。お互い、楽しもうじゃないか！」

瞬間。

二人は同時に地面を蹴る。

どちらも速度は速い。

そして、技術も凄かった。

来ヶ谷は刀を右から左に振る。

その攻撃を椎名は右手に持つ短刀で受け流すと、今度は左手に持つ短刀を使って来ヶ谷の心臓を狙う。

……しかし来ヶ谷は受け流された刀を、今度は下から上に切り上げて、椎名の攻撃の軌道を反らす。

そして、相手の右手を狙って……突く。

「くっ！」

椎名は激痛のあまりに短刀を落としてしまった。

すかさず来ヶ谷は短刀を奪い、そしてその短刀を遠くに投げて捨てた。

「……？」

椎名は突かれた右手を擦ってみるが、痛みこそ感じるけれど、血は一滴も流れていないことに気付いた。

そのことに若干の違和感を感じたが、次の来ヶ谷の言葉を聞いてその謎が解明される。

「安心しろ。これは模造刀だ。人を斬ったりすることは出来ない」

そう。

来ヶ谷が持つ刀は間違いなく模造刀……相手を傷つけるなど到底不可能であった。

「だが……斬ろうと思えば、斬れなくもない代物だが？」

椎名はこの時察した。

目の前にいる少女は……自分と同じくらいか、それ以上に強くて素早いと。

だが、椎名は引かない。

それが、『彼女』から与えられた今回の『オペレーション』だから。

「ハアッ！」

その後、二人は切り合いを続けた。

そのスピードは、常人には判別なんて不可能な程素早い物であった。

「ハアハア……」

気付けば互いに満身創痍の二人。

制服は若干破けていて、身体からは血も少し流れている。

どちらも切り傷程度だったが、それが数を多くすればするほど、痛みと言うのは増すばかりなのだ。

それを二人は知っていて、こうして動きを止めたというわけだ。

「……やるな、お主」

「君こそな。正直、お姉さんの動きに合わせられる人がいるとは思ってなかったよ」

「……それは褒め言葉として受け取ってもよいのか？」

「当然」

「……浅はかなり」

笑いながら、二人はそう答える。

来ヶ谷は模造刀を鞘の中に収め、それから両手で身体を叩く。

椎名も手にしていた武器を仕舞い、それから同じように身体を叩いて汚れを落とす

た。

「正直ここまで熱くなつた戦いというのは初めてだ。生前ではあまり感じられなかったからな」

「……そうか」

来ヶ谷の言葉に、椎名は短く答える。

……ついさつきまで戦っていた二人が、今はこうして互いに会話を交わしている。

しかも、その内容は互いの健闘を讃えあうものであり、この二人の間には何らかの絆が生まれたのかもしれない。

そんな中で、来ヶ谷はある質問を椎名に吹っ掛けてみた。

「そういえば……どうしていきなりお姉さんを襲つたりしたんだ？」

「……それは」

「それは私が椎名さんにそう指示を出したからよ」

「むっ！」

校舎裏に近付いてくる、一つの影。

声からして女子だと来ヶ谷は判断した為、刀に触れていた手を離し、その女子生徒がやってくるのを待つ。

やがて現れてきたのは、やはり来ヶ谷とは違い、椎名と同じく色が白の制服を着た女

子生徒だった。

身長は来ヶ谷よりも小さいくらいで、黒いヘアバンドをして、エメラルドグリーンの強気な瞳を持つ少女は、まさしく恭介がつい先日出会った少女、『ゆり』であった。

「君は？」

「私はゆり……『死んでたまるか戦線』のリーダーよ」

「『死んでたまるか戦線』……？ もう私達は死んでいるというのにか？」

「……どうやら事情は分かっているようね、貴女」

ゆりは、来ヶ谷の反応を見て、僅かながら笑みを見せる。

椎名はいつの間にか姿を消していて、それは恐らく自分にはもう用がないだろうと悟った椎名なりの気遣いなのだろうと、来ヶ谷は考えた。

……同時にこれはチャンスだとも考えていたのだが、ゆりが知るはずもなかった。

「単刀直入に言うわ……貴女、私達の戦線に入隊してくれないかしら？」

「ほう……お姉さんをスカウトするか。その根拠は？」

あくまで余裕の態度を見せる来ヶ谷。

そんな来ヶ谷の態度を見て、ますますゆりは興味を抱いたという。

「貴女の戦闘能力は、椎名さんにも劣らない程のもの……それだけの戦闘能力を持った人がうちの戦線に入ってくれば、大助かりなの」

「……それで、入隊してお姉さんが得することとかはあるのかい？」

「得すること？ ……それを聞いてきたのは貴女が初めてよ」

ゆりは、来ヶ谷の言葉に驚く。

対して来ヶ谷は、最初の態度から何一つ変わってはいなかった。

そんな来ヶ谷に、ゆりは言う。

「そうね……『神』に反逆出来るわ。理不尽な人生を押し付けた、『神』に……ね」

「……その素振りだと、君の人生はそう良いもののように聞こえないのだが？」

元よりこの世界に来るような人達は、最高の人生を送ってきたとは思えないような人達ばかりが集まっている。

やり残したこと、やり直したいことなど……後悔や未練がある人達が来る世界なのだ。

つまり、みんな自分の生きてきた人生に対して、不満を抱いたのだ……満足出来なかったのだ。

そしてその悔しきは、やがて復讐へとベクトルを変えていき、その矛先は……居るかも分からない『神』に向けられていた。

「君は……神は本当にいると考えているのか？」

来ヶ谷は、一つそのことを尋ねる。

その問いに対して、ゆりは答えた。

「……ええ、いると思うわ。だってこの世界には、恐らく『神』から力を授かったと思われる『天使』がいるんだもの」

「……『天使』？」

初めて聞く単語に、流石の来ヶ谷も眉を潜める。

そんな来ヶ谷に、ゆりは説明した。

『天使』と自分達の戦いについてを。

仲間の内の何人かが『天使』に消されているということをも。

「……ふむ、そうか」

来ヶ谷はそれらの話を最後まで聞いた上で、答えを出した。

「いいだろう。私も戦線メンバーの仲間入りをすることにしよう」

「本当に!? やりい!」

ゆりは、心底嬉しそうにそう答える。

そして次の言葉を言ったのだった。

「危ない危ない……棗君に拒否されたから、貴女にも拒否されるかと思ったわ」

「……恭介氏にも声をかけたのか？」

『棗君』という単語が出た時、来ヶ谷は明らかに反応を見せた。

「え、ええ……そうだけど」

「……そうか」

「……？」

この間の正体をゆりは知りようがなかったのだと言う。

やがて来ヶ谷は、ゆりにそつと近付き、耳元で一言、こう囁いた。

「さて……これからは大人の時間だ。心置きなく楽しむといい。さあお姉さんにすべてを任せて」

「な、何言つて……ひゃん！」

……その後、校舎の裏に人が来るまで、彼女達のやり取りは聞こえてきたのだという。

*

恭介は、玄関前に来ていた。

もちろん理由あつてのことで、ただ単に一人で授業を抜け出してきたわけではなかった。

しかも、その場にいるのは恭介一人ではない。

「さて棗とやら。理由を聞こうか？」

「……しかしまたお前に呼ばれるとはな。お前もしかしてそつちの気でもあるのか？」

「抜かせ！」

「……あのよ、これって一体どんな状況？」

現在この場にいるのは、恭介と野田、そして何故かいる日向の三人。

野田はもちろんいつも手にしているハルバードの刃先を、前回と同じように恭介の首元に突きつける。

しかし、恭介は動じなかった。

どころか、笑みさえ浮かばせる余裕を見せていた。

「何なんだよ一体!?! これは一体……本当にどんな状況なんだ?」

よく分かっている日向は、頭を抱えて、思わずそう叫んでいた。

「俺は俺のやりたいようにやる。『天使』だが何だか知らねえが、それを理由に一人の女の子適当に傷つけるだけのお前達の戦線何かに入る程、俺は人間出来てはいないんでね」

「テメエ……ゆりつpegがやってることを否定する気か!?!」

「……まあ、最初は誰でもそう思うわな。ソイツの言うとおりだ」

日向は、恭介の意見に同意することが出来た。

それだけこの話はあまりにも中身がなさすぎたのだ。

実際にその現場を見てみない限りには、何も言えないのが現実だ。

「お前達に言っつてやるよ……こんなバカげた争い……やらなくたって別にいいんじゃないね

えか?」

「嘗めてんのかこの野郎!!」

怒りにまかせて、野田がハルバードを振りかぶる。

だがその前に恭介は不敵な笑みを浮かべて、こう告げた。

「おっと! どうせ戦うのなら、この前の方式で戦うことにしようぜ?」

「何だとゴラア……そんな意見二回も聞けるかよ!!」

ザクツ!

振り下ろされたハルバードは、恭介が元居た位置に突き刺さる。

恭介本人はと言えば……。

「お前、力任せに振るだけじゃ当たらないことを、いい加減に学習したらどうだ?」

「なっ……!?!」

「そ、そんなバカな……野田の攻撃を避けたって?!」

それだけ、野田の一撃を避けることが、珍しいことだってことだ。

恭介は、それを日向の前でやってのけた。

……簡単に言ってしまうえば、恭介もまた、それなりの戦闘能力を持ち合わせているということだ。

「こちとら毎日ランキングバトルをやってきた身だから……それなりの戦闘はやって

きたつもりだ」

「ちっ……この野郎!!」

「おっと、そろそろそのハルバードを手放してもらおうか?」

スツ。

野田がハルバードを振りかぶっている間に、恭介は一気に間合いを詰める。

そこは野田との距離をもっとも短くしたところでもあり……かつ、野田の攻撃が当たらない場所。

「なっ……!」

「ふん!」

ドウツ。

突き刺さる、恭介の拳。

ただ、拳の為か、身体に傷はほとんど残らない。

しかし、恭介が殴った部分は鳩尾だ。

そこを殴られた人間は、そう簡単に体力を戻すことは出来ない。

殴られた衝撃で、野田はハルバードを落としてしまった。

その瞬間を、恭介は見逃さなかった。

「よっと!」

地面に落ちていたハルバードを、恭介は思い切り蹴る。

それは野田よりかなり遠い位置に飛んでいき、しかも場所は恭介の後ろの方。取りに行く為には、恭介を越えていかなければならないということだ。

「お前……実はかなり戦闘能力高いんじゃないかね？」

日向は、恭介の持つ戦闘能力の高さに、素直に感激していた。

だが、野田の方は……プライドを傷つけられたような物で、怒りはさらに高まつていく。

それが、野田の判断を鈍らせたのか。

「……いいだろう。前の形での勝負で、決着をつけてやるよ!!」

「そうこなくっちゃな……おい、そこの青い髪の奴、名前は？」

「俺か？ 日向だけど……」

「よし、日向。周りにいる生徒達を集めてこい」

「え？ けど今は授業中……」

「もうすぐ授業も終わるはずだ。だから授業が終わった所を狙って、ここに集めてきてくれ……」

「あ、ああ。分かった！」

恭介の言葉を聞いて、日向は校舎の中へと姿を消す。

その間……恭介と野田は、何も言わずに、ただ黙って対峙していた。

……そして、学園中にチャイムが鳴り響き、

「集めて来たぞ」

日向が数十人の生徒を連れてやってきた。

「昨日のお前よりも人を連れてきたな」

「うるせえ！ とつとと武器を寄越しやがれ！」

野田がそう叫ぶ

周りの観衆から次々と武器が投げ込まれてくる！

「……なんだこの状況？」

一旦野田と恭介から遠ざかり、そして二人を見守る日向。

周りにいるのは……それこそ自らの意思を持たない、『NPC』なのだ。

そんな『NPC』にここまでさせるとは……棗恭介という人物は一体何者なのだろうと、日向は考えていた。

そうこうしている内に、まずは野田が武器を得た。

「よし、これだ！ ……つて、消しゴム……だと……？」

野田が手にしたのは、1つの消しゴム（ほとんど残量が残っていないバージョン）。

ほとんど役に立ちそうにない物だった。

前回の黒髭危機一髪しかり、今回の残量ほとんどなし消しゴムしかり、この男……とことん運がない男である。

「俺は……これだ！」

恭介が意気込んで手にした物。

それは……。

「……フリスビー？」

「……あつー！」

恭介が手にしたフリスビーを見て、日向は何か気付いたようだ。

しかし、二人から離れている日向のその言葉は、当然恭介に聞こえるわけがなかった。

「……さて、そろそろ準備はいいな？」

恭介が尋ねると、野田は手にした消しゴムを恭介に向けて、

「おうよ！ ……俺は戦う……守れなかった未来の為に！！」

「ああそうかい……なら、始めるぞ！」

問合いを開いて、互いの武器を構える。

決闘ということもあって、周りの熱は一気にヒートアップする。

だがしかし、二人が手にしている武器を見比べてみて、日向は一言こう漏らした。

「……うわあ、なんともシユールな光景だなあ」

この二人のこのような戦闘形式は初めてみた為、どうして二人が周りから投げ込まれた武器を手にして戦っているのが分からずにいた。

だが、そんな彼でも確実に言えることがただ一つあった。それが……。

「ふざけてる場合かよ!? その武器で戦うつてのかよ!」

という、ごく自然なツツコミのみであった。

「見てな、日向……俺達がこの武器を使って華麗に戦ってる姿をな!」

笑顔でそう言う恭介だが、それには手にしているfrisbeeがどうしても爽やかな雰囲気を作り出すのを邪魔してるようにも見えた。

「それじゃあ……バトルスタートだ!!」

多少日向が納得いってない様子だったが、恭介はとつと戦闘開始の合図を告げるのだった。

*

神なるロリコン

棗恭介

V S

単細胞生物

野田

「おい、称号が前のと変わってないか!？」

「ああ……ちよつと前にお前達のリーダーからお前に称号をつけるように言われてな。前のと変えさせてもらった……ていうか、俺の称号が変わってねえ!」

*

「そんな理不尽……通じてたまるか!」

野田の攻撃。

消しゴムを使って恭介の身体を擦る!

「ちっ!」

恭介に20のダメージ。

「今度はこっちの番だ!」

恭介の攻撃。

フリスビーを華麗なフォームで野田に向かって投げる!

「ちっ!」

野田に100のダメージ。

「お前なんか消してやる!!」

野田の攻撃。

先ほどよりも強い力で恭介の身体を擦る！

「そう簡単に消えるかよ！」

恭介に30のダメージ。

恭介に50のダメージ。

「なるほどな……これでレベルアップだぜ！」

野田は消しゴムの使い方のレベルが上がった！

「そう簡単には俺は倒せないぜ！」

恭介の攻撃。

恭介はfrisbeeを野田めがけて投げた！

「ちっ！」

野田に200のダメージ！

「そういうことか……」

恭介はfrisbeeの使い方を応用した！

「だからどうしたってんだよ！」

野田の攻撃。

野田は消しゴムで恭介の身体を擦る！

「おっと！」

ミス！

攻撃は恭介に当たらなかつた。

「反撃だ！」

「ぐはっ！」

恭介の反撃！

野田に100のダメージ！

「反撃ありだなんて聞いてないぞ!!」

「いや、勝負に反撃はつきものだろ？」

「ちっ……勝手にしろ！ 次からは俺も反撃するからな!!」

*

「そこまでよ」

「ん？」

「あ？ ……テメエは……!!」

勝負がこれからつていう時に、二人の間に邪魔が入る。

声質からして、女子の物だった。

そして、その女子とは……。

「お前……立華か？」

「……お前、『天使』と知り合いだったのか!？」

「……は? 『天使』?」

恭介が奏の名前を呼び、日向が恭介に問いかける。

その時日向は、確かに奏のことを『天使』と呼んだ。

そのことに、恭介は疑問を抱く。

「……『天使』って、どいつのことだ?」

「目の前にいるだろ! お前の目の前に!」

「目の前って……目の前にいるのは、立華だろ?」

「その子が俺達戦線の相手、『天使』なんだって!」

「なっ!？」

恭介は、心底驚いた。

目の前にいる少女が、彼らの敵である『天使』だと言うのだ。

それが真実なのかどうかを確かめる為に、恭介は尋ねた。

「お前が……『天使』。それで合ってるのか?」

「私は『天使』なんかじゃないわ。けど……その人達と戦っているという事実には、変わり

はないわ」

奏は、音を奏でるような美しい声で、その事実を恭介に告げたのだった。

「それじゃあやつぱり……立華は……お前らが言うところの『天使』に間違いないんだな？」

「ああ……間違いない」

日向に確認をとった恭介だったが、内心ではそうではなくて他の人物であつて欲しいという思いがあつた。

しかし、その思いは日向から告げられた事実によつて悉く壊される。

そしてそれは……立華奏が『天使』であるという事実を容認してなければならぬということの意味していた。

「……そんな、嘘だろ？ 確かにコイツは不器用そうで無表情だけど、でもコイツが『天使』だなんて……」

恭介がそう反論を述べていた、その時だった。

恭介の背後より、一発の銃声がダアンと響く。

その弾丸は、奏に向かつて飛んでいく。

このままだと銃弾は、奏の身体に埋め込まれてしまう。

そう思っていた時のことだった。

「……Gird skill Hand sonic」

「……え？」

突然その口から発せられた、無機質な声。

そして恭介は見てしまった。

立華奏の腕から、何やら刃物のようなものが出現したのを。

「なっ……………!!」

「来るぞ! 野田、ゆりっぺに連絡だ!!」

「こんな所で退けるかよ!! お前が行って来い!!」

「つたく、しょうがねえなあ!!」

日向と野田は、真っ先に奏と戦う為に、準備を始める。

日向は人員確保を、野田はそれまでの時間稼ぎを。

「……………立華、お前……………」

「……………」

奏は何も言わずに、ただ恭介の顔を見るだけだった。

その先の言葉を求めるように恭介が奏のことを見るが、やはり奏は何も言わなかった。

「……………立華?」

「……………貴方も、神に抗うの?」

「え?」

やがて奏から返ってきたのは、疑問を示す言葉だった。

恭介はその質問に一瞬戸惑うが、すぐにそれが何を意味するのかを理解した。

その質問に『Yes』で答えた瞬間、自分は奏と戦うことになってしまう。

そんな気は更々なかった恭介は、違うと答えようとした。

が、ガキン！ という衝突音が、恭介の言葉を書き消した。

そして恭介は、その人物を見て……。

「来ヶ谷……!!」

そこには、『天使』の攻撃を防ぐ来ヶ谷唯湖の姿があつた。

「い、いつの間に……!?!」

さすがにこれには野田も驚いていた。

何せさつきまで周りに人がいた気配すら感じられなかったのだから。

「ふむ。日向氏に呼ばれてここに来てみれば……なるほど、君がゆり君達が対峙している『天使』ということか」

「……来ヶ谷、お前、まさか……」

「恭介氏。私は自分の意思で戦線に入隊した」

「バツ！」

互いに体勢を整えながら、来ヶ谷は恭介に言った。

その言葉に……恭介は思わず驚きを隠せずにした。

「何でだよ……いくら何でもおかしいと思わないか？　いくら『天使』と言われていようと、相手はたった一人の女の子だぞ？　そんな子に向かつて剣や銃を向けるなんて真似……出来るわけが……!!」

「確かにその通りかもしれない……だが、私は決して『天使』が憎いからこの戦線に入隊したわけではない。もちろん恭介氏が新生リトルバスターズを作ろうとしていることも知っている。だから私は、そちらにも入らせてもらおう」

「それは認めるが……だが、それじゃあ何で戦線に入隊なんかしたんだ!!」
責めるような口調で、恭介は尋ねる。

……一方で、その間、『天使』が来ヶ谷に攻撃を仕掛けることはなかった。
どころか、

「……敵じゃ、ない？」

先ほどの恭介の言葉を思い出し、一言そう漏らしていた。
もちろん、そんな呟きなど彼らは聞いているはずがない。

現に、そんな『天使』の言葉を無視して、来ヶ谷は言った。

「私は、ただゆり君が可愛そうだと思ったから……どうしても『神』に反逆したいと言ったから。だから戦線に入隊した。『天使』が女の子であることも知っているし、たった一

人に対して戦線メンバーが一方的に攻めている現実も知っている。だが、それでも私は……自分の信念を貫き通す為にこの戦線に入った。この世界における、自分の役目を全うする為にな……」

「……そうか。今から戦線を抜け出せと言っても、聞かないのか？」

一言、恭介はそう尋ねる。

すると、来ヶ谷は一言……こう告げただけだった。

「そうだな……考えなくもないが、今は戦線メンバーに入りたてでな。しばらくはこちらの活動もさせてもらおう。もちろん、リトルバスターズの一員でもあることも忘れてないでほしい……あの事故には、私としてもいささか理不尽だと思う点があるのでな。その点だけは、この戦線メンバー達全員が抱く『理不尽な人生に対する復讐心』という、共通感できる点であるのでな」

「……そうか、分かった。それだけ言うなら、俺はもうお前を止めない。ただ、抜け出したくなったらいつでも来い。俺はお前が完全にリトルバスターズの一員になることを……待ってるからな」

「……了解した」

ドン！

答えた後で、来ヶ谷は思い切り地面を蹴り、『天使』に向けて己の刀を向けながら突つ

込んでいく。

迎撃する為に、『天使』もまた全力で地を駆ける。

その間に、日向は人を呼んできて……野田もハルバードを手にして『天使』に突っ込んでいく。

そして、日向が呼んできた人員による、集中砲撃。

これらの光景を……恭介はただ見ていることしか出来なかった。

そして、恭介は感じさせられる。

立華奏が……『天使』がただならぬ能力の持ち主なのだということ。

episode 3 Music

釈然としないまま、恭介は校舎の中に引き返していた。

……今でも、彼は納得いってなかった。

例え立華奏が特別な能力を手にしていても……それがどうして一人の女の子を集中砲撃するきつかけになってしまったのだろうか。

「そんなの……そんなのって理不尽じゃないか……!」

その理論がまかり通ってしまうこの世界の仕組みを……恭介はおかしいと思わずにはいられないでいた。

もしこれで彼女が何の関係もない、ごく普通の女の子であったなんてことが後で発覚したならば……彼ら戦線メンバーは、取り返しのつかないことをしてしまったも同然なのだ。

そんな事実を……彼らは知っているのだろうか？

「……知らないだろうな。アイツらはアイツらで、自分達の信念って物を持っているんだろうし」

彼ら戦線メンバーとして……単に集団リンチをしているわけでもない。

彼らもまた……抗っているのだ。

『神』に抵抗しているのだ。

そんな生活を……自らの持つ、辛かった生前の記憶を頭の奥底にしまいこみながら、彼らは抗っているのだ。

故に、『神』に繋がりそうな存在に出くわしたのなら……迷わずそれにすがる。

攻撃して、そうして彼らは反逆しているのだ。

『反逆』という意味では、これから恭介がやろうとしていることもまた、反逆と呼ぶべきことなのかもしれない。

この世界の仕組みを理解しつつ……まともに授業を受けるような真似はせず、そして自分のやりたい放題にやる。

「……そういえば、『天使』は生徒会長だと言ってたっけか」

先日ゆりが言っていたことを、恭介は思い出す。

確かに彼女は、『天使』は生徒会長であると言っていた。

彼らの言う『天使』が奏だったと言うことは、『天使』＝立華奏＝生徒会長という方程式が出来上がっていた。

「……つまり、俺は戦線メンバーとは敵にはならず、立華にとつては『敵』になるということか。そう言う意味では……彼女が救われることはないってことか」

こうなつてくると、恭介は願わずにはいられなかった。

第三者の介入……立華奏の味方をしてくれるような……そんな人材がやってくるとを。

更には言えば……立華奏の友人になつてくれるような存在を。

「……そういえば忘れてたな。食堂で何かを奢るつて約束」

校長室までの道のりを聞いた際に、恭介は奏とそんな約束を交わしていたことを思い出す。

しかし……とうとうその約束は守られることはなかった。

しかもその上、奏から敵視されるようになったと、恭介は考えていた。

「……もう無理だろうな。食堂でアイツの飯を奢つてやることも」

そんな小さなことですら……恭介は叶わなくなつてしまったのだ。

この世界に抗うということは……つまりはそういうことなのだ。

もしここで奏の味方をして……友人になつて、一緒に学園生活を送つてしまったとしたら……自分は消えてしまう。

身勝手ながら、この世界はそういう風に出来上がつていたのだ。

恐らく何の考えもなしに出来上がった……勝手に出来上がってしまった仕組みなのだろうが、いつの間にか奏が孤独になるように、この世界は出来上がってしまった

のだ。

「ハハ……アホらしい。どうしてそんなシステムが出来上がらなくちゃならねえんだよ……」

恭介は、呟きながら……両手拳を強く握りしめる。

そして……全身を震わせて、この理不尽な世界に対する怒りを全身で表現していた。

「……くそ。何も出来ない俺が憎い」

ダン！

壁を思い切り殴り、抑えきれない怒りを逃がそうとする。

しかし、痛みが増えるだけで、怒りは一向に収まりを見せなかった。

そんな状態の恭介が聞いたのは、何処かの教室から流れてくる、音だった。

いや、それは単なる音ではなく、規則的に、しかも何個もの音が重なり合い、そして

見事に一つの形を完成させていた。

「これは……音楽？」

それは、音楽であった。

部類で言えば、ロックの部類に入るだろう。

「ロックか……にしてもいい曲だな……流れて聞こえてくるだけなのに、心に響くいい曲だ」

その曲を聞いているだけで、何故だか恭介の心が踊るのだ。

何故だか理由はよく分からないが、とにかく恭介は楽しくなるのだ。

「……この教室からか」

やがて恭介は、曲が聞こえてくる教室を特定することに成功した。

そこからは、更に大きな音が聞こえてくる。

エレキギターの音や、中にはボーカルの歌声なんかも。

「音楽室か……成る程な」

恭介は一言呟いて、その中に入って行つた。

中に入つてみれば、ちょうど少女達が演奏している最中だった。

恭介が入つてきたことにも気付いていないのか、それぞれのパートに合わせて楽器を演奏している。

エレキギター・ドラム・ベース・ボーカル……。

それらが合わさり、一つの曲を完成させていた。

近くで聞くと、これらの音がうまく重なり合つたところで騒音になる。

そう考えていた恭介だったが……その実そんなことは決してなかった。

こんなにも間近で聞いているにも関わらず、その曲は恭介の耳を通して頭に伝わり、そして心に確実に響いていた。

「……ん？ みんな、一旦止めてくれ！」

そこで、恭介の存在に気付いたらしいボーカルの少女が、楽器を演奏していた少女達に指示をして、演奏を中止させる。

そうしてやつと、少女達もまた恭介の存在に気付いたのだった。

「あ……悪い。邪魔しちゃったみたいだな」

罰の悪そうな表情を見せながら、恭介は音楽室から出て行くこうとする。

しかし、そんな恭介を、

「まあ待ちなよ。私達の曲に釣られて来たんだろ？」

「……ああ」

ボーカルの少女の言う通り、恭介は漏れて聞こえてきた曲がなんとなくいい曲だと感じたから、この教室に入ってきたのだ。

それについては否定する気はなかった。

「私は岩沢。このバンドのボーカルを担当してる。ベースが関根で、ドラムが入江。そしてリードギターがひさ子だ」

「あ、ああ……わざわざ丁寧に紹介までしてくれて。どうも」

とりあえず恭介は、メンバーの紹介をしてくれた岩沢に向かってそう言葉を返す。

頭を下げると、メンバー四人が全員揃って頭を下げた。

「それじゃあしばらく休憩にしよう。私はこの人と少し話してるから」

岩沢は、他のメンバーにそう告げる。

すると三人は、飲み物を買う為に教室から出て行った。

「……いいの？ アイツら、飲み物を買に行つたんだろ？ 特にお前はボーカルだし、人一倍喉が渴いてるんじゃない？」

「大丈夫」

恭介の言葉を聞くと、岩沢は自らのカバンの中身を探り、そして中からミネラルウォーターを取り出すと、そのペットボトルを恭介に見せ、

「私はもう、用意してあるから」

笑顔で、恭介にそう告げた。

*

「にしても、相変わらずいろんな奴らが現れるな、この世界つてのは」

死後の世界故に、いつ誰が現れてもおかしくはない。

長ドスを持つ少年……藤巻はまた、そんなことを考えていた。

彼は今、特にやることもない為、校長室に向かう為に廊下を歩いている。

その中でも、NPCではないだろう人物達には何人も会ってきた。

しかし、どの人物達も、いずれはNPCみたく学園生活になじんでしまい、そして消

えてしまいそうな奴らばかりで、彼ら戦線メンバーとして入隊させるには全然合わない奴らばかりであった。

「まったく、少しは骨のありそうな奴らってのはいないのか?」

彼とてそこまで目立った働きをしているわけではないが、別段戦線の足を引っ張っているわけでもなかった。

故に、ある程度遅れを取りそうな人というのが把握出来るのだ。

「さつき会った奴なんか、完璧にミーハーだったな。背も小さいし、ピンク色の髪だし、何か小悪魔って感じの女子だったな……そういうや、ガルデモのファンだって言ってたっけか?」

先ほど会話した少女のことを思い出して、藤巻は少し苛立ちを感じる。

ミーハーな女子故に、戦線に入れたとしても単なる足手まといになりかねない。

そう考えた藤巻は、スカウトするなんて真似は決してしなかったのだ。

「……そういえば、この廊下、変だよな」

ふと、藤巻は廊下を見て、何かに気付く。

……何故だか理由は不明だが、廊下には数多くのビー玉が散乱していた。

まるで、誰かを転ばせたいという願望が強く前面に出ているかのよう。

「……こんなの……誰が引つかかるってんだ?」

とりあえず長ドスでビー玉を弾き飛ばしながら、藤巻は前に進む。
すると……。

ガン!!

「ぐはっ!」

突如頭上から金タライが落ちてきた。

しかもネタとかに使う大きな物ではなく、確実にダメージを与える目的に設置されたかのような、小さな金タライ。

……藤巻は悟った。

「コイツ……ウザい」

一言、『ウザい』という言葉が浮かんできた。

先ほどのミーハー小悪魔少女なんかよりも、さらにウザツたらしい何者か。

そしてその何者かを探る為、藤巻は無意味だろうと考えながらも、

「誰だ!! こんな仕掛け作った奴は!!」

大声で、そう叫んでみる。

すると……近くの空き教室の扉が開き、そこから何者かが登場し、そして一言。

「呼ばれて飛び出てジャジャジャッソン!! ハルちゃん華麗に参上〜!」

「……………はっ!」

藤巻は、突如として目の前に現れた何者かを目前にして、ただ一言、その言葉を漏らすことしかできなかつた。

「だ……誰だお前？」

突如目の前に現れた少女に、藤巻は尋ねる。

ビー玉の形をした髪留めを使用している少女は、キョトンとした表情を見せた後に、「私は三枝葉留佳といいマス。そこでポケつとしてる貴方の名前はなんですか？」

「ポケつとつて……俺は藤巻だよ。よろしくな」

「藤巻……何か巻貝見たいな名前ですナ」

「ま、巻貝……だと……!!」

藤巻は、自分の名前をけなされたことに対してかなり頭に來ていた。

ただでさえ先ほど金タライが頭に降ってきたこともあつて、少し怒っているというのに……最後にこの始末だ。

これで怒らない人間は、相当人がいいのだろう。

「なめんじゃねえぞ、三枝とやら……テメエ何ぞこれがあれば一発で……!!」

「一発で……なんですか？」

「殺してや……らあああああああああああああああああああ!!」

突っ込もうとした所で、地面に転がるビー玉に足を取られて、そのまま藤巻は頭から

廊下に激突。

結果……気絶。

「……………ふっ。またつまらぬ物を倒してしまった……なんちって♪」

おチャラけた様子で葉留佳は言ってみたが、もちろん聞いている人は誰ひとりいない。

唯一いた人である藤巻は……たった今気絶してしまったのだから。

「しかし………どうにも落ち着きのない人ですナ。ビー玉に自分から引つかかりに来る人なんて、初めて見ましたヨ」

独り言のように呟く……いや、実際独り言を呟く葉留佳。

しかし、廊下で倒れている藤巻が……何とも滑稽で、むなしいものであった。

「さて………そろそろ私もいきますか」

「行くって………どこに行く気？」

「へっ？」

そこで、何者かが葉留佳に向かって話しかけてくる。

強気な印象を受けるその声は、かつて恭介達も会話したことのある少女の声。

「それだけの能力があれば、私達戦線メンバーに入って、その力を発揮してくれないかしらっ。」

「だ、誰ですか？」

そして、葉留佳のそんな問いに答えるかのように、

「……私は死んでたまるか戦線のリーダー、ゆりよ」

ゆりは、葉留佳の目の前に現れた。

*

「バンド？」

休憩時間を利用して、岩沢と恭介の二人は会話をしていた。

その内容は、岩沢達のバンドについてだ。

「そ。『Girls Dead Monster』略してガルデモ。これが今私達がやってるバンドの名前」

「そうだったのか……なかなかいい曲を歌うと思ってたら……お前、生前は歌手かなんかやってたのか？」

「……」

「……？」

恭介がふとその質問をした時、岩沢はただ黙って、目を細めるだけだった。

そんな岩沢の反応を見て……恭介はしてはいけけない質問をしてしまったと感じた。

「悪い……触れちゃならないことだったか」

「いいよ、別に。一度は誰もが気になることだろ？」

「……濟まない」

「謝るなって。逆にそっちの方が辛いから」

「……ああ」

今度は、恭介は謝らなかった。

ただその代わり、肯定の意を示す言葉を述べただけ。

そしてその後、しばらく間を空けた後で、恭介は尋ねる。

「……なあ、今の生活って、楽しいか？」

「うん？」

「……いや、なんとなくそんな質問が出ただけだ。別に他意はない」

ふと恭介の口から出た、そんな質問。

しかし、岩沢にとってはとても深い意味が感じられた、そんな質問だった。

少し悩んだ末に、岩沢は答える。

「……うん、充実した生活だと思う。好きなことが出来て、私はこの生活、悪くないと思ってる」

「……そうか。なら、いいんだ」

初めて会った人物なのに。

どうしてか恭介は、岩沢のことを気に掛けないわけにはいかなかった。

なぜなら……クールな感じを出しているこの少女が、実はどこか寂しげな何かを感じ取ることが出来たから。

「それじゃあ、お前達も練習があるだろうし……俺は行くから」

そう言つて、恭介はその場から立ち去ろうとする。

が、ふと恭介は何かを思いつき、その場に立ち止まる。

「……？」

不思議に思った岩沢が、恭介に話しかけようとしたら、

「お前……『リトルバスターズ』に入らないか？」

「えっ？」

恭介が、岩沢に向かってそう告げた。

それは明らかなる勧誘の言葉。

恭介が自らで設立しようとしている、新生『リトルバスターズ』への勧誘だった。

「……『リトルバスターズ』に入ったら、もっと面白いことや、楽しいことが経験出来る

ぜ？ 毎日が楽しくて、飽きないこと間違いないよ！」

「……魅力的な誘いだけど、私にはこのバンドがある。だから私は

『リトルバスターズ』には入らないよ」

「……………そうか」

断られて、恭介は少し残念そうな表情を浮かべる。

しかし、次の岩沢の言葉で、そんな気持ちも吹き飛んでしまった。

「……………それに、仮にも私達は……………戦線メンバーの一員だ。陽動部隊だから、戦闘こそしないけどね」

「!? ……そうなのか?」

「……………そう。君の話は聞いてるよ。何でも、私達のリーダーに歯向かったそうじゃないか」

「……………まあな」

ゆりに向かって言った言葉を思い出し、恭介は呟く。

「そういうわけだ。だから私は『リトルバスターズ』には入らない。ガルデモを置いていくわけにはいかないからな」

「そうか。気が変わったら、いつでも俺に言ってくれよ?」

「まあ、その気になったらまた連絡するよ……………多分そんなことはないと思うけど」

その言葉を聞いた恭介は、すぐに音楽室から出て行った。

※

場所は移り変わり、ここは武道館。

そこで、ただひたすら剣道に打ち込む少年が一人いた。

道着をきちんと着ており、竹刀をしっかりと握り、振る。

白い髪が、竹刀が振り下ろされる度に小さく揺れる。

「……ふう。そろそろ休憩にするか」

眩き、少年は竹刀から手を離して、一旦壁に寄りかかる。

それからその場にしゃがみ込み、隣に置いてあったペットボトルの中身の水を飲み、ホウと一息ついた。

「その剣筋……ただ者ではないな。剣道の有段者か何かか？」

「む？」

その時。

少年に話しかける人物が一人。

身体つきがよくて、見ただけでも筋肉があることが分かる。

学生服ではあるが、何かしらの武道はやっているかのような感じだった。

「空手の有段者なのか？」

少年は、制服を着た少年に尋ねる。

その少年は答えた。

「いや、違う。柔道なら少々嗜んでるがな」

「そうか……」

少年は、その言葉を聞くと、もう一度ペットボトルの水を飲む。

……しばらくの間、静寂の時間が訪れる。

やがて口を開いたのは、制服姿の少年からだった。

「……松下だ」

「む？」

「互いに名前で呼んだ方が、都合がよからう。だから名前を教えた」

「……そうだな。俺の名前は宮沢謙吾。よろしく頼む」

「ん」

ガシツと、手を握り合う謙吾と松下。

そこには、何か見えない物が見えたような……気がした。

「それにしても、お主もこの世界に来てしまったのか」

「……ここは、どういう世界なんだ？ 何故俺は、生きている？」

「……死んだことは、分かっているのだな」

「ああ。俺はバスの事故で死んだはずだ……なのに俺はこうして生きている。俺だけな

のか？ この世界に来たのは。恭介は？ 真人は？ 鈴は？ 理樹は？」

「……最後の二人は知らぬが、前の二人は、すでにこの世界で確認出来ておる」

「本当か!？」

恭介・真人。

二人もまたこの世界に来ていることに、謙吾は思わず驚きの声を挙げてしまっていた。

……同時に、それは自分も、恭介や真人、そのほかのメンバーもまた、あのバスの事故に巻き込まれて死んでしまったということの意味していた。

「……そうか。二人は無事に生きてくれたのか。バスの事故の衝撃から守った甲斐はあったな……いや、もっともその後のことなんて俺らが知りえるはずもないのだがな」
「……何の話だ?」

「なんでもない。ただの独り言だ」

松下の言葉に対して、謙吾はそう答える。

……そして再び訪れる、静寂の時間。

この二人の会話は、そう長くは続かないようだった。

「とりあえず……まずはこの武道館から出るか」

「そうだな。それが賢明な判断だと思う。話は他の場所でゆっくり聞こう」

松下の意見に賛同した謙吾は、とりあえず武道館から出ることにする。

出た先に……。

「Oh! Let's dance!」

「筋肉筋肉く!!」

「……は?」

出てきた先で、不気味なダンスを踊っている二人がいた。

真人と……TKだ。

「TK……何をしている?」

「おう、謙吾っち! お前もこつちの世界に来てたのかよ!」

「ま、真人……お前、こんな場所でもそれを……」

謙吾は、多少呆れざる負えなかった。

なぜなら、二人が踊っているそのダンスとは、ただ単に身体の前で両手を左右に振るような動きなのだから。

生前よく真人が理樹を誘って踊っていたダンスそのままだ。

「アンタもやってみたらどうだ! 筋肉が鍛えられるぜ?」

「そ、そうなのか?」

「Hey come on!」

真人とTKが、一緒に踊らないかと誘う。

松下は……二人の誘いに乗り、その場で筋肉ダンスを踊り出した。

「ちや……茶番だああああああああああああああああああああああ!!」

謙吾は、踊り始めた松下を見て、思わずそう叫ばずにはいられなかった。

「なんだよ謙吾っち。ただ単に筋トレすればいいって問題でもないぜ?」

「こんなの筋トレでも何でもないぞ!!」

真人の言葉を、謙吾は全力で否定する。

しかし、真人は食い下がる。

「なんだよ、ノリ悪いなあ……前にリトルバスターズジャンパーを着てた時の、俺ですら引いてしまったあのノリはどこに行ったんだ?」

「リトルバスターズ……ジャンパー……?」

その単語を聞いた時。

謙吾の中で……何かが、閃いた。

「……」

「……宮沢?」

黙り込んだ謙吾に、松下が問いかけたその時だった。

「リトルバスターズ……最高うううううううううううううううううううううううううううううう!!」

「その意気だぜ、謙吾!!」

余計に訳が分からず、日向はそろそろ呆れてきた。

椎名は、つい先ほど『浅はかなり』という言葉を残して立ち去ってしまった程だ。

そんなわけで、残ったのはクドと日向の二人だけとなったのだった。

「……先ほど私は、『天使』に話しかけられました」

「……え？ マジ？」

「マジです」

突然のカミングアウトに、日向は思わずそんな反応をとった。

……いくらなんでも、急過ぎる言葉だとも思っていた。

今の彼らにとつて、『天使』と何らかのやり取りをするということはかなり有意義なことであるかのように考えられていたからだ。

「それで……お前なんて言われたんだ？」

日向も気になるのか、クドに質問をする。

するとクドは、

「何でも……『貴女達は勘違いしている』だそうなのです」

「勘違い？ ……一体なんのことなんだ？」

今更勘違いしていると言われたところで、日向達戦線メンバーのその意味が分からないのも当然だろう。

「……うーん、分からないなあ……」

「わふ〜……分からないのです」

二人は、考えが至らなくて悩み続けていた。

だが、いくら悩んでいても分からないものは分からず仕舞い。

結局、この二人だけで何かよい考えを思い浮かばせることは出来なかつたのであつた。

……だが、クドが奏より聞いた、『貴女達は勘違いをしている』という言葉は、後々重要なことを彼らに気付かせることになることなど、この時はまだ誰も知りようがなかつたのだつた。

*

「これで何人目だ？」

恭介は、これまで学園内の至る所を探索し、まだ他にもメンバーが残っているのかを探していた。

これまで恭介が見かけたのは、真人・謙吾・来ヶ谷の三人。

そしてつい先ほど新たに見かけたのは、クド・西園美魚の二人だつた。

「五人……俺を含めて六人か」

ここまで順調にメンバーが見つかり、そして全員がリトルバスターズに入ってくれる

と言ってくれた時には、恭介の心は本当に和らいだ感じがした。

ただ、クド・真人・来ヶ谷の三人は、すでにSSSのメンバーにもなっている為、両立することになっている（主にリトルバスターズの活動に集中するらしいが）。

「そろそろ新しいメンバーも誘ってみたいところだが……お？」

その時。

目の前から見知った顔が歩いてくるのが見えた。

白くて長い髪、無表情のその少女の名前は。

「立華……」

「……棗君？」

立華奏。

戦線メンバーから『天使』と恐れられている少女。

しかし、恭介は戦線メンバーでも何でもない為、彼女のことを特別怖がったりはしなかった。

ただ、何らかの力を持っていることだけは知っているので、さすがに恭介も完全に警戒心を忘れていくわけでもなかった。

……見た感じではそれは分からないが、奏は若干そんな恭介の緊張を感じ取ることが出来たらしい。

「どうしたの？ 緊張してるの？」

「あ、いや。なんでもないんだ……」

「……そう。ならいいの」

奏は、ホツとしたような声で、そう呟く。

……恭介は、こんな少女に対して警戒心を抱いていたことに対して恥ずかしさを感じ、抱いていた警戒心と緊張感を完全に解き放った。

そんな恭介に、奏は一言、こう尋ねてきた。

「貴方……本当に敵じゃなかったの？」

「え？」

それは確認の口調。

敵か味方か……まるでそれだけを尋ねるかのような声だった。

「私にとつての敵？ それとも、あの人達にとつての敵？」

「……第三者つてのも立場としては厳しいものがあるな。こういう時に、完璧な答えを用意することが出来ないとは」

そう。

恭介はどちらの味方もする気はなかった。

というか……そもそもこの二つの勢力の戦いに介入する気など、さらさらなかった。

ただ、恭介は消えない為にも……無駄な授業など受けずに、楽しく過ごしていければ、それでよかったのだから。

「第三者？」

「ああ。俺はどちらの味方をする気もない。どちらの敵にもなるつもりもない。そういうことだ」

「……そう」

残念そうな、嬉しそうな、そんな微妙な表情を見せる奏。

もちろんそんな表情の動きなんて、恭介は分かるはずもない。

ただ、そんな気がしただけなのだから。

「……そうだ。ひとつお前に聞いてもいいか？」

「……なに？」

「お前……『リトルバスターズ』に入らないか？」

「……リトル、バスターズ？」

奏がそう尋ねると、恭介は楽しそうな表情を見せ、

「ああ！ 校則違反上等、楽しければそれでいい！ そんな青春を送る為に……俺は、いや、俺達はリトルバスターズとして活動をしようと思ってるんだ。どうだ？ お前も生徒会長の仕事なんか忘れて、俺達と一緒に、リトルバスターズに……」

「…………御免なさい。私は入れないわ。だって私は、生徒会長だもの」

「あ…………」

それだけを言うと、奏は恭介の言葉を最後まで聞くことなく、そのまま何処かへ歩き去ってしまった。

…………不思議と、恭介は奏の後を追う気にはなれなかった。

「…………もしかしたら、彼なら気付くことが出来るかもしれないわ。この世界の秘密に…………彼らが抱いている、『勘違い』の正体に」

聞こえない程小さな声で、奏はそう呟いていた。

そして物語は、序章へと繋がっていく。

episode 4 Departure

「……!!」

少年は目が覚めた。

唐突な目覚め……しかも背中にはコンクリートの感触。

最初に見えたのは……黒い空だった。

「はいは……ど……?」

少年は、ここが何処なのかを把握する為に、辺りを見回してみる。

そこは少年が知らない場所だった。

どうやらどこかの学園みたいで、校舎らしき建物を見ることが出来た。

木々が何本か植えられており、この学園が少しは自然に気をつかっていることが分かる。

……少年はもう一度空を見上げた。

この角度からだ、月を確認することが出来なかったが、今は間違いなく夜。

「(……そもそもどうして俺はここに……?)」

少年は、どうしてこの場所にいるのかを気にする以前に、もっと気にするべきことが

あった。

それは……。

「何も……思い出せない」

彼の頭の中に、記憶と呼べる物が存在しなかった。

自分が何者なのか、どうしてここにいるのか。

それらを把握することは……少年には出来なかった。

「目が覚めた？」

「!!」

その時、どこかから少女の声が聞こえてくる。

どこから聞こえてくるのかなんて、探す必要はなかった。

なぜなら……その少女は、倒れている少女の身体の目の前にいたのだから。

紺色のカチューシャをつけ、紫っぽい色の髪は、肩のあたりまでの長さ。

背中を向けている為、顔は確認出来ない。

草むらの影に隠れ、その少女は何処かを見つめている……スコープ銃で誰かを狙いながら。

「アンタ……」

なにしてんだ？

少年がそう続けようとしたところで、

「ようこそ……」

少女が口を開き、少年の言葉を遮る。

その後で、少年の方を振り向きながら、笑顔でこう告げたのだった。

「ようこそ、死んでたまるか戦線へ！」

「……は？死んでたまるか戦線？」

少年の頭の中で、様々な疑問が渦巻く。

まずは、少女が言った、『死んでたまるか戦線』について。

続いて、この少女の正体。

そして何より……どうして銃なんて物騒な物を持っているのだろうか？

「唐突だけど、貴方、入隊してくれないかしら？」

「へ？ 入隊……？」

やつのことで、少年はそう答える。

少女は向けていた顔をスコープ銃に戻し、それから一言、こう告げた。

不覚にも、その一言は……少年にとっては信じられないものだった。

「ここにいては……貴方、死んだのよ」

「あの……よくわからないんだけど……」

「ここは死んだ後の世界。何もしなければ消されるわよ」

「消される……誰に？」

次から次へと、少年の頭の中に疑問が湧きあがってくる。

解決仕切れていないのに、更に疑問は頭に蓄積されていく。

少年の頭はただでさえ処理仕切れていないのに、次の少女の言葉は、更に混乱させるようなものであった。

「そりゃ神様でしようね」

「……はあ」

確かにここがもし本当に『死んだ後の世界』だとしたら、その可能性もありうるのだろう……そう考えかけて、しかし少年はその考えを止めた。

「じゃあ……入隊ってのは、何？」

そして少年は先ほどの『入隊』についての疑問をぶつける。

すると、

「死んでたまるか戦線に、よ」

少年は少し脱力感を覚えた。

だが、そんな様子なんていざ知らず、少女は言葉を続ける。

「まあ部隊名はよく変わるわ。最初は『死んだ世界戦線』。でも、『死んだ世界戦線』つ

て、死んだことを認めたことになるんじゃないかね？」ということにより破棄。以降変遷を続けてるわ」

倒れていた身体を起こし、少年は少女の背中を見つめる。

ただし、その表情には何処か呆れているようなところも見られたが。

そして、その間にも少女の言葉は続く。

「今は『死んでたまるか戦線』、その前は『生きた心地がしない戦線』。まあ完全にネタだったから一日で変わったけど」

「ふ〜ん……」

どうでもいいことだと思いつつも、少年は少女の話聞く。

「後、それって本物の銃なのか？」

少女が持つ銃を見て、尋ねる。

すると少女は、何を言ってるのという表情を見せながら、

「ここに来た連中は、みんなそんな反応をするのよね」

「(そりやそうだ。何処の世界にいきなり銃を見せられて信じる奴がいるんだよ)」

心の中でそう呟いたが、もちろん少女に聞こえるはずがなかった。

「で、本物なのか？」

少年がそう尋ねると、少女はこう切り返してきた。

「順応性を高めなさい。そしてあるがままを受け止めるのよ」

「受け止めて……どうするんだよ」

「戦うのよ」

「何と？」

「アレよ」

そして少女は校庭がある方向を指差し、

「あれが『死んでたまるか戦線』の敵……『天使』よ」

自分達の敵の名前を、短く告げた。

「アレが……」

少年は、少女が指さした方向を見て、眩く。

だが、そこにいたのは単なる少女だった。

白くて長い髪で、目の前の少女とは違う制服を着た、一人の少女に過ぎなかった。

「……やっぱ『死んでたまるか戦線』は変えたいわ。あなた、考えといて」

そんな少年の思考に気付くはずもなく、少女は話を繋げる。

……少年は、頭の中でこんなことを考えていた。

「（どう見たってアレは普通の女の子じゃないか。やっぱりこいつら可笑しいんじゃないかねえか？）」

常識的に考えてみれば、銃を持って少女を狙っている人物よりも、ただ単にグラウンドを歩いている少女の方がまだ信じられる可能性が高い。

目の前にいる少女は、明らかに誰かを殺そうと言う意思があるのだ。

はたして、さあどちらを信じるなんて問いが来た時に、真つ先に信じられるのはどちらだろうか。

「あのさあ……向こうに行つて良いかな？」

だから少年がこう言ったのも、第三者の目線から見れば当然の言葉だったのかもしれない。

しかし、少年のこの言葉が、少女にとっては明らかに異常なものだったらしく。

「はあっ!？」

と叫んでは、少年の方に身を乗り出していた。

咄嗟に少年は後ろに下がると、少女はこう言葉を続けた。

「何で!?! 訳わかんないわ!! どうしたらそんな思考に至るの! 貴方バツカじゃないの!?! 一遍死んだら!?!」

「うっ……」

思わずそんなうめき声をあげてしまう。

付け入る暇も与えない少女の言葉に、少年は息がつまりそうな気分になったのだ。

……やがて少女が言葉を言い終えて、しばらくの静寂の時間が訪れた後に、

「……これは死ねない世界でよく使われるジョークなんだけど……どう？」

「いや、ジョークの感想はいいとして……」

ベクトルが若干ずれた質問を返されたので、少年は思わずそんな反応をとる。

その間に、少年は少女から離れ、それから先ほどの言葉の理由を述べた。

「銃を女の子に向けてるやつより少しはまともな話が出るからさ」

「はあ……私は貴方の味方よ。あなたが銃を向けるなど言うのなら私は銃を誰にも向けないわ。私を信用しなさい」

「……」

その表情は、真剣そのものであった。

そこには信念すらも見え隠れするような感じだった。

「(それだけ本気なら、信用しても大丈夫かもな……)」

少年の頭の中では、すでに少女を信用し始めていた。

このままだと、後もう少しで少年は入隊するだろう。

その時だった。

「おっい、ゆりっぺっ！」

誰かが名前を呼ぶ声が聞こえてくる。

「ゆりっぺ？ 目の前にいるコイツのあだ名か何かか？」
とりあえず少年はそう判断した。

そして『ゆりっぺ』と名前を言った、青い髪の少年が、二人の目の前に現れてくる。
少年は、目の前に現れたこの人物もまた、少女の言う『死んでたまるか戦線』のメン
バーの内の一人なのだろうと考えた。

そしてその少年が言った言葉によって……何かが崩壊したような気がした。

「ゆりっぺ、人事勧誘の手筈はどうなってるんだ？ 人手が足りねえ今だ、どんな汚ない手を
使っても……って、アレ？」

「……やっぱ俺、あっち行くわ」

そう告げると、少年は二人のことなんて無視して、グラウンドの方へと足を向ける。

そしてそのまま、歩いて行ってしまった。

「うわあー！ 勧誘に失敗したー!!」

少女が叫びながら、青い髪の少年の頭を叩いたようにも見えたが、グラウンドに向け
て歩いている少年には、そんな光景など見えるはずもなかった。

「何なんだ……アイツら……」

眩きながら、少年はグラウンドまでの距離を歩く。

程なくして、少年は先ほど銃で狙われていた少女の所まで到着した。

「ああ……あの、こんばんは」

少年は、少女に向かってそう挨拶する。

白い髪の少女は、少年の到着に気付いたのか、じっと見つめてくる。

少年は言った。

「あのさあ……あんた銃で狙われてたぞ。あんたの事を『天使だあー』とか言つて」

そう言うのと、少女は首をかしげる。

そして、透き通るような声で、少年に向かってこう言った。

「私は『天使』なんかじゃないわ」

だよなあ〜と、少年は納得したような声を挙げる。

それから、

「それじゃあ……」

と、先の言葉を急かす。

「生徒会長」

短く、少女は言葉を告げた。

その言葉を聞いた少年は……左手で頭を押さえて、

「アホだ俺は……あの女にからかわれてたんだ……くそっ！ 自分が誰かも分からないし……!」

「……」

少年が葛藤している間、少女は何も言わなかった。

それから少年は、

「病院にでも行くよ」

手を振って、少女の目の前から立ち去ろうとした、その時だった。

「病院なんてないわよ」

「え？」

少女の言葉で、少年は足を止めた。

「どうして……?」

「誰も病まないから」

「病まないって……」

そして次の少女の言葉は……少年の頭に思い切りのしかかってくる。

「……みんな死んでるから」

その瞬間。

やはり少年の頭の中で、何かが崩壊したような気がした。

「ああ、分かった！ お前もグルなんだな！ 俺を騙そうとしてるんだろ？ なんだあ

? この記憶喪失もお前らの仕業か!？」

「記憶喪失はよくあることよ、ここに来た時は……事故死とかだったら、頭もやられるから」

淡々と事実を述べる少女。

少年は……とうとうふつきれて、次の言葉を言った。

「じゃあ証明してくれよ！ 俺はもう死んでるから、もう死なない、って……」

最後の方は、恐らく小さくなっていたと思われる。

少年のそんな言葉に応えるように、少女は一步、少年に近づく。

それから、

「Hand sonic」

眩き、右手から刃を出現させた。

「え？」

刃を自分に向けて、勢いよく刺してくる白い髪の少女。

それが……少年がこの時見た、最後の光景だった。

※

「あくあ……やつちまったな、こりゃ」

グラウンドには、血だまりの上に倒れている少年と、そんな少年の前にじっと立っている奏が立っていた。

恭介は、影ながら二人の様子をじっと眺めていたのだが、あまりにも目の前で倒れている少年が哀れに思えた為、思わず出てきてしまったのだ。

「……どうしたの？ 棗君」

「一応聞くが、どうしてお前はコイツを刺したんだ？」

「……死なない証明をしてくれよって言われたから、言われた通りにしただけけど」

「やっぱりか」

そんなことを言われたら、手っ取り早い方法で教えてやった方が早い。

一番簡単な方法として、奏は身体に教え込むという方法をとつたに過ぎなかったのだらう。

奏の不器用さと、少年の哀れさに、思わず恭介は吹いてしまった。

「どうしたの？」

奏は、いつもと同じような感じの声で、恭介に尋ねる。

それが何だかおかしくて……恭介はさらに笑ってしまう。

「わりのわりの。何だかこの風景とお前があまりにも合ってなくてな……つい笑っちゃまった……！」

「……そう」

それでもいつもと変わらない奏に、恭介は思わず口元がニヤけてしまう。

それを少し抑えると、

「さて、これどうすつかな……」

血だまりの中に倒れている少年を見て、恭介が呟く。

「……私の責任だから。私が保健室に運んでおく」

「無理すんな。例えお前がそれほどの力があつたつて、お前は女の子だからな。ここは男の俺に任せろつて」

「……でも。その人をやったのは私だし……」

「だから、たまには人に頼れつて言つてるんだよ。何でも一人で抱え込もうとすつから、人つてのは失敗ばつかしの人生を送つてしまうことになるんだぜ？ 世の中にたくさんいる成功者達を見てみろよ。誰一人として、たった一人で成功してきた奴はいないだろ？ それは友人であり、妻であり、助手であり……人間誰かしらの手助けを借りなければ生きてはいけないんだよ」

「……」

「つーわけで、コイツは俺が責任を持つて保健室まで連れてつてやるからな」

そう言つて恭介が少年の身体を持ち上げる。

その際制服に血がついてしまったが、この際気にはいられなかつた。

「……頼つてもいいつて、言つたわよね？」

「え？ ああ、言ったけども？」

この時、恭介は奏から発せられる何かが、いつものそれとは少し違うような感覚を感じていた。

そしてそれは、気のせいなんかではないことを恭介は悟る。

「……貴方なら出来るかもしれない。あの人達が抱いている、ある勘違いを解くことが」「アイツらが抱いている……勘違い？」

奏は、それ以上口を開くことなく、そのままその場を立ち去ってしまった。

しばらくその場に突っ立っていた恭介だったが、やがてこの場にいつまでもいた所で無駄だと言うことを悟り、少年の身体を持ち上げて、そのまま保健室へと向かった。

*

「棗、恭介君……」

あの後、奏は自分の部屋に戻り、パソコンを立ち上げていた。

起動させるプログラムは、『Angel Player』。

自らが使用している能力のすべては、このプログラムで開発したものののだ。

あくまで自衛用の為、すべて『Gird Sonic』という頭文字みたいなものがつけられていた。

ここで開発したプログラムとして、以下の物があげられる。

まずは、『Hand Sonic』。

これは腕に刃を創りだし、それで接近戦を行うという物。

ちなみにこれは現在バージョン4まで存在し、バージョン1はいつも見る短いナイフみたいな感じのもの。

バージョン2は細くて速効性に特化した、剣みたいな感じのもの。

バージョン3は槍みたいな形状をしたもので。

バージョン4は……花型。

本人曰く、可愛さを追求したものらしい。

続いて、身体能力を飛躍的に向上させる『Overdrive』。

銃弾や爆風の軌道を逸らす『Distortion』。

高速で動く『Delay』。

実体を持つ自分の分身を発生させる『Harmonics』。

分身を自分と同化させる『Absorb』。

超高周波を発して聞いた相手を気絶させる『Howling』など。他にも色々存在する可能性も否定はできないが、とりあえずここでは奏が主に使う物だけを挙げておこう。

「……彼になら、出来るかもしれない」

少女は、パソコンのキーボードを打ちながら呟く。
新たなるプログラムを開発している最中なのだ。

「棗君のやつてゐることは、ある意味ではこの世界に対する反逆……だけど、彼の考え方は、もしかしたらあの人達にいい影響を与えるかもしれない」

棗恭介。

つい最近この世界にやつてきた人物であり。

今現在奏が期待を抱いている人物でもあった。

戦いなんて望んではおらず、楽しい生活さえ送れば、後はどうなったって構わない。
出来れば授業には真面目に出てほしいと思う彼女だったが、それ以上に、彼のそんな考え方に対して期待の念を抱いていたのだ。

「あの人になら出来るかもしれない……彼らを、無事にこの世界から卒業させることが……」

それ以上、奏は言葉を発することはなかった。

※

「……ハッ!？」

気がつけば、少年は保健室のベッドの上に寝転がっていた。

ご丁寧に布団までかぶせられており、自分がどうやら何者かここまで連れてきても

少年によつて投げられたシャツは、勢いよく床に激突する。

そして少年はベッドの横に置かれていた靴を履き、

「くそっ！ 冗談じゃない!! よく分かんねえけど……ここにいたらヤバイ気がする!!」

そうして保健室から出ようとした……その時だった。

「気は済んだか？」

「!？」

突如声が聞こえてくる。

……いつそこにいたのか、茶髪の少年——恭介が、そこにいた。

いや、最初からそこにいたのだ。

「……アンタ、何者だよ」

「俺か？」

警戒心をむき出しにする少年に対して、恭介は笑つてこう答えた。

「俺は棗恭介。お前は？」

「……俺は……お、音無……」

少年——音無は、呆然とした表情を見せて、恭介に自らの名前を告げた。

恭介は、その言葉を聞くと更に笑顔を見せて、

「へえ、音無か……下の名前は？」

「……思い、出せないんだ……俺が覚えてるのは、上の名前だけで……俺のことは、それだけしか分からないんだ……」

「……記憶喪失、か」

恭介は短くそう呟く。

目の前に立つ音無という少年は、どうやら記憶を失っているらしい。

「なるほどな。この世界には記憶喪失の奴も時には現れるってことか」

「……なあ、アンタは信じられたのか？　ここが死後の世界だってことを」

音無は、恭介にそう尋ねる。

すると恭介は、簡単に答えて見せた。

「ああ。俺は少なくともお前と違って、記憶ははつきりしてたからな」

「……そうか。それじゃあやっぱり、ここは」

「死後の世界だ。それだけは間違いない」

「……」

恭介の言葉に、音無は思わず黙り込んでしまった。

自分の思った通りだったことに対する、失望感。

それだけが、音無の頭の中で渦巻いていた。

「これから俺はどうすればいい……このままいつまでも、わけのわからないこの世界で過すごしていくしかないのか？」

「それは……」

恭介がその先の言葉を繋げようとした、その時だった。

ガラツと音が鳴り、扉が開く。

そして中に入ってきたのは……。

「お前は……野田か？」

「アアン！ テメエは棗か……まあいい、今用があるのはテメエじゃねえ」

ハルバードを持って、ズカズカと保健室に入ってきたのは、野田だった。

野田は音無の方まで歩いていくと、

「貴様か……ゆりつぺを侮辱し、入隊を断った奴は!!」

「……待てよ、落ち着けて！」

とりあえず音無は、再び生命の危機を感じたのか、野田を必死に止めようとする。

こうしている間にも、野田は静かにハルバードの刃先を音無に向けていた。

「……死ぬか？」

ドスの利いた声で発せられたのは、そんな言葉だった。

音無は、以前に黒いヘアバンドをした少女から言われた言葉を思いゆりのことなのだ

恭介は、目の前で起きたことに対して……ただ呆然と眺めているだけだった。

「なんとというか……すげえな、お前」

「それより貴様も……コイツのようになりたいか？」

「生憎、俺はそういうのは間に合ってるからな。二の舞にだけはなる気はないぜ？」

ハルバードを向けてきた野田を挑発するように、恭介は答える。

すると、保健室の窓を開き、

「じゃあな！　俺はお前達の戦線に入隊する気なんてこれっぽっちもねえから！　後の

ことはよろしく頼んだぜ!!」

「あ、お、おい待て!!」

窓から飛び降りた恭介を追うように、野田も窓から出る。

……保健室に残されたのは、血だまりの中倒れている、音無のみだった。

※

数十分後。

「殺す気か！　つて、すでにツツコミがツツコミじゃねえ……てか、アイツらはどこ行つた？」

音無は辺りを確認し、すでにそこには誰もいないことに気付く。

同時に、辺りに広がる血が自分の物だということも悟り、

「つて言うか何がこの世界のジョークだよ。死ぬほど痛いのに死ねないなんて……最悪じゃないか」

音無はそう呟くのと同時に、先ほどの少女（ゆりのことだが、音無は名前をしらない）が言っていた言葉を思い出す。

『ここは死んだ後の世界。何もしなければ消されるわよ』

「そうだ。消されればいいんだ……そうすれば、この世界ともおさらば出来る」

音無が考え付いた方法は、この世界から早く消えることだった。

だが、どうやって？

そんな時に、更にもう一つの言葉を思い出す。

『私は貴方の味方よ。私を信用しなさい』

「……無理だったの」

音無は、保健室から出て、校内を歩く。

空き教室、音楽室、その他諸々……。

しかし、特別何かよさそうな場所はどこにもない。

「屋上とか行ってみるか……」

屋上に行ったとしても特別解決するようなことも何もないのだが、することもない音無は、とりあえず屋上に向かってみることにする。

階段を上りきり、やがて屋上へと続く扉の前までたどり着く。

「鍵とかはないのか……まあ、飛び降り自殺とか出来るわけじゃないからな」
死後の世界故の施しなのだろうと音無は思いながら、屋上の扉を開く。

「……誰もいないよな」

辺りを見回してみるが、もちろん誰かがいるわけでもない。

……いや、人なら一人だけいた。

「……何やってるんだ？」

「見られてない見られてない……」

隠れたつもりなのか。

音無が壁の向こう側に行ってみれば、そこには女の子が一人いた。

周りにはお菓子が散らばっていて、如何にもさつきまでお菓子を食べていましたとい
うような感じがする。

「あうううううううう!?!」

「うわあっ!」

音無の姿を確認した少女は、悲鳴に近い声を挙げていた。

思わず音無自身も驚きの声を挙げてしまった。

そして少女は、まるで念仏でも唱えるかのごとく、こう言う。

「あううううごめんささくい！ 授業をサボってお菓子を食べていたことは謝ります！
ですがこれには深いわけがありませんして〜!!」

「……あのよ、俺別に、風紀委員とか生徒会の役員とかじゃないんだけど」

「……へ？」

取り乱していた少女は、やがて音無の顔をじつくりと眺める。

……その様子に、音無は思わずドキッとしてしまった。

少女は、何とか可愛い系の少女だった。

一緒にいるだけで、心まで癒されるような……そんな少女だった。

「……本当に、怒りに来たわけじゃない？」

「ああ。むしろ、俺は今すぐここから消え去りたい気分だ」

「あうううううう！ 私、気を悪くするようなことした？」

「い、いや、アンタのせいじゃないって……ただ、ちよつとこの世界から消え去りたい
なって思っただけだ」

それは紛れもなく、音無の今の心境を表していたのだが、当然目の前にいる少女がそ
んなことを知るはずもなかった。

音無は、そんな少女に、

「……邪魔したな。それじゃ俺は、他のところに行ってみるから」

そう告げて、屋上から立ち去ろうとする音無。
しかし少女は、

「あ、待って〜！ せっかくだから、一緒にお菓子食べようよ〜」

「……は？ お菓子？」

言われて音無は、足を止める。

というか、腕を掴まれてしまったては、止まらざるおえなかった。

「……しようがないな。ちよつとだけだぞ」

澁々音無は、少女に付き合うことにした。

元々やることもなかった為、音無にとつてはある意味で消えるまでの暇つぶしになるのかもしれない。

少女は笑顔で音無を壁に寄りかかせて、その隣に腰を下ろす。

そこにはやはり、大量のお菓子が置かれてあった。

「……それ、アンタ一人で食おうとしたのか？」

「……ふえ？ 『アンタ』って私のこと？」

「ああ。他に誰がいるんだよ」

「『アンタ』じゃなんだか嫌な気分になるから……お互いに名前呼び合うことにしましよう〜」

「……（ああ、何だか疲れるな）」

音無は、なんとなく隣に座る少女のことが面倒くさく感じてきていた。

しかし少女は、そんな音無などお構いなく、

「私の名前は神北小毬って言います。貴方の名前は？」

「俺か？ 俺は音無……下の名前は、覚えてない」

「……記憶喪失なの？」

「ああ。そんな感じだ」

少女——小毬の問いに、音無は平然とした表情で答える。

記憶喪失の話題をするのはこれで三回目なので、もう慣れてきていたのだ。

「それじゃあ……今は幸せじゃないの？」

「……さっきも行っただろ。どっちかといえ、俺は今すぐこの世界から消えたいってな」

「そんなの駄目だよ！」

音無が自分の考えを述べると……突如として小毬が叫んだ。

思わず音無は身体をビクツとさせてしまうが、すぐに冷静に戻る。

「簡単に消えるだなんて言っちゃ駄目！ 生きていればきつと幸せなことだってあるんだから……」

「幸せ？ 死後の世界に来たような奴らが、幸せな人生なんて送ってたと思ってるのか？ それに、神北が考える幸せってなんだよ。俺とお前とでは、幸せの定義なんて絶対に違うだろ？」

「……私は、『貴方が幸せなら、私も幸せ』って感じかな。誰かが嬉しそうにしていたのなら、私だって幸せになれる。だから私は、どっちかと言えば生きていた頃も幸せだったかもしれない。けど……心残りが無いかと言われると、それは嘘になるけどね」

「……そうか」
音無は、小毬の幸せ理論を聞いた後に、落ちていた袋詰めのココロレートを一つ拾って、

「……俺は行く。長居するのもあれだしな……このチョコ、貰っていくぞ」

「うん、いいよ〜」

小毬は、ほんわか笑顔で音無を送り出す。

そんな小毬の笑顔を見て、音無は少しやる気が抜けるような感じがしたが、床から立ち上がり、

「(とにかく大人を探そう。大人はどこにいる……先生は？ まずは校長にでも聞いてみるか?)」

そんなことを考えながら、屋上から校舎内に入ろうとする。

するとその前に、

「またここに来てくれるかな〜?」

小毬からのそんな言葉が聞こえてくる。

先ほどの世界から消えたいと言っていた少年に言うべき言葉ではないと音無は考えていたが、

「……気が乗ったらな」

とりあえず音無は、そう答えておいた。

小毬の顔が、笑顔になったような気がした。

※

「とにかく、校長室に行ってみるのがいいかもな。学園のことなら、この学園の校長に聞くのが一番だからな」

音無は、校長室に行けば何かが分かると考えていた。

そんな考えを抱きながら歩くこと、およそ数分後。

校長室の前に到着した。

「きつと何かが分かるはずだ……校長なら、まともな話が出るかもしれないからな」

そう思っ、音無はドアノブに手をかける。

しかし、その瞬間だった。

「…………え？」

ブウン！

空を斬るような音がしたかと思ったら、横から巨大なハンマーが飛んできて……。

「ぐはっ！」

ドン！

その巨大なハンマーに思い切り殴られて、音無の身体は、ガラスを突き破り、外へと飛んで行った……。

*

「そうだな…………じゃあこれはどうだ？ 『死ぬのはお前だ戦線』」

「何よ、私が殺されるみたいじゃない」

「…………いや、もちろん死ぬはあの女だぜ？」

「…………ならこつち向きなさいよ。『死ぬのはお前だ戦線』」

「ぐおっ！ やべえ…………確かに俺が殺されそうだわ」

気がつけば、音無はどこかの部屋のソファの上で寝かされていた。

顔だけを動かし、上の方を見ると…………そこには何人かの人が集まっているのが見える。

何個かの声の中には、音無があの時聞いた女子の声も聞こえてきた。

何の話をしているのかと気になった音無が会話を聞いてみれば、

「他には？ 何か案は無いの？」

「おっ、これかっこよくね？ 『走馬灯戦線』」

「それ死ぬ寸前じゃない」

「ならこれはどうだ！ 『消したい戦線』」

「死ぬのを覚悟してるじゃない……!!」

「『絶体絶命戦線』」

「絶体絶命じゃない！」

「『可愛い子を愛でたい戦線』」

「勝手に愛でてなさい!!」

「『無敵艦隊』」

「それ戦線じゃないし」

「えつと……」

「考えてから発案しなさい!!」

「ハイ！ 『ライト兄弟』!!」

「大喜利か！」

ガン！

ゆりが思い切り日向を殴る場面が、音無の目にも飛び込んでくる。

顔を赤くした日向は、終始痛がるそぶりを見せていたが、ゆりは構わずこう述べた。

「もうっ、最後は戦線って決まってるの！ これだけは譲れないわ」

理想論を語るゆりだが……この時音無は、

「(しようもないことで悩んでんじやねえよ……)」

なんてことを考えていたという。

「私たちは戦線の第一戦線にいるのよ。もっとマシな案は無いの？」

ゆりが全員に向かってそう言ったその時。

一人の少年が、音無がソファから身体を起こしていることに気付いて、一言。

「ねえ……その人、もう起きてるんじゃない？」

「へっ？」

この一言に、今まで話していた人物達が揃って音無の方を振り向く。

そしてゆりが、音無に向かってこう言った。

「ああ、気が付いた？」

「あ、ああ……」

音無の答えを聞く前に、ゆりがさらに言葉を繋げる。

「そうだ！ コイツにも考えさせてあったのよ」

言いながら、ゆりが音無に近づいてくる。

音無の顔に、自らの顔を近づけた後に、一言こう尋ねてきた。

「時間はたつぷりあったわ……聞かせて頂きましようか？」

「何を？」

「『死んでたまるか戦線』に代わる新しい部隊名よ」

そう尋ねてきたゆりを思い切り嫌そうに見つめて、音無は言った。

「勝手にやつてろ戦線」

「ほぅ、ゆりつぺに歯向かうとはいいい度胸じゃねえか……!!」

長い刀を持つ少年——藤巻が刀を抜きながら、音無に近づいてくる。

音無は、そんな少年に向かって……いや、この場にいる全員に向かって、言った。

「何だよ……勝手にやつてろって言ってるんだよ！」

「何だと!!」

音無の言葉にキレて、藤巻が叫ぶ。

その声に負けず劣らない大きな声で、音無は言った。

「大体何なんだよお前ら……俺を巻き込むなよ！俺は早く消えたいんだよ!!」

自分の心中をさらけ出すと、メガネをかけた少年——高松が、かけているメガネの鼻当て部分をクイツと上げて、それから言った。

「消えたい？ 今ここにこうして存在しているのに、ですか？」

「ああそうだよ！」

「……抗いもせず、消されることを望むと？」

「ああ！」

「抗いもせず、ミジンコになると？」

「ああ！ ……つて、え？ ミジンコ？」

聞き捨てならないと言ったような表情を浮かべ、音無が即座に言葉を中断する。

そんな音無に向かって、藤巻が嫌な笑みを浮かべて言った。

「ハッ！ 魂が人間だけに宿るもんだとでも考えてたのかよ、テメエは……」

「浅はかなり……」

「うおっ!？」

藤巻の言葉に呼応するように、音無の背後にいた椎名が呟く。

思わず音無は、驚きの声をあげてしまった。

「次はフジツボかもしれないし、ヤドカリかもしれないし、フナムシかもしれない」

「そんな……まさか？」

松下の言葉を聞いて、音無は冷静に判断が出来なくなっていた。

そんなところに、高松から一言。

「何故浜辺に集中しているのかと突っ込む余裕もなさそうな顔ですね」

「そんなところまで気付くかよ！ てかその前に突っ込まねえよ!!」

段々音無は、ここにいて突っ込むのが面倒になってきていた。

しかし、話は更に続く。

「ほら、それならさっさとここから出て行けよ。天使の言いなりになって無事成仏すんだろ？ フジツボにでもなつて誰かに食われてろよ。幸せな来世じゃねえか」

「フジツボ……」

藤巻に言われて、音無はフジツボの姿を思い浮かべる。

「(うわあ……確かにそれだけは嫌だな)」

心の中でそう呟いていた。

すると、先程音無が目覚めていたことに気付いた少年が、

「ええ！ フジツボって食べられるの？」

そんな問いに、高松が普通に答える。

「食用のも確かにあります」

「へえ、知らなかったぜ」

「浅はかなり……」

日向が素直に感心し、椎名が小さな声で、やはりそう呟いた。

「まあまあみんな。そんな追い出すような真似はしないであげなさい。かわいいそう
しよ?」

見かねたゆりが、全員に向かってそう言う。

その後で、音無の方を向いて話を振る。

「我ら……あゝえつと……今何だったっけ?」

『フジツボ戦線』

「そうそう! フジツボせん……」

言いかけた所で、ゆりは余計な口を挟んできた藤巻の顔面を蹴り飛ばす。

スカートが翻り、音無は若干顔を赤くしていたが……もちろん誰も気づいてはいな
かった。

「いけないな。女の子がスカートで蹴りを入れるなど……せめて鉄拳制裁に留めておく
がいい」

「わふ……くるがやさん、何を言ってるのですか?」

クドと来ヶ谷のそんな会話が聞こえてきたが、当然音無は聞くはずもなかった。

「元に戻す……『死んだ世界戦線』」

「いい蹴りだったぜ、ゆりっぺ」

ぶつきらぼうにそう言い切るゆりに対して、顔をさすりながら笑顔でそう言う藤巻。

心なしか、音無はそんな藤巻に対して軽蔑の眼差しを向けていた。気にせずゆりが言葉をつなげる。

「この戦線の本部にいる間は安全なんだから、彼もそれを知ってここに逃げ込んで来たんでしょ」

「いや、知らないし。入ろうとした途端ぶっ飛ばされたし」

すぐさま否定する音無。

音無が言ったことはすべて現実であり、何も知らずに……この部屋に校長がいるものだとはかり思っていて、当たり前のようにそこには校長がいなかった。

おまけに入ろうとしたところで、謎のトラップ発生。

尚一層、わけが分からなかった。

「つて言うか、来世があったとして人間じゃないかもしれない何て……冗談だろ？」

「冗談ではない」

「だって……そんなの確かめられないじゃないか。誰か見てきたのかよ」

「そりゃあ、確かめられないわよ」

「じゃあ……」

「でも仏教では人に生まれ変わるとは限らないと考えられているわ」

「そんな……フジツボだなんて……」

真剣に落ち込む音無に、ゆりがなだめるように言った。

「まあ、宗教なんて人間が考えた物なんだけど……でもね、よく聞きなさい。ここが大事よ」

前置きはともかく、ここからが重大な話となる。

音無はそれを悟り、真剣な表情になる。

やがてゆりは、一拍置いた後に……話し出した。

「あたし達がかつて生きていた世界では、人の死は無差別に……無作為に訪れるものだった。だからその死に抗いようがなかった」

確かに……その通りだった。

人の死など、いつ訪れるかなんて、最後までわからない。

人は自らの死に対して回避策を講じることは可能でも……それを確実に回避することは不可能なのだ。

理不尽だが、そういうシステムになっていたのだ。

「でも、この世界では違うのよ。天使にさえ抵抗し続ければ行き続けられる。抗えるのよー」

ゆりは、音無にこう告げていた。

だが、音無はどうしても疑問に思わずにはいられなかった。

『その先に……何があるのか?』と。

だから音無は、ゆりに尋ねていた。

「その先にあるのは何なんだ? 天使に抗って……お前達はどうしたいんだ?」

その問いに対して、ゆりは胸を張って……答えた。

「私達の目的は天使を消しさること……そして、この世界を手に入れることよ!」

「……え?」

この言葉に、音無はキョトンとするしかなかった。

周りを見てみれば……その場にいるほぼ全員が、ゆりの言葉に対して誇りを抱いているようにも見えた。

だが、イマイチ理解していないクドと、音無と同じく疑問の表情を浮かべている来ヶ谷もまた、その中に混じっていた。

「まだ来て間もないから混乱するのも無理ないわ。順応性を高めなさい。そして、あるがままを受け止めるのよ」

「そして戦うのか? ……天使と」

「そうよ。共にね」

そう言つて、ゆりは音無に手を差し出す。

その手を握るか握らないかで……音無が果たして今後どのような道を進むことにな

安全に話せる場所なんてないわ」

「……少し時間をくれないか?」

「ここ以外でならどうぞ?」

「うっ……!」

そう言われてしまつては、音無が選べる選択肢は極端に減つてしまつていた。

というよりも……選べる道は、一つだけだった。

「お……OKだ!!」

「!!!」
「!!!」
「!!!」

ここまでされてしまつては、音無は入隊して合言葉を聞く以外に、この場所から無事に脱出出来る方法はなかった。

つまりこれは……ある意味では一方的な交渉だったのだ。

狙つた獲物は逃がさない……ゆりという人間は、そういう性格の人間なのかもしれないと、音無は考えていた。

「合言葉は?」

音無がゆりにそう尋ねると、ゆりは心底嬉しそうな表情を浮かべた後に、

「神も仏も、天使もなし」

そしてゆりは音無の右手をしっかりと握り……握手を交わした。

それから自己紹介が始まった。

「私はゆり。この戦線のリーダーよ」

まずはゆりが自分の名前を告げる。

それから戦線メンバーの紹介をした。

「彼は日向君。見た目はちゃんぽらんだけど、やる時はたまにやるわ」

「ああ……つて全然フォローになつてねえよ！」

ゆりに向かつてツッコミを入れる青髪の少年……日向。

「彼は松下君。彼は柔道五段だから、みんなは敬意をもつて松下五段と呼ぶわ」

「よろしくな」

短い挨拶を述べた、いい身体付きをしている少年は、松下。

つい先日謙吾が出会つた少年なのだが、音無が知るはずもなかった。

「彼は大山君。特徴がないのが特徴よ」

「ようこそ、戦線へ」

そう言つたのは、先ほど音無が目覚めたことに最初に気付いた少年——大山。

ゆりの紹介通り、これと言つた特徴がなさそうな少年であった。

「Come on! Let's dance!」

「いや、踊らねえし」

「ああ、それ、彼なりの挨拶なのよ。彼はTK。本名は誰も知らない謎の男よ」
「んな奴が仲間でもいいのかよ……」

その場で奇妙な踊りをしだすのは、金髪で赤いバンダナを頭に巻いた少年……TK。
本名が不明という点から、音無は思わずそう呟いてしまっていた。

「いちいち眼鏡を持ち上げて知的に話すのは高松君。実はバカよ」

「えっ……」

「よろしく」

知的そうに見える少年——高松が、実はバカだという事実を告げられる。

本人はそのことに関して否定しないことから……どうやらそれは本当なのだろう。

「で、さつき飛んでいったのが野田君。陰であさはかなりって言い続けているのは椎名さんよ」

「浅はかなり……」

ゆりの言葉に、椎名が再びお決まりの文句を言っていた。

「何でか知らないけどいつも制服にマントを羽織ってるのが、能美さん」

「よろしくです」

「あ、ああ。こちらこそ……」

丁寧な頭を下げて挨拶をされたので、音無も思わず頭を下げてしまっていた。

「腰に刀を差した女の人は……来ヶ谷さん。ある意味この戦線で一番恐ろしい人よ」

「本人を目の前にして言うことなのか？ ……何がともあれ、私は来ヶ谷唯湖だ。どうぞよろしく」

「よろしく」

とりあえず音無は、短くそう言葉を述べておいた。

「こつちに座っているのが岩沢さんよ」

ゆりに紹介されてから、岩沢は頭をペコリと小さく下げたのみだった。

「彼は藤巻君」

「藤巻だボウズ」

「……ボウズじゃない」

先ほど音無に突つかかってきた音無が、やはり今回も挑発するような言葉を述べて音無に挨拶をする。

音無もまた、ぶつきらぼうに言葉を返していた。

「後、ここにはいないだけでまだ戦線のメンバーは何十人というわ。ところで……貴方、名前は？」

「ここまできて、音無はこのメンバーに自分の自己紹介をしていないことに気付く。

といつても、記憶喪失である彼には……。」

「俺は音無……」

「下の名前は？」

「うくん……思い出せねえ」

自分の苗字以外何も思い出せていない音無は、ゆりに下の名前を聞かれても、答えることが出来なかった。

「記憶がないパターンか……気にすんなって、時期に戻るさー！」

音無の肩に手を乗っけながら、日向が話しかけてきた。

そんな中で、藤巻がゆりに尋ねる。

「おい、制服は渡さなくていいのか？」

「あつ、忘れてた」

その言葉を聞いて、音無は改めて辺りを見回す。

自分の制服と（ボロボロになってるので制服と呼べるかどうか定かではなかったが）、日向達が着ているものでは違うことに気付いた。

「その……何で俺の制服は違うんだ？」

その問いを聞いたゆりは、校長の椅子に向かって歩き……座る。

それからこう言ったのだった。

「あなたが違うんじゃないわ。あたし達が違うのよ。それは模範生の制服、これがあた

し達……クラススリーSの制服ってわけ」

そう告げるゆりの制服の肩の部分には、三つのSが並ぶワツペンが貼られてあった。

※

「ハア……暇だな」

恭介は、することもなくただ校庭を歩いていた。

時刻は夕方……特別することがないような時間こそ、恭介がもつとも嫌う時間であった。

「……何だ？」

食堂の方に近づいた時、誰かが楽器を食堂の中に運んでいるのが見えた。

それは以前に会ったことのあるような……そんな少女達だった。

「あれは……岩沢達か？ けどなんで……」

「作戦の一部……みたいですよ？」

「うわっ！ な、なんだ……西園か……」

背後から声があったので、恭介は思わず驚いてしまう。

慌てて後ろを振り向いてみれば……そこにいたのは、西園美魚だった。

「こんにちは、恭介さん」

「ああ……けど、作戦って？」

「来ヶ谷さんの話ですと……何でもその作戦名は、『オペレーショントルネード』と言うのだとか」

「オペレーショントルネード！ ……って、具体的になんだ？」

名前を言われたただだと、それがどのような中身なのかを理解することは難しい。

恭介も例外ではなかったらしく、その内容について美魚に尋ねていた。

頭の中だと……竜巻がどうのこうのとなっているが。

「一言で言い現すのでしたら……生徒から食券を巻き上げるのだとか」

「そつちの巻き上げるかよ！ ただの不良がやることじゃないのかそれ!？」

実はこれより前に音無がオペレーション内容を聞いた際に同じような反応をしてい

たのだが、恭介が知るはずもなかった。

「いえ、それがそうでもないんですよ……」

「どういうことだ？」

冷静さを取り戻し、恭介が美魚に尋ねる。

美魚は、先ほど来ヶ谷に聞いたことをすべて話した。

「部隊は陽動部隊とバリケード班に分かれて行動するようです。陽動部隊は一般生徒達を食堂にくぎ付け状態にさせるように……ガルデモと称される女性バンドチームを中心として行動するようです」

「ガルデモ……岩沢達のバンドだな」

「続いてバリケード班ですが、こちらはやること自体はただ一つ……『天使』を食堂から遠ざけること」

「『天使』……立華のことだな」

まとめてみれば、こうだ。

陽動部隊が一般生徒達を食堂から出さないようにしておいて、被害が及ばないようにする。

当然、ガルデモは正規の活動をしているわけではなく、校則違反の行動をしているわけなので……生徒会長である『天使』が注意の為に食堂へ向かう。

そこでバリケード班が、『天使』を食堂へ来させないように、防御するのだ。

そうして頃合いを見計らい、ゆり達が巨大な扇風機みたいなもので生徒達の持つている食券を巻き上げて、それを手に入れて引き返すと……そんな感じだ。

恐らくこの中で一番大事で大変な役回りをするのは、バリケード班だろう。

「なるほどな……確かにそれなら、オペレーションなんて名前が冠するのも当然だよな」

「作戦開始はヒトハチサンマル……だそうですね」

「ヒトハチサンマル……18：30のことか」

「……恭介さん、顔がニヤけてますよ？」

「分かるか？」

美魚が話し終えた時……恭介は誰が見ても分かるような笑顔だった。それはまるで、何か楽しいことを見つけた少年みtainな笑顔だった。

「……恭介さん、まさか」

「ああ、そのまさかだ」

恭介はさぞかし嬉しそうな表情を浮かべて、それからこう宣言した。
「さて、リトルバスターズの活動開始だな！」

「……やっぱり。ですが、恭介さんらしいです」

いつの間にか、恭介に釣られて美魚も笑顔になっていた。

ともかく……新生『リトルバスターズ』の、最初の活動開始である。

*

18:30。

そこに現れてきたのは……誰がみても分かる通りの、美少女だった。

少女は、生徒達が食堂で何やら大騒ぎをしているとの情報を掴み、こうして自らの寮の部屋から食堂まで赴いたのだ。

やることはただ一つ……騒ぎを終息させること。その為に、少女は動いたのだった。

「……これ何回目かしら」

眩く、少女の名前は……立華奏。

ゆり達戦線メンバーから『天使』と呼ばれる存在だった。

彼女は生徒会長としての仕事を全うしているだけなのに……いつの間にか『天使』なんて異名がつけられてしまったのである。

「けどそれでも……行かないわけにはいかない」

奏には、これから何が起こるのかが理解出来ていた。

理解していて、奏はこの場にこうして現れたのだ。

生徒会長という役柄にある以上……注意しに来るのは絶対条件だから。

「……」

そして奏は、一人の少年に出会った。

人に出会うまでは、いつも通りの展開だった。

しかし、その人物というのが……。

「……え？」

「面白そうなおことがある所に、棗恭介ありってな」

月が輝く夜。

満月をバックに笑顔を見せるその少年は、何人かの仲間を引き連れて、

「面白そうだな、俺達も混ぜてくれよ！」

「まったくだ……こんなに楽しそうなことは、今まで見たことはない」

「ハルちゃんの出番ですな」

「私も頑張るよ〜」

「……善処致します」

少年の他にいたのは、五人の少年少女達。

体格から何もかもが違うその少年少女達は……しかし中心にいる少年と同じように、笑顔だった。

そしてその少年は、奏に向かってこう言った。

「リトルバスターズ……ここに参上！」

そこにいたのは……リトルバスターズのリーダー——棗恭介だった。

「どうして……貴方達がここに？」

奏は、目の前に恭介達が現れたことか心底不思議でたまらなかった。

夜中に校舎の外に出ているのは校則違反だと告げる前に……どうして自分の前に現れているのが不思議だったのだ。

しかも制服も……何処か普通のものとは違う。

かといって、ゆり達戦線メンバーが着ている服とも別物であった。

「神北と謙吾の力作なんだぜ、この制服……前にいた世界での制服まんまだが、なかなか

うまく出来てるだろ？」

「あう……あの時は本当に倒れるかと思ったよ」

「まあ、存外楽しかったがな」

楽しかったと述べる謙吾とは対称的に、疲れたような表情を見せる小毬。

二人合わせて、果たして何人分の制服を作ったのかわかったものではない。

ちなみに、謙吾は生きていた時と同じように、剣道着を着ていた。

しかし何故か……その上にリトルバスターズジャンパーを着ているのが目に映った。

「私が聞きたいのはそうではなくて……」

「ああ。何で俺達がここにいるのか、だろ？」

奏の言葉に重なるように、恭介は言う。

その通りの言葉を言われたので、奏はただ黙って頷くしかなかった。

「……面白そうなところに、俺達リトルバスターズがいる。それだけじゃ駄目か？」

「……確かに面白そうなことがあったらそこに来るのが人間。今回の食堂での騒ぎもそれと同じ心理……だけど、貴方達はそれならなお更、どうしてこっちに來ているの？」

「ここには戦いしかない。死にはしないけど、怪我をするわ」

「そんなこと、上等じゃないか」

奏の言葉を一言で断ち切る。

そのことに奏は驚くが、他のメンバーはそれが恭介だといわんばかりの表情を見せていた。

「さてお前達に聞くが……俺達の名前は何だ？」

「リトルバスターズですネ」

「んじゃあ、リトルバスターズのメンバーは、何と戦う？」

「悪とだな」

「この場合は悪とか関係ないが……楽しいことがあつた場合にはどうする？」

「もちろん、迷わず飛び込むぜ!!」

「それが例え危険な場所だったとしても？」

「……もちろん私達は、行きます」

「……」

恭介・葉留佳・謙吾・真人・美魚の五人の言葉に、奏はただただ驚くだけだった。

そしてそんな奏の表情を見て、恭介は満足そうな笑顔を見せ、

「さて、ここまで言つても分からないと言つたような立華に、最後に一言だけ言つておく」

そして恭介は、奏に向かってそう言つた。

「俺達リトルバスターズは……今回はお前の味方だ」

「!?」

「もちろん、今回は楽しそうなおことがあったから仲間になったようなものだから……次回以降どちらの仲間につくかは、俺達の勝手だからな」

「……棗君」

呟く奏の声は、今まで恭介も聞いたことのないような、どこか安心しきったような声だった。

だから恭介は、奏に言った。

「安心しろ。必ず俺達が勝利してみせるからよ……立華を食堂まで無事に送り届けられたら俺達の勝ちつてことで構わないんだろ？ あとはお前の好きなようにやれ。それまでは俺達も好きに暴れさせてもらおうからな!!」

「……分かった。今回の校外活動のことは、見逃してあげる」

「そりやどうも……もつとも、これから校外活動よりも凄いシヨウが待ち受けているけどな」

笑顔でそういう恭介は、その後で四人に告げる。

「いいかお前達！ 相手は俺達よりも実戦経験が豊富と見える！ もしかしたら多少の犠牲者が出るかもしれないけど、そこは覚悟の上で頼むぞ！ ……小毬、お前は先に食堂に行つて、中の様子をこの無線機で知らせてくれ。何か大きな動きがあったら、すぐ

「さま俺に知らせろ」

「分かりました〜!」

「謙吾と真人は特攻部隊、西園と三枝は後衛で援護してくれ……その、NYP（何だかよく分からないパワー）が備わった例の武器は持つてるのか？」

「はい。何故か私の部屋に置いてありました」

「それは助かる……奏は最初囿として一人で食堂まで向かってくれ。何か危険なことがあつたら、俺達がカバーに回るから……いいな？」

「……うん」

全員に指示を出す恭介は、リーダーとして様になっていた。

いや、元々彼はリーダーなので、その表現もおかしいのかもしれない。

「それじゃあ久々に言うぜ! ……ミツシヨン、スタートだ!!」

「「おお!!」「頑張るよ〜!」

「……頑張ります」

こうして、リトルバスターズ+奏は、食堂を目指して行動を開始した。

*

「こんな作戦で、一体どうやって食券を平和的に巻き上げるんだ……?」

学生棟と学食近くを繋ぐ連絡橋の近くに、拳銃をしっかりと握り締めた音無が立つて

いた。

彼はバリケード班の一員として、『天使』が攻めてくるのを防ぐ為に、そこに立っていた。

「……いつ現れてくるんだ？」

眩いた時、食堂の明かりが一気に消え、そこから大歓声が聞こえる。

恐らく作戦が開始されたということだろう。

そして、それとほぼ同時のことだった。

夜の中に輝く、白くて長い髪。

歩く度に左右に揺らし、そこに人がいることを強調しているかのようにだった。

その少女……天使のごとき美少女。

「現れた……現れやがった……俺のところに……!!」

現れたのは、『天使』。

音無はその姿を発見すると、反射的に銃を向ける。

標準を、一人の少女に定めて……。

「(今の戦線の弱点でことかよ……くそっ！ 撃つてやる!!)」

決意を見せる音無だが、その腕は未だに震えている。

まだこの状況をうまく理解出来ていない証拠だった。

それを物語るように、音無は心の中で呟く。

「(でも、あんな華奢な身体を、銃弾でか? あんな、俺より頭一つは低い身体をか?)」
迷いが生じる。

だが、その次には……迷いは消え去っていた。

「(やらなきや、やられるんだ……何の容赦もなく、な……!!)」

やがて音無は、拳銃の引き金を引くために、ゆっくりと右手人差し指を動かす。

だが、その指が引き金を引くことはなかった。

何故なら……どこかからか勢いよく飛んできた、小さな石みたいなものが、音無の右手に直撃したからだ。

そして、その方向から少年の声が聞こえてくる。

「そんな物騒な物を手にして……随分と派手な舞踏会になりそうだな?」

「だ……誰だ!？」

慌てて銃を拾って、今まで『天使』に向けていた銃を、その方向にいるだろう人物に向かつて突きつける。

やがて何者かが木陰から現れて、一言こう言った。

「本日は招待状なしの入場だが、ありがたく乱入させてもらうぜ……!!」

「なっ!?! ……棗!?!」

そこにいたのは、パチンコを片手に持った、棗恭介だった。

「悪いな音無……今回はお前達の敵なんだな」

「どうして……お前は俺達とも戦わないし、『天使』の味方になるわけでもなかったんじゃないのかよ!？」

責めるように、音無が言う。

だが、恭介は笑顔を決して崩さずに……こう言ってみせたのだ。

「ああ、確かに言ったな。そして今も俺達は『戦つては』いない」

「ハア!? どう見たつてお前達は戦つてるじゃねえかよ!？」

「いや、俺達は『戦つて』いない……遊んでるんだよ」

「な、何言つて……」

「俺達リトルバスターズは、面白そうな場面があつたら勝手に乱入するんだよ。それとも何か? こんなにも楽しい舞踏会はお前達だけつてことか? それは少しばかり欲が深いんじゃないのか?」

そう言っている恭介に、嘘偽りなどどこにもなかった。

それは奏も感じていることで……同様に音無にも感じられた。

だが、そんな恭介の心境こそ……音無の中で何か怒りに似た物を感じさせるきつかけとなつたのだった。

「ああそうかよ！ 今回だけなのかもしれないけど……今のお前は『天使』の味方をしてるってことは、敵だと認識して構わないってことだよな!？」

「最初に言っただろ……今回はお前達の敵だってな！」

パン！

パチンコを使って、恭介は数回にわたり、音無の右手を狙って石を当てようとする。

だが、音無とて最初と同じようにその攻撃を見過ごすわけではなかった。

「喰らえ！」

パンパンパン！

数発にわたる銃声が鳴り響く。

……だがその弾は、どれも恭介まで届かなかった。

なぜなら。

「……な、何だよそれ!？」

奏が恭介の目の前に立ち、腕に出現させた刃でそれらを跳ね返したからだ。

さすがにこの状況にビビり始めた音無は……後退しながら銃を撃つ。

それを奏は、いとも簡単に何回も跳ね返す。

「どうして……どうして当たらない!？」

音無の表情に、焦りの色が見え始める。

それは逆にいえば、恭介達にとっては勝ち目がある証拠にも繋がっていた。
「立華……ここですぐに一気に食堂まで向かうぞ！」

「……うん」

刃が出現していない方の手を掴み、恭介は奏を引つ張つて音無の後を追う。

そしてついた先は……最早食堂の目の前という場所だった。

「くそっ……このままだと……やられる!!」

音無の持つ銃には、もはや弾なんて残っていないかった。

奏に対して銃を撃ちすぎたのだ……しかも音無は、焦っているが為にリロードするこ
とを忘れてしまっていた。

「チェックメイト……ではなさそうだな。立華！横から奇襲が来るぞ!!」

「……!!」

その時。

何処からか巨大な何かが飛んでくるのが目に映った。

奏はそれを『Hand Sonic』ではじき返すと、それは地面に突き刺さった。

……その形状は、まさしく野田がもっていたハルバードそのものであった。

「ちっ、外したか！」

それを物語るかのように、物陰から野田が現れてくる。

「ぐはっ！」

突然暗闇から叫び声が聞こえてきたかと思ったら、大山が殴られて、そのまま気絶。

「ちっ！ 何が何だかよくわからんが……俺が行こう!!」

松下は銃を捨て、その人物とタイマンをはるつもりだった。

そしてその人物こそが……。

「へっ！ 俺と筋肉で張り合おうってか……いいだろう！ この俺が相手してやるぜ!!」

今や筋肉暴走電車と化した、井ノ原真人であった。

「お前達は『天使』に向かって一斉射撃だ!!」

「りよ、了解!!」

真人に突撃を開始した松下が、日向達に向かってそう指示を出す。

その指示を聞いた日向達は、隣に恭介がいることに若干の戸惑いを感じつつも、銃で一斉射撃を開始した。

だが、その銃は恭介にも奏にも当たらない。

「Gird Skill Distortion」

呟いたかと思ったら、奏の身体に当たるはずの銃弾は、何処かに弾き飛ばされて行った。

……全身が先ほどの『Hand Sonic』のように飛び道具を通さない仕組みになっっているのだろう。

そして何の対策もないはずの恭介の身体に銃弾が当たらなかつたその理由が。

「……待たせたな、恭介」

「タイムリングばつちりだぜ、謙吾」

どこから手に入れたのかはよくわからない刀を持って、謙吾がそれらをすべて斬り伏せたからだつた。

「な、何なんだよコイツら!？」

驚きの声を挙げるのは、藤巻だつた。

藤巻にとって、恭介立は初めて見る存在……すなわちNPCと同等くらいのレベルの戦闘能力しかないものだとはかり考えていた。

しかし、事実はかなり異なっていて……実は戦闘能力においても、戦線メンバーに劣らない程のものだつた。

「充電……完了しました」

「よし、西園……撃て!!」

後ろから呟く声が聞こえてきたのを確認すると、恭介はその人物に向かって指示をだす。

同時に恭介は奏を連れて安全圏内に行き、

「……発射」

美魚は、巨大なバズーカみたいなのを藤巻に向けたかと思ったら、

そのバズーカの引き金を引き、一気に放出した。

「ぐほあ！ な、何だよ……これ……」

そのまま藤巻は、意識を手放してしまった。

だが、攻撃は尚も止まない。

それどころか、今度は恭介達でも手ごわい相手が登場する。

「……!!」

「何？ ……おつとー！」

突然恭介と奏の方に飛んできた……謎の人影。

それは間違いなく、椎名のものであった。

さらに横から現れてきたのは……。

「なっ!! お前……来ケ谷か!!」

「残念だな、恭介氏。今回ばかりは恭介氏の敵という立場なのでな。仕方ないが、攻撃さ

せてもらおう……!!」

「待て、お前の相手はこの俺だ」

そう言つて恭介の前に立つたのは、謙吾だった。

刀をしつかりと構え、来ヶ谷の前に立ちふさがる。

「……いいだろう。謙吾氏、お姉さんを満足させてくれよ……!!」

そして二人は恭介と奏から離れて、互いに戦闘を開始した。

一方で椎名は、奏に斬りかかったかと思うと、すぐさまその場から引いてしまった。

その時に『Distortion』を解除して、奏は『Hand Sonic』で対応していた。

……そこそが、落ち度だった。

「ま、まずい……立華！今すぐそれを解除しろ!!」

気付いた時にはすでに遅く。

敵は巨大なバズーカ砲を撃ってくる所だった。

しかし、バズーカ砲を手にしていたTKの頭上から、謎の球体が大量に降り注ぎ……

そのままTKは気絶。

「これは……ビー玉か」

「見たか！ハルちゃんのビー玉攻撃を!!」

上にいたのは……天に向かってピースをしている葉留佳の姿だった。

「まったく……ん？」

葉留佳の姿を見て呆れていた恭介だったが、その時無線から小毬の声が聞こえてきたのが分かった。

「どうした神北？」

『恭介さん！ その……今、何か巨大な扇風機みたいなものが動いて、ライブを見ている人達の手から、次々と食券が巻き上げられて行っています！ その……まるで台風にも巻き込まれたかのように』

「巨大な扇風機……巻き上げられる食券……ハハッ！ そうか、奴らの方が動きが早かったってことか」

そして先ほどの小毬の言葉を裏付けるかのように……次々と食堂から放出される、食券の数々。

「それでいいの？ 行くぞー！」

音無が何かを拾い上げたのを確認すると、日向は音無の腕を引つ張って、食堂の方へと入っていく。

入って行く際に、音無は仕切りに奏の様子をチラチラと見ているのが、恭介の目からも分かった。

「……今回は、俺達の敗退ってことか」

去っていく戦線メンバーを見ながら、恭介がやりきったような表情を見せて、そう呟

いていた。

episode 5 Guild

「ふわあ……眠いな、さすがに」

翌日。

恭介は授業に出る気などさらさらないらしく、屋上でのんびり授業をさぼっていた。

だが、頭の中で思い出されるのは……先日起きた『オペレーショントルネード』の一件。

「あれが……戦線メンバーがやっていることか。一体アイツらは、立華のことを『天使』なんて呼んで、何がしたいんだ？」

未だにゆり達戦線メンバーがやりたいことが理解出来ない恭介は、どう説得したらいのかも分からず仕舞いだった。

「……何もないと、さすがにつまらないな」

さすがにただ屋上で眠っているだけだと、本当にやるのが何もなくて困る恭介。

今は授業中ということもあって、屋上にはもちろん誰一人としていないはずがなかった。

本来ならお菓子を食べているだろう小毬も、どうやら授業を受けに行ってるのか、そ

れとも他の場所に行ってるのかのどちらからしい。

「ま、授業を受けたところで何の意味も成さない世界だからな……」

一応テストとかはあるんだろうが、成績なんざどうだっていいいな。真面目に授業を受けてたら消えてしまうとの話だし……」

恭介は呟いた後で、床の上に寝転がる。

そして、空を見上げる。

……太陽がこれでもかというほど輝いていて、清々しい朝だと言うことを物語っていた。

「……何と言うか、贅沢だなあ。けど、暇だ……」

棗恭介という人物は、暇な時間を意外と好まない。

楽しい何かが起こらないと、恭介はつまらなそうな表情を浮かべるのである。

その実、楽しいことを見つけるのも得意で、そのような点があったからこそ、恭介はリトルバスターズのリーダーとして活躍していたのだろう。

「……ま、今はどいつもコイツも好きないように過ごしてるだろうし。昼休みか放課後になるまで眠ってるとするか」

恭介は、もう一度だけ地面に向けて日差しを放っている太陽を見ると、そのまま目を閉じて、眠ってしまった。

すぐ近くに、金髪の少女がやって来ていることに気付かぬまま……。

*

少女がここに来たのは、本当に偶然だった。

他のメンバーが別件で動こうとしている為、特に何かすることがあつたわけではなかつた少女——遊佐は、屋上でゆりとの連絡係として残つていようと思つていたその時。

地面に横たわつて気持ちよさそうに眠っている恭介の姿を目撃したのだった。

「……だが、棗恭介」

遊佐は小さく呟く。

恭介のことは、すでにほとんどの戦線メンバーに伝わっていた。

恭介が第三勢力として、『リトルバスターズ』という団体を作ろうとしていること（実際にはもう出来あがっているのだが）、戦闘能力が戦線メンバー並にあること、そして……戦線と『天使』のどちらか一方の味方で居続けるということをしなないこと。

先の『オペレーショントルネード』では、恭介達『リトルバスターズ』は『天使』側についた。

しかしこれから先何が起こつた時、はたしてどちらの味方になるのかどうかと言つたことは、イマイチ推測することが難しいのだという。

「彼がこの世界に来たことで、何か変わるのでしょうか……？」

さらに遊佐は小さく呟いていた。

そして気付けば、無線機に手を触れていた。

理由は、簡単だった。

「ゆりっぺさん。屋上にて棗恭介さんの姿を確認しましたが……如何いたしますか？」

『棗君が？ 他のメンバーは周りにいる？』

「……いえ、棗さんだけです。屋上で寝ています」

『ハア!? 寝てるの? ……仕方ないわね。屋上から校長室まで運んでくるか、もしくは校長室まで任意同行させてくれないかしら? ……彼は戦線メンバーではないけど、ひよつとしたら今回は私達の味方になってくれるかもしれないから』

「分かりました」

無線はそこで途切れた。

いや、切れたというか切ったのだが。

「……さて」

とりあえず遊佐は、恭介の身体をゆすつて起こしてみる。

……しばらく揺らしたところで、恭介は起きなかった。

「……むう」

今度は頬を引つ張ったりしてみる。
しかし恭介は起きない。

「……こうなつたら、屋上から落としてみましょうか？」

「待つてくれ！ そんなことしたらかなり痛いから!! 分かった起きるつて!!」

「……起きてたんでしたら、最初から言つてくださいよ」

すでに恭介が起きていたことに対して、遊佐は若干すねていた。

「いやあ、なかなか美少女に起こしてもらおう機会なんてないものだからな。ちよつとばっかし堪能しようかなつて思つてな」

「……そうですか」

「そうですね……お前、反応薄いな」

遊佐の反応の薄さに、恭介は若干ね呆れを抱かずにはいられなかつた。

「……んで、わざわざ寝ているところを起こすなんて、一体俺に何の用だ？」

恭介がそう尋ねると、遊佐は短く、こう言つた。

「ゆりっぺさんから……校長室に来て欲しいとのことですよ」

※

「んで、俺に用つてなんだよ？」

遊佐につれてこられた恭介は、まずはじめに校長の椅子に座っているゆりに話しかけ

る。

周りには戦線メンバーがいて、みな一様に恭介のことを睨んでいた。

……先の戦闘で奏側についたので、そのくらいはしょうがないと恭介は考えた。

ただ、恭介はそのことよりも気になってることがあった。

校長室の明かりが消えていて、ゆりの背後には巨大なスクリーンがあり、映像が映し出されているのが分かった。

今は特別何か新しい情報を伝えているわけではないので、戦線メンバーが着ている制服にもついているようなマークが映し出されているのみであった。

「棗君も来たわね……」

恭介のそんな小さな疑問など気付いていないゆりは、恭介が来たことを確認するかのようにはなげいた後に、

「それじゃあ今回の作戦についての説明を開始するわよ……って、そういうえば能美さんと来ヶ谷さん。制服が全然違うのはどうしてかしら？ 見たところNPCが着てる制服とも違うようだし……」

説明を始めようとしたゆりが、クドと来ヶ谷の制服が戦線メンバーが着ているものでも、NPCが着ているものでもないことに気付いた為、思わずそう尋ねていた。

するとクドが、ほとんど謝るかの勢いでこう言った。

「わふ……申し訳ございません、です……」

「私と能美君は、戦線メンバーであると同時にリトルバスターズの一員だからな。こうして神北君と謙吾氏が作ってくれた制服を着ているというわけだ……なんだかコッチの服の方がしつくりくるというのもあるが」

「……そう」

クドの後を継ぐように説明した来ヶ谷の言葉を聞いて、ゆりは若干興味を失ったかのような表情を浮かべ、その後で真剣な眼差しに戻った。

「さて、今回棗君を呼んだのは他でもないわ……貴方が来る前に高松君が説明してくれたことをまとめると、戦闘に使う為の武器の在庫がもうほとんど残っていないという状態らしいのよ。このままだと流星にいけないから……そんなわけで、本日のオペレーション『ギルド降下作戦』に貴方も参加して欲しいの」

「……降下作戦？」

音無は、ゆりの言葉を聞くと同時に、上空から落ちる想像をしてしまう。

思わず身震いをさせた音無に、日向が尋ねる。

「どうした音無？」

「俺、高いのはちよつと……」

その言葉を聞いて、椎名・ゆり・クドを除く全員が、思わず吹き出してしまっていた。

「高所恐怖症ってか？ 情けねえな」

「いや、そういうわけじゃないんだが……で、ギルドって何処にあるんだ？」

これ以上恭介の話に付き合ったところで何の意味もないことを悟った音無は、単刀直入にゆりにそう尋ねた。

ゆりは顔色一つ崩さずに答える。

「ギルドは地下に存在するわ。地上にはないのよ」

「へえ、地下にか……って、地下!？」

「なるほど……今度は地下冒険か……」

驚く音無とは対象的に、恭介は少し興味を示したような表情を見せる。

それを見たゆりが、満足そうな表情を浮かべて、

「そこには何人もの仲間がいて、武器を作ってくれている。そこを取り抑えられたら武器調達が出来なくなるから、地下に作ったってわけ」

「なるほど……」

素直に感心する音無と恭介の二人。

そして目を輝かせるクドに、そんなクドの様子を見て悶絶している来ヶ谷。

来ヶ谷の様子を見た時、日向は思わず大丈夫かと考えてしまったという。

そんな中で、一通り説明を終えたゆりが、手元に置いてあった無線機みたいなものを

手に取って、

『もしも〜し』

「私だ。今夜そちらに向かう。トラップの解除をお願い」

『今夜だにや？ 了解〜』

短いやりとりを終えたのを確認すると、

「……トラップ？ ギルドにはトラップが仕掛けられているのか？」

『トラップ』という単語が気になったらしい恭介は、思わずゆりにそう尋ねていた。

そしてゆりが、そんな恭介の疑問に答える。

「ええ。対天使用のトラップがいくつか仕組まれているわ」

「対天使用トラップか……」

トラップと聞いて若干気分が上がった恭介だったが、『対天使用』という頭文字付きなのだということを知って、何処か複雑な表情を浮かべていた。

そんな恭介に構わず、ゆりは話を続ける。

「それじゃあ今回のオペレーションは……ここにいるメンバーでやりましょうか」

「え？ 野田君はいいの？」

「それに……俺は強制参加なのか!？」

野田のことを気にする大山と、勝手にギルド行きが決定してしまったことに不満を抱

いている音無。

そんな二人の言葉に答えるように藤巻が言った。

「アイツはまた一人で行動してんだろ、ほっとけ。後、お前が来るのは当然だ」

「……」

藤巻の言葉に、音無はもはや何も言えなくなってしまうていた。

「どうやら自分に拒否権が存在しないことを悟った為だ。」

「さて、棗君はどうする？」

「そうだな……」

恭介は少し考える素振りを見せた後に、

「……よし、分かった。今回は一緒に行動させてもらおう」

「ありがとう。貴方達が居てくれると助かるわ……頭数的にも」

「何か言ったか？」

「何でもないわよ」

最後の方にゆりが何かを呟いていたような気がしたので恭介がそう尋ねたのだが、ゆりが平然とした様子で流したので、気にしないことにした。

……その発言について深く突っ込んではいけないような気がしたというのは、この際置いておくことにしよう。

「それじゃあみんな。今夜22時までには体育館入り口前まで来て頂戴」

そう言ってから、ゆりは何時ものあの言葉を言ってみせたのだった。

「それじゃあ……オペレーション、スタート！」

※

そして、夜。

恭介達が集合場所として指示された体育館入り口前に来てみると、すでに戦線メンバーは集まっていた。

「全員来たわね？」

ゆりが全員を見回してそう確認をとる。

そしてその場に全員集まっていることを確認したゆりは、

「それじゃあみんな……行くわよ！」

全員にそう言った後に、ゆりは先頭を歩き出した。

遅れないように音無や恭介達もついて行く。

ちなみに、今回ここに集まってきたリトルバスターズメンバーは、恭介・謙吾・真人・

来ヶ谷・葉留佳・クドの六人だった。

美魚に小毬は、寮にてすでに就寝しているとのことなので、わざわざ起こすなどという野暮な真似はせず、今回は置いていくことにした。

「どんなトラップが来ようとも……俺の筋肉で乗り越えてみせるぜ！」

「いい心構えです……これは私も負けてはいられませんね」

「……何言ってるんだ高松？」

何やら意味不明なことを言い出す高松に、藤巻が思わずそう尋ねていた。

「バカやってないで早くついて来なさい。二人とも置いていくわよ？」

ゆりは、藤巻と高松にそう言うと、どんどん進んで行く。

ゆりに追い付こうと、恭介達は歩みを早める。

やがてゆりは、とある場所の目の前で足を止めた。

「……椅子がしまつてある所だよな、……」

「松下君、お願い」

音無の呟きを無視して、ゆりは松下に言った。

すると松下は、数人の男子を呼び、

「せーのー！」

掛け声と共に、パイプ椅子が入っている部分が引つ張られる。

出てくるのは、やはり何十個ものパイプ椅子だった。

だが、それを限界まで引つ張ってみると……。

「……へ？」

そこには空洞が用意されていた。

誰にも見つけられないように、ひっそりとそこに設置されていたのだ。

「よし、行くか！」

藤巻がそう言いながらその中に入っていくと、次々と戦線メンバーも中に入っていく。

恭介達もなにやら面白そうな表情を浮かべながら、中へと入って行った。

一方で、音無はいまだに突っ立ったままだった。

そんな音無を後ろから日向が押しながら、

「ほら。突っ立ってないで行くぞ」

「……この中をか？」

そうぼやくと、音無は一旦しゃがみ、空洞の中を確認する。

するとそこには……地下へと続く階段が、確かに用意されていた。

「……うん」

頷くと、音無は空洞の中をくぐって行き、用意されていた階段を降りて行く。

その後を、日向が後ろから降りて行くという形になった。

「ギルドに入るのも久しぶりだね」

音無が降りた瞬間に、大山がそう呟く。

「暗いな……」

音無が、中に入った感想を言った、その時だった。

「おい、誰かいるぜ！」

「!?」

聞こえたのは、藤巻の声だった。

どうやら何者かの気配を感じたようで……藤巻は手にしていたペンライトを使って、目の前を照らしてみることにした。

すると、そこにいたのは……。

「……ふっ」

所有物は、巨大なるハルバード。

その少年は、戦線メンバー＋リトルバスターズメンバーを確認すると、不敵な笑みを浮かべて、彼らの方を見てきた。

……その様子に、一同は唾然とし、呆れて、そして日向が一言漏らした。

「ああ……バカがいた」

「……何でこんなところにいるんだよ」

恭介すらも、小さくそう呟いてしまっていた。

そんな二人の言葉など無視するように、野田が音無に向かってハルバードを向けなが

ら、

「音無とか言ったな……俺はまだお前を認めていない」

それは音無に対する明らかなる宣戦布告。

しかし、彼以外の全員が……野田のやっていることの意味が分からないでいた。

「わざわざあんな所で待ちかまえている意味が分からないよな？」

「野田君はシチュエーションを重要視するみたいだよ」

「訳が分からんな……あの男」

「謙吾っちも負けてねえけどな」

日向と大山が話している最中に、何故か謙吾と真人の二人は、謎の喧嘩を始めていた。

しかし他のメンバーは、喧嘩をしている二人を無視して話を進める。

「別に認められたくない」

先ほどの野田の言葉に対する音無の答えは、それだった。

自分でも未だに戦線メンバーの一員として戦っているという自覚があまりない音無

は、そんなことはどうでもよかった。

むしろ、野田一人に認められた所で、逆に不愉快にも感じていた。

「何？……貴様、今度は千回死なせてやろうか？」

ゆつくりと、ハルバードを持ちながら音無に向かって歩み寄ってくる野田。

だが、次の瞬間。

「ぐはあっ！」

「!？」

横から飛んできたハンマーに吹っ飛ばされ、そのまま壁に激突。

その後でもう一度ハンマーの襲撃を喰らい、その衝撃で崩れた瓦礫の下敷きとなつてしまった。

「臨戦態勢!!」

その様子を一瞥した後で、ゆりが全員に指示を出す。

咄嗟に何人かは地面に伏せ、銃を構えたり、己の得物をいつでも使えるように準備していた。

「トラップが解除されてねえのかよ!？」

それはほとんど訴えにも近い叫びだった。

藤巻は目の前で稼働し始めたトラップを見て、思わずそう叫んでしまったのだ。

「これは……何事だ？」

来ヶ谷が尋ねる声が聞こえる。

その質問に答えたのは……意外にも恭介だった。

「これらのトラップは対『天使』用に特別に作られたトラップ……さっきの無線でゆりは

トラップを解除するように伝えていたはずだ。それが解除されていないということは……いや、恐らく一度は解除したんだろうな」

「一度解除したのに……どうしてまたトラップをつける必要があったのでしょうか？」

「何、簡単だ能美……来たんだよ。ギルドの中に、『天使』がな」

恭介が、あまり余裕のなさそうな表情を見せながら答える。

「その通りだと思われるわ……やるじゃない、棗君」

「そりやどうも」

とりあえずゆりにそう返事を返した恭介だったが、内心ではあまり落ち着いてはいなかった。

『天使』が来たということはつまり……奏がギルドの中に潜入してきたということになる。

つまり今回自分達は……奏を敵に回さなくてはいけなくなるということだ。

覚悟はしていたことだったが、まさかこんなにも早くに敵が現れると予測していなかった恭介は、さすがに動揺の色を隠せずにいた。

「ギルドの連中は、俺達がいることを分かかってこんな真似をするのか？」

尋ねる音無に対して、今度は高松がメガネの位置を直しながら答える。

「まだ分かっていないようですね……私達はどんなことがあると、死ぬわけじゃない

「……死ぬ痛みは味わいますが」

「そ、それが嫌なんだが……」

瓦礫の中に埋もれている野田を見ながら、思わず音無は呟いてしまっていた。

さらに高松は説明を加える。

「しかし、ギルドが陥落させられれば、銃弾の補充も、壊れた武器の修復なども出来なくなる。それでどうやって『天使』と戦うというのです？」

「……」

言われて、音無は何も答えることは出来なかった。

「ギルドの判断は正しい」

ゆりが短くそう呟くと、日向がみんなに意見を求めるように言った。

「『天使』を追うか？」

「トラップが解除されてねえ中をかよ!？」

「『天使』はトラップで何とかなるだろ？ 戻ろうぜ!」

「……いや、戻るのはあまり得策とはいえないな」

「え?」

音無の提案を、恭介が否定する。

そしてその理由を、こう述べた。

「さつきそのメガネをかけた奴が言つてた通り、俺達はどんなことがあるかと死ぬことはない。死ぬ痛みは味わうけどな……だがそれはたち……『天使』とて同じことだ。つまりこれらのトラップは単なる時間稼ぎくらいにしかならない。ここで引き返してしまつたら、それこそギルド陥落の危険性があるけど？」

「けどよ恭介……ぶつちや俺達には関係ないんじゃないか？　そもそも『天使』と戦つてゐるわけでも、コイツら戦線と戦つてゐるわけでもねえんだしよ」

「何だと teme え……斬り殺されてえのか!!」

自分達は関係ないから早く戻ろうと言おうとした真人に対して、藤巻が刀の刃を見せながら迫ってくる。

それに対して、真人も何故か上半身裸となり、

「へっ！　俺と張り合おうつてのか？　……そんな軟弱な筋肉で？」

「うるせえ!!」

「やめろ!!（やめなさい!!）」

「!？」

今すぐにも喧嘩を勃発しそうになつた真人と藤巻に、恭介とゆりが渴を入れる。

それで頭を冷やしたのか……二人はおとなしく離れて行つた。

「……こうしている内にも『天使』が先に進んでいるわ。何としても『天使』よりも早く

ギルドに到達して、何とか防衛線を張るわよ……進軍よ！」

ゆり達は、ギルド最深部を目指し、進軍を開始した。

「よし、俺達リトルバスターズも出撃だ！」

恭介の掛け声に合わせて、リトルバスターズのメンバーも、ゆり達戦線メンバーの後ろを追った。

※

ギルド連絡通路、地下3階。

彼らはその後、ただ歩いているだけで何個かのトラップに遭遇しながらも、それでも被害者は一番最初のハンマーの被害に遭った野田のみで、何とかほぼ全員生き残っている状態でここまで来ていた。

「そういえば、他にはどんなトラップがあるんだ？」

静寂を打ち破ったのは、音無の発した疑問の声だった。

その音無の質問に、日向が笑顔で答えた。

「いろんなのがあるぜ？　ま、期待しときな」

「……!?!」

地面に着地した椎名が、何かの気配に気づく。

「まずい、来るぞー！」

「来るって……何がでしようか？」

葉留佳がそんなのんきなことを呟いた……その時だった。

ギルド全体が小さく揺れているのが感じられ、何かの上から落ちてくるような音が聞こえてきた。

「これってまさか……トラップの定番中の定番……」

恭介がそう呟いた……まさにその時だった。

ゴン！ という鋭い音がして、天井から……巨大な鉄球が落下してきた。

「走れ!!」

「Oh……Crazy」

最初に声を出して走り出したのは……椎名だった。

その後を追うように、ゆり達もまた走り出す。

だが、こうして全力で走っているのにも関わらず、鉄球はどんどん音無達に迫ってくる。

「こつちだ！ 早く!!」

その時、横に小さな抜け穴があるのを見つけることが出来た。

椎名がそこから顔を出して、全員を呼んでいる。

そこにゆり達は駆け付ける。

……だが、遅れて中に入れなさそうな人物も数名残されていた。

「謙吾、真人！ 先行つてろ!!」

「お、おう!!」

「承知!」

謙吾と真人はどうか間に合った。

恭介もこのまま普通に走っていけば間に合うのだが……走るのが若干遅れたらしい日向・音無・高松・葉留佳・クドの五人は、このままだと鉄球の餌食となってしまう。

「ちっ……能美! 手を掴め!!」

「は、はいです!」

恭介はクドが伸ばした右手を掴むと……強引に引つ張つて、その身体を抱えた。

そしてそのまま、壁の横に設置された抜け穴に入りこむ。

「くそっ!」

「う、うわっ!」

同時に、日向が音無の身体を吹っ飛ばすように、横に倒れこんだ。

そして鉄球は……二人の横を通り過ぎる。

だが……未だに逃げている、高松と葉留佳の姿が、目に映った。

「このままじゃ、押しつぶされる!!」

「ぐわあっ！」

……そして、しばらくして短い断末魔が聞こえてくる。

「高松の声だ……」

「三枝の声も聞こえてきた……どうやら今回の犠牲はあの二人のようだな」

冷静に呟く、恭介。

「……高松君と三枝さん以外は無事のようなね。行きましょ」

ゆりがそう言つて、全員に指示を出す。

「いいのかよ？ 助けなくて」

音無が日向に尋ねると、

「死ぬわけじゃない。ほっといても、自力で抜け出して地上に戻るさ」

「そうなのか？」

「そうだよ……ほらよ」

音無の質問に答えると、日向は音無に向かって手を差し出してきた。

その手を掴んで音無は何とか身体を起こす。

そして、音無は日向に礼の言葉を述べた。

「さっきは助かったぜ」

「いいってことよ。俺さ、お前のこと結構気に入ってたよ」

右目でウインクをしながら、日向が爽やかに答える。

だが、音無はそれを少し勘違いしたようで……。

「……これなのか？」

左手を右頬に当てながら、不安そうな表情を浮かべてそう尋ねる音無。

それに対して、日向は全力で否定した。

「ちげえよ!!」

「ほら、そのホモはほつといて行くぞ? 音無」

「棗! お前まで何を誤解してるんだよ!! てか、いい加減能美の身体離してやれよ!!」

未だにクドを抱きかかえたままの恭介を見て、日向がツツコミを入れる。

それに対して恭介は、

「ん? 別にいいんじゃないか? このままでも」

爽やかな笑顔で、そう答えた。

「いえ……その、出来れば離して頂けると嬉しいのですが……何と

言いますか、その、恥ずかしいですし……」

「ああ、それは悪かったな」

特に悪びれた様子も見せずに、普通に恭介はクドの身体を地面に下ろす。

一連の流れを見て、音無と日向は恭介に向かってこう言った。

「お前……ロリコンだろ」

「ちげえよ!!」

恭介による否定の声は、先ほどの日向の声よりも大きかった。

*

一行はどんどん地下へと進んで行って、現在は地下6階。

何やら結構整備された道のある扉には、鍵がかかっていた。

藤巻がその鍵の解除を試みるが……。

「開く?」

「もち無理だぜ」

ゆりの質問に対して、藤巻は鍵に悪戦苦闘しながらもそう答える。

そして……その時だった。

「!?!」

突如プシュウウウウという音がして、入ってきたところに扉が出現。

そのまま鍵もかかってしまい……完全に閉じ込められてしまった。

「しまった忘れてたよ! ここは閉じ込められるトラップだった!」

「そんな大事なことを忘れるなよ!!」

「Oh no……」

大山の絶叫に対して、音無も絶叫して言葉を返す。

TKは、何故か小さくそう呟いていた。

「浅はかなり……」

腕を組みながら、椎名がそう呟いていた。

それに対して……何故かはよくわからないが、恭介は楽しそうな表情を浮かべていた。

「なあお前……どうしてそんなに楽しそうな表情を浮かべられるんだ？」

思わず音無がそう尋ねてしまった。

すると恭介は、やはり笑顔で答えた。

「いや、こんなにもワクワクする展開になるとは思ってたからよ……来てよかったぜ！」

「命の危険に晒されるかもしれないのに……呑気な野郎だぜ」

鍵を解除しながら、藤巻がそうぼやく。

すると、暗かったそこは、電気がついた影響で明るくなった。

そのことに驚く一同。

「ここからヤバいのが来るわよ……」

「ヤベえ……伏せろ!!」

何故か理由は不明だが、全員が伏せた為、恭介達もその場に伏せる。

「……………ふっ！」

そして同時に、椎名が煙玉を投げる。

はじめ恭介達には、その意味が分からなかったが……………その理由は、やがて形になって現れてきた。

「これは……………レーザー光線？」

恭介が、小さくそう呟いた。

しかも赤外線……………普通にしていたら見えるはずのない物であった。

椎名が投げた煙玉のおかげで、それがようやくと見えるようになったのだ。

「当たるとどうなるの？ あれ」

呟く音無に、日向が茶化すように答えた。

「最高の切れ味で胴体を真っ二つにしてくれるぜ？」

「ふむ……………それはいかんな」

来ヶ谷が、ボソツと小さく呟いた。

「だ、第二射が来ますです！」

クドが叫ぶ。

最初は一本線だったが……………二射目は二本線だ。

「どうすんだよこれ!」

「くぐるのよ!」

ゆりの叫び声に答えるかのように、全員がしゃがんでことをなす。

そして、

「第三射来るぞ!!」

藤巻の声が、室内に響き渡る。

「第三射は何だっけ?」

「Xだ!!」

ゆりの質問に答えるように、藤巻が叫んだ。

「あんなの……どうしろろと言うのだ?」

「各自でなんとかして!」

さすがに今回ばかりは、ゆりも特定の指示を与えることは不可能だった。

謙吾の疑問にあいまいな形で答えると、それとほぼ同時に放射線が迫ってきた。

「早く開けろ!!」

最後尾にいる松下の声が響く中、藤巻が必死に鍵の解除に努める。

「……!!?」
ぐほああああああああああああああああああああああああああああああ

あ!!」

ゆり達は、ただちに扉から外へと脱出した。

「ううううううううげええええええええええええええええええええええ!!」

出ると同時に、大山が地面に向かって吐いているのが見えた。

……恐らく松下と真人の散り様を見てしまったのだろう。

「今度の犠牲は松下君と井ノ原君か……あの身体じゃ仕方ないわね」

二人とも筋肉質な身体なので、どう頑張ってもあれを避けることは出来なかったのだ。

「少しはダイエットしろって言ってたのによ……」

呆れるように藤巻が言った。

そんな中、しゃがみ込んでいる音無に近づいてきて、日向が一言。

「すげえもん見ちまったんだろうな……アイツ、目の前で。俺はお前が生きててくれてよかったぜ。あ、ちなみに切り刻まれてもすぐに戻るぜ?」

「ああ、そう……」

日向にそう言われて、音無はそんな反応を返すことしか出来なかった。

※

ギルド連絡通路地下8階。

ここままで数名の被害者を出している戦線メンバー+リトルバスターズだが、未だその

人数は多い方の部類にあった。

恭介・ゆりの二大リーダーは未だに健在な為、指揮能力は落ちていない。そのおかげもあつてか、ここまでは普通に進むことが出来たのだが……。

「……ん？」

「どうした？ 能美」

クドが天井を見上げているのを見て、恭介が尋ねる。

クドは、手を天井に伸ばして、それから言った。

「今さっき、砂みたいなのが降ってきたような気がしたです……」

「砂？」

言われて恭介が天井を見上げると。

……確かに、パラパラと砂が落ちてくるような音が聞こえてくる。

そして……。

「な、何？」

勢いよく、天井が落下してきた。

「トラップが発動してるわよ!!」

ゆりの叫び声が、彼らの耳に入る。

そして大山が、先ほどのトラップと同様に声を荒げてこう言った。

「しまった忘れてたよ！　ここは天井が落ちてくるトラップだった!!」
「そんな大事なことを忘れるなよ!!」

ダアン!!

音無の叫び声を最後に、全員が犠牲になる……寸前のところだった。
いくら待っても、押しつぶされるような圧迫感、もしくは痛みが感じられない。
恐る恐る目を開けてみると……。

「TK!!」

「謙吾（氏）（さん）!?!」

何と……落ちてきた天井を、TKと謙吾の二人が支えていたのだ。

そして二人は、残ったメンバーに向かって一言。

「H u l l y u p !　今なら間に合う……Oh飛んでいって抱きしめてやれ」

「行け……俺達のこととは構わなくていいから、早く行け!!」

「ありがとう」

「……え？」

必死に天井を抑える二人に向かってゆりが言った言葉は、たった一言『ありがとう』のみだった。

あまりにも簡単すぎるその言葉に啞然としながらも、さすがに他のメンバーを下敷き

にさせるわけにはいかないので、どうにか力を振り絞って天井を抑えていた。
そんな謙吾とTKの横を、

「じゃあな」

「達者でな！」

「うわああああああああ……」

「わふ〜！ 頑張ってください〜い」

「いい仕事をしたぞ、謙吾氏」

藤巻・日向・大山・クド・来ヶ谷がそれぞれ二人に言葉をかける。

……言葉をかけてくれるだけまだましだろう（大山の場合は言葉をかけているとは言えないが）。

椎名に至っては、何の反応もなかった程だ。

「……Sorry」

「……悪い、謙吾」

音無と恭介の二人は、未だ天井を支え続けているTKと謙吾に謝罪と感謝の両方の意味を兼ね備えた言葉を告げると、その横を通り過ぎていった。

「もう……もたない……」

「I………W i l l ……b a c k ……」

そして二人は、そのまま天井の下敷きとなってしまった。

その様子を見て、ゆりが一言。

「TKと宮沢君までもが犠牲に……」

「したんだろ、俺達が」

「大丈夫だって……すぐ元に戻るから」

音無のツツコミに対して、日向が何時もと同じような口調で言葉をかける。

「犠牲を無駄にはしないわ……次に行くわよ!」

「コイツの頭の中には労いって文字はないのかよ……」

思わず、恭介はそう呟いてしまっていた。

ともかく一行は、先に行くことにした。

*

ギルド連絡通路地下9階。

そろそろ恭介の表情にも余裕の色が消え始めていた。

いくらこの世界の人間が死なないからと言って……ここまで多くの被害者を出してしまっているのだ。

これがもし現実の世界だったらということを考えるのが……たまらなく怖かった。

「……悪いな、みんな。助けてやれなくて」

誰にも聞こえないような小さな声で、恭介が呟く。

そして被害者は……またもや増加する。

「……うん？」

「どうした？」

ゆりが何かを思い出したかのように呟く。

日向の問いかけにゆりが答えようとした……まさにその瞬間だった。

「!？」

さっきまで地面だった場所が、一気にガラガラと崩れ去っていく！

そう……このエリアのトラップが発生してしまったのだ。

「しまった忘れてたよ！……ここはあああああああ!!」

「だからそんな大事なことを忘れるなよ!!」

大山は最後まで言葉をいい終えることなく、そのまま底の方へと落下していった。

大山だけではない。

「わ、わふうふうふうふうふう!!」

「の、能美！」

背が小さかったのが仇となったか……地面が崩壊する時に何処かに捕まることが出来ずに、そのまま落下してしまった始末だ。

「ちっー！」

とりあえず何とか恭介は唯一残された部分を掴むことが出来たので、自力で何とか這い上がる。

上がって見ると、藤巻が椎名のロープによって支えられているの光景が映ってきた。

その横では、無事に這い上がっている来ヶ谷の姿と、かなり辛そうな表情をしながら柱に必死にしがみついているゆりの姿が確認出来た。

何故にそこまで辛そうな表情を浮かべているのかと気になった恭介だったが、下の方を見てやがて答えを導き出した。

「重すぎて……もたない!!」

大の男二人を、たった一人の少女が支えているのだ。

そんな中でこうしてこの体勢を守っていられる方が、まさしく奇跡と呼ぶに値するこ
とであった。

「このままだとヤバいな……俺と音無も落ちるか?」

「ちよつと待て! 勝手に決めつけるな!」

日向の提案を聞いて、思わず音無はそう切り返してしまう。

当たり前だ……ここから落ちると言うことは、つまり自殺を意味するということなのだから。

「ここで一気に戦力を失うのは得策ではない——!!」

「うむ……被害は最小限に留めるべきだろうな」

椎名からの言葉に同意を示す来ヶ谷。

彼女達の言い分は正しく、これから先も数々のトラップがあることを考えると……一気に数を減らすことは、逆に自分がトラップに引つ掛かる可能性もかなり上昇することを意味していることになり、

それはあまり効率がよいとは言えないことでもあった。

「分かってるわよ……早く登りなさいよ!」

下にいる二人にそう指示を出すゆり。

その言葉を聞いた音無が……一気に登ろうとする。

だが、その度にゆりの身体が悲鳴をあげる。

「くうっ!」

「お前……ドSだな」

「そんなこと言ってる場合じゃないだろ!」

茶化す日向に、真剣に言葉を返す音無。

やがて日向の身体分までは登りきった音無は、そのままゆりの身体を掴むことを試みるが……。

「…………どうしたのよ。早く登りなさいよ！」

「…………どこ掴めばいいんだよ!!」

「何処だっついていいでしょ!!」

命の危機に晒されているにも関わらず、そんなことを気にする余裕があるのかと、この時恭介は疑問に思っていたという。

「…………よつと」

顔を赤くした音無が、何とか上まで這い上がってきた。

「づ苦労様…………変態」

「俺は…………変態じゃ…………ねえ…………」

息を切らしながら、音無は恭介の言葉を否定した。

そして下を見ると、

「きゃあ! そんなところ持てるわけがないでしょ!」

「うわああああああ! 馬鹿ああああああああ!!」

…………理由はよく分からないが、とりあえず日向はゆりに突き飛ばされて、悲鳴をあげながらそのまま底の方へと消えていった。

…………無表情でゆりが登ってきたのを確認すると、音無は今の行動について尋ねてみる。

「おい……日向は……」

「尊い犠牲となつたわ……」

「したんだろ……お前が」

思わず恭介は、そう呟いてしまっていた。

「はあ……遂に六人になつちやつたわね」

そうゆりが呟くと、藤巻が恭介達の方を見て、

「ハッ！ よくもまあ新入りのお前達と部外者のお前が生き残つてるなあ」

「は、はあ……」

「うむ、ありがたい言葉だな」

「ありがとよ」

音無・来ヶ谷・恭介の三人は、それぞれこんな反応をとる。

ちなみに、『新入りのお前達』というのが音無と来ヶ谷のことを指し、『部外者のお前』が恭介のことを指していた。

「次はテメエの番だぜ……？」

藤巻が不敵な笑みを浮かべながらそう告げると、

「さて……それはどうかな？」

来ヶ谷が、含みのある笑みを浮かべながら、そう呟いた。

しかし、藤巻の耳には、そんな来ヶ谷の呟きは入ってこなかった。

※

ギルド連絡通路地下13階。

「……………ここは水攻めだったのか」

「コイツ……………カナツチだったんだな」

呆れるように、音無がそう呟いていた。

この階のトラップは、水がどんどん入ってくるといふもの。

うまい具合に、藤巻が溺れて……………そのまま命を落としていた。

「それに来ヶ谷……………コイツは溺れるようなたまじやないはずだし、しかもその上何故か

満足そうな表情浮かべてやがるし……………」

「ああ……………なるほどね」

恭介は、どうして来ヶ谷までもが溺れてしまったかの理由に検討がついていた。

恐らく、水でびしょ濡れとなったゆりの身体を見て興奮して……………そのまま帰らぬ人

に。

だが、このことを言うと、戦線メンバーが抱いている『来ヶ谷唯湖』像が崩れ去ってしまおうと考えた恭介は、その考えを胸の中に大切にしまっておいたという。

「……………出口はこっちだ、来い！」

その時。

水中に潜っていた椎名が、水の中から頭を出して、音無達にそう伝える。

音無達は思い切り酸素を吸い込んだ後、溜まった空気をなんとか留める為に口を閉じて、息を止めて、水中に潜っていく。

椎名が誘導していく先を指して、他の三人も泳いでいく。

やがて泳ぎきったその先には、小さな川みtainのが流れているような場所に出た。

「……は……何だ？」

気になった恭介が辺りを見回してみると、そこには滝があったり、岩があったりと、まるで鍾乳洞の一角にいるような気分を味わうことが出来た。

「学校の地下にこんなのがあつていいのかよ……」

思わず恭介が、そう呟いた。

その時だった。

『キャンキャンキャンキャン！』

「！！！！」

何かの鳴き声らしきものが聞こえてくる。

出どころが何処かを探す為に辺りを見回してみると……川に流されている、子犬らしき物体を発見した。

だが、それはよく見ると決して子犬などではなく、
「犬の……人形？」

それは確かに、犬の形はしていても、犬ではない。

ただの犬の人形だった。

しかし、そんな犬の人形に飛びつく少女が一人。

「あああああ！ 子犬が川に流されているうううううううううう！！」

「だ、駄目！ 椎名さん！！」

ゆりが静止するのを無視して、椎名はそのまま。

「とうっ！」

バシヤン！

川の中に飛び込んで、その犬の人形を救い出す。

……しかし、救った所で人形だ。

「不覚！ ぬいぐるみだったあああああああああああああああああああああ
あ！！」

「いや、普通に気付けよ！！」

どんどん流されて行く椎名を見て……恭介と音無はそうツツコミを入れていた。

そのまま椎名は滝の方へと流れて行ってしまい……滝壺に落ちて行った。

「くっ……椎名さんまでもがトラップの犠牲に……!!」

「あれもトラップだったのか？」

「トラップというよりも単なる自業自得のような気もしなくもないが……」

半分恭介の言い分が正しいようにも思える。

ゆりは分かっついていかなくてか、

「可愛い物に対する意識は彼女の弱点なのよ……」

「……何だか来ヶ谷に似てるよな、いろんな点が」

思わず恭介は、小さな声でそう呟いていた。

「意外と可愛いんだな……」

音無がそう呟いていたが、恭介とゆりのどちらも、その呟きに対して反応を見せるこ

とはなかった。

*

ギルド連絡通路地下17階。

残り人数……三人。

「残ったのは貴方達二人だけみたいね」

「そのようだな」

「そうだな……」

ゆりの弦きに、音無と恭介が答える。

すると、ドン！ と壁を殴る音が聞こえた。

ゆりが壁を右手で思い切りぶん殴っていたのだ。

「本当の軍隊だったらみんな死んで全滅じゃない……!! 酷いリーダーね……」
 ゆりが悔しがるのも納得がいった。

リーダーとして他のメンバーを引つ張っていかなければならない立場にいるはずなのに、結局仲間達を守れずに、見殺しにするしかなかった数々のケース。

それらを経ても、はたしてリーダーとしての自覚を保つことが出来るのだろうか？

「対『天使』用のトラップなんだし、このくらいじゃなきや意味がないんじゃないか？」

「……」

音無が慰めるようにそう言ったが、ゆりからは無言しか返って来なかった。

そんなゆりに、恭介が言う。

「お前はいいじゃねえか……まだ音無がいてよ。俺達なんかどうだ？ ……すでに壊滅

じゃねえか。俺以外誰一人としてリトルバスターズのメンバーは残っちゃいないんだ

ぜ？ ……こつちに来ていない二人を除いて、だがな」

ゆり達戦線メンバーは、一応音無という残りがいる。

だが、恭介達リトルバスターズは……今回ギルド降下作戦に参加したメンバーは恭介

以外誰一人として生き残ってはいなかった。

つまり……事実上の壊滅状態。

これがもし生前の世界だったならば、彼らはもう完璧に終わっていただろう。

「……ちよつと休憩していいこうぜ、二人とも」

「……そうだな」

「そうね……服も乾かしたいし」

音無とゆりは、壁に寄りかかるようにして座る。

一方で、恭介は未だに立ちあがったままだった。

「どうしたのよ。貴方も座らないの？」

そんな恭介を見て、ゆりはそう尋ねる。

恭介は首を横に振って否定の意を見せると、

「俺は少しこの辺を歩いてみる。ちよつとした気分転換にな」

そう告げると、恭介はゆりと音無から少し離れた位置をぶらつき始めた。

……その場に残ったのは、ゆりと音無の二人だけ。

「……アンタ、よく部隊の隊長なんて務められるよな。あれだけ個性豊かな連中を、よく統率していられるな。それに、どうしてアンタがリーダーに選ばれたんだ？」

二人きりになったのをいい機会だと考えたのか。

音無は、気になっていたことをゆりに打ち明けてみた。
するとゆりは、

「……最初に歯向かったから。それだけの理由よ」

無表情で、淡々とした様子でそう答えた。

『天使』にか？」

「そう」

ゆりがそう答えると、しばらくの間、静寂の時間が訪れる。

やがてその沈黙を破ったのは、ゆりだった。

「………妹弟がいたのよ」

「え？」

突然のゆりの言葉に、若干音無は反応出来ないでいた。

そんな音無に向かって、ゆりが言う。

「貴方にはない記憶の話よ………私の過去の話。死ぬ前の私の話よ」

そしてゆりは語り出す。

自らが抱えている………生前の記憶を。

恭介も、ゆりの話を影で聞くことにした。

もちろん、どんな話であろうと、ゆりの話が終わるまでは………いや、終わった後でも、

口を挟むつもりはなかった。

音無も、何も言わずに……ゆりの話を聞くことにした。

*

ゆりの家は四人姉弟だった。

下に妹が二人いて、弟が一人。

両親の仕事もうまくいっていて、彼女達は割りと裕福な暮らしをしていた。

自然に囲まれた、別荘のような家で、ゆり達は暮らしていた。

しかし、そんな家庭に異変が起こったのは、ゆり達の両親が偶然家にいなかった、夏休みのとある日のことだった。

真夏なのに暑そうな目だし帽を被った男達が、ゆり達の家にいた。

ゆりは彼らを見て……即座に『悪い人達だ』と判断した。

そして、姉としてなんとしてでも妹達を守らなければという責任を感じた。

しかし……いくら長女としての責任を感じたところで、所詮は子供。

大人達には到底かなうはずがなかった。

男達は金目当てでゆり達の家に忍びこんで来たのだが、どうしてもめぼしいものを見つけることは出来なかった。

窓ガラスを割ったり、テレビを叩き壊したりして、その苛立ちを露にしていた。

だがその内彼らは、ゆり達にとって最悪のアイデアを思いついたのだった。

「お姉ちゃん。アンタはこの家の長女だ。家の大事な物の在処くらい教えられているだろう？ 地震が起きたらこれを持って逃げなさいとか、強盗さんが来たらそれを差し出してお帰り願いなさいだとか……聞かされた覚えはあるだろ？」

「知らない……そんなの……知らない……！」

知らないと言ったところで、男達が聞くはずもなかった。

それを裏付けるかのように、最悪な提案をゆりに突きつけてきた。

「さあ、それらを探して、ここに持ってきておくれ。僕達が気に入らなかったら……君にとつては悲しいことだろうけど、一人ずつお別れしていくことになるよ？ 一人につき10分。10分毎に一個ずつ持ってきておくれ」

ゆりは必死に探した。

聞かされてもいないはずの、この家にとつての大事なものを必死に探した。

頭痛は酷く、吐き気がした。

しかし、そんなことを気にしている余裕などなかった。

ボサツしていると、一人ずつ、順番に消されていく。

なんとしてでもあの子達を守りたい。

そんな想いが、ゆりの頭を支配していた。

やがてゆりは、大きな壺を見つけ出す。

「この一番大きな壺を持って行こう……!!」

それを男達のところまで持っていく為、ゆりは持ち上げようとした。しかし、

「うっ……重い……!!」

それはとても子供一人で持てるものではなかった。

しかし、持っていかなければ、一人ずつ殺されてしまう。

「これだけ重いんだから、それだけスツゴい価値があるに違いない……!!」

そう考えたゆりは、頑張つてその壺を上階から下階まで運んでいく。

だが、その途中でのことだった。

「キヤア!」

ズルッ!

階段を下る際に足を滑らせて下まで落下。

その時に持っていた壺を手放してしまい……無惨にも壺はそのままバラバラに割れてしまった。

「あ……ああ……!!」

ゆつくりと、ゆりはその破片に手を伸ばす。

その破片によってつけられた指の切り傷からの出血が、壺が割れてしまったという事実を物語っていた。

警察が来たのは、男達とゆりが取り引きをしてから30分後のことだった。生き残ったのは……ゆり一人のみだった。

※

「……」

聞いた後で、音無は何の言葉もかけてやることが出来なかつた。

ゆりの話には、それだけの何かが秘められていたのだ。

やがて、しばらく続く静寂の中、打ち破ったのはやはりゆりだった。

「別にミジンコになろうが、そんなのはどうだっていいのよ。私はただ、本当に神がいるのなら立ち向かいたいだけなのよ。だって理不尽過ぎるじゃない。なんにも悪いことなんてしていないのに……あの日まで立派なお姉ちゃんだった自信だってあったのに……!!」

「……」

「……守りたいすべてを30分で奪われた。そんな理不尽じゃないじゃない……そんな

人生なんて、許せないじゃない……!!」

悔しそうな表情を浮かべるゆりに、音無がこう言葉をかけた。

「強いんだな」

「え？」

予想もしていなかった反応に、思わずゆりはそんな言葉を返してしまった。

だが音無は、構わず言葉を続ける。

「俺には記憶がないが、もしも俺の記憶がそんなのだとしたら、抗いもせずに消えたいと思うだろうな……そんな中でも、アンタは抗おうとするんだろ？」

「……そうよ」

スツとゆりは立ち上がると、

「さあ、先を急ぎましょ。貴方達は私が守るわ」

「……頼もしい言葉だぜ」

音無は、ゆりの言葉に素直に反応を返した。

丁度その時、

「話は終わったか？」

タイミングよく恭介も現れる。

「ほら、棗君もいくわよ？」

「……ああ」

恭介は、短くそう答えた。

*

そしてとうとう、三人はギルド最深部に到着した。

「おお……これがギルドか」

機械が辺り一面に設置されていて、それらはすべて武器を作っていた。

これ程の武器をこの場所で作っているから、彼ら戦線メンバーの持つ武器が完全になくなってしまふということが起きないのだろう。

「おお、ゆりっぺだ！」

やがて作業をしていた男の内の一人が、ゆり達の存在に気付いて、全員に向かってその声をかけた。

すると作業をしていた作業員らしき男達が全員作業を一時停止して、ゆり達のところまでやってくる。

近くにいる恭介や音無のことは、あまり気にしていない様子だった。

「あの罫の中、たどり着きやがったか！ 流石だな、ゆりっぺ！」

「……『天使』は？」

気になっていたのは、『天使』の所在。

未だにギルドが健在ということは、恐らくまだ『天使』はこの場所に到達していないということになる。

「さつきまで進行が止まってたんだが……」

作業員の内の一人が説明しようとした、その時だった。

突然……ズウン！ という巨大な音が聞こえてきて、全体が揺れた。

「またかかったか……!!」

それはまさしく、『天使』がトラップにかかったという紛れもない証拠。

そしてその音の出どころから、恭介がこう判断した。

「……結構近くまで来てるな」

ズウン！

またしてもトラップに引っかかる音が響く。

今度は先ほどよりも、もっと近かった。

「……どうする、ゆりっぺ」

男達が、ゆりの指示を仰ぐ。

やがてゆりが出した結論は……。

「……ここは破棄するわ」

「『なっ?!』」

瞬間。

ギルドメンバー達は全員驚きの色を隠せないでいた。

そして中には、こう反論を返す者も現れる。

「正気かゆりっぺ!？」

「武器が作れなくなってもいいのかよ!？」

そんな彼らに対して、ゆりはこう説得した。

「大切なのは場所や道具じゃない、記憶よ。貴方達はそれを忘れたの?」

「……どういふことだ?」

音無には、ゆりが言っていることがイマイチ理解出来ずにいた。

そんな音無の疑問に、恭介が答える。

「つまりだ。ここで作っているものは全部、命が吹き込まれていないレプリカということになるんだよ。ここは死後の世界だ。故に命あるものが新たに生まれることはない……だが、記憶さえあればその記憶を頼りに何かを生み出すことも可能というわけさ……というのが俺の考えなんだが、ゆり、当たってるか?」

持論を述べた後に、それが正しいなかどうかを、恭介はゆりに尋ねる。

ゆりは、

「ほとんど正解よただ、銃なんかを作る時には部品からしか作ることが出来ないという

説明か欲しかったわね」

補足説明といったような形で、ゆりが恭介の言葉につけくわえる。

「……なら、オールドギルドに行こう」

「……誰？」

突然現れた、髭だらけの男。

とても高校生には見えないが、彼もまた立派な高校生であった。

「チャーさんよ。ギルドの工場長みたいなものよ」

「(……コイツも、高校生なのか?)」

思わず恭介が心の中でそう呟いていたのだが、もちろん誰も聞いてはいなかった。

「オールドギルドには何も無いが、土塊だけならいくらでもある」

「(……)は？」

「爆破だ」

「「「?!」」」

迷いなくそう答えられたことに対して、多少なりとも動揺を隠せないギルドメンバー達。

しかしそんな彼らに向かって、チャーは言った。

「『天使』にオールドギルドは渡させん……俺達が持つていくのは記憶と職人としてのプ

ライドだ。違うか？ お前ら!!」

「!!」「!!」「!!」「!!」「!!」

チャーに説得されて、ギルドメンバーが動き始めた。

それぞれが忙しそうに働き、何処かからダイナマイトを引つ張り出してきては、それらをギルド全体に設置していく。

「あ、おいゆり！ 何処に行くんだよ！」

その時、何処かに向かおうとしていたゆりの姿を捉えた恭介は、そう尋ねていた。

それは音無とて同じで、ゆりの答えを待っていた。

そしてゆりは答える。

「何って……時間稼ぎよ！」

そのままゆりは上へ上がっていった。

「……よし」

「俺も行く！」

恭介と音無の二人もまた、ゆりの後を追いかけるように上へ上がっていった。

「あら？ 貴方達も来たの？」

後から遅れてやってきた二人を見て、ゆりが思わずそう尋ねる。

音無は、

「することがないからな……向こうにいたとしてもな」

肩を若干すくめつつ、そう答える。

一方で恭介は、

「こつちには来たが、俺は一応どちらの加勢もしないつもりだからな」

「分かつてるわよ……」

断り文句を言う恭介に、ゆりは若干呆れたような表情を見せつつ答えた。

やがてゆりは、銃を構えて、

「……行くわよ！」

入り口から、『天使』——奏が現れてくる。

それを見たゆりが、彼女の足を目掛けて、一発発砲。

「……」

ドサッ。

足に銃弾を喰らった奏は、そのまま地面にしゃがみこむ。

ただ、特に痛みとかを感じている様子は見られなかった。

「……Gird Skill Distortion」

瞬間。

ゆりと音無が発砲した弾は、奏の身体を避けるように何処かへ飛んでいく。

そして、足に埋め込まれた銃弾が、その影響で外に出てきた。

「対応が早すぎる……!!」

その対応の迅速さに、ゆりは思わず呟いていた。

恭介は……そんな彼らの様子をただ見守ることしか出来なかった。

何故なら、今回は戦線メンバーの味方をしてる為に、ゆり達に向けて攻撃することも出来なければ、奏の敵にはならないと決めている為、奏目掛けて攻撃することも不可能なのだから。

「……ちっ!」

やがて銃での攻撃は無意味と判断したのか、ゆりはポケットの中からナイフを取り出し、そして接近戦に持ち込んだ。

奏も、『Hand Sonic』を発動させて、ゆりの攻撃に受けて立つ。

「……すげえ、アイツ接近戦も出来るのか」

ただただ感心するだけの音無。

しかし銃の狙いは、未だに奏に向けられていた。

もつとも、二人の動きが早すぎて、銃で攻撃するのは本当の意味で無意味となつてしまっているのだが。

ゆりが奏の心臓部分を狙おうとすると、奏はそれに攻撃を合わせてくる。

瞬間。

ドン！ という衝突音が走り、ゆりの目の前を何者かが横切っていく。それは……奏に体当たりを繰り出した音無だった。

「音無君!？」

音無は、そのまま奏毎地面に転がっていく。

その時だった。

「三人とも、そこをどけ!!」

一人の男の声が聞こえてくる。

恭介がその方向を見てみると……。

「な、なんだありや!？」

赤くて巨大な砲台みたいなものが、そこには用意されていた。

そしてそれを取り囲むように、ギルドメンバーが数人配置されている。

「アンタ達! やれば出来るじゃない!! そんなものは簡単には作れないわよ!!」

ゆりが嬉しそうな声でそう言う。

砲台の標準は、ゆつくりと立ち上がった奏に向けられていた。

「ほら二人とも、こっちにきて!」

「お、おう!」

「ぐほあっー！」

眩いた男に、ゆりが肘鉄を入れる。

入れられた男は……本気で苦しそうにしていた。

だが、そんなことを言っている余裕もなかった。

『天使』が起きるぞ!!」

音無の声が聞こえる。

その言葉通り、奏はしずかに立ち上がっていた。

「お前達！　これで何とかしろ!!」

そう言つてチャーが渡したのは……細長い手榴弾みたいなものであった。

男達はそれを受け取ると、奏目掛けて投げた。

「……Gird Skill Distortion」

咄嗟に奏はそう眩くと、それらの爆発から逃れることには成功する。

だが、その爆風によって、前が完全に見えなくなってしまうていた。

「総員退避、完了しました!!」

「分かった！」

ギルドメンバーの内の一人が、チャーに向かってそう報告をする。

チャーは報告を聞いた後でゆりの方を向き、

「……本当にいいんだな？」

「ええ。お願い」

「……爆破あ!!」

ゆりの返事を確認すると、チャーはそう命令する。

その命令を聞いて、男の一人が……ダイナマイトのスイッチを入れた。

瞬間。

激しい爆発音が聞こえてきて、ギルド全体が爆破されていくのが分かった。

今恭介達がいるところも揺れていて、その凄まじさは身体で感じられるほどのものであった。

「ほら二人とも！早く逃げるわよ!!」

「あ、ああ！」

音無はゆりに言われて、慌ててその場から離れる。

……しかし、恭介はゆり達とは逆方向に走り出した。

「棗君!!」

荒げた声をあげるが、ゆりはその場所に向かうのは自殺行為だと判

断した為か、一旦動きを止めただけで、その後は他のメンバーと共にその場から離れ

て行った。

「くそっ……立華!!」

「!?」

奏が立っていたその場所は、爆破の影響で完全に地面が崩れ去ろうとしていた。

恭介は慌てて手を伸ばすが……その手は奏の腕を掴むことが出来ずに、そのまま自分毎底の方へと落下してしまうだろうと判断したのか、

「……せめて最小限に留めてやらないと!」

恭介は奏の小さな身体をしつかりと抱きしめる。

瞬間……恭介と奏が立っている場所は、ガラガラ! という大きな音をたてて、無残にも崩れ去っていた。

「しつかり捕まってるよ……立華……!!」

「……」

二人の身体は、そのまま底の方へと落ちて行った。

*

「ん……」

気付けばそこはすでに地上だった。

もつと言うのなら……最初に自分がこの世界にいた時の、保健室のベッドの上。

「あれ……俺はあの時、立華と一緒に落ちたんじゃ……」

「呼んだ？」

「うおっ!？」

突然声が聞こえた為、恭介は思わず驚きの声をあげていた。

そこには確かに、奏がいた。

ただし、身体は無傷。

「……………そつか。怪我はなかったんだな、立華」

「……………おかげさまで」

相変わらずの無表情で、奏は恭介の言葉に答えた。

「けど、その代わり貴方は死んだの……………」

「……………そうか。俺、『死んだ』んだな。まったく、ここが死後の世界で助かったぜ……………まさしく不幸中の幸いって奴だな」

茶化すように恭介は言うが、奏に対していくらそう言ったことを言っただとしても無駄だということとは分かっていたので、その言葉から何かに派生させることをやめ、

「ところで、お前がここまで運んでくれたのか？」

「……………そうだけど。何か問題でもあった？」

「いや……………お前を助けるはずが、反対にお前に助けられるとはな。面目ないぜ」

「……………そんなことない。貴方が私のことを守ってくれたか、おかげで怪我をせずに足止

めされることなく、こうして地上に上がってこれた」

「……そうか。それは本当に、素直に嬉しいな」

恭介は、いつの間にか自然と笑っていた。

そんな恭介に、奏は次のように尋ねた。

「どうして貴方は、あの時私のを助けたの？」

「え？」

それは、ギルド崩壊の時の話。

あの時、恭介は自分の身のことよりも、真つ先に奏のことを優先して行動した。

その結果恭介は『死んだ』ことになるのだが……。

恭介は、笑顔こそ崩さなかったが、何か含みのあるような笑顔を浮かべて、こう答えた。

「……似てたんだよ。落ちていくという光景が、あの時のバス事故とな」

「……」

奏は何も言わなかった。

恭介は、無言でいてくれる奏に心の中で感謝しつつ、言葉を続けた。

「今回の件で分かった通り、俺は結局誰一人守れなかった……最後に立華のことを守つてやれたことくらいだったな。それは俺にとって……悔しかったんだ。あのバス事故

での理樹や鈴の件と、被ったから……俺達はアイツらの命さえ助かればそれでいいと思つてた。けど、バス事故は転落しただけで終わったわけじゃないんじゃないかって思つてな……俺はそのことを考えるのを忘れてたんだ。バスが崖から転落したら、ガソリンが漏れている可能性だつてあつたつてことをな。ひよつとしたら、心の弱いアイツらだと……そのままバスから避難することも出来ずに、助けられないという事実も分かつていないまま、俺達のことを助けようとして、そのままバスが炎上して……」

「……」

半分は恭介の憶測での話だ。

既に死んでしまつている恭介には、事の真相を掴むことは不可能だ。

しかし、この時の恭介は、不思議とそれが現実の話なのではないかと思えてきてならなかつたのだ。

自分達が死んだ理由は……バスが崖に転落したことによるものではなく、その後の火災が原因なのではないだろうか？

それを確かめることはもう出来ないが……もしそうなのだとしたら、彼の頭の中には、更に後悔の念が積もるばかりだった。

「……俺は、誰一人助けられなかつた。駄目なリーダーだな、俺は……よつほどゆりの方が、リーダーとして頑張つてるし……それに比べて、俺は駄目だな……」

「そんなことない。貴方は立派なリーダーよ。『リトルバスターズ』の人達には必要な……リーダーなのよ」

それは奏の口から言える、最大限の慰めの言葉だったのだろう。

しかしこの時の恭介は、そんな言葉すら救いの言葉のようにも聞こえてきた。

そして恭介は、素直に奏にお礼を言う。

「ありがとう、立華……それと、こんな俺だけど、今後ともよろしくな」
「……」

最後の恭介の言葉に、奏はただ黙って首を縦に頷かせて返事を返すのみだった。

気付けば、外はもう太陽が昇っていて、午前中の授業がもうすぐ始まるうとしている時間帯だった。

episode 6 In night school

「うう……やっぱり夜の学校は怖いなあ……」

とある日の夜の校舎内。

そこには、本来ならこの時間にはならない、この学園の生徒がいた。

薄紫色の髪の少女が、辺りをキョロキョロと見回しながら、学園内を歩いていた。

何故こんな時間に校舎内を歩いているのかと言うと……。

「……まさか忘れ物をするなんて……しかもよりによつて替えの服を……」

彼女は学園内では有名なバンド、『Girls Dead Monster』のドラムを担当している少女——入江だ。

その練習は結構汗をかくものである為、彼女達は着替えを持っていくのだが、どうやら入江は、その着替えを置いてきてしまった様子だった。

場所は分かっているので、後はそこまで行つて着替えを取つてきて、真つ直ぐ帰るだけなのだが、彼女が若干の恐怖を感じているにはあるちよつとした理由があった。

「幽霊……でないよね……?」

そう。

入江は幽霊が苦手なのだ。

……入江自身が幽霊みたいなものであるというのに、どうしても幽霊だけは苦手なのであった。

「……せめて誰か他の人でも連れて来ればよかったなあ……うう」

身体は若干震えていて、その様子は見ていて守ってあげたくなくなるような感じだった。

もしこの場に来ケ谷がいようものなら、背後から襲い掛かって、そのまま百合空間に引きずり込んでいることだろう。

もつとも、入江自身は来ケ谷のことを『クールビューティー』だと思っている為、そんなことを考えてもいなかったのだが。

「……出て来ない……よね？」

もはや念仏でも唱えているのかというような勢いで、入江は幽霊に遭遇しないことを祈りながら、校舎内を歩いて行く。

……やがていつも自分達が練習している教室までたどり着き、入江はホッと一安心していた。

ここまで特別幽霊などに遭遇したわけでもなく、何一つ不自然なことなど起きずに、こうして無事にたどり着くことが出来たという安心感からである。

入江はすぐに着替えを取り、即座にその教室から出た。後は女子寮まで戻るのみなの

だが……行きよりも帰りの方が恐怖の色が濃くなっていることを、入江は感じていた。「……後は帰るだけなんだから。大丈夫……だよね？」

行きと同じく、辺りをキョロキョロと見回しながら、何もなかったことを確認しつつ前へと進んでいく。

やがて階段のところまで差し掛かってきたというところで……。

カン。

「!？」

誰かの足音が聞こえてきた。

入江の身体は……思わず硬直してしまった。

「な、何……?？」

音はどんどん近づいてきている。

どうやら下の階から上に上がって来ているようだった。

「……彼処なら」

入江はその人物が通り過ぎるまで、物陰に隠れてやり過ごすことにした。

姿を直視したくはなかったが、その何かが通り過ぎるのを見送る為、物陰に隠れつつも、たまにチラチラと階段の方を確認する。

やがて下の階から……一人の少女が現れた。

金髪で、勝ち気な印象を与える少女だったが、制服は一般生徒が着るようなものであった。

「な、なあんだ……」

ホツとしたあまりに、全身から力が抜けて行くのを感じる。

一般生徒だと分かった入江は、その横を通り過ぎて下の階まで向かおうとして……。

「……え？」

その少女が、いつの間にか姿を消していた。

そんなことはあり得ないと考えた入江は、一旦強く目を瞑ってみて……もう一度見た。

しかし、まだ階段を登っている筈の少女の姿が、何処にも見られなかった。

「嘘……どうして……？」

入江はただ驚くばかり。

驚きだけではない……その表情には、恐怖の色さえ見え隠れしていた。

「もしかして……幽霊？」

とりあえず、恐らくは階段で上に登っていったのだらうと考えた入江は、階段を使って上の階まで登ろうと考えた。

いくら幽霊が苦手でも……その正体を確かめないわけにはいかなかったからだ。

そして……階段を登ろうとした、その時だった。

「……貴女、誰？」

「……………え？」

背後から声が聞こえてくる。

それは本来、入江の背後から聞こえてきてはならない声だった。

何故なら、背後にいたのは……。

「き……キヤアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

先ほどまで階段を登っていた筈の、金髪の少女だったのだから……。

*

「え？ 幽霊？」

放課後。

特にすることもなかった恭介は、数日ぶりにガルデモのメンバーが練習している教室までやって来ていた。

そこで恭介は、岩沢やひさ子の二人と話をしていた。

関根は、何故か泣いている入江を慰めていた。

そして会話に上ったのが、幽霊騒ぎである。

「夜中に現れた幽霊か……」

「私も最初は嘘だと思ったんだが、どうやらそうでもないらしいんだよなあ。岩沢含め始めは私達の誰一人として信じてなかったわけよ」

「けど入江の怖がりを見て、どうやら嘘ではないんだなと感じることが出来た……これだけ怖がつってるってことは、本当に幽霊を見たんだと私は今では思う」

「……ただの幻だったって可能性も……」

「確かに見たんだってば！」

恭介がそう呟くと、泣き顔のまま入江が恭介に迫ってくる。

その気迫に押されて、恭介は思わず謝ってしまった程だ。

「……どんな奴だったんだ？」

恭介はとりあえず、入江に幽霊の特徴を尋ねた。

入江は、顔を青くしながら、

「金髪の女の子で……制服は一般生徒のものだったよ。ですが……目の前から消えたかと思ったら、すぐに私の後ろに現れて……!!」

「おくよしよしく本当によく頑張ったぞ〜」

宥めるように関根が入江の背中を擦りつつそう言う。

「夜の校舎に現れる、金髪の少女か……何だか面白そうだな」

「「「「え？」」」」

恭介の呟きを聞いて、岩沢達は思わず声をあげて驚く。
そんな四人に向かって、恭介は言った。

「今夜、リトルバスターズメンバーとゆり達の戦線メンバーを混ぜて夜の肝試し大会を兼ねた幽霊探索と行こう！ もちろん、お前達も全員参加な」

「……ええ!?」

その言葉は、入江にとってはただの死刑宣告にしかなくていなかった。

しかし、入江がこの世が終わってしまったかのような表情を浮かべているのが分かっていてかいないでか、楽しそうな笑顔を見せている。

その笑顔は、反対意見は受け付けられないというはつきりとした意志すらも見え隠れしていたという。

※

場所は変わって、『天使』対策本部……もとい、校長室。

「え? 幽霊ですって?」

第一に声を発したのは、ゆりだった。

それもそのはずで、いきなり恭介とガルドメンバーがやってきたかと思えば、今夜肝試しをするなんてことを言い出したのだ。

これで驚くなどという方が無理があるだろう。

「無意味な相談ですわね……私達が行く意味はないと思われませんが？」

相変わらずメガネをくいっと上げながら、高松がそう発言する。

それに対して、恭介は言った。

「何言ってるんだよ。これはお前達にとってはオペレーションみたいなものだけ？」

「なんでだ……？　ただ夜の校内で肝試しをしようとしているだけじゃないのか？」

「……浅はかなり」

音無が恭介にそう言つて、椎名がボソツと小さな声で呟く。

だが、恭介は依然として言った。

「違うな。確かに俺達が介入するのは楽しいことが起こった時だけだ。現にここにいる

入江には大変感謝してくるくらいだからな」

「私に……感謝を？」

「ああ。こんなにも退屈しないことによくぞ遭遇してくれた。まあ幽霊が苦手らしいから入江にとつては単なる災難でしかないだろうけどな」

そう断り文句を言つてから、恭介はさらに言葉を繋げる。

「けどな。お前達にとつて、これがもしかしたら『天使』の仕業なんじゃないかとも考えないのか？　実は『天使』にはそれだけの力があつて、幽霊騒動なんて作つて、夜の校舎内に入らせないようにしてるとか」

「そんなことあるわけ……」

「……あり得なくはないわね」

「だろ？」

「ええ!? ゆりっぺ、正気か？」

真剣な表情で頷いたゆりを見て、満足そうな表情を浮かべる恭介。

それに対して、ゆりがそんな言葉を発したことに對して、信じられないと言ったような表情を浮かべながら、日向が驚いていた。

それは他のメンバーとて同じことだった。

「ゆりっぺ……一体どうしたって言うんだ？」

藤巻がゆりの身を案じるように言うのと、

「俺はゆりっぺが行く所について行くつもりだけだな！」

「バカは黙っとけよ」

「何だよこの野郎……!! ちょっと表に出ろや!!」

音無の呟きに怒りを見せた野田が、怒りの表情を浮かべながら音無を校長室の外へ連れて行くようにする。

しかし……自らが設置したトラップにはまり、そのまま校舎の外へブツ飛ばされた。

「アイツには学習能力という単語はないのか？」

「バカがいなくなった所で、話を続けよう」

「さりげなくひどいこと言ってるよな、棗」

日向が、恭介の発言に対してそうツツコミを入れていた。

しかし恭介は構わないと言ったような表情で話を続ける。

『天使』は生徒会長として俺達に校則違反をして欲しくないと考えるはずだ。しかしお前達戦線メンバーや俺達リトルバスターズメンバーは口頭注意だけでは言うことは聞かない。口頭注意で言うことを聞かないと判断したら、人間はどんな手段に出るか分かるか？」

「……強硬手段、であつてるかな？ 恭介氏」

「来ヶ谷の言うとおりだ。相手は強硬手段に出て、言いくるめようとする。だから『天使』が、何かしらの力を使って『幽霊騒ぎ』を起こしているとは考えられないか？」

「まあ……考えられなくもないかもね」

大山が納得するように頷きながら答える。

……反応はまちまちだった。

だが、恭介はそれでも、リーダーさえ言いくるめてしまえば後は自分に軍配があがると考えた。

なので最後の一押しといわんばかりの勢いでゆりに言った。

「これはお前達にとつてのオペレーションでもある。俺達にとつてはミッションでもある。お前達は入江が遭遇したことが果たして『天使』による仕業だったのかを調べるこゝとが出来来る。大して俺達は、面白そうなところに乱入できる……これほど都合のいい案件はないと思うが？」

「……分かつたわ。棗君がそこまで言うのだったら、貴方に付き合いますよ」

「そ、それじゃあ……」

音無が、その先の言葉を求めると、ゆりはこう答えた。

「ええ。今回のオペレーションは、夜の校内潜入作戦よ！」

「……マジでかよ」

ゆりがそう高々に宣言した時、藤巻はそんなことを呟いていた。

そんな中で、入江は絶望的な表情を浮かべていて、対称的に恭介は楽しそうな表情を

浮かべていた。

この時、ひさ子は思った。

「(コイツ……意外とSだな)」

その心の呟きは、もちろん恭介には聞こえていなかった。

*

そして、夜。

リトルバスターズ＋戦線メンバーは、玄関前に集合していた。

「なあ恭介……いきなり俺達を呼び出したりして、何の用なんだ？」

「……少し、眠いです」

真人が、恭介に向かってそう尋ねる。

「どうやら恭介は、リトルバスターズのメンバーには今から何をやるかは知らせていなかったようだ。」

いつもは日傘を持ち歩いている美魚は、夜中ということもあり傘を閉じていて、しきりに小さなあくびをしながら、ボソツとそう呟いていた。

「いやあくこんなタイミングで呼ばれるとは思ってなかったの、ハルちゃんはこれからどうやってクー公を弄ろうか考えていたところでしたヨ」

「わふっ!? 私、弄られてしまうところだったんですか!？」

「……いや、俺に話を振られても困るからな」

日向は、突然自分に話を振られて、戸惑うことしか出来なかった。

そんな彼らは置いといて、恭介が今回集まった理由を他のメンバーに伝える。

すると。

「もう分かっていたことだが、相変わらず恭介は思いつきで行動するタイプだな……まあ、ある意味ではそこが利点でもあるのだが」

「ですが、さすがに幽霊はちよつと……」

「私も、あまり得意じゃないかなあ……って思ってみたり……」

恭介の思いつきの行動に笑う謙吾と、『幽霊』という単語を聞いて若干困っている様子の美魚と小毬。

「だったら、二人は私と一緒に来るといい……ああ、入江君も私と一緒に来るといいよ」

「本当ですか!？」

「やめとけ入江……来ケ谷と一緒に夜の校舎内に入ると何されるか分からないぞ。ある意味幽霊よりも恐ろしいことが起こるかもしれないしな」

「……ありえる話ね」

来ケ谷が三人を誘おうとしたところで、恭介がストップをかけた。

さらには来ケ谷の被害に遭ったゆりも、小さくそう呟いていた。

「まあ、全員で入っていくのも少しつまらないから……ここはペアで行くでしょう。それなら公平に分けられるだろ？」

現在ここに集まっているのは、音無・恭介・ゆり・日向・椎名・藤巻・入江・ひさ子・岩沢・関根・高松・大山・小毬・クド・来ケ谷・謙吾・真人・美魚・松下・TKというメンバーだ。

男子10人に、女子9人というメンバーだ。

「……あれ、一人足りなくないか？」

その時。

藤巻がメンバーが一人足りないことに気付く。

そのメンバーとは。

「やつぱり野田か……アイツ、まさか一人で勝手に校舎に入ってんじやねえのか？」

「それはやつぱり音無君に対抗する為に？」

「まあ……そういうことになるだろうな」

「わけわかんないわ……」

大山の言葉に、藤巻が答える。

ボソツと呟いたのは、ゆりだった。

「……まあいいだろう。そこは人グループだけ三人で行けば問題ないな。ただし、男子三人や女子三人、女子一人に男子二人になったとしても、決して文句は言わないでくれよっ。」

「けど……どうやってペアを決めるのよ」

仕切る恭介に対して、ゆりが一言そう尋ねる。

……すると、恭介は途端に黙り込んでしまった。

「……浅はかなり」

屋上から彼らの様子を見守る、一人の少女がいた。

一般生徒の制服を着た、金髪の少女。

あの時入江が見た少女と似ている……いや、その人物が立っていた。

「それじゃあ試させてもらおうわよ。貴方達の実力がどれほどのものなのかを」
彼らが校内に入っっていったのを確認すると、少女はこう呟いた。

「ゲーム……スタート」

少女は、『ゲーム』の開始を宣言する。

満月が昇る闇夜の中。

月の光が、彼女の身体を照らしていた。

※

校舎1階生物実験室前。

「……まったく、何が嬉しくて男二人で肝試しなんてしなきゃならねえんだよ」

「そんなこと僕に聞かれても……」

「……ハア。どうせなら女子と二人きりで行きたかったぜ」

「僕だっってそうだよ……」

藤巻のペアは、大山だった。

二人は歩きながら、この組み合わせに対して文句を言っていた。

何せ、男同士のグループなんて、この二人のペア以外にいないのだから。

「何で上手い具合に女子と男子で別れるんだよ……ってか、例えそうだとしたら、誰かしらに一人女子いないとおかしいんじゃないか?」

「……そういえば棗君は岩沢さんと入江さんと組んでいたような……」

「……アイツ、やりやがったな……!!」

藤巻の怒りの矛先は、恭介に向けられていた。

何故なら、彼は巷で言う所のハーレム状態となっているのだから。

「ま、まあ棗君も相当運がよかったんだろうねえ……きつと」

「いや、何か仕組んでたに違いねえ……って、ん?」

その時。

藤巻は何かの音を聞いたような気がした。

「ど、どうしたの?」

聞いていなかったらしい大山は、藤巻にそう尋ねる。

藤巻は、大山に言った。

「……何か物音が聞こえたような気がした」

「……まさか、『幽霊』?」

「確かめてみる価値はあるな。けど何処からだ……?」

物音の発生源を特定する為に、藤巻は辺りを見回す。

そうしている内に。

カタツ。

「!? 生物実験室からだ」

「……目の前だよ。ここに入るの?」

「……そうするつきやねえだろ。でないと、『幽霊』なのかどうかすら分からねえだろ?」
藤巻にそう論されて、大山はようやく中に入る決心をする。

それぞれの武器を構えて、

「……ちよつと待てよ。幽霊には銃なんて通用しないんじゃないのか? 何せ身体持っ

てないわけだし」

「……え、じゃあこれ持ってきた意味ないってこと?」

大山は、手にしているハンドガンを見せながら、藤巻に尋ねる。

あまり考えることなく、藤巻は言った。

「かもしれねえな……まつ、一応準備しとけ。備えあれば憂いなしってな」

刀を鞘から取りだしながら、藤巻は教室の扉を開ける。

慌てて銃の安全装置を外しながら、その後を大山が追っていく。

「……」

「……………」

中に入った二人だったが、特にこれと言って変わったような点は見られなかった。

強いて言うなら……不自然なくらいに量の多い人体模型くらいだろうか。

「……この教師連中は人体模型を集めるのが趣味なのかよ……まったく意味分かんねえぜ」

「うん……だけど不気味だよね」

大山は、若干身体をブルブルと震わせながら、そう呟いていた。

もちろん、藤巻はその呟きには答えず、辺りから何が来るのかを必死に探っていた。

……もつとも、彼の心臓は、何時もと比べ物にならないくらいにバクンバクンと脈を打ってたりするのだが。

そんな時だった。

「……………あれ？」

「!? ……どうした、大山？」

「今………模型がちよつと動いたような……」

「ハハッ………そんなわけねえだろ。ただの人形が動き出すだなんてこと、あるわけが………」

ガタガタガタガタガタ！

突如そんな激しい音がして、人体模型が……一気に宙を舞い始めた。そんな様子を見て、二人が叫んだことは果たして同じことであった。

「で、出たあああああああああああああああああああ!!!」
彼らにしてみれば、それは明らかなる『幽霊』の出現だった。

いや、そこまではいかにしろ……ポルターガイスト的な現象は起こっていた。

「おいおい……冗談じゃねえぞこれは!」

「ひゃああああああ! ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい!!!」

「念仏みてえに何回も唱えてんじゃねえ!! 余計に怖くなつてくるじゃねえか!」

一心不乱に喚く大山に、逃げながらも藤巻がそう叫ぶ。

だが、彼として許してもらいたいという衝動はあった。

ただ、大山が代わりにやってくれている(?)為、なんとか自我を保つことが出来ているに過ぎなかった。

「くそっ! 何で開かねえんだよ!」

焦りからかどうかはよく分からなかったが、藤巻は必死に扉を開こうとするが……びくともしなかった。

ただ、ガタガタと音がするのみで、その内やっついても無駄だと判断した。

「どうするんだよ藤巻君！」

「んなこと俺に聞くんじゃねえよ!!」

そう会話をしていったその時だった。

「ゴオン！」という音が響き、頭に何かが当たった。

それは二人を気絶させるには十分なものであり……。

「……おい、これってある意味ギルドよりも立ち悪いトラップじゃね？ ……ガクツ」

そう言い残して、藤巻は気絶した。

*

「気を付けろよなクー公。この先に何かがあるか分からないからな……」

「わふ……」

「心配すんなって。何かあっても俺の筋肉で守ってやつからよ！」

「井ノ原さん……頼もしいです」

「だろ？ 今なら俺の筋肉に触れてもいいぜ」

「本当ですか!?!」

校舎2階廊下。

そこを歩くのは、真人・クドのペアだった。

ツツコミ不在のこのコンビは、もはやボケのオンパレードだった。

ある意味この二人には……もう一人くらいメンバーが欲しかったところだろう。

「にしても夜の学校での肝試しなんて……あの時以来じやねえか？ 修学旅行に行く前に恭介の思いつきで始めた肝試しの時とほとんど変わってねえけどよ」

「そうですね……やつぱり恭介さんは恭介さんです」

楽しそうな表情を浮かべ、真人とクドがそう言った。

夜の学校というシチュエーションは多少なりともクドに恐怖を与えているが、それ以上に楽しさがあつた。

そんな二人に……。

ふにや。

「ひゃあー！」

「どうしたクー公？」

突然悲鳴をあげたクドに、真人が尋ねる。

クドは、首筋に感じた謎の感觸の正体を探るべく、恐る恐る背後を確認した。

……そこには紐に吊るされたこんにやくがあつた。

「こ、こんにやくですか……？」

クドは、そのこんにやくを引っ張ってみた。

……すると。

パシユパシユ。

「……わふ、なんだか眠く」

「首筋に何か打たれたような気が……ガクツ」

二人が打たれたものの正体は……麻醉銃であった。

どうやらこんにやくを引つ張ると発射される仕組みになっていたらしい。

彼らは麻醉銃を打たれて……そのまま眠ってしまった。

※

「……そう。もう既にニグループも犠牲に」

『はい。藤巻さん・大山さんペアと、井ノ原さん・能美さんペアからの連絡がつかなくなっていました。恐らく何かしらのトラップ等にはまり、気絶してしまった模様です』

「トラップ？ 『幽霊』騒動のくせにどうしてトラップなんてことが？」

『いえ、それがですね……無線が切れてしまった人達のほとんどから、悲鳴みたいな声が聞こえてきましたので』

「……そう、分かったわ」

『ゆりっぺさんも、くれぐれも気をつけてくださいね』

「分かってるわよ。私を誰だと思ってるの？」

『……そうでしたね。余計な心配のようでしたね。それでは、健闘を祈ります』

その言葉を最後に、遊佐との連絡は切れた。

それを確認すると、ゆりのペアである音無が、

「……今の通信、何だつて？」

ゆりに対して、そう尋ねる。

すると、

「すでに二ペアが被害にあつてゐるみたいよ」

「もう二ペアか……早いなあ」

素直に音無が感想を漏らす。

その後で、二人は会話をあまりしなかった。

この前のギルドでの件もあり……何だか少しだけ話しかけずらい雰囲気の流れていたからだ。

状況も、あまり以前と変わっていないような気がした。

「あのさ」

「ん？ 何よ」

そんな中を、音無は勇気を持って話しかけてみた。

だが、声をかけてみたところで、話す内容は特に決まっていたわけじゃなかった。

音無が話題に困っていると、

「……音無とか言ったな」

「……なあ。今の声、もしかして……」

「……ええ。もしかしなくても、その通りだと思うわ」

その声が聞こえてきた時、二人は明らかに面倒くさそうな表情を浮かべていた。

その表情には、『またか』という呆れも含まれているような気がした。

「俺はまだ認めてはいない……お前のことをな!!」

ハルバードの刃先を見せ付けて現れてきたのは……これで二度目のリベンジ、野田だった。

「……何しに来た？」

「無論、お前を殺しに来た」

「……それ、死ねない世界での冗談だよな？」

「無論、本気だ」

野田と音無による、辛うじて交わっている会話のキャッチボール。

だが、野田からは明らかなる殺気しか感じられず、音無からは呆れしか感じられない。

お世辞にも、いい雰囲気を出しているとは思えなかった。

「ハア……なんでもいいけど。野田君、貴方程々にしといた方がいいわよ？」

「いや、違う……あれは幽霊なんかじゃない！ あれはただのスタンガンだ!!」
床に落ちていたスタンガンを拾い上げて、音無がそう判断する。

そのスタンガンは、スイッチが入っている状態で、何者かが野田に向かって投げたようだった。

……いや、人の気配はしないところから想定するに。

「誰かが行動パターンを読んで……そこに来た人に向かってスイッチの入ったスタンガンが飛んでくるようにセッティングしていた？」

「まさかとは思うが……『天使』の仕業なんじゃ……」

「それは私が入ってるわけじゃないわ」

「……………え？」

音無が『天使』という単語を出した時。

今度は少女の声が……二人の背後より聞こえてきた。

その人物とは……。

「て、『天使』!?!」

「……私は『天使』なんかじゃないわよ」

『天使』こと、立華奏が、そこにいた。

*

「ハルちゃんもう駄目……」

「泣き言を言わないでください、三枝さん」

校舎3階。

渡り廊下を歩くのは、高松と葉留佳のペアだった。

皮肉なことに、前回のギルド降下作戦では、二人仲良く鉄球につぶされた仲であった。「ただでさえ夜の校舎というのでハルちゃんは怖いのに……その上これだけ歩いてきたのデスから、テンションだくだ下がりですヨ」

「知りませんよ、貴女のテンションの問題なんて……」

呆れながら、しかりメガネをクイツと上げることが忘れずに、高松が言った。

そんな反応を取る高松に若干不満を感じつつも、高松のことをそう多く知っているわけでもなかったたので、特に何もいえなかった。

そんな時、高松の持つ無線に連絡が入る。

『関根さん・宮沢さんペアと、神北さん・TKさんペアも音信不通となりました』

「これで私達の組も合わせて、後4ペアといったところですか……」

『くれぐれもご用心を』

「了解です」

入ってきた連絡は、またしても被害に遭ったメンバー達についてだった。

今の無線を聞いた結果、残っているのは後4ペアということになった。
一つは()。

後の三つは、恭介・入江・岩沢組、音無・ゆりペア、そして椎名・松下ペアだった。

「後のメンバーは特に問題なく進みそうなペアばかりですナ」

「ですね……特に問題は起きなさそうですね。貴女さえ油断しなければ」

「なっ……！ 前はハルちゃんと一緒に鉄球につぶされたくせに!!」

「あれはあれ、これはこれです。大体貴女は普段からおとなしくしていればいいのに……どうしてこう騒ぎたくなってしまうんですか？」

高松は、普段から騒ぐことしかしない葉留佳に向かって、そんな質問をしていた。

その質問に、葉留佳は答える。

「私がやらないと、他に誰がやると言うんですカ？」

「……ハア。誰もやらないから、自分がやろうというのですか？」

「その通りですけど、何か？」

「……いえ、貴女の動力源に心底呆れただけですよ」

「いやあく照れてしまいますナ」

「ほめてないですからね」

そんな会話を繰り広げつつ、二人は空き教室の扉を開ける。

だが……その扉は何故か少しだけ堅かった。

「どういうことでしょう……何故扉が堅く……」

「タツクルしちやえばいいんじゃないですか？」

「た、タツクルって……それじゃあ何かのトラップが作動してしまっても……」

高松がそう言つて葉留佳を止めようとするが、一度決めた葉留佳が止まるはずもなく……。

気付いた時には、高松の視界から葉留佳が消えてしまっていて、見つけた時にはもう遅かった。

「ハルちゃんミラクルダイナマイトアタック!!」

「な、何を……!?!」

ドン!

思い切り衝突音を響かせて、ドアは打ち破られる。

だが、それと同時に押し寄せてくる……机の数々。

「ひ、ひえええええええええええええええええええええええええええええええええええ!!」
「だから無闇に行動するなって言つたじゃないですか!!」

なす術もなく、二人はあつという間に机に飲み込まれる。

そんな中で葉留佳が言つた一言とは。

「うう……前にもこんな場面、あったような気が、しま、ス……ガクツ」
そうして、二人は気絶した。

※

「はあ……はあ……もう、駄目……」

「どうした入江。もうギブアップか？」

ドサツと地面に座り込み、仕切りにもう無理と呟く入江。

それもそのはずで、階段を使って彼らが来ているのはすでに5階。

その上入江は幽霊が苦手な性格なのだ。

夜中の校舎で、しかも幽霊を見た本人である入江にとっては、これ以上ない程恐怖を煽る展開でもあった。

さらには、ここに至るまでに発生した謎のトラップの数々。

「もうなんなのここは……本当にここ学校なの？」

「確かにこれは相当楽しい展開だが、少しばかり休憩挟むのも大事だな……あそこの空き教室で休んでいこう」

恭介がそう提案すると、入江は待つてましたと言わんばかりの表情を見せて、教室の中に入っていった。

トラップの危険性もあったため、恭介と岩沢の二人は慎重に入っ行って行ったが、そこに

トラップが何も設置されていないことを理解すると、警戒体勢を解いて、中に入ってしまった。

見ると、入江は椅子に座つてすでに眠り始めていた。

「……緊張が一気に解れたんだろなあ」

「だな……俺達も少しリラックスしていよう」

入江を起こさないように、恭介と岩沢はゆっくり椅子に座る。

落ち着いたところで、二人は話を始めた。

「ところで棗はどうして今回の肝試しを企画したんだ？ それも、私達を巻き込んで」

岩沢は、少し気になっていたことを尋ねた。

すると恭介は、笑顔でこう言ってみせた。

「それが一番楽しそうだったからだよ。楽しいことはみんなやらなければ意味がないだろ？」

「……なんというか、棗らしい理由だよ。うん、とつてもいい理由だ」

岩沢は、納得するようにそう呟く。

「そうか？」

恭介が笑顔のまま岩沢に尋ねる。

岩沢も笑顔で、

「そうだよ」

短く、そう答えた。

その後で、しばらく静寂の時間が流れる。

やがてその静寂の中で話しかけてきたのは、岩沢だった。

「……なあ、アンタには話してもいいと思えたから、話してみてもいいか？」

「……何をだ？」

恭介は、急に真剣な表情を浮かべてそう言った岩沢に、やはり真剣に答える。

それを見て安心した岩沢は、

「……私の過去だよ。生きていた頃の話」

「……いいいぜ。俺でいいなら、聞いてやる」

そう答えると、恭介は優しい笑顔を岩沢に見せた。

そんな恭介の笑顔を見た後で、

「……私、今はこうしてガルデモのボーカルとしてここにいる。それは毎日が楽しくて、本当にこうしていけるのが堪らなく嬉しいんだ。何故なら……生きていた頃にはこんなこと、出来なかつたから。私が生きていた頃には、私の歌を誰かに聞いて貰うということが、満足に出来なかつたから」

「……満足出来ていなかったのか？　生きていた頃の生活に」

「まさか。満足出来てしまったらこの世界に来てないよ。棗だってその一人なんだろう？」

「……まあそうだな。自分が死んだことに対して、何処か納得いかなかった点があった。もつとアイツらと一緒に過ごしていきたくったとか……何より悔しかったのは……」

「……」

その先を、恭介は言わなかった。

軽々しく口にしてしまうのは、どこか自分の中で許せない思いがあったからだ。

だが岩沢はその先を聞かなかった。

代わりに、自分の話をし始めた。

「私……本当はバラードがやりたいんだ」

「バラードって言う……曲調が静かな曲のことだよな」

「ああ、その通りだよ。何時もの私達が歌ってるロックとは対称的な、静かなバラードが歌いたいんだ」

そう前置きを置いた後で、岩沢は自らの過去の話を始めた。

*

岩沢まさみの家庭では、日々両親の喧嘩が絶えなかった。

ことあるごとに二人は喧嘩をし、岩沢本人はその喧嘩が終わるまで必死に耐える毎日。

そんな日々を送っていた彼女に、やがてある一つの出会いが訪れた。

その日岩沢は、学校の帰りにCDショップに寄っていた。

何のことはない、そこに来たのはただの偶然だった。

そこで岩沢は、一枚のCDを手にした。

そのCDは、『SAD MACHINE』と呼ばれる、バンドチームのものであった。

そのCDが入った試聴コーナーの前に立ち、ヘッドホンを耳にかけて、その曲を聞いてみた。

「……！！」

岩沢はハツとした。

いつの間にかその曲にのめり込んでいた。

その曲を聞いている間は、自分の家庭環境すら忘れることが出来た。

そんな感覚を味わいたいと思った岩沢は……音楽の道を歩んでいくことに決めた。

その後で岩沢は、とある雨の日に、ごみ捨て場に捨ててあったアコースティックギターを拾い、それを使って路上で自分の歌を披露してみることにした。

始めの内は、それこそあまり人は集まってこなかった。

しかし、続けていく内に、どんどん人が集まってきた。

彼女の周りに、彼女の歌を聞きにくる人達が集まってきたのだ。

そんな人達に、岩沢は自分の歌を、自分の音楽を披露した。

観客として集まってきた人達は、歌が終わると岩沢に向かって拍手をしてくれて、去り際には、

「いい歌だったね」

と言いながら立ち去って行く人がいた位だった。

そして彼女は決意する。

「音楽の道を……目指そう」

成績こそ上位の学校を目指せる程のものであったが、岩沢は音楽の道を目指すことにした。

毎日バイトをしながら、片っ端からオーディションを受けに行く毎日。

オーディションを通ることはなかったが、将来の目標を見つけていることが出来た彼女には、そんなことは些細なことではしかなかった。

だが……上京して歌手になることを夢見ていた岩沢だったが、やがてその夢も潰えることとなってしまった。

「あれ……？」

皿洗いのバイトをしている途中、岩沢は突然目眩を感じた。

「どうして……目の前が揺れて見える……のかな……？」

「お、おい！ 大丈夫か岩沢！」

そのまま岩沢は病院に運ばれて、下された診断は……脳梗塞。

原因は、両親の喧嘩……と言うよりも、巻き添えを喰らったことであつた。

父親がビール瓶で岩沢の頭を偶然殴ってしまったが為に……脳梗塞となり、失語症となつてしまった。

満足に身体を動かせず、最後はそのまま生き絶えてしまった。

自分の夢も、果たせぬまま……後悔だけを胸の内に残して……。

*

「……どう？ これが私の今まで抱えてきた過去。出来ることなら忘れ去りたい過去だよ」

「……なんというか、壮絶な人生を送ってきたんだな」

岩沢の話を聞き終えた恭介が第一にとつた反応は、そんな言葉を洩らすことだけだつた。

けれど、岩沢は話を聞いてもらえただけ満足だったのか、笑顔を見せていた。

「……確かに、バラードと言うのは一番人に聞き入って貰える曲だからな。静かな曲調

だから、勝手に盛り上がるような真似も出来ないし」

「……ああ。その通りだよ」

岩沢は、窓から外を覗き込む。

そこには相変わらず暗いグラウンドしか見えなかったが、月明かりや電灯の光が、ボチボチと地面を照らしているのが見えた。

「……なあ、曲の方は出来上がってるのか？」

「え？」

尋ねる恭介の言葉に、岩沢はそんな反応を取ってしまう。

恭介は更に言葉を付け足した。

「お前はバラードを歌いたいんだろ？ だったらある程度は形として残ってるんだろ？」

「……まあ、少しなら」

「……なら、完成したら俺に聞かせてくれよ。そこで観客が俺一人のミニライブというぜ。一対一の、本当に小さなライブなんだ。歌うのは一曲だけ……お前が作った、バラードだ」

「棗……」

その言葉を聞いて、岩沢はどれ程嬉しいと感じたことだろう。

歌手として……歌を聞かせて欲しいと言われることは、これ以上ない幸せだった。自分の歌を求めてくれる人がいる。

こんなに嬉しいことはないだろう……。

だってそれは、自分の歌が認められたことを指しているのだから。だから岩沢は言った。

「……ああ。きつとそうするよ」

二人だけの約束が、ここに結ばれた。

「さて……岩沢。入江を起こしてやってくれ。そろそろ行くからな」
「分かった……ほら、そろそろ起きて」

「ふみゆ……もう行くの？」

「ああ。それともまだ寝てたいか？ そうだとしたら置いて行くが」
「行く！ 行くから一人にしないで！」

必死な形相を浮かべながら、入江は恭介の腕に必死にしがみつく。その目には涙すら浮かんでいた。

「冗談だよ……そら、そろそろ行くぞ。『幽霊』の正体掴みにな」

「ああ」

「う、うん……」

若干騒がしいながらも、恭介達は空き教室から出て行って、ひたすら上の階を目指した。

※　と言つても、ここから上と言うと屋上しかないのだが……。

「お前じゃないつて……どういう意味だよ。これは『天使』であるお前がやつてることじゃないのか？」

「ええ」

奏の言葉に、二人は目を丸くした。

それもそのはずで、今の今までこの騒動は『天使』の仕業だと考えていたのに、その考えは本人によつて否定されてしまったのだから。

それも一言、『私じゃない』の一言で。

「それじゃあ一体誰が……」

「恐らくこの学校には、私達以外に侵入者がいる」

「俺達以外の……侵入者？」

「そう。この世界に、新たなる人物が現れた。その人物が、この学校に様々な仕掛けを仕掛けたの」

「新たなる人物……」

ゆりが小さく呟く。

奏の説明を要約すると、こうなる。

この世界に新たに現れた人物が、何の目的があるかは不明だが、夜の校舎内に様々なトラップを仕掛けておいて、侵入者を迎撃しているようだった。

「入江が見たという『幽霊』もソイツのことか……」

「けど、どうして貴女はそのことを掴んだの？」

本来なら敵対している立場の二人だが、今回限りは敵同士というわけではないので、事務的な会話は交わっていた。

そんな二人を見て、音無は若干違和感を感じつつも……悪くない光景だとは思っていた。

「お、俺は何を考えていた？ 目の前にいるのは俺達が敵対視している『天使』だぞ？

それなのに、どうしてホツとして俺がいるんだ？」

若干、自分の思考に追いついていないようだった。

そんな音無のことは放っておいて、二人の会話は続く。

「……直井君から聞いた」

「直井君？ 直井君って誰よ」

「……生徒会副会長。彼が屋上にいた時に、その人物を見たそうよ」

「屋上に？ 何でその直井って人が屋上に……」

「そこまでは知らないわ。けど、この情報は恐らく本物。だから私が調べに来た」

「……なるほどね。それは生徒会長としての責務だから、かしら？」

「……」

最後のゆりの言葉には、奏は答えなかった。

これ以上会話することはないと判断した奏は、そのまま暗闇の中へと消えて行った。

「あ、ちよつと待ちなさいよ！」

ゆりの制止の言葉に、奏が反応することはなかった。

「……で、どうすんだよ。進むのか？ この先には『天使』が待つてるんだぞ」

「進むしかないでしょ。この騒動を引き起こした張本人が『天使』じゃなかったけど、私達の仲間をここまでにした犯人が誰なのかを掴まなければ、納得がいかないでしょ？」

「まあ、それもそうだけど……」

ゆりの言っていることは正しかった。

今となつてはもはや、『天使』の仕業かどうかではなく、誰が仲間達を危険な目に遭わせたのが気になるゆりだった。

そんな様子のゆりを見て、

「……分かったよ。最後まで付き合ってやる」

「当然じゃない、音無君。ここまで来た以上、最後までついてきてもらうわよ」
「ああ」

パン！

互いの右手でハイタッチをして、音無とゆりは、先へ進んで行った。

*

「……屋上か」

恭介・岩沢・入江の三人は、ようやくと屋上に到達した。

ここまで数個のトラップが発動してきたものだが、それらは無事避けることに成功した。

残された場所は、ここのみだ。

「他の奴らは恐らくもうほとんど残ってないだろうな……」

「一応聞いてみたらどうだ？」

「それもそうだな」

岩沢の提案で、恭介は遊佐に仲間達の状況を聞くことにした。

無線機をポケットの中から取り出し、

「遊佐。俺だ、恭介だ」

『こちら遊佐です。ご用件を』

感情があまり籠っていない声が、無線機を通じて恭介に聞こえてくる。

恭介はそのことを追及してみようかと考えたが、入江の参り顔を見た瞬間、早めに終わらせてあげるべきだと考えていた。

いつまでもこんな場所にいるのは、入江のことを考えるとあまり得策ではないと考えたからだ。

「他の奴らは、後どのくらい残っている？」

一番聞きたかった質問だけを、恭介は遊佐にした。

すると、一瞬の間があつた後に、

『棗さん・岩沢さん・入江さんのペアと、音無さん・ゆりっぺさんのペア以外、残っている組はありません』

「ほぼ全滅つてわけか……っーか、またリトルバスターズは全滅かよ。何だかりーダーとして情けなく思えてきたぜ」

『現在トラップに引つかかつた後にいち早く引き上げてきた松下さん・椎名さんペアで、残りのメンバーを回収している最中です』

「そうか。また何かあつたら無線入れるから」

『了解』

その言葉を最後に、無線は切れた。

「わ、私達しか残ってないの？」

無線が終わったと同時に、入江が不安そうな表情を見せながらそう尋ねてくる。

恭介は、ポケットに無線機を入れながら、

「いや、ゆりのチームがまだ残ってるそうさ。他のチームは全滅みただけだな」

「そうか……しかし、よく私達のチームが残ってたものだな」

岩沢は、まるで奇跡でも起きたかのような語調でそう言った。

実際奇跡が起こったようなものだったので、あながち恭介もその言葉は間違いではないと考えていた。

特に、残っているだろうと思われていた、来ヶ谷や椎名、松下に謙吾がいるペアまでもが撃沈しているとなると、自分達がゆり・音無ペアと同様にここまえ残って来られたのが奇跡のように思えてならなかったのだ。

「ま、こういうのは奇跡の一つや二つ、イレギュラーな出来事の一つや二つなければ面白くねえからな。この位はちようどいいスパイスになるってものだけ」

恭介は、さぞかし笑顔でそう答えたことだろう。

それこそ入江と岩沢までも笑顔にさせる程のものだった。

「さて、ここにゴールだ。ここにきて何もなかったならば、さっさと引き上げてしまおう」

「そうだな。入江の件もあるし」

「うう……助かるよ」

若干身体を震わせて、入江が答える。

そんな入江の背中を、岩沢が軽く撫でながら、

「さて、そろそろ行こう……棗」

「ああ」

そして三人は、屋上へと続く扉を……開いた。

ギイイイという音が聞こえてきそうな感じがしたが、はたしてそれは気のせいなのだろうか。

「……誰もいないな」

「だな」

辺りを見回してみるが、そこには誰もいなかった。

実際には誰かがいた形跡のような後も見受けられたかのように思えた。

「それに、人の気配はわずかながらするしな……」

「……まさか、『幽霊』？」

「まあ、私達が幽霊みたいな存在だからな。それは間違いではないような気もしなくもないけど」

「それとこれとは違うんです〜!」

入江は若干恐怖に怯えながらも、岩沢に反論した。

そんな二人を無視して、恭介は辺りを見回す。

やがてそれを終えた後で、

「……さて、そろそろ姿を見せてもいいんじゃないか? 隠れてるのは分かってるんだ

からな」

「「え?」」

恭介の言葉に、入江と岩沢の二人は驚きの声をあげる。

そんな二人を無視して、恭介は何かを悟ったような表情を浮かべて、辺りを一回見回した。

すると、

「……よくここに私がいるって分かったわね」

「……あつ! この子だよ! この子が昨日私が見た……」

入江がその先の言葉を言おうとして、そこで打ち切った。

……そこにいたのは、一人の金髪の少女だった。

「……まず最初に聞きたいことがある。お前は、何者だ?」

真つ先に恭介が尋ねたのは、少女の正体についてだった。

まずは敵の正体から掴もうということだろう。

少女は特に問題もなさそうに、

「朱鷺戸沙耶よ。私の名前も教えたんだから、貴方達の名前も教えなさい」

少女——沙耶にそう言われた恭介は、とりあえず自分の名前を含めて、岩沢・入江の名前も沙耶に告げた。

「あれだけのメンバーがいて、残ったのは貴方達だけだったというわけね」

「いや、後二人程やつてくる筈だぜ？ 恐らく、だけどな」

「どつちでもいいわ……それにしても、あのトラップの中をよくもまあ易々と潜り抜けたものね」

「まあな。俺達に不可能はねえってわけだ」

恭介は笑顔で沙耶に言った後に、

「……で、俺達に対してあれ程のトラップを仕掛けたのはどうしてだ？」

本題の……どうしてトラップを仕掛けたのかに入る。

すると沙耶は、恭介の方をしつかりと見て、

「試してたのよ。貴方達の力を」

「試す？ ……なんで俺達を試したんだ？」

「……噂を聞いたからよ」

「噂？　噂って何？」

幽霊ではないことは分かったので、入江も先程に比べては大分落ち着いたみたいだった。

今では沙耶に向かってそんな質問をすることが出来た位だ。

沙耶は、そんな入江の質問に対して答えた。

「恐らく貴方達戦線メンバーが話していた内容なんでしょうけど、ソイツらによると『戦線と同じ位の力を持つ集団がいる』らしいってね」

「戦線と同じ位の力を持つ集団か……俺達、そんな風と呼ばれてたんだな」

「それで気になったのよ。その二つの勢力は、どれ程の力なのか。知りたいと思ったからには、何かそれを知る為のきっかけみたいなものが必要。その集団は楽しいもの好きという噂も聞いて、今回の『幽霊』騒ぎを作ったってわけ」

「なるほど……よく分からないが、とりあえず結構準備してきたんだなってことは分かった」

正直な話、恭介は沙耶の話を聞いた所で、どうしてこの騒ぎを起こすことにしたのかがイマイチよく分からなかった。

実力を知りたければ、自分から調べにいった方が手っ取り早いのではないかと考えていたのだ。

もつとも、その分自分が一番危険な目に遭遇すること間違いなしだが。

「いや、なんとというか……最初はただ実力を測る程度のものだったのよ。けどトラップを作ってる内に……面白くなっちゃって」

「「……は？」」

三人は、沙耶の言葉を聞いて哑然としていた。

何故なら、トラップを設置するのが『面白くなってきた』と言ってみせたのだから。

「つまり……本来の目的も忘れて、ただひたすらトラップ作りに没頭してたってわけか？」

「……ええそうよ！　あまりに作りすぎたから、正直な話自分でも何処にどんなトラップを設置したか分からなくなってしまった位よ！」

「自分で作ったトラップ位メモするなり何なりしとけよ!!」

思わず恭介はそうツツコミを入れてしまっていた。

恐らく朱鷺戸沙耶という人物は……行動力や分析力はある程度他人よりも多く持っているに違いないが、最後の最後に抜けてしまうタイプのようだった。

要は……せつかちというやつだろうか。

「ええそうよ！　私はトラップを作ってる内に目的を忘れてただトラップを作ることに夢中になって、自分で何処に何を仕掛けたか分からなくなったばかりではなく、更に

は自分で仕掛けた筈のトラップにはまって何回か撃沈した位よ！ どう？ 滑稽でしょ？ 笑えるでしょ？ 笑えばいいわ！ アーハツハツハツて！」

「え……いや、まあ……」

突如自虐に走った沙耶を見て、恭介達は何も反応することが出来なかった。

入江に至っては、声をかけようとして言葉が見つからない位に。

「……ふう。それで、何の話だっけ？」

「お前がバカで天然ボケだつて話」

「そうそう私つてば、『ど』がつくほどの天然ボケだつてりk……つて、違うでしょうが！」

「ちっ」

「舌打ち!?!」

恭介の舌打ちを、沙耶は決して聞き逃さなかった。

「……で、本題に入るわよ」

「もうなんでもいいような気もしなくないけど……」

半ばこの状況に飽きかけている様子の岩沢。

その頭の中では、早く新曲作りをしてしまいたいという気持ちでいっぱいだった。

「……んで、話をまとめると、まず朱鷺戸は俺達の噂を聞いてどれ程の実力があるのかを

知りたかった。それで『幽霊』騒ぎを思いつき、それさえ起きれば面白い物好きの俺達を誘き出せると考えたわけだ」

「……ええ。そして貴方達はまんまと来てくれたわ」

「まあ、楽しい物好きがリトルバスターズの特徴だからな」

「そう……って、今貴方、なんて言った？」

沙耶が、『リトルバスターズ』という言葉聞いて、恭介に尋ねる。

恭介はいぶかしげな表情を浮かべながら、

「何って……リトルバスターズって言ったんだが」

「……やっぱり。理樹君が入ってたのと同じだ」

「なん……だと……？」

『理樹』という言葉聞いて、今度は恭介が驚いた。

「お前……どうして理樹の名前を知ってるんだよ」

恭介は、驚愕の表情を浮かべたまま、沙耶に向かってそう尋ねる。

事情が分からない入江と岩沢の二人は、呆然と二人を見比べていた。

そんな中で、沙耶は答える。

「だって理樹君と一緒に過ごしてきたんだもの、私……そして理樹君から、リトルバスターズの話聞いてたの。名前を聞いてまさかと思っただけ……やっぱりあのリトル

バスターズのリーダーだったのね」

「……えつと、棗。生きていた頃の知り合い、とかか？」

「いや、俺自身は会ったことはない。朱鷺戸とはこれが初めてだ」

恭介がその言葉を返した時、朱鷺戸は若干不審そうな表情を浮かべる。

その後で……何かを察したようだ。

「なるほど。私と貴方は、同じ場所から来ていて、違う所から来ているみたいね」

「……は？ 意味が分からないんだが」

「いいのよ、今の貴方は分からないままで。私がかつていればそれでいいんだから。それに、貴方もその内分かる時が来るわ」

「……？」

意味が分からないまま、沙耶によって話を断ち切られてしまった。

その先の言葉を恭介が尋ねようと思った……その時だった。

「やつと着いた!!」

バン！ と扉を蹴り破って、誰かが入ってくる。

声は女子のものだった……しかも恭介達にとってはかなり馴染みある女子のもの。

人影は……三つ。

「三つ？」

そこに入江は若干の疑問を感じたが、とりあえず最初に入ってきた人物を見て、知り合いだということに安堵する。

だがその後で……。

「ひえっ！」

「おお……」

入江が驚き、岩沢が感心したような声をあげる。

一方で、恭介は若干笑顔を見せて、

「やっぱりな」

と一言、そう呟いていた。

屋上に上がってきた人物……ゆりと音無と、そして……奏は、恭介の方をじっと見て、
「やっぱり少しは気付いていたのね、棗君」

「ああ。こういうことが起きたなら、生徒会長として黙ってはいないだろうなと考えた
からな。最初から立華はやってないと思ってたんだよ」

「そう……」

「なら、俺達は棗にまんまと騙されただけってことなのか？」

音無が若干頭に来ているかのような感じをちらつかせながら、恭介にそう尋ねる。

すると恭介は、特に悪びれた様子も見せずに、

「ああ」

と一言、そう言ってみせた。

「あ、あのな……お前のせいで俺達がどんな目に遭ったと……!!」

「その話は今は置いときましょう。今は目の前にいる主犯の方が大事だわ」

音無が恭介に突つかかろうとしていたが、ゆりがそれを制止する。

そんな二人を無視して、奏は沙耶の目の前に立ち、

「夜中の校外活動は校則違反よ」

まずは、口頭注意。

「そんなこと分かってるわよ。私はただ、この人達を試したかっただけ。こうして屋上まで辿りつけたってことは、この人達はそれだけ強いってことでしょ。なら、私の目的は達成できたわけだし、もう寮の方に戻るわよ。これでいいかしら？ 生徒会長さん」

ただ一方的に自分の意見を押し付けているかのようにも聞こえるが、

とりあえず奏は、沙耶はもう帰る意思があるのだと分かると、

「……そう。なら、今後同じことをやらないように」

「はいはい、分かってるわよ」

面倒くさそうに言葉を返す沙耶にも、奏はやはり無表情のままだった。

沙耶に注意を終えた後は、

「貴方達も、次からはこんなことがないように」

「出来たらいいけどな。ま、俺達がどんな奴らなのか、お前も知ってるだろう？ 立華」

「……知ってるけど。出来れば普通に学園生活を送ってほしい。きちんと規則は守って、それで……」

「まあ、気が向いたら考えてやらなくもないな。とりあえず今日はもう帰ればいいんだろ？ もう少しだけ朱鷺戸と話したら帰るから、お前は先に帰っていいぞ」

「……分かった」

恭介がそう言うのと、奏はその一言だけを呟いて、素直に応じる。

今まで恭介達に向けていた身体を、扉の方へ向けて、そのまま屋上から去っていった。

「……さて、そろそろ話を聞こうじゃないの。『幽霊』さん？」

「幽霊じゃないわよ。朱鷺戸沙耶よ……貴女の名前は？」

「私はゆりよ。こっちは音無君……よろしくね」

ゆりの言葉に少しムツとした沙耶が、自分の名前と音無の名前を告げる。

その後で、ゆりが自分の名前を告げた。

「……で、どうして貴女はこんなことをしたのかしら？」

「……さつきそこの人達にもいったけれど」

そう前置きを置いてから、沙耶は先程恭介達にもした説明を、ゆり

と音無にも繰り返した。

その後で、音無が一言。

「何て言うか……迷惑な話だな」

「何よ。別に私がやりたいと思っただからいいじゃない。貴方には関係ないでしょ？」

喧嘩腰で、沙耶は音無に言う。

そんな様子を見て、ゆりは呟いた。

「へえ……私達、少し似てるじゃない。似てないのは天然ボケという点だけかしら？」

「お前も人のこと言えないけどな」

「撃つわよ？」

「それだけはやめてくれ」

銃を抜いてきたゆりに、恭介は結構本気でやめて欲しいと懇願する。

「……それじゃあ、私から聞きたいことは一つだけ。貴女は、この先どうするつもりなの？」

「この先、ねえ……」

ゆりが聞いてきたのは、今後どの勢力に属すのかということだ。

選択肢なら、いくつかあった。

戦線メンバーに入るのか、『天使』の味方をするのか、リトルバスターズに入るのか、一般生徒と一緒に生活していき、そのまま魂だけ抜け去りNPC化するのか。

沙耶は少し考えると、やがて結論を出した。

「私は……そうね。リトルバスターズに入団することにするわ」

「……え?」

驚きの声は、その場にいる全員からだった。

戦線メンバーにも入らず……リトルバスターズに入団すると言い出したのだから。

沙耶は、その理由をこう述べた。

「私は、理樹君が大切にしてきた人達がどんな人達なのかを知りたいの。理樹君からあの程度の話は聞いていたけど、実際に話したことはなかったから……私の存在というのがイレギュラーだったおかげで、一度も会話せずに……こんなことになってしまったから……」

「……分かったわ。棗君率いるリトルバスターズに入るって言うのなら、これ以上誘うような言葉は言わないわ」

「え? いいのか?」

意外そうな表情を浮かべて、音無が尋ねる。

しかしゆりは、そんな音無に、

「いいのよ。リトルバスターズもまた、神に反逆している立場にあるんだもの。最終的な目標だけは同じよ」

「まあ……その辺りは否定しないな。ただし、俺達は『天使』とは戦わないけどな」
「分かってるわよ。そこがリトルバスターズの人達のいいところでもあるんでしょ」

ゆりは、もはやリトルバスターズの存在がどれほど特殊なものなのか分かってきていた。

だから、恭介が『天使』とは戦わないと言っても、納得してしまえたのだ。

それは、彼らなりの『神』に対する反逆の方法があるということに繋がるから。

「……もう今夜は遅いわ。さつき『天使』とも約束しちやったし、そろそろ私達も引き上げましょ」

「そうだな……さすがにもう夜も遅いし、そろそろ帰ってやらないと、入江がおびえだしてしまうかもしれないしな」

「ふえ？ ……ちよ、ちよっと！ さつきまで全然怖くなかったのに、最後の最後で思い出させないでよー！」

恭介の言葉を聞いて、自分が今夜中の学校の屋上にいることを認識させられてしまった入江は、途端に身体の震えを止めることが出来ずにいた。

そんな様子を、岩沢はすぐ近くで笑いながら見ていた。

「も、元はといえれば貴女がいけないんだから！」

「え？ 私が原因なの？」

入江を恐怖へと誘った張本人である沙耶には、そんな自覚はどこにもなかったのだという。

満月が彼ら六人を照らす中、彼らは騒がしくしながらも、それぞれの寮の部屋へと帰って行った。

e p i s o d e 7 M y s o n g

部屋中に響き渡る、ギターによる綺麗な旋律。

それらは確かに聞いている人々の心の中に間違いなく響いていた。

何時もの彼女とは違う、そんな静かな曲調。

確かに彼らの心を掴んではいたのだが……その曲を聞いた一人の少女は、こう尋ねてきた。

「……なんで新曲が……バラード？」

ここは対『天使』対策本部……またの名を校長室。

そこで岩沢は、本来なら校長が座っている筈の椅子に座り、しかも机の上で足を組んでいる少女——ゆりに向かって、今回製作した曲を弾いていたのだった。

今回は歌はまだつけていなかったが、ギターでの演奏を聞いているだけでも、それがバラードであることは容易に想像がついたことであつた。

「いけないか？」

「陽動としては、ね」

尋ねる岩沢に、ゆりは少しばかり不機嫌な表情を浮かべながら、そう答えた。

そんなゆりに質問するのはどうかと思ったが、音無がゆりに尋ねた。

「あのさ……陽動ってなんの話だ？」

溜め息を一つついて、ゆりは分かりやすく説明した。

「彼女達は校内でロックバンドを組んでいて、生徒達から絶大なる人気を勝ち得ているのよ。私達は一般生徒には危害を加えない。けれどどうしても邪魔になるような時には、その場から排除しなければならぬ。そんな時に、彼女達に陽動を頼んでるのよ」

一通りの説明が終わった後で、来ヶ谷が一言。

「この学園の一般生徒も、随分ミーハーなんだな……」

「同感だ……」

来ヶ谷の言葉に、音無も同意した。

「まあ彼女達のバンドにはそれだけ魅力があるってことよ」

相変わらずの調子で日向がそう言うのと、その言葉を引き継ぐように、来ヶ谷が言った。「うむ、その通りだな。お姉さんもあの時に見た入江君の脅えている顔や関根君の入江君を宥めている時の、母性を感じさせるような表情には不覚にもグツときてしまったな。それこそ、私の手で愛でてあげたいくらいに」

「いや、それはもはや魅力を感じるとかのレベルじゃないからな！ ただの変態だよ!!」
途中から訳の分からない発言をし出した来ヶ谷に、思わず音無はそうツツコミを入れ

ていた。

もしも入江がこの状況を見ていたとしたら、来ヶ谷に対する印象はボロボロに崩れ去っていたところだっただろう。

「で、駄目なの？」

そんな彼らの会話を一通り聞いた後で、岩沢がゆりに尋ねた。

ゆりはこう告げる。

「バラードはね……確かにいい曲だとは思うけど、しんみり聞き入っちゃったら私達が派手に行動出来ないじゃない」

「……じゃ、これは没か……」

そう言いながら、岩沢はギターを仕舞う。

……だが、頭の中では何か違うことを考えていたのだが、そんな彼女を無視するかのように、部屋中のカーテンが閉まり、そしてスクリーンに例のマークが映し出される。

それこそが、作戦会議が始まるという合図だった。

「今回の作戦は『天使』エリア侵入のリベンジを行う。作戦決行は三日後よ」

「またですか……」

ゆりの言葉を聞いて、高松がそうぼやく。

だが、事情を知らないクドが、

「音無さん、『天使』エリアってなんでしよう？」

「さあ……俺に聞かれてもな」

聞かれたところで、クドよりも遅く入隊した身である音無に、それが何を意味するのかが理解出来るわけがなかった。

『天使』エリアについての説明は後ですとして……今回の作戦には彼が同行することになってるわ」

ゆりがそう言った後で、メガネをかけた少年が、何故かゆりの座る椅子の後ろから現れた。

斬新な登場方法に驚いている音無のことは特に気にせず、

「椅子の後ろから!?!」

「……メガネ被り」

大山が素直に驚き、高松はメガネが被ることに不満を言っていた。

一方で、

「はっ! ……ゆりっぺ、何の冗談だ?」

「こんな青瓢箪みたいな奴が使い物になるのかよ」

野田と藤巻は、かなりその少年のことを酷く言っていた。

どうやら彼ら二人は新人が入る度にこんなことを言っているらしい。

「まあまあ、そう言わないでくれる?」

そんな彼らを宥めるように、ゆりが言った。

だが野田はそんなゆりの言葉を無視し、

「はっ! なら試してやろう」

ハルバードを手にして、野田が少年の方へと近付いていく。

そんな様子を見て、音無と来ヶ谷が一言。

「お前友達いないだろ」

そして、野田が少年の目の前までやってきた……その時だった。

「3・1415926535……」

突如円周率を呟き始める少年。

そんなことをして何の意味があるのかと音無が考えていたら、

「うわあああああ! やめろ……止めてくれえええええ!」

少年の言葉を聞いていた野田が、突然悶え出したのだ。

「なっ……円周率だ?!」

「止めてあげて! その人はアホなんだ!!」

「ぐわああああああああああ!!」

驚きの声を大袈裟に叫ぶ藤巻に、悲痛の叫びをする大山。

更には悶え苦しんでいる野田という、何だかよく意味が理解出来ないような場所と化してしまっている校長室。

尚も止まない少年による円周率。

ゆりは彼の発言を止めた後で、一言。

「これが私達の弱点……アホなことよ」

「リーダーが言うなよ」

音無がそうツツコミを入れたが、無視してゆりは話を続ける。

「前回の侵入作戦では、我々の頭の至らなさを露呈する結果となってしまった……しかし！ 今回は天才ハッカーの名を欲しいがままにしている、ハンドルネーム『竹山』君を作戦チームに登用し、『天使』エリアを綿密に調査する！」

「……それは本名じゃないんですか？」

「いや、意外にも名前かもしれないぜ？」

疑問を抱く高松に、半ば冗談でそう言う藤巻。

その二人の後に、竹山と呼ばれた少年が一言。

「僕のごとは『クライスト』とお呼び下さい」

「「……………」」

凍り付いた。

間違いなくその場が凍り付いた。

そしてやっと解放されたかのように、日向が一言。

「格好いいハンドルが台無しだな……」

「流石はゆりっぺだ」

「これって天然の部類に入るのか？」

「Don, t crazy」

日向・野田・藤巻・TKの順番で、それぞれ感想を述べる。

その後で、音無が尋ねた。

「あのさ、『天使』エリアって何？」

「その名の通り、『天使』の住処だよ」

隣にいた日向が、音無の問いに答えた。

さらに音無は呟いた。

「どんな所に住んでるんだろ……」

「中枢はコンピュータで制御されてるんだぜ？」

「機械仕掛けか!？」

そう言われて、音無の頭の中では……ジ〇リ作品で見たことのあるような、動く家が
思い浮かばれる。

……記憶を失っているのに、なかなかの発想力だろう。

「ま、その中に神に通じる手段があるかもしれないってわけだ」

「なるほど……」

日向の言葉に、今度は来ヶ谷が感心したように呟いた。

「二度目ということもあつて、『天使』も今まで以上に警戒してくると思うわ。いつちよガルデモには派手にやってもらわないとね。岩沢さん、今回の作戦も頼んだわよ」

「了解した」

ゆりの言葉に、ギターを仕舞いながら岩沢が了承した。

その後で。

「それじゃあ今日はこれで解散ね。以上」

ゆりがそう言ったことで、今回の作戦会議は幕を閉じた。

※

「告知ライブか……」

廊下を歩いている恭介は、壁にバシバシと貼られているポスターを見て、そう呟いた。そこに書かれていたのは、三日後の体育館でのガルデモ告知ライブについて。

「今までゲリラライブがほとんどだったアイツらが、今度は告知ライブか……これはひと悶着ありそうな予感だな」

恭介は、これから訪れるであろう事態を想定しながら、その時は自分達も勝手に入り込んでしまおうなどと考えていた。

そんな時だった。

「よっ……ほっ……やあ……とうー！」

「……」

壁に一生懸命何かを貼ろうとしている、ピンク色の長い髪をした少女がいた。

ピョンピョンと飛び跳ねる度に、恐らくは悪魔をモチーフとしているだろう尻尾みたいなアクセサリーが、上下に揺れる。

長い髪は腰のあたりにまで届いていて、その髪も同様に横に揺れる。

「お前……何やってるんだ？」

「ふにゃあ!!」

突然声をかけられたことに対して、その少女はかなり驚いている様子だった。

後ろから突然声をかけられたのだ……驚くのも無理はないだろう。

「悪い悪い、驚かすつもりはなかったんだが……」

恭介は、一応その少女に詫びの言葉を告げた。

だが、それを完全に言い終える前に、

「ああ、貴方は棗先輩じゃないですか！」

「え？ 俺のこと知ってるの？」

少女がそう言ってきたので、恭介は思わずそう尋ねる。

すると少女は、笑顔でこう言った。

「貴方は確か、小さい女の子が大好きだということでは有名ですよ？ ストレートに言ってしまうえば……ロリコンな先輩！」

「俺はロリコンじゃねえ!!」

激しくツツコミを入れる恭介。

どうやらロリコン疑惑だけはここまで来てやつぱり晴れていなかったようだ。

「……おい、えつと……」

「ユイです」

「そう、ユイとやら。そのことは誰に聞いたんだ？」

恭介が、ピンク色の髪の少女——ユイに尋ねる。

ユイは少しだけ考える素振りを見せて、

「確かでかい斧を持った先輩が……」

「野田か。アイツ、後でお仕置きだな」

名前を聞いた瞬間に、ほとんど条件反射で恭介がそう答えていた。

思わずユイが再び驚きの表情を見せた程だった。

そんな様子のユイは気にせず、恭介はふともう一度ポスターの方を見やる。そして、尋ねる。

「これ、体育館占拠って書いてあるけどよ、そんなことして大丈夫なのか？ 教師連中が出てきてもおかしくないだろう」

今まではゲリラライブということもあり、教師が注意する前にズラかることが出来た。

だが、今回はこうして廊下に告知のポスターまで貼った、告知ライブだ。

教師や……生徒会が黙ってはいないだろう。

「そりゃあもうヤバいですよ体育館占拠なんて！ しかもゲリラライブではなく告知ライブですしね。先生達も黙ってはいないですから」

「なるほどね……」

恭介は若干感心するように呟く。

その後で、

「しかし、よくもまあ岩沢達も今回の作戦を引き受ける気になったよな。何時もならゲリラライブでやるのが主流なんだろう？」

恭介がそう尋ねると、ユイは嬉しそうに語り出す。

「そうですよ！ そんな危険を侵してまで、岩沢さん率いるガルデモの皆さんは今回の

作戦に参加するんです！ それだけ今回の作戦には重大な意味が含まれているのだと岩沢さんが言っていました！」

「なるほどな……（ということは、出来たのか？ あの新曲が）」

恭介は、以前夜中の学園に侵入した時に岩沢とした話を思い出す。

……あの時、岩沢は自分はバラードを歌いたいと言った。

しかし、ガルデモは女子ロックバンドだ。

果たして何処にバラードを入れてくるのか……少し恭介は楽しみにしていた。

もちろん、先程のゆり達の作戦会議の内容を聞いていないからそんなことを考えることが出来るのだが。

「ところで、棗先輩はガルデモを知っていますか？」

「ん？ あ、ああ……」

ユイにそう尋ねられた恭介が、『知っている』と答えようとしたが、

「凄いですよ、ガルデモって！」

そこから、ユイによるガルデモ自慢が始まった。

ボーカルの凄さから、ベース・ドラム等、本当に楽しそうに語っていた。

恭介はそんなユイを見て……本当に嬉しそうだなどと考えていた。

だが、その内時間の方が段々と過ぎていくことにも気付いていた。

そろそろ帰りたいたいと思った恭介が、ユイを無視して帰ろうと思ったら、

「……………つて、説明の途中で帰らないでください！」

「うおっ!？」

ひき止めるために、ユイが恭介の身体に抱きついた。

小さな身体に似つかず、その力は意外と強かった。

恭介は離れようとするが、ユイが抱きしめながらも説明を続ける。

……………やがて恭介が、

「……………ま、いつか（小さな胸が当たっているのも、またいいな……………）」

と、自分の欲望を微妙に心の中で呟きつつも、観念したところで。

「……………何してんだ？ お前ら」

「へっ？」

そこには、見てはいけない物を見てしまったような表情を浮かべる音無の姿があった。

音無の目線から見てみれば、恭介がユイを抱き締めているかのようにしか見えないのだ。

「……………いや、違うぞ音無。別に俺はユイを抱き締めてたわけじゃ……………」

「……………このロリコン」

「だからロリコンじゃねえっての!!」

「……やっぱり棗先輩って……」

「だから違うからな! お前もさりげなく俺から退いてるんじゃないよ!」

距離を置く音無とユイの二人に、恭介が言った。

その後で、恭介が何かに気付いたかのように呟いた。

「今はどうでもいい話だが……(21)をすばやく書くとロリに見えないか?」

「……重症だな(ですわね)」

「……ほら、ユイはさっさとガルデモの為に働け!!」

「そうでした! ガルデモの皆さんの為にも働かなければ! それでは私はこの辺で

!!」

そう言うと、ユイはたくさんのおスターを抱えて、その場から去っていった。

「……で、棗。お前やっぱりロリコ……」

「だから違うっつの!!」

その後、恭介が誤解を解くには、かなりの時間を必要としたらしい。

*

「……まるで私、悪者ね」

廊下を歩きながら呟いたのは、奏だった。

その手には、先ほどユイが貼ったはずのポスターが何枚も抱えられていた。その理由は、彼女が校内を巡ってすべて外したからだ。

彼女は生徒会長としての職務を全うしただけ。

しかし生徒達に言われたことは、

「私達の楽しみを奪わないでよ!!」

「ガルデモは俺達のオアシスなんだよ!!」

「横暴よ!」

「勘弁してくれよ生徒会長!!」

などなど……奏がやってきたことを明らかに批判するものばかりだった。

彼女がやっていることは、決して間違っていない。

むしろ、この場合は正解といっても過言ではないだろう。

しかし、生徒達から見れば、それは単に自由を奪う行動でしかなかったのだ。

だからポスターを外す奏に向かって、そんな心無い言葉を浴びせるのだった。

奏とて、自分が生徒会長でなかったらこんなことはしないだろう。

しかし奏は生徒会長なのだ。

だとしたらその責務を果たさなければならぬのも自明の真理だった。

「……」

しかし奏は、批判を無言で浴びた。

何も反論することなく、ただただ奏は、黙々とその責務を果たすだけだった。

本来なら辛いだろうに。

本来なら泣き言を言いたいだろうに。

しかし奏は、何も言わなかったのだった。

「……これ、どうしよう」

回収したはいいが、その後奏はどうすればいいのかわからないでいた。

そんな時に、誰かが奏の進行方向とは逆の方向から……つまりは、奏の目の前から、歩いてきた。

「あれは……」

「……あれ？ 確か……立華奏ちゃん……だよね？」

前から歩いてきていたのは、小毬だった。

奏は少し意外な人物の登場に少し驚きつつも、小毬に対応した。

「ええ。そうだけど……」

「それじゃあ……かなちやんだね♪」

「……かなちやん？」

『かなちやん』と呼ばれたことに、多少奏は違和感を感じる。

何故そう呼ぶのかと小毬に聞いてみれば、

「だって奏ちやんだからだよ。奏ちやんって名前だから、『かなちゃん』。生きていた頃の友達の名前と被っちゃうけど、気にしないでね」

「……どうして、そんな風に友達みたく私のことを呼ぶの？ 友達じゃないんだし、別に……」

「何を言ってるのかなちゃん？」

「え？」

無表情のまま、奏は小毬に尋ねる。

すると小毬は、笑顔で奏にこう言ってみせた。

「だって私達……もう友達じゃない？」

「……え？」

驚く奏に、小毬がポケットの中から何かを取り出す。

そして奏の近くまで歩み寄ってきて、両手を取り、その中に何かを置いた。

「これ、かなちゃんに上げるね♪」

「これは……」

「それじゃあ昼休みにでも、屋上で会いましょう！ ……あ、その時はもしかしたら音

無君も一緒かもしれないから、音無君とも仲良くしましょうね」

……事情を知っててか知らないでか、小毬は結局最後までポスターのことは何も聞かなかった。

そのまま奏の横を通り過ぎると、笑顔で手を振りながら、その場を去って行った。

「……」

小毬が去った後、奏は手を広げて中身を確認してみる。

そこにあつたのは、一つの飴玉だった。

「校内でのお菓子の持ち込みは校則違反……」

眩きながらも、奏は包み紙を外し、その中身を口の中に放り込む。

「……イチゴね」

その飴は、イチゴ味の飴で、口の中には、飴の甘さが広がっていた。

自然と……奏の表情が柔らかくなったような気がした。

※

そして三日後。

『天使』エリア侵入作戦は……始まった。

同時に、ガルデモの告知ライブが体育館で行われる。

楽器を準備している間に、遊佐が幕の間から客の出入りを確認していた。

「……少ない」

しかし、その人数は明らかに少なかった。

あれだけユイがポスターを貼っていたのにも関わらず、その人数は何時もよりも少ない。

「……けど、ここからが私達の力の見せ所だよ」

ギターを準備しながら、ひさ子がそう呟く。

……やがて彼女達の準備も終わり、時間がやってきたことを悟った岩沢が、

「……時間だ」

そう呟くと、遊佐が手を上げて、照明が落とされる。

「さあ！ 派手にやろうぜ!!」

岩沢が声を張り上げたと同時に、ライブは始まった。

*

同時刻。

『天使』エリアに侵入するメンバー達は、とある扉の前に立っていた。

「……Oh, yes!」

ピッキングをしていたTKが、全員に向かってそう告げる。

「……それじゃあ、行くわよ!」

ゆりがそう言うと、銃を片手に持っている松下が、一気に扉を開け放った。

それと同時に、同様に銃を持っていた日向・TK・ゆり・音無・野田、そしてパソコンを手に行っている竹山、最後に扉を開けていた松下の順番で部屋の中に侵入した。

「暗いな……」

呟いた音無は、明かりが欲しいと考えた。

壁の方を探ってみて、何かのスィッチらしきものに、手を触れた。

パツと明かりがついて、中の様子が明らかになる。

そこにあつたのは、ベッド・本棚・勉強机・その上に置かれているパソコン・etc

……。

「……つて、これって単に女子の部屋を荒らしに來ただけじゃねえか！ 犯罪だろ！」

「貴様何をする!! ここは女子寮だぞ！ 電気を消せ！」

そう。

ここは単なる女子寮にある、とある一人の女子の部屋。

もつと厳密に言えば……『天使』こと奏の部屋であつた。

普通の女の子みたいなの部屋を見て、音無はつい先日まで思い浮かべていた自分の想像は、かなりアホみたいなのであつたことを悟つたのだという。

「しようがないでしょ！ 私達には情報が足りないのよ。今回の作戦はそれを補う為の作戦なんだから！ ……音無君はバレない程度にその辺を物色して頂戴」

「え……マジで？」

「マジで」

ゆりにそう命令されて、とりあえず辺りを見回してみている音無。

まず最初に目についたのは、ベッドの上に置かれている一つの熊のぬいぐるみだった。

大きさは中くらいで、抱き締めて寝るにはちょうどいいくらい大きさだった。

「これを抱き締めて寝てたりするのか……いや、気のせいか。けどもし本当にそうだとしたら……なんかそれっていいな」

頭の中で、熊のぬいぐるみを抱き締めながら眠る奏の姿を想像して、少し可愛いなと思ってしまった音無であった。

「どう竹山君。出来るかしら？」

パソコンの前には、ゆり・TK・野田・日向・松下の五人が立っていた。

ゆりは椅子に座り、何やら設置をしている竹山にそう尋ねた。

「少々時間はかかるかもしれませんが……なんとか大丈夫ですよ。この手の作業は、僕の得意分野ですから」

設置作業が完了したららしい竹山が、無表情のままそう答える。

その答えを聞いて、

「流石は天才ハッカーね……思う存分その能力を發揮しなさい」

「了解です。後僕のことにはクライストとお呼び……」

「さあ、一体どんな情報を見せてくれるのかしら……?」

「……」

発言を遮られた竹山が、少し不服そうな表情を浮かべながらも、ただ黙々と作業を開始し始めた。

途中、ゆりの無線に連絡が入る。

「私だ」

『ゆりっぺさん。体育館に「天使」が現れました。しかし、生徒達が思いの他少ないので、あまり陽動の方が成功していません』

「そう……」

『パスワードの解析の方はどうなっていますか?』

無線から聞こえる遊佐の声。

遊佐にそう尋ねられたゆりが、一度パソコンの方を見てから、

「まだもう少し時間がかかりそう」

『そうですか……それではまた何か連絡事項がありましたら、無線を入れますね』

「分かったわ。それじゃあ引き続きそちらの監視をお願いします」

『了解しました』

無線はそこで途切れた。

「なんだって？」

近くにいた音無が、ゆりに向かってそう尋ねる。

観念したのかそれとも吹っ切れたのか、先程まで女子の部屋を荒らすのはどうかと訴えていたのが、今では大人しくパソコンの画面を見つめていた。

「ガルデモの方にあまり生徒が行ってないみたい……『天使』は体育館に現れたみたいだけど」

「そうか……」

実は音無、数日前に岩沢と会っていて、そこで岩沢の過去の話を聞いていた。

それだけに、人があまり来ないという状況に、岩沢自身があまりいい思いをしていないのではないかと音無は考えていた。

「竹山君、後どのくらいかかりそう？」

そんな音無の考えはとりあえず置いておき、ゆりは竹山にそう尋ねる。

すると竹山は、

「もう少しで終わりますよ……今が佳境と言ったところですよ！」

「流星は竹山君！ 天才ハッカーと言われるだけはあるわね！」

「竹山がここまで使える奴とは思ってなかったぜ」

「Wonderful!」

日向とTKが、素直に感想を述べていた。

「ちつ……少しはやるじゃねえか、ヒヨロヒヨロのくせに」

野田が若干貶すようにそう言うと、

「そんなに僕はヒヨロヒヨロじゃないですよ……それに、僕のことはクライストとお呼びください!」

最後にお決まりの文句を言った後に、竹山はエンターキーを押す。

それこそが、パスワードの解析が終わったことを意味していた。

「さっすが!! 後は私がやるわ!」

竹山が席を譲り、ゆりが操作をし始める。

しばらくキーボードを押している内に、とあるプログラムが起動した。

「……え?」

「これは……『天使』が攻撃手段として使用しているものだな」

松下の言う通り、そこには奏が今まで使ってきた攻撃手段の数々が映し出されていた。

それこそ『Hand Sonic』からゆり達が見たこともないようなものまで。

やがてこれを見たゆりが、とあることを思い付く。

「ちよつと待てよ……それじゃあ『天使』はこの『Angel Player』って奴を使つて、自分で武器を作つてきたつてこと？」

その事実は、ゆりにとっては重くのしかかつてきたのだった。

※

「へえ。これが岩沢達の生演奏か……」

恭介達リトルバスターズは、体育館にて岩沢達のライブを見に来ていた。

中は今でこそ生徒達で埋め尽くされているが、ちよつと前までは空白も多少目立っていたのだ。

「これでも随分増えた方みたいだな」

辺りを見回しながら、謙吾がそう呟いた。

それに同意を示したのは、美魚だった。

「そうですね……今では恐らくほとんどの生徒がここに来ているのではないのでしょうか？」

彼女がそう言うのにも納得がいった。

さつきまでなら何とかスペースを確保出来ていたのに、今では多少圧迫されるくらいだ。

クドや小毬に至っては、押し潰されるのに耐えられず、

「あうく……」

目を回して、ライブどころではなくなっている程だ。

そんな二人を見据えて、まるで獲物を狙う狩人の目となっているのは、来ヶ谷だった。駄目ですヨ姉御。今ここで二人を襲っては」

「失礼だな葉留佳君。これでも私は内なる欲望を抑えているのだぞ……ハアハア」

「息が荒くなってるわよ」

おまけに目も血走っていると付け加えたのは、沙耶だった。

恭介はそんな彼らの話を聞きつつも、岩沢の曲を聞いている。

だが、何時もと変わらないはずのその旋律からは、何処か焦りの色も見えているかのよう感じていた。

「まさか思いの他、人が入ってないことに焦ってる？」

そう考えてた恭介の思考を、

「何やってるんだお前ら!!」

という誰かの叫び声によって打ち消されることとなった。

「な、何事ですか？」

先程まで目を回していた二人も、今の怒鳴り声によって完全に目を覚ます。

声のした方を振り向いてみれば、そこには数人の教師が立っていた。恐らく、体育館での騒ぎを聞いて飛び出してきた体育科の教師だろう。

「今すぐお前らは演奏を中止しろ!!」

ズカズカと教師達は生徒の間を縫って割り込んで来る。

その間にも、

「何なんだよ!!」

「別にこの位見逃したっていいじゃない!」

「やらせてやったっていいじゃないか!!」

という、NPCからの批判の声があがる。

そんな彼らに、一人の教師が声を荒げて告げた。

「今までは多目に見ていただけだ! 今回はそうもいかない!」

やがて教師達はステージに上がり、演奏していた岩沢達を拘束し始める。

そして教師達は、岩沢達の楽器を没収し始めた。

「楽器はしばらく没収だ」

未だに教師達を睨んでいる岩沢達だったが、体育教師に捕まっているので、ただ抵抗することしか出来なかった。

やがて教師の一人が、

「これは捨てても構わないな？」

そうやって……岩沢のギターに手を触れようとした……。

そのギターは、岩沢にとっては始まりのギター。

このギターから始まり……それだけ思い入れのある代物。

それをこの教師は『捨てても構わないな』と言った。

瞬間、岩沢の頭の中で、何かが切れた。

「触るな……」

「あん？」

「それに……それに……触るなああああああああああああああああああ!!!」

「ぐほあ!!」

岩沢が自分を掴んでいる教師を殴ったと同時。

岩沢のギターを奪おうとしていた教師と、その教師に飛び掛かろうとしていた岩沢の間に入り……その教師を投げ飛ばした人物がいた。

その人物は……。

「感謝しろよな、岩沢とやら。俺の筋肉をフル稼働出来るのも、全部恭介のおかげなんだからな!!」

赤いバンダナを頭に巻いた少年、井ノ原真人がそこにいた。

他の所では、謙吾・来ヶ谷の二人はそれぞれひさ子・関根を拘束している教師を振りほどき、入江を拘束している教師は、恭介が助けに行っていた。

「棗……………どうして……………」

「お前の曲を聞かせてやれ！俺達がこの教師達を外に追いやっている内に、早くお前はお前の音楽を……………お前のやりたかったことをやれえ!!」

「!? 棗……………ありがとう」

恭介達は、教師陣を連れて体育館の外へ出て行く。

その間に、岩沢はギターを手にとり……………やがてあの曲を演奏し始めた。

その曲は、まさしくバラード。

岩沢が一番やりたかった曲……………静かで、みんなが聞き入ってくれるような曲だった。

恭介達はその曲を聴くことは出来なかったが、それを聞けば恭介も驚嘆の声を出してしまおうだろう。

「……………ありがとう、棗」

心の中でもう一度そう呟きながらも、岩沢はその曲を弾き、そして歌った。

*

「ふう……………ようやくと終わったぜ」

数分経って、恭介達はようやくと教師陣をどうにかすることが出来た。

一応教師ということもあって、傷をつけるわけにもいかない。だから気絶させる程度に収めていたのだった。

「まあ私の麻酔銃が役に経つとは思ってもみなかったわよ」

銃を片手に、沙耶がそう呟いた。

「本当にな……教師達もほとんど一撃でぶっ倒れてくれたようなものだしな」
「けど、やつぱりさーちゃんは凄いいね」

呟く謙吾に対し、沙耶のことを素直に褒める小毬。

褒められたことが少し嬉しかったのか、沙耶は思い切り笑い飛ばしていた。

「……さて、恭介氏。ここで一つ提案があるのだが」

「うん？」

来ヶ谷が、体育館の方を見ながら、恭介にそう尋ねる。

恭介は返事を返し、それを確認すると来ヶ谷が言葉を繋げた。

「恭介氏はそろそろ体育館に戻った方がいい」

「……一応聞くが、どうしてだ？」

「それは恭介氏が一番知っているはずだが？」

「……ああ、そうだな」

恭介は、来ヶ谷が言った言葉の意味が分かっていた。

何故なら……彼女の過去を知っていて、そして彼女がその夢を果たそうとしているからだ。

ここは死後の世界……後悔を抱いてきた者達が集う場所。

つまり後悔さえなくなってしまうば……この世界の住人はこの世界から立ち去ることとなるのだ。

「何だかよく分からないが、この教師達の処理は俺達がやつとくからよ」

「後は私達に任せて、恭介さんはあの人達の元へ向かってあげてくださいです！」

真人とクドが、胸を張ってそう告げる。

そんな二人を見た後で、恭介は他のメンバーを一瞥する。

……みんな、この場は任せろという表情を浮かばせて、恭介のことをじっと見ていた。

「……分かった。俺は体育館に戻る。お前達はこの教師達をどうにかしてくれ！」

「了解です」

美魚が答えると同時に、他のメンバーも頭を縦に頷かせて、肯定の意を示した。

「それじゃあ……ミッシェンスタートだ!!」

恭介はそう高々に宣言すると同時に、急いで体育館まで引き返した。

*

「(ああ……これが私のやりたかったことなんだ……)」

歌いながら、岩沢は段々と胸が軽くなっていくような感覚を得ていた。抱いてきた後悔がなくなっていく……自分は地に足を付けているという感覚をなくしてきた。

「私……このまま……どうなってしまおうのだろう」
自分はこのままどうなってしまおうのか。

この歌を歌い終えた時、自分は果たしてどうなってしまおうのだろうか。
岩沢は……そのことが分からないでいた。

そして岩沢は、分からないまま……歌を終えた。

「終わった……終わったんだ。私の夢、全部……」

岩沢は、曲が終わったと同時に、目を閉じた……。

その時だった。

「まだだ……まだお前はすべてやり終えていないはずだ!!」
「!?!」

一気に目を見開く岩沢。

それは立ち去ろうとしていた奏ですら驚くことだった。

何故なら……聞こえてきた声の主は、まさしく恭介の物だったのだから。

「お前はまだ、俺との約束を果たしてはいないだろう！俺とお前の二人きりでのライ

ブのこと、忘れたとは絶対に言わせねえぞ!! 勝手にお前だけ納得して消えるなんて許してたまるかよ!! だから……消えるな! 消えるのはまだ早いだろ岩沢あ!!」

「なっ……め……」

そう。

後悔がなくなったのなら。

やり残したことがなくなったのなら。

もうこの世界から消え去ってしまう……それは恭介が導き出した結論だった。

だから、恭介は岩沢には消えて欲しくないと思った。

自分勝手なことだとは分かっていた……だけど、もう少しだけ一緒に過ごしていたい
と思っていた。

こんなにも短期間でお別れなんて、そんなの悔しくてしようがなかった。

だから恭介は、岩沢を引き止めた。

そして、岩沢は……。

「そうだな……まだ私にはやり残したことがある。まだ終わってないんだな……棗
……」

「ああそうだ。俺の勝手な約束で申し訳ないが、お前にはまだやり残したことがある
……だから、まだ消えないでくれ。お前には、まだ消えて欲しくないんだ……!」

生徒達が見守る中。

恭介は段々とステージの上へと上がっていく。

恭介が歩く道を、生徒達は自然と開けていく。

岩沢は、ステージの上でギターを抱えたまま、そこに立っていた。

「ありがとう……棗。私はまだ、この世界から立ち去るわけにはいかない……後悔はもうないけど、やり残したことはまだあるから。みんなより一足早く消え去るなんてこと、出来るわけない……」

「……『ありがとう』って言うべきなのは、俺の方だつてのに……」

やがて恭介は、岩沢の目の前に立ち、自然と見詰め合っていた。

岩沢は若干顔を赤くして、恭介の顔を見つめる。

そして恭介は、一言こう言った。

「いつでもいい。いつでもいいから……俺とお前の二人きりのライブが終わるまで……これからもよろしくな、ガルデモのボーカルさん？」

「……お前らしいな。リトルバスターズのリーダー」

パン！

抱きしめるわけでもなく、手を握るわけでもなく。

恭介と岩沢の二人は……互いの右手を叩いて、ハイタッチを交わす。

それこそが、彼らの間で交わされた、『これからもよろしく』のサインだった。

episode 8 A Day

『天使』エリア侵入作戦から数日後の、校長室での話。

今回は、この間の作戦で収穫した情報を述べるような形となっていた。

それだけに、一同の面持ちは少し固いものとなっていた。

何せ『天使』についての重大な情報を、先日ゆり達は得ているのだから。

「……で、そんな重大な会議なのに、どうして部外者であるはずのコイツが同席してんだよー！」

藤巻は、かなり怒っているような表情を浮かばせて、とある方向を指差しながらゆりに向かってそう叫ぶ。

その方向には、岩沢の隣で不敵な笑みを浮かべている恭介がいた。

彼は藤巻に対してこう言った。

「岩沢やゆりに呼ばれて此方に来たんだよ。なんでも今回は俺が必要なんだと」

「なんだって……本当かゆりっぺ!!」

藤巻は、ゆりの耳元で叫びながらそう確認をとる。

ゆりは五月蠅いから少し黙ってくれと言わんばかりの表情を見せつつ、耳を抑えなが

ら、

「五月蠅いわね……その通りよ。棗君は今回のことに関しては部外者じゃないのよ。何せ岩沢さんが消えそうになったのを引き止めてくれた重要な人なんだから」

「岩沢が……消えそうになつた？」

「……」

いち早く日向が反応し、来ヶ谷はただ黙つて彼らの反応を眺めていた。

ゆりの言葉はそれなりに効果があつたようで、岩沢がどうして消えそうになつたのかを考えるような声も聞こえてきた。

「静かになさい。このままじゃ意見も聞けないじゃないの」

そんな彼らに、ゆりはそう告げる。

少し経つてから彼らは押し黙り、その後でゆりは恭介に言った。

「それじゃあ棗君、説明の方をお願い出来るかしら？」

「ああ、任せろ」

ゆりに言われて、恭介は一旦岩沢の隣から離れて、ゆりの近くにまで来る。

この位置からの方が、全員の顔を眺めることが出来て話しやすいからだ。

「まずお前達に尋ねる……この世界から消える要因となるものが何か覚えてるか？」

「この世界から消える要因か……」

「『天使』の言うことを聞くことではないですか？」

松下が考える素振りを見せ、高松がそう意見を出す。

しかし恭介は、その意見に対して首を横に振った。

「それについては俺には分からない。何せ目の前で見たわけじゃないからな。それに俺が今言ってるのは、NPC化の話ではなく、『成仏』の話だ」

「『成仏』の話？」

キョトンとしたような表情を浮かばせて、大山が恭介に尋ねる。

恭介は分かりやすくその概要について説明した。

「これはあくまで俺の考えにしか過ぎないんだが……ここは死後の世界だ。辛い過去を持った人間や、後悔を抱いてきた人間がやって来る場所だ。生前にやり残したことがあるような奴もこの世界に來たりするな」

「なんだよ……勿体ぶらずに早く言えよ」

気になった音無が、恭介に先を急かす。

そんな音無を宥めつつ、恭介は更に言葉を続けた。

「それじゃあここで更に一つ質問だ。後悔や、やり残したことがなくなった奴らは、どうなる？」

「えっと……やり残したことがなくなって、満足する？」

「その通りだ能美」

クドのことを褒めてから、恭介は結論を述べた。

「つまりはだ。後悔や未練がなくなった人間は……この世界から消える。つまりは『成仏』するということに繋がるわけだ」

「後悔や未練がなくなったら……」

『成仏』する……」

日向と音無が、思わずそう呟いていた。

恭介の意見を聞いて、他の人達は何も言えなくなってしまうていた。

つまり、自分ももし後悔や未練がなくなってしまうたら、この世界から消えるということに繋がるのだから。

「事実岩沢はあの曲を歌い終えた時……満足したような表情を浮かべて、そのまま消えそうになった。そうだろ？」

「……ああ、棗の言う通りだ」

恭介は確認を取るように岩沢に尋ねると、すぐに彼女は返事を返してくれた。

そして岩沢は更に言葉を繋げる。

「あの時私は、身体の中が空っぽになるような感覚を感じていた。中身がなくなつて、軽くなったような……浮いているような感覚だった。地面に足が着いていないような気

もした。そして私は……消えるんだなどあの時は思った」

「身体が……軽くなる……」

「……浅はかなり」

小さく呟くのは、竹山と椎名だった。

その後で、ゆりがまとめるように告げた。

「みんなも気をつけて頂戴。こんな風に未練がなくなると……消えてしまい可能性も十分にあるからね」

「……分かりました」

高松が頷くのとほぼ同時に、一同は理解したかのように頷く。

その後で、ゆりは別の話を始めた。

「そして今度は私達からよ……私達が収穫した事実も、かなり大きなものだったわ」

「具体的にはどんな感じなんだ？」

「What's about?」

来ヶ谷がゆりに対して尋ねる。

この際TKの発言は……無視することにした。

一旦ゆりは間を置いた後で、一同に言った。

「……『天使』は自分で武器を作っていたことが分かったわ」

「「!?」」

「Oh, that's unbelievable!!」

藤巻・大山・高松の三人が驚き、TKは叫びながらブレイクダンスを踊っていた。

「……何故にブレイクダンス?」

尋ねる音無の言葉を無視して、ゆりは話を続ける。

「『天使』は神様から力を授かっているわけでもなかった。自分で武器を作ったのよ

……私達と同じように」

「それじゃあ……『天使』は神に繋がってないってこと?」

「……まだ分からないわ。このことに関しては、もう少し様子を見てみる必要があるわね」

大山の言葉に、ゆりは苦い表情を浮かべながら答えた。

そしてこの言葉を最後に、『天使』についての情報も終わった。

「……さて、ここまでが先日のオペレーションで得た情報。ここからは報告になるわ

……岩沢さん、発表して」

「ああ」

恭介と入れ替わりに、今度は岩沢が前に立つ。

すれ違い様に、恭介は岩沢の耳元で言った。

「放課後に屋上に来てくれ」

「え？ ああ……」

岩沢も小さな声で答えると、そのままゆりの近くまでやってきた。

「岩沢が話があるってことは、ガルデモについての報告か？」

「その通りだよ、音無」

音無の質問に答えた後で、岩沢は告げた。

「今回私達は、新しいボーカルを入れることとなった。今日はその人物を紹介しよいと思っ……入ってきていいよ」

岩沢が許可を出した瞬間、勢いよく扉は開かれて、誰かがそこから入ってくる。

ピンク色で腰の辺りまで長くなっている髪、手錠のようなアクセサリー、悪魔の尻尾をモチーフとした飾り。

一目でミーハーな少女だと判断出来るその少女は。

「お前……ユイか!!」

恭介が指を差しながらそう叫ぶ。

岩沢が紹介した新しいボーカルとは……ユイのことだったのだ。

「皆さんはじめまして！ ……あ、音無先輩と棗先輩は数日ぶりです」

「……岩沢、なんだこのミーハー女は？ こんな奴を本当に新しいボーカルとして迎え

入れるのか？ ガルデモが崩壊しても知らないぞ」

「いや、これでも歌唱力はなかなかにあるんだ……ミーハーな部分に関しては否定のしようがないが」

日向の言葉に対して、岩沢はユイのことをフォローする。

……メンバーのほとんどが、本当に大丈夫なのだろうかと考える中（恭介ですらそう考えていた）、一人だけ賛成っぽい意向を見せている少女が一人。

「ああ……可愛すぎる！」

「……駄目だぞ来ケ谷。ユイを襲っては」

口元から涎を出し、だらしのない表情を浮かべる来ケ谷に、恭介がそう忠告する。

しかしその忠告の後に、音無は恭介のことを軽蔑の眼差しで見つめながら言った。

「そういえばお前……ロリコンだったな。だからお前も襲う危険が……」

「だから違えつての！ 別に小さな女の子限定なわけじゃ……そこ、どうして俺から距離をとる。さりげにゆりは能美を安全圏内に隠してんじやない！」

音無の言葉を聞いてからの一同の行動は……かなり早かった。

みんながみんな恭介から距離をとり、ゆりや松下に至っては、それぞれクド・ユイを安全圏内まで逃がしていた。

そして名前を呼ばれたゆりが、恭介に向かって一言。

「気安く私の名前を呼ばないでくれるかしら……変態」

「だから俺は違うんだってばああああああ!!」

泣きながら、恭介は勢いよく校長室から出ていく。

しかし、考えなしに出て行ったものだから……。

「「あ」」

ドゴン!

大きな音を響かせて、恭介はハンマーに攻撃され……そのまま外へと飛ばされたのだった。

「……ちよつと言い過ぎたかしら」

「いや、あれ位の方が棗の為にもなるだろうな」

少し反省するような素振りを見せたゆりに、音無は若干清々したような表情を見せながらそう言った。

そんな音無を見て日向が一言。

「……お前、実はちよつと前の夜の校舎でのこと、まだ恨んでるだろ」

「え? なんのことだ日向?」

「……いや、何でもない」

とりあえず日向は、この話題については置いておくことにした。

「さて、それじゃあ話を元に戻すか」

「恭介氏についてはトコトン無視の方向で行くんだな……」

話をさっさと進めようとする音無に対して来ヶ谷がそう呟いていたのだが、それは音無の耳にまで入らなかったという。

「それで、ガルデモの新ボーカルとして……えっと……」

「ユイにやんです♪」

「そうそうユイ……へ？」

ゆりはユイの言葉を聞いて若干聞き間違いでもしたのかと気になってしまう。

しかし、ユイはもう一度、高々に言ってみせた。

「ユイにやん☆」

「……そういうのが一番ムカつくんだっての！」

「んぎやあああああああ！」

突然ユイに対して間接技を仕掛けてきた日向。

一同は、その様子をただ呆然と眺めているだけだった。

「あー日向。とりあえず、解放してやったらいいんじゃないか？」

ようやくと反応を見せたのは、音無だった。

日向はそんな音無の言葉を聞いて、ようやくとユイを解放してあげたのだった。

「ハアハア……死ぬかと思いました」

「安心しろ。俺達はもう死んでるから」

「そういう問題じゃないですよ！」

無然とした表情を浮かべて、日向は整然と言い放った。

ユイはそれに対して何か言いたげな表情を見せていたのだが（というか実際に話しかけてみているのだが）、日向はそれらを全面的に無視し続けた。

「……痴話喧嘩なら他所でやってくれないかしら？」

とうとう痺れを切らしたゆりが、二人に対してそう言ったのも時間の問題だった。

*

「アイテテテ……酷い目に遭ったぜ」

例の如く死なない世界でのルール通り、校舎から地面に叩き落とされたにも関わらず、恭介は起き上がっていた。

もつとも、その時に流したらしい血は多少地面に広がっている為、少しグロテスクな様子となっていた。

「……ちようどいい時に現れたじゃねえか」

「あん？ ……野田か」

相変わらずハルバードを持っている野田が、恭介の元へと近づいてくる。

恭介は、そんな野田の様子を見て少し笑ってしまいが、やがてすぐに元の表情へと戻した。

「どうしたんだよ、そんな所で」

「俺はいつも通り素振りをしてただけだ」

「謙吾みたいなやつだな……変なところで律義なんだな」

「ゆりつぺの為だ」

「……ほう」

そう言い放った野田を見て、何やら面白そうな表情を浮かべる恭介。

思わず野田は顔をしかめた。

「何だよ。何か文句あんのか？」

「いや、別に」

そう答えた恭介だったが、やはり笑みは消えていなかった。

恭介はそのままの笑顔で、野田に尋ねる。

「気晴らしに……久しぶりにやるか？ ランキングバトル」

「……ふん、珍しいじゃねえか。お前から誘ってくるとはな」

野田はハルバードを地面に置くと、恭介に向かって右手人差し指を向け、

「上等じゃねえか！ 今までの分の恨み……ここで晴らさせてもらおう!!」

「いい心意気だ。そういう男、俺は嫌いじゃないぜ？」

「悪いが俺にはそつちの気はねえよ!!」

「安心しな……俺もないから」

不敵な笑みを浮かべつつ、恭介と野田は互いにそう言い放つ。

そうしている内に、周りには続々とNPC達が集まってきた。

「久しぶりの戦いだが……腕はなまってないだろうな?」

「もちろんだぜ……さあ早く武器を投げてこい!!」

周りから様々な武器が投げ込まれてくる!!

「よし……これだ!!」

野田が手にしたものの。

それは……漫画本だった(B○)。

「誰だこんな漫画なんか投げ込んだ奴は!!」

「……男同士の世界というのも、いいものですよ?」

何処からか美魚の声が聞こえてきたような気がしたが、恭介は無視することにした。

一方で、恭介が手にしたものは。

「……おい、これで何をしろと?」

それは……子犬のぬいぐるみだった。

「はん！ そいつは残念だったな！！ それで俺に勝てるのか!?」

「……○」本持つてる奴に言われても説得力感じないんだが」

「うるせえ!!」

何だかよく分からない武器を手にした二人の戦いは……こうして幕を開けたのだ
た。

※

もはや変態の領域に達したロリコン棗恭介

VS

やられ王野田

「心外だ!!」

*

「しかしこれ……どうやって使おう……」

恭介は未だに子犬のぬいぐるみの使い方に迷っている。

「おっしや！ 今しか攻撃するタイミングはねえ!!」

野田の攻撃。

野田は漫画本を音読した。

「オエー！」

恭介の精神に300のダメージ!

「ウゴツ! ……こんな気持ち悪いもんなんか読ませるんじゃねえよ!」

野田の精神に300ダメージ!

「とりあえず……投げてみるか」

恭介の攻撃。

恭介は野田に向かってぬいぐるみを投げた。

「ふん……そんなの軽いな」

ミス!

漫画本でぬいぐるみを弾かれてしまった。

「なんだか救われない気がするな……あのぬいぐるみ」

「ガタガタ抜かしてるんじゃねえぞ!」

野田の攻撃。

野田は漫画本を音読した。

「クツ……!!」

恭介の精神に200のダメージ!

「耐えろ……耐えろ!」

野田の精神に150のダメージ!

「このままでは負けるな……もう一度投げてみよう」

恭介の攻撃。

恭介はぬいぐるみを投げた。

「同じ手が通用するかよ！」

ミス！

ぬいぐるみは漫画に弾かれてしまった。

だが……。

「……………うん？」

「浅はかナリイイイイ!!」

「グハアツ！」

その場を偶然通りかかった椎名が、子犬のぬいぐるみを見つけたことで野田に突っ込んできた!

野田に5000のダメージ!

「こんなの……ありかよ……ガクツ」

「なるほどなるほど……このぬいぐるみは椎名を呼ぶ為のアイテムだったのか」

恭介、WIN!!

*

「お前に特上の称号をつけてやろう……流石に三回目だしな」

そう言って恭介が野田につけた称号は……。

「こんなのいるかよ!!」

野田は『目指せドM王』の称号を手に入れた!

「じゃあ俺……そろそろ行くからな。ちよつとばつかし用事があるから」

「お……おい待て! 話はまだ終わっていない!!」

引き止める野田の言葉を無視して、恭介は校舎の中へと戻っていった。

*

岩沢と約束した通り、恭介は屋上に向かっていった。

どうやら恭介が眠っている時に時間はかなり経過していたらしく、約束の時間にギリギリ間に合う位の時刻となっていた。

少し急ぎ足で恭介は階段を上って行く。

「ホッホッ……うん?」

そして恭介は、廊下を歩く一人の少女を目撃した。

その少女とは……。

「よう、立華」

「………(こ)んにちは、棗君」

相変わらずの無表情で恭介に挨拶の言葉を返したのは、奏だった。

「どうやら仕事をしている最中のようで、手には何かの資料みたいなものが握られていた。」

「それ……何の資料なんだ？」

「気になった恭介が、奏に尋ねてみた。」

すると奏は、特に顔色を変えるわけでもなく、

「……今年の学園の予算案。それを今、職員室に提出しに行く所」

「そっか……一緒に行ってもいいか……って尋ねる所なんだが、実は俺もこの後用事があつてな」

「用事？」

「ああ。ちよつとな」

「そう言うのと、恭介は自然に笑顔を作る。」

「そんな恭介を見て、そういうえげと何か思い至つたようで……。」

「棗君、今日も授業に出てない……」

「ああ、悪い……ちよつとばつかし外で眠っていたからな」

まさか校長室から出る時にトラップに引つ掛かってしまって、そのまましばらくの間血の池の中で眠っていたなんてことは、恥ずかしくて言えるはずがなかった。

一応『外で寝ていた』ことには代わりないので、嘘はついていないことになるが……。
「そう……次は授業に……」

「分かってるだろう？ 俺達がどんな集団なのか」

「……そうだったわね。なら、何を言っても無駄なことかしら？」

「そういうことになるな……悪いな、授業に出るような奴らじゃなくて。ついでに言う
と、生徒会長としての仕事増やしちゃって悪いな」

「……」

奏はその先の言葉を何も言わなかった。

だが、今の話の筋とは関係なしだが、奏が恭介に聞きたかったことを、尋ねた。

「……私、少し前に神北さんと会った」

「ほう……神北とか。んで、一体どんな話をしたんだ？」

「……私が、神北さんの友達として認識されていた」

「だろうな。アイツはそういうタイプの人間なんだよ。よく言えばお人好し。悪く言え
ばなんでもかんでも信じすぎ」

恭介は、小毬の人間性を思い浮かべて、そう呟いていた。

恭介の言う通り、神北小毬という人間は誰でも信用する。

出会った人全員の幸せを願うような……そんな少女なのだ。

だが、それは同情なんかからくるものではない。

彼女なりの……本心の表し方なのだ。

「それじゃあ私、神北さんに同情されたの？」

「ソイツは違うぜ。神北は多分、お前のことを本当に友達だと思ってる……神北だけじゃない。俺達もそうだ」

「……リトルバスターズのメンバーが、ってこと？」

「その通り。来ヶ谷と能美は形こそ戦線のメンバーだが、俺達リトルバスターズの大切な仲間であることに代わりはない。だからアイツらも、本当はお前のことを友達って思ってるだろうぜ？」

「……珍しい人達。私と友達になろうとする人達なんて……今まで誰一人としていなかったのに」

「どうしてだ？ 一人くらいはいたっていいのに……」

「みんな消えちやうもの」

「……ああ、そうだったな」

そこで恭介は、思い出していた。

奏と友達になり、楽しい時間を過ごしていくということは……楽しい青春を送れたこととなり、やがては消えていくのだ。

以前にも感じていた、理不尽なシステム。

しかし、だからこそ恭介は奏に言った。

「安心しろ……俺達は先に消えたりはしない。まあ規則なんかクソ喰らえな連中だしな。それに、お前は気付いていないだろうが……音無も多少お前のことを気にかけている節があるな」

「……音無、君？」

「……ほら、この前夜の校舎の中でゆりの隣にいた……お前が『死なない』証明として心臓ぶっ刺した奴のことだよ」

「……ああ」

そこまで言われて、奏はようやくと思いつく。

意外と抜けている部分があるのではないかと、この時恭介は考えていた。

「まあ、つまりは音無を含めた俺達は、お前にとっての例外ということだ……後、勘違いしないでくれよ。戦線メンバーだって、誤解さえ解ければきつとお前の味方になってくれると思うぜ？ アイツらだって、多分心の底からお前のことを憎んでいるわけじゃないだろうしな」

「……」

奏は、その言葉に対して何も言わなかった。

恭介は、そんな奏に向かつて、

「……じゃあ俺は行くからな」

手を振り、恭介は奏に挨拶の言葉を述べる。

奏はそんな恭介に対して、無言で手を軽く振っただけだった。

※

「呼んだのは俺の方なのに、俺の方が遅れてしまって、悪いな」

恭介が屋上に行ってみると、そこには既に岩沢の姿があった。

どうやら結構待っていたらしく、地面に座りこんでしまっていた。

「いいさ。たまには何もせずただ空を見上げるのもいいなって思ってたところだった

しや」

恭介に笑顔を見せ、岩沢がそう答える。

恭介は、少しすまなそうな表情を浮かばせていたが、すぐに笑顔となつて、

「こうしてるのも、悪くないだろう？」

と、尋ねていた。

その質問に対して、岩沢は答える。

「ああ、まあまあかな。けどもとはと言えば棗が遅れたからこんな時間が生まれたん

じゃないか」

「それはそれは……申し訳ございませんでした、お姫様？」

「止めてくれ。私はお姫様つて柄じゃない」

ちよつとばかり無駄な会話を繰り広げて、恭介と岩沢は互いの顔を見る。

岩沢の隣に恭介が座り込み、それから空を見上げた。

岩沢も、恭介の顔を見ていたのを空へと視点を移し、夕方の空をじつと見つめていた。

「赤くて、強く輝いているよな……太陽つて」

「ああ、そうだな」

眩く岩沢の言葉に、恭介は答える。

その後で、またしばらく無言となる。

二人は、今この時をたっぷり堪能していた。

赤く輝く太陽は、今が夕方であることを物語っていた。

太陽の周りには、若干オレンジがかかった白い雲がいくつも見当たり、いい具合に配置

されている。

純粹に、綺麗だと感じとることが出来る風景だった。

「……さてと。話があるから呼び出したわけだし、そろそろ本題に入るか」

やがて、恭介が無言の時間を突き破り、岩沢にそう話しかけてくる。

「ここでようやく、岩沢は今日、恭介に呼び出されたから屋上に来たのだという事実を

再認識した。

「ああ、そういえば私、棗に呼び出されて屋上に来たんだったな」

「なんだよ。数分前までは知っているような感じで話していたよな」

「……そうだったな」

数分前に自分が言った言葉を思い出し、岩沢はそう呟いた。

恐らく、綺麗な空を見ていたことで、感傷にでも浸っていたのだろう。

「さて、今日お前を呼び出したのは……この前のライブについてだ」

「ライブ？ ……ああ、私が消えそうになったライブのことか」

岩沢は、恭介がこれから何を話すのか……僅かながら感じとることが出来た。

今さらライブのことを取り上げる必要はないというのに……。

「まず岩沢に尋ねる……お前、『Alchemy』を歌ってた時、少し焦ってたろ？」

「……え？」

信じられないというような表情を浮かべていた。

それは恭介の発言が間違ってたからではなく……むしろ合っていたからだ。

確かにあの時、岩沢は焦っていた。

理由は……。

「人が思いの外集まらない。これでは自分の歌を聞いて貰えているとは言えない……な

んて不安を抱いていたんだろ」

「どうしてそれを……ひさ子から聞いたのか?」

「違えよ。お前の様子を見てて気付いたんだ」

「!？」

誰かから聞いていたのならともかく、まさか恭介本人が自分で気付いているとは思っていなかったらしく、岩沢は大きなショックを受けたような感覚を感じた。

バンドのメンバー以外には気付かれていないと思っていたのに、隣に座る棗恭介という人物は、普通なら気付けない小さな変化にも、気付いていたのだ。

「あんなタイミングで……まだ二曲目というタイミングで、あそこまで激しい曲は普通やらない。ましてやそれが陽動作戦の内に含まれた、長時間にも及ぶかもしれないようなライブだと尚更だ」

「……やっぱり、棗って凄いいんだな。流石はリトルバスターズのリーダーを務めているだけはある。観念したよ、まったくもってその通りだ」

恭介に言い当てられて、とうとう岩沢は観念してしまった。

この人物には何があっても勝てない……そんな感じがした。

「俺は多少の心の変化なら、ある程度理解出来る自信がある。まあリーダーやつてるからか、そんなのが身に付いてしまったわけなのだが」

「それでも十分凄いと思う。私なんてそんなに人の心なんて理解出来ないし」

「けど、少なくともガルデモのメンバーの心の動き位なら把握出来るだろう？ ガルデ

モのメインボーカルとして」

「……まあ、否定はしないけど」

岩沢は、恭介の言葉に対してそう返した。

恭介はそんな彼女の言葉を聞いた後で、更に言葉を付け足した。

「俺から見ればお前だって凄いと思うがな。入江や関根から聞いたぞ。お前、ボーカルだけじゃなくて作詞作曲もやってるんだってな」

「まあね」

一言で返す岩沢。

「……俺にはそんなこと出来ないからな。一つのことをやるのに精一杯だから。お前はそれでも、いくつもの役をやってみせている。何だか少しだけうらやましいぜ」

「そう言われると……照れるな」

顔を少し赤くして、岩沢が答える。

恭介は空を見上げると、岩沢に向かって言った。

「だからお前は誇つていいんだよ……お前の曲には、お前の心が詰め込まれている。そしてそんな曲は、確かに俺達聴衆の心を鷲掴みにしてるってことをな」

「棗……」

「もう少し自信を持って。お前の歌は、決して劣ってなんかいない。あの時客の出足が悪かったのは……みんなライブの存在を知らされていかなかったからだ。ユイがポスターを貼った後、恐らく生徒会の奴らが剥がしたんだ。だから知らなかった……それは仕方ないことじゃないか」

「で、でも……」

何かを言おうとする岩沢の発言に被るように、恭介は言った。

「お前の曲は、聞く奴らの心を掴むってことはさっき言ったな。だから客は自ずと入ってくるんだよ。お前にはそれだけの力が備わっている。曲を演奏していれば、自然と入ってくるんだ……野外ライブと同じ原理だろ？」

「……そうだな。確かにそうだ。野外ライブの時も、最初の内は少なかったけれど、後から段々と人が集まってくれた。たくさんの人達が、私の歌を聞いてくれた……それと同じだったんだな」

岩沢は、呟くようにそう言った。

恭介は、満足そうな表情を浮かべると、その場から立ち上がり、

「さて。そろそろ戻らないとな。食堂に行つて夕食を食べる時間だから……ほら、岩沢」

「……まさみだ」

「うん？」

恭介が岩沢を起こそうと手を差し出したのとほとんど同時に、岩沢が自らの下の名前を告げる。

その後で、更にこう付け加えた。

「まさみ……私の下の名前だ。これからはそう呼んでくれ」

「……ああ、分かった」

「それと……」

岩沢はそこで躊躇う。

それから……恥ずかしさを隠すように、小さな声で、言った。

「棗のこと……恭介って、呼んでもいいか？」

その質問に対して、恭介は笑顔で答える。

「……ああ！」

恭介の手が、岩沢の手を掴み、恭介は笑顔でそう答えた。

……二人の仲が、また一歩近付いた瞬間だった。

episode 9 Day Game

「ハアハア……」

真夏の野球場。

気温、摂氏三十度以上。

九回裏2アウトランナー二・三塁。

後一つ打ちとれば……彼のチームは勝利となる。

「あと一つ……あと一つだ……」

彼が守っているのはセカンド。

頬には汗が伝わり、心臓は鼓動を止めない。

……ピッチャーは、自分達のチームの勝利を信じて、最後の一球を投げた。

カキン!!

「あ……」

球は高く打ち上げられる。

打ち損じたのだ……。

その打球は、セカンドを守っている彼の所へと、飛んでいく。

「これを捕れば……終わる……」

セカンドフライ。

しかも定位置。

ほとんど位置を動かすことなく、ただその場でグラブを構えていれば捕れる、そんな打球だった。

彼はグラブを高く突き出し、その球を取ろうとする。

……空に上がる太陽が、やけにまぶしく映っていた。

*

「球技大会？」

屋上に集まったリトルバスターズメンバーは、来ヶ谷より野球のことを聞かされた。

来ヶ谷は、その概要を説明し始める。

「今度この学園で球技大会が行われるらしいんだ。競技は野球」

「ほう……それは俺達にぴったりのスポーツではないか？ あの時の俺は部活に打ちこんでいたが、今なら野球もやってもいいかもしれないな」

「何せ生きていた頃には野球をやってたしな！」

謙吾と真人が、ウキウキしたような表情を見せながらそう言う。

……他のメンバーも、ワクワクしたような表情を見せていた。

「その情報はどこから?」

恭介が来ヶ谷に情報源を尋ねる。

すると来ヶ谷は、

「日向氏からだ。私達の所に球技大会の話を持ってきて、メンバーに入ってくれと頼まれた」

「それで来ヶ谷さんは、どう答えたのですか?」

今が日中ということもあり、美魚は日傘を差している。

そんな彼女が、来ヶ谷にそう尋ねた。

「うむ。野球と聞けば恭介氏が黙っていないと思つてな。あらかじめ断つておいた」

「さすがは来ヶ谷だな……分かつてたか」

恭介は笑顔で来ヶ谷を見る。

それに対して、来ヶ谷も笑顔で返して見せた。

「よし……我らがリトルバスターズも球技大会に参加するぞ!! メンバーはここにいろ

九人で……」

「私はちよつと、運動するというのは……」

小さな声で、美魚が競技に参加することを辞退した。

恭介は、そんな美魚を見て微かに事情を察知すると、

「……出場するメンバーは、俺・謙吾・真人・神北・能美・朱鷺戸・来ヶ谷・三枝の八人と……後一人か。マネージャーとして西園には入ってもらおう」

「ありがとうございます」

恭介がメンバーを告げると、美魚は恭介に礼を言う。

出場メンバーとして自分を外してもらえたことに対して、だ。

「もちろんゲリラ参戦なのよね？」

「もちろんさー」

沙耶が確認を取るようにそう言うと、恭介は笑顔で言葉を返した。

その後で、クドが恭介に尋ねた。

「ですが、後一人のメンバーはどうするんですか？」

野球は九人でやるスポーツだ。

八人ならば何とかやれないこともない人数だが、やはりやるなら九人でやりたい。

そっちの方が守備を充実させることが出来るからだ。

「そのことに関しては俺に任せてくれ。一人だけ宛があるからな」

「恭介さん、しつかり頼みましたヨ？」

葉留佳が恭介に向かってそう後押しをする。

恭介は、全員に向かって、

「ああ、任せろー！」

とだけ告げた。

そして恭介は、一人屋上から去っていく。

それを見送った後で、小毬が来ヶ谷に一言。

「ちなみにどんな風に誘われたの〜？」

「うむ……『死ぬよりも恐ろしい罰ゲームが待っているわよ』って言われてるんだ。だからお前も協力してくれないか？』と言われたが？」

「死ぬよりも恐ろしい罰ゲームって……」

「一体何なんでしょう……わふ……」

美魚とクドの二人は、来ヶ谷の説明を聞いて、若干身震いを感じた。

*

「えつと多分ここに……お、いたいた」

恭介は、とある教室の前で足を止める。

そこはいつもガルデモのメンバーが練習している教室だった。

どうやら恭介の目的の人物は、ここにいらっしゃるらしい。

「さて………入るか」

音が聞こえてこないのです、ひよつとしたら誰もいないかもしれないという可能性も考

えたが、とりあえずは中にその人物がいることを信じて、恭介は教室の中へと入った。
「ん? ……ああ、恭介か」

「よっ、まさみ」

中にいたのは、岩沢ただ一人。

そして岩沢こそ、今回恭介が目当てとしてしている人物だった。

どうやらさつきまで一人で練習していたらしく、額には多少汗らしきものが見えていた。

「悪いね。こんな格好で」

「いや、なかなか頑張ってるって証拠だ。別に謙遜する必要もないだろ」

「そうか? そう言つて貰えると嬉しいかな」

首にかけていたタオルで汗を拭き取り、その後で岩沢は恭介の方を向く。

「……それで、私に何か用でも?」

そして一言、そう尋ねた。

前置きをほとんど置かずに、恭介は単刀直入に切り出した。

「今度球技大会が行われることは知ってるか?」

「ああ、知ってるよ。戦線メンバーが何人か誘われているのも見たし……今回は野球だったっけ?」

「ああ、その通りだ。そして今日、俺はお前を勧誘しに来た」

「……私を？」

意外そうな表情で、岩沢は恭介の顔を見る。

恭介は、いつもと同じような笑顔を見せて、そしてこう言ったのだった。

「どうせやるなら、みんな一緒にやった方がいいだろう？ まあ内のメンバーはリトルバスターズのメンバーで固められてるからちよつと居づらいかもしれないが、来ヶ谷や能美だっている。けど、メンバーがどうしても一人足りないんだ。だから俺達のチームに入ってくれないか？」

恭介がそう頼み込むと、岩沢は少し考える素振りを見せる。

恭介は、そんな岩沢を緊張の面持ちでジッと見詰めていた。

「……うん」

やがて答えを出したらしい岩沢が、小さく首を縦に頷かせた後に、

「いいよ。恭介からの頼みだし、断る気はない。それに、私も野球をやってみたかったからね」

「サンキュー岩沢！」

恭介が岩沢の手を握って、上下に振る。

そんな恭介を見た岩沢は、

「子供っぽい一面もあるんだな……恭介って」

なんてことを考えていたという。

こうして、恭介達リトルバスターズチームも、メンバーが九人揃ったのであった。

※

そして、球技大会当日。

一般生徒達も混じるなか、一際目立つ集団があった。

その名も……リトルバスターズ。

本日の為に、コーデイナー宮沢謙吾が、猛スピードで作り上げた匠の一品とも言えるユニフォームを、彼ら全員が着ていた。

ただし、マネージャーとして来ている美魚は制服のままであった。

「なあ恭介……これは何だ？」

「なんでも謙吾が数日で完成させた、野球のユニフォームらしい……頼んだ覚えはないんだが、どうやら謙吾が張り切って作り上げてしまったらしいな。しかも何故かメンバー全員の採寸がピッタリだしな」

謙吾が作り上げたユニフォームの特徴は、前面に大きく書かれた『Little Busters』という文字があり、右胸付近には小さく猫を象ったワッペンみたいなものが貼られていた。

後ろには背番号が付いていて、一番はもちろん恭介だった。

二番から順番に、謙吾・来ヶ谷・真人・沙耶・葉留佳・岩沢・クド・小毬。
「まずは初戦突破が目標だな。初戦の相手は……」

トーナメント表を確認する来ヶ谷。

そして自分達の名前を見つけた瞬間に、

「恭介氏……これはなかなか面白い試合になるかもしれないぞ」
「え？」

そんな来ヶ谷の言葉を恭介が確認する前に、

「集合ー！」

審判から、そんな合図が出される。

それに合わせて、互いのチームのメンバーがホームベース前に集合する。

そして対戦相手を見て……双方驚いた。

「ええ!!」一回戦目の対戦相手はお前達かよ……」

「ほう……これは中々に面白そうな試合になりそうだな」

先ほど来ヶ谷に言われたことを思い出し、恭介は呟く。

対して日向は、あまり嬉しそうな表情を浮かべてはいなかった。

「ではこれより試合を始めます!」一同、礼!

「「「お願いします!!」」」

全員分の声が響き、試合開始の合図が告げられる。

先行は日向チームだ。

「さて……初回が大切だぜ! 気を引き締めて行くぞ!」

ここで、リトルバスターズチームのポジションを発表しよう。

ファースト 謙吾

セカンド 沙耶

サード 来ヶ谷

シヨート 葉留佳

レフト クド

センター 岩沢

ライト 小毬

キャッチャー 真人

ピッチャー 恭介

「よっしや恭介! 思い切り投げてこい!」

キャッチャー道具を身に纏った真人は、グラブを思い切りバン! と叩き、その後で

構える。

対する日向チームの先頭打者は、音無だった。

「よう、音無。相変わらず元気になってるようだな……」

「そっちこそ。お勤めご苦労様、リトルバスターズのリーダー？」

互いに笑いながらそう言い合う。

「プレイボール！」

審判がそう告げると、バッターボックスに立った音無は、バットを構え、そして恭介の顔を真剣味帯びた眼差しで見つめる。

恭介は口元をニヤリとさせて、

「まずは第一球か……鈴がどんな気持ちで投げていたのかが、何となく理解出来るような気がするぜ！」

恭介は思い切り力を込めて、第一球を……投げた。

「バアン！」

「ストライク!!」

「……結構速いな」

記録、118 Km。

それはピッチャー経験がない選手にしてみれば、結構速い部類に入るだろう。

「(けど、先頭打者としての役割として、まずは塁に出る!)」

心の中でそう呟いた音無は、その後でバットを強く握り直す。

そして……恭介の手から放たれる、第二球。

「!!」

キーン!

打球はセカンドとショートの間を越えて、センター前ヒット……かとおもいきや。

「そんなへなちよこの球しか打てないのか!」

何故かそこにはハルバードを持った野田がいて……何故かそのボールを打ち返した。

「なんだと……!!」

その後で、音無は再び打ち返す。

野田が打ち返し、音無が打ち返し……それを繰り返す二人。

実は野田を連れてくる際に、日向が『野球で白黒つけなければいいじゃないか』ということと言っていたのだ。

そして、意味をはき違えたらしい野田が前に出て……何故か二人のわけわからない戦いが始まる。

これには流石の日向も啞然とし、

「いや、お前ら競技間違ってるからな!」

と叫んでしまう程であった。

もちろん判定はアウト。

「ようはアホですね」

未だにやりとりを続ける二人に、ユイがそう告げたのだった。

*

結局その回は椎名・日向・野田の三人によって入れられた点数で終わり、続けて一回裏、今度はリトルバスターズの攻撃だ。

「先頭打者は……三枝、お前が行ってこい」

「アイアイサ〜!!」

一番バッターは、葉留佳。

ここは固く打者を出していこうという戦法だ。

対するピッチャーは音無。

日向チームの守備位置を確認すると……。

ファースト ユイ親衛隊 A

セカンド 日向

サード ユイ

シヨート 椎名

レフト ユイ親衛隊 B

センター なし

ライト ユイ親衛隊C

キャッチャー 野田

ピッチャー 音無

以上。

「さてとまずは第一球……」

音無は、投げる体勢をとる。

そして……アンダースローからの、一球。

バアン!

「ストライク!」

ど真ん中ストライク。

葉留佳は、まずは見送った。

だが……。

「貴様の球はそんなものか!」

野田がメットを外して、球を全力で投げる。

音無も、

「なんだと……!!」

力強く、全力で投球する。

そして再び……そこで戦いが始まった。

「だから二人だけで戦ってるんじゃないっ!!」

日向のツツコミが、このタイミングで入った。

だが意外にも、この二人の球に手を出した人物がいた。

「ハルちゃんミラクルダイヤモンド……以下略!」

キーン!

「「「あ」」」

誰もがこの時思った。

三枝葉留佳という少女は……何処までもアホの子だな、と。

パシッ。

「アウト!!」

「そ、そんなぁ……」

項垂れる葉留佳に、恭介が一言。

「あんだけ高い球打てば、そりや当たり前のことだろうぜ」

「うう……次こそは必ず……!!」

三枝葉留佳、再チャレンジに燃える。

「さて、次は俺だな……」

続いてバッターボックスに入ったのは、謙吾だった。

バットを構えるその姿は……中々に様になっていた。

「頼むぞ謙吾！　せめて塁には出てくれ！」

「任せろ！」

謙吾は恭介の期待に応えるべく、バットを握る手に力を込めた。

「……セイ!!」

音無は、球を投げた。

しかし謙吾は……何故か目を瞑っている。

やがて自分の身体の少し前に球が来た時に、

「……!!」

目を見開き、そしつ、

「マーーーーー……ン!!」

思い切りバットを振り抜き、打球はスタンド一直線。

そのまま球はセンタースタンドへと入っていき、結果、

「ほ……ホームラン!!」

「そ、そんな……マジかよ……」

日向が思わずそう呟いてしまう程、綺麗なホームランだった。

謙吾はそのままホームインすると、

「リトルバスターズ最高!!」

と、天に向かって腕を突き出して、叫ぶ。

そんな様子を見たユイが、またしても一言。

「あの人も……アホですね」

「とうか……ネジがどつか揺るんじまった感じだな……」

流石の日向も、今回のユイの発言には同意せざるおえなかった。

「何をやっているのだ貴様!! ちゃんとバッターを打ち取れ!!」

「あのなあ……いくらなんでもあれは無理だろ!!」

その後、野田と音無が本日三回目の喧嘩を始めたのは言うまでもない。

※

「さて、次のバッターは……ユイか」

試合も中盤に差し掛かり、五回表で、点数は7対5。

双方ともなかなかの善戦ぶりだが、生きていた頃に野球部に所属していた日向に、抜群のコントロールを持つ音無、パワーヒッターの野田に、素早い動きの椎名。

この四人がいる日向チームは、ある意味強いチームだった。

対するリトルバスターズも、恭介・来ヶ谷・謙吾・真人・沙耶の五人が主力となつていた。

岩沢はごく普通にうまいというレベルで、果たして本当に野球が初めてなのかと疑いたくなる程だった。

葉留佳は特筆する必要はないが、別段下手なわけでもない。

他の二人については……もはや何も言うことはあるまい。

「おっしや行くぞー！」

気合いだけは十分だったが、その結果は……。

「ストライク！ バッターアウト！」

「あ……あれ？」

「ああ……やっぱりな」

日向は、『思った通り』と言ったような表情を見せ、ユイのことをジツと見詰めていた。

次のバッターはユイ親衛隊Aだ。

「この回はもう期待出来ないな……」

日向がボソツとそう呟いていた。

その時だった。

カキン！ という、軽いが……しかし確実にバットに球が当たっていた。

打球は緩いフライとなり、セカンドまで飛んでいく。

そのフライを、沙耶は……。

「よっしや捕ったあああああああああああ!!」

わざわざ滑り込む必要はないのに、沙耶はスライディングしてまで全力で捕りに行く。

……結果的には捕ることが出来た為、特別問題はないが……ただ単にアホな動きを見せているだけであつた。

「……アホですね。この人も」

沙耶の動きを見たユイが、何時ものように口癖である『アホですね』という言葉を言う。

そうしている内に、次のバッターになる。

次はユイ親衛隊C。

「え……えい!」

カアン!

球はショートトの方向に飛んでいく。

しかし……来ヶ谷は何故か動かない。

抜けたと考えた日向だったが……。

シユンというような音が聞こえたかと思うと、何と来ヶ谷はその場から瞬間移動して
みせたではないか。

「……………マジでっ。」

思わず日向がポカンとした表情を見せてしまう。

そんな日向に向けて言ったように、来ヶ谷が一言。

「……………残像だ」

そして攻守交代となり、リトルバスターズのメンバーはベンチに戻っていく。

代わりに今度は日向達が守備につく。

続くバッターは……………岩沢だ。

「岩沢か……………結構要注意人物なんだよなあ」

ここまで岩沢は目立った活躍こそしてないものの、なかなかリトルバスターズの勝
利に貢献しているようにも見えた。

「よう、記憶無し男」

「相変わらずの呼び方だな、岩沢」

バッターボックスに立った岩沢は、自分の過去を話した時に呼んだ名前で、音無のこ
とを呼ぶ。

何だか不思議と嫌な気分はしなくて、むしろ音無は今の状況を楽しんでるようにも

感じられていた。

「……もちろん、ここで敗退すれば恐ろしい罰ゲームがあることを頭の隅の方に置いておきながら。」

「今回もヒットを打ってあげるよ」

「そういうわけにもいかないでな……そう何回もヒットを打たせるわけには、いかなえよ！」

アンダースローからの一球。

岩沢はそれを……前へはじき返した。

キーン！ という鋭い球が飛んでくる。

方向は……ピッチャーの真正面。

「うをつー！」

パアン！

思わず目を瞑って、それをキャッチした。

「……あぶねえ」

「……狙いはよかったと思うんだけどな」

「お前、本当に初心者なのか？」

音無が岩沢に向かってそう尋ねる。

すると岩沢はこう言った。

「いや、やっていく内に慣れてきただけだよ」

「いやいや……慣れにしてはかなり凄いだよ」

セカンドにいる日向が、思わずそんなことを呟っていた。

*

さて、いよいよ9回表へと突入し、点数は未だに7対5のまま。

次のバッターは……音無だった。

「ここでお前に遭うとはな……少しばかり不幸な気もするぜ」

「何でお前がそんなこと思うんだよ、棗」

「いや……何だかお前なら、色々奇跡起こしちゃうような気がしてよ。そんなわけだ、く

れぐれも球を前にだけは飛ばさないでくれよな」

「そいつは無理な相談だな……何だつて、俺も罰ゲームが怖いしよ。得体の知れない物

ほど、人間ってのは恐怖を感じちまうものだしな」

互いにそんな会話をかわした後に……恭介は第一球を投げた。

球はベースより少しずれて、記録はボール。

「……」

続く二球目。

今度は……低めストライク。

「何をやっているのだ！ 早く打って次へ続けろ!!」

「うるせえな！ 少し黙っててくれよ!!」

野次を飛ばしてくる野田を口で制圧して、音無はもう一度集中する。

……恭介は、慎重に球を選ぶ。

そして……第三球。

「……そこだ!」

キーン!

鋭い打球が、恭介の頭上を越えて行く。

……まさかとは考えていたが、それはセンターの頭すらも越えて行く。

「……これは、まさかな……」

「……ホームラン!!」

恭介の呟きをかき消すように、審判からそんな言葉が告げられる。

……球はスタンドインして、それがまさしく音無がホームランを打ったことを象徴していたのだった。

「マジで?」

これで点差は3点。

少し9回裏で逆転しにくい展開となっていた。

「とうか……そろそろマジで『天使』が来ちまうぜ。ここで一気に点差広げといて、さっさと試合を終わらせないと……」

そう。

日向チーム、リトルバスターズチーム共にゲリラ参戦なのだ。

参加登録していないことで、生徒会にとやかく言われる前に、何とかして試合を終わらせる必要があったのだ。

「つと、そんなこと言ってる場合じゃねえな。次のバッターは俺だな……」

日向はメットを被りバットを握り、バッターボックスの中に入る。

「俺も、音無に続かなきゃな」

「恭介！ 何でもいい、思い切り投げてこい!!」

キヤッチャーである真人が、恭介に向かってそう告げる。

ならばと思つて恭介が投げたその球は……。

「俺に出来るか？ ……鈴がかつてあの時に投げていた、あの球を……」

「鈴が投げていたつて、まさか……恭介……!!」

謙吾が驚いたような表情を見せる。

それは他のメンバーも同様のことだった。

ただ、事情をよくわかっていない岩沢・沙耶の二人は、ポカンとした表情を浮かべていた。

「必殺……ライジングニャットボール!!」

「それ本当に鈴の特権だろ!! っていうか、この局面で出すかよ普通!」
ものすごい剛速球が、恭介の手より放たれる。

ズバァン!!

「す、ストライク……」

記録、なんと139km。

「あ、ありえねえ……」

思わずキャッチャーのグラブを見てしまった日向が、一言そう呟いていた。

いくらなんでもこんなにも剛速球を投げれるなんて……チート以外の何物でもないのではないか?

日向はそんなことを考えていた。

「さあ、お前達にこれが打てるかな？」

「……凄いですね、棗先輩って」

「あ、ああ……そうだな」

ベンチでは、ユイが恭介の剛速球を見て、そんなことを言っていた。

隣に座っている音無も、唾然とした表情で見つめている。

「先輩！ そんな球バシンと打ち返しちゃってくださいよ!!」

「無茶言うな！ あんな球俺が野球やった時だってそんなに見たことねえよ!!」

続く第二球。

球はまたしても……ライジングニャットボールだ。

ただし……頭文字に『真』という文字がついたりつかなかったり。

「す、す、ストライク……」

今回の記録、何と152 km。

「ひゃ……152 kmだと!? もはやプロじゃね!? 速度だけで言えばプロじゃねえの

!?!」

もう日向は完全にパニックになっている。

だが、さすがは元野球部。

その球に、少し遅れながらも反応することが出来ていた。

バットに球は当たっていないが、それでも反応出来ているだけでも奇跡に近いその球

に、もう少しで当たるといふ所まで来たのだ。

「よし、行けるぞ日向!!」

音無の声を聞いて、日向はさらに手に力を込める。

次こそ絶対に打つ……そんな意思が感じられた。

そして、運命の第三球。

「セイツー！」

ポス。

「「……」」

記録、87km。

「ストライク！ バッターアウト!!」

「はあ!? 最後の最後でチェンジアップ!? 何だそれ!! あの剛速球の後でこれを打てだなんて無理な話だろ!!」

もう完全にパニックッてる様子の日向。

しかしそんな日向に対して、恭介が悪びれた様子もなく、一言。

「悪い、もう力が抜けちまってよ……」

「つまり……ガス欠ってことね」

恭介の言葉に、沙耶がさらに言葉を付け足す。

日向は……バッターボックスの中で、ポカンとした表情を浮かべたまま、その場に立ち尽くしていた。

※

『……日向チーム、8対7で勝ちです』

あの後日向チームは、どうにかリトルバスターズチームを抑えることが出来た。

一点差まで詰め寄られていたが、その後は何とか音無の頑張りによつて三振に打ち取ることが出来、試合はそこで終了。

結果、8対7で日向チームの勝利となつたのだつた。

「危なかつたわね……さすがに棗君のチームは簡単には勝たせてくれなかつたつてわけね。けど、順当に戦線メンバーが勝ちあがつてきているわねみんな死よりも恐ろしいバツゲームとやらを恐れて必死ね……滑稽だわ」

望遠鏡を使つて試合の様子を眺めていたゆりの無線に、遊佐からの報告が入る。

口元は笑つていて、どうやらこの展開を面白がつているようだ。

『戦線ではユリツペさんのバツゲームを受けた人は発狂し人格が変わると有名ですから』

「そうね……つてどんなバツゲームよ!？」

遊佐からの言葉に、ゆりは激しくツツコミを入れる。

しかし遊佐はその先の言葉を何も言わなかつた。

「……つと、炙り出しに成功ね」

望遠鏡を覗いていたゆりが、そう呟く。

そこには、生徒会のメンバー……とりわけ、『天使』と生徒会副会長、そしてユニフォームを着ている少年達が何人かいた。

「こっちは武器もなし、あるのはバットとグローブのみ。はたしてどんな平和的解決を求めるのかしら？ 見物だわ」

そう呟くゆり。

……しかし、野田のハルバードは、はたして武器の部類に入らないのだろうか？

*

「貴方達のチームは参加登録していない」

試合終了直後の日向チームに、指を差しながらそう言ってきたのは、奏だった。

日向はそんな奏に何かを言おうとしたが、

「参加することに意義がある……こういうイベントってのは、楽しくやればそれでいいだろ？」

試合を終えて、とりあえず観戦に向かおうとしていた恭介が、一人奏の近くまで寄つてくる。

「けど、ルールはルールだから」

「そんなルール、あつてないようなものだろ？ それに、ゲリラ参戦の方が面白いじゃないか！」

「……本当に楽しければそれでいいって考え持つてるよな、棗って」

さすがに音無ですら呆れるほどの言い分だったが、何故かそれを恭介が言うのと、説得力があるように聞こえるのだから、その部分だけを評価すれば、棗恭介という人物がどれほどの存在なのかを理解することが出来た。

そんな時に、一般男子生徒の制服を着て、何故か頭に帽子を被る少年が、一步前に出て、

「生徒会副会長の直井です」

と、自分の名前を告げてきた。

その名前を聞いた時、恭介は頭の中でふっと思いつく。

「(コイツがあの時沙耶の存在を見かけた奴か……何だ、一般生徒だったのか?)」

そんな心の眩きを無視して、直井はさらに続ける。

「我々は生徒会チームを結成しました。貴方たちが関わるチームは我々が正当な手段で排除します」

そう言ってから、直井は自分達の背後にいる選手達を、日向チーム・恭介の前に見せてきた。

……どう考えても野球経験者ばかりのそのチームは、まさしく野球部のレギュラーそ

の物だった。

「おいおい……コイツら野球部のレギュラー連中だろ?」

「はは……いくらなんでも勝てねえよな」

呆然とそのメンバーを眺める恭介に、少し戦意喪失している様子の日向。

その横では、ユイが野球部のレギュラー達を指さしながら、

「はっ! 頭洗って待っておけよな!!」

と、挑発をしていた。

「威勢の良さだけは認めるが……お前、相手を挑発してどうすんだよ」

そのままの調子のまま、恭介はボソツとそう呟いていた。

「ところでよ棗……内のチーム一人足りないんだ。そっちのチームから誰か一人派遣してくれないかな?」

恭介の隣にいた日向が、そう頼んでいた。

しばらく考えるような素振りを見せていた恭介が、途端に笑顔になって。

「よし……そういうことなら、俺がチームの中に入ってやろう。ただし、ポジションはピッチャー以外の場所を担当するが、構わないか?」

「おお、助かるぜ!!」

こうして、日向チームの中に、恭介が加わることとなったのだった。

*

その後、生徒会チームが投入された球技大会で……戦線メンバーが次々と敗退していった。

相手は野球部のレギュラーばかりで、どの試合もワンサイドゲーム。

力だけはある戦線メンバーだが、奈何せん野球経験が足りておらず、歯が立たないも
いい所だった。

『竹山チームに続き、高松チームもコールド負けです』

「かあああああああああ！ あんなの反則じゃない!! 『天使』をぎやふんと言わせるつもりだったのに……!!」

『反対に、こちらが言わされていますね』

「うるさい!!」

遊佐の言葉に反応したゆりは、その後で残りチームを尋ねる。

すると遊佐は、

『後は日向チームだけです』

「くうううううううううう!! 頼むわよ日向君達……もう貴方達だけしか残っていないんだから……」

顔をしかめた後に、ゆりは懇願するような表情を作り、望遠鏡で日向チームのことを

覗いていた。

*

「ついに来てやったぜ」

「……」

ホームベース前に集まるのは、生徒会チームと日向チーム＋恭介。

日向は挑発するように奏に言ってみたが、奏はその言葉を完璧に無視していた。

そのまま審判が『礼』という言葉を告げると、結局最後まで日向に対して何も告げることなく、そのまま自分のベンチまで歩いて戻って行ってしまった。

「ちっ。可愛くねえな……挑発の一つでもしてみろってんだ」

去り際に、日向がボソツとそう呟いていた。

こうして始まった生徒会チームvs日向チーム＋恭介の試合だったが。

まずは一回表。

「いつけえ音無！」

「まずは塁に出ることを優先にな!!」

恭介と日向からの言葉が聞こえてくる。

その言葉通り……音無はまず、確実にヒットを狙いに行った。

だが、相手はさすがは野球部レギュラー。

球の速さなら一般生徒のものよりもはるかにスピードが違う。
だが……。

「一回戦目での恭介の球と同じくらいのスピードだから……まだ打てる！」
キーン！

二塁間を抜ける、シングルヒットを放って見せた。

「よしっ！」

日向は思わずガッツポーズをしてみせる。

それだけ点に繋がるだろうランナーを前に出せたことが嬉しかったのだろう。

続く二番・三番バッターである日向・椎名もそれぞれシングルヒットを放ち、ランナーは満塁。

ここで四番野田だ。

「野田！ 頼むからホームランかましてくれよ!!」

「貴様に言われなくとも分かっている!!」

恭介の言葉が耳に入ってきて、耳障りだと言いたいような目つきを

した野田だったが、第一球でバットを振り、そのままホームランへと持っていく、一気に四点の先制点を入れた。

「次は俺だな」

全員が帰ってきた後で、続くバッターは五番恭介。

バッターボックスに立つ恭介は、ピッチャーにバットを向け、そして一言。

「悪いな。俺はここで、ホームランを打ってやるよ」

高々に、そう宣言してみせたのだった。

その言葉を不快に思ったピッチャーが、思い切りど真ん中にストレートを投げ込んできた。

……ど真ん中ストレートのその球を、恭介は思い切り振り抜いて見せた。

キーン!!

「お、……………おお!!」

高く上がる、その打球は、綺麗な弧を描いて……………。

パスっ。

「アウト!!」

綺麗な弧を描いたその球は、キャッチャーの頭上で捕球される。

記録は……………キャッチャーフライ。

「な、何やってるんだよ棗……………」

バッターボックスから帰ってきた恭介に、日向が一言尋ねる。

すると恭介は、

「……いやああの球は速かった。もう少しタイミングが合つてたらよかつただけだな……」

「タイミングは合つてたぞ。けどお前がボールの下を振つてたからあんな球になつたんだらうが」

「……タイミングは合つてたんだ。けど球がな……」

これでもなお必死に言い訳をする恭介。

しかしそんな恭介に対して、ユイがズバツと一言。

「ようはアホですね……棗先輩♪」

今この場において一番言つて欲しくないような言葉を言われて、恭介はショックを受けたという。

※

1回裏。

今度は生徒会チームの攻撃。

ピッチャーはまたしても音無。

守備位置は前の試合とほとんど変更なしだが、恭介が入ったことでユイ親衛隊Aがセンターに入ることになった。

その場所に、恭介が割り込んできた。

センターには、先ほど移動したユイ親衛隊がいるのではなく、肉うどんをおいしそうに啜っている、松下の姿があった。

「ああ。食券が余ってたからな。譲ってやったんだ」

その様子を見た音無が、日向に向かってそう告げる。

すると日向は、音無の両肩に手を置いて、

「お前かよ！ よし、よくやった！ あいつは食い物の義理は忘れない、これで外野の守備はバッチシだぜ!!」

感動のあまり、思わず叫んでしまっていた。

一方で……松下の介入の他にも、日向チームには変化があった。

「……誰？」

ユイが思わずそう呟いてしまう。

その視線の先には……。

「はりやほれうまうー!!」

「「……誰？」」

日向・音無・ユイ・野田の声が重なる。

先ほどまで恭介がいたその場所には、何やら不気味な仮面を身に付けた謎の人物が立っていた。

「あれは……マスク・ザ・斉藤!？」

観客席で日向チームの応援をしていた他のリトルバスターズメンバーが、揃って日向チームのベンチまで駆け寄ってくる。

そして、そこにいる人物の顔を見て、真人がそう言っていた。

「マスク・ザ・斉藤? 誰だよ、それ」

音無がベンチに集まったリトルバスターズメンバーに向かって尋ねる。

するとその問いに答えたのは、謙吾だった。

「マスク・ザ・斉藤とは、俺達が生きていた頃にバトルランキングというのをやっていたな。その時に何度も現れた強敵だ。意味不明だが、力だけはあるはず。頼りがいは……まあまああるのではないか?」

「もつとも、中身はきよ……」

「おつと! それ以上は言うてはいけないお約束なのですヨみおちん!」

正体を告げようとしたところで、咄嗟に葉留佳に口をふさがれる。

「どうやら正体を明かしてはいけない人物のようだ。」

「と、とりあえず……恭介はどこに行ったんだ?」

ようやく発言権を与えられた岩沢が、そう尋ねていた。

しかし、他のメンバーもそれが分からない為、答えることは出来なかった。

ともかく、試合は続行する。

「セイツー！」

その後は順調だった。

音無が投げたボールはレフト方向に飛ばされて行ったが、そこは松下の実力の見せどころ。

食べていた肉うどんをその場に置いて、そのままレフトの方まで走っていく。転がりながらも、その球はうまくキャッチされる。

「アウトー！」

まずはワンアウト。

続くバッターは、ライト方向に球を飛ばしていく。

今度は肉うどんを食べながらその球が飛んでいく方向まで走っていき、捕球。

「アウトオー！」

アウトになっただけが驚きではない。

何とその肉うどんを、見事に汗一滴たりとも零していないではないか。

「……いや、凄いいけどさ。肉うどんはどうかならないのか？」

音無は思わずそう呟いていたが、セカンドを守る日向は興奮しまくっていた。

「よし、行ける……行けるぞ！ これで何とか試合になりそうだ!!」

音無はそんな興奮する日向の声を聞きつつも、次の球を投げる。

今度は、ファーストの方へと球が飛んでいく。

しかも強烈なゴロ。

おまけにベース方向に飛んで行っている上に、フェアコース。

「あ、あぶねえ!!」

「うまう!!」

しかし、マスク・ザ・斉藤はそれをわけのわからない動きをしながら捕球する。

「アウト! スリーアウトチェンジ!!」

審判が高々にそう告げる。

その、マスク・ザ・斉藤の動きがTKみたいに見えたのと、先ほどの松下の捕球ぶりを見て、音無が一言。

「野球チームというよりは、むしろ雑技団だな」

*

試合はついに終盤。

9回裏、ツーアウトランナー二・三塁。

9対8。

ここを守り抜くことが出来れば、日向チームはこの試合に勝利することとなる。

「あ……」

マスク・ザ・斉藤はすでにいなくなっており、ファーストは最初通りに恭介が守っている。

というか、彼らはすでにマスク・ザ・斉藤の正体に気付いていたのだが、敢えて口には出さなかった。

というより、出す必要はまったくないと考えていた。

「タイムー」

その時、ピッチャーマウンドに立つ音無がタイムをかける。

この状況に耐えられなくなった音無が、たまらず日向の元へ駆け寄ってきた。

「ヤベエ……抑えきれぬ自信がねえよ。なあ日向。今からでもピッチャー交代を……」

してくれないか？

そう続けようとしたところで、音無は日向の様子がどこかおかしいことに気付いていた。

目は音無のいる方向を見ておらず、何故だか空を見上げている。

その身体は……わずかながら震えていた。

「……日向？」

「え？」

もう一度声をかけられて、ようやく日向は気付いた。

そしてこう言う。

「ああ、悪い。昔、生きていた時に同じようなことがあったって思い出してな……スゲー大事な試合だった」

「お前……震えてるのか？」

未だに身体を震わせている……どころか、先ほどよりも若干強くなっているような気がしたので、音無は思わずそう尋ねていた。

そんな様子を……恭介はただ単にファーストの守備位置から見守るだけだった。

「え？ そうか？ ……悪い、はは、おかしいな。身体の震えが止まらねえや」

「……何が、あつたんだ？」

音無は、日向に尋ねる。

尋ねる内容は聞くまでもなかった。

それは……日向の生きていた頃の話なのだから。

「わかんねえ……よく、覚えてねえんだけどき……」

そう前置きを置いてから、日向は自らの生きていた頃の話、始めた。

*

日向は野球部に所属していた。

甲子園を目指す、一人の男子高校生。

日向は、セカンドとしてレギュラー入りをしていて、共に甲子園を目指すチームメイトと共に、汗水垂らして頑張ってきたのだ。

そして迎えた地区予選大会。

彼らは次々と勝利して行き……ついには決勝戦まで上り詰めた。

この試合に勝てれば……次に待っているのは甲子園。

真夏の野球場。

気温、摂氏30度以上。

猛熱の中、試合は行われた。

試合が続くごとに、彼らの体力はその熱によってどんどん奪われて行く。

口の中は、いつの間にかカラツカラで、土の味しかなかった。

適度に水分補給をしていたとはいえ、次の瞬間には身体が再び水分を欲する。

そんな中迎えた、最終回。

一点のリードを守っていた日向達のチームは、後一步という所まで来ていた。

9回裏、ツーアウトランナー二・三塁。

後一つアウトを取れば……彼らは甲子園に行ける。

ピッチャーは自分達のチームが甲子園に行けると信じて、最後の一球を投げた。

カアン！ という詰まったような音が、球場内に響く。

球が向かう先は、セカンドの真上。

定位置……簡単なセカンドフライだった。

「あ……」

これを捕れば、終わる。

ただ……日向はその球が捕れたのか捕れなかったのかを覚えていなかった。

しかし一つだけ言えることがあるとすれば……恐らくこの球、日向は捕球することが出来なかったのだろう。

何故なら、捕球出来ていたら日向自身が悔いを残して死後の世界に来ることなどなかったのだから。

試合が終わった後、彼は更衣室にてチームメイトに責められた。

「後一步で甲子園に行けるところだったのによ」

「あくあ。これで俺達の夏ももうおしまいか」

「誰かさんがハマしたおかげで、高校生活最後の夏もおじゃんだぜ」

「本当、どう責任とってくれるんだよ」

日向に浴びせられる、心もとない言葉。

それらは日向の心を抉るように突き刺す。

日向はもう心が折れそうになっていた……いや、すでに折れていた。
そんな中で思い出すのは、

「……日向。誰にだって失敗はあるさ。けど、そんな失敗は忘れるに限る。ほら、これやるからさ。嫌なこと、全部忘れられるんだぜ？」

野球部の先輩よりもらったその袋の中身は……正直言つて彼自身覚えてはいなかった。

だが、それは恐らく麻薬で、彼の身体を恐らく蝕むきつかけとなつてしまった物だろう。

そして、彼は……。

※

日向の話をすべて聞き終えた音無が、堪えきれずに日向に尋ねる。

「お前……消えるのか？」

「え？」

「この試合が終わつたら……お前、消えちまうのか？」

それは以前恭介から聞いた仮説を聞いての、不安だった。

もしこのまま日向がこの試合に勝利したら……ましてや、セカンドフライなんて打たせてしまったら、日向はほぼ間違いなく消えてしまう。

音無は、そう考えていた。

……だから音無は、このまま自分の手で試合を終わらせてしまおうと考えていた。

「……」

音無は決意する。

ピッチャーマウンドに立ち、構えをとる。

……狙うは相手の三振。

どうにかしてセカンドには飛ばさないようにする。

「……抑えろよ音無!!」

恭介が音無に向かってそう叫ぶ。

その叫び声を聞いた音無は……アンダースローからの渾身の一球を……投げた。

カキン!

「!?!」

打球は……高く上がった。

しかも……セカンドフライ。

「ハッ!」

音無はハツとする。

そして、セカンドにいる日向に向かって走り出す。

「ああ……セカンドフライ」

日向は考えた。

これは……あの日の再現なのだろうか。

これを捕ったら終われるのだろうか。

打球は、セカンドの真上。

ほぼ定位置の場所……あの日の再現。

「捕るな！　日向あああああああああああ!!」

必死に日向を球から遠ざけようと走る音無。

心の中では、日向には消えて欲しくないと思っていた。

まだ友人同士でいたい。

そんなことを考えていたのだ。

一方で、恭介は日向から一番近い距離にいるのに、何故か地面に縛りつけられたかのように動けなかった。

本来ならこのままでいいはずはないのに、何故だかその場から動けないもどかしさ。

「……」

ベンチに座る岩沢は、瞬時に今の日向が、あの時の自分と同じ状況にあることを察した。

人生に満足して、身体が軽くなっていくような、そんな感じ。

あの時自分がしていたであろう満足そうな表情を、今では頭上にグローブを構える日向がしていた。

恐らく彼は、この球を捕れたら……消える。

『恐らく』なんて仮定的な表現ではない。

『必ず』が当てはまるだろう。

「この球を捕って……俺達が勝つ……そいつは……最高に気持ちがいいや……」

呟く日向の表情は……驚く程すつきりとした笑顔だった。

もう勝利を確信していて、それでいて納得しているような、そんな……笑顔。

達成感を感じている、何か大きな偉業を果たそうとしている人物の表情。

あの時果たせなかった無念を……今ここで果たそうとしている。

「あつ……」

やがて日向のグローブの中には……白い球が一球。

ポスツという音をたてて……中に収まって……しかしゲームセットには、ならなかった。

「……え？」

声をあげたのは、果たして誰だったろうか。

はたまた、声をあげなかったのは、果たして誰だったろうか。

それは、あまりにも呆気なさ過ぎて……あまりにもアホ過ぎる試合終了の合図だった。

事の顛末を述べるとしたら、今回の中心人物は……まさしくユイだろう。

「スキアリ!! よくもあの時は卍固めしてくれたなコノオ!!」

「グハッ!」

背後よりユイによる……渾身のタックル攻撃。

その衝撃によって、日向のグローブの中に収まっていた球が、コロコロと地面に落ちた。

その時に、ちょうど三塁にいたランナーが、ホームインして、同点に。

「「「……………」」」

ベンチ内にいる人達・実際に試合をしている人達は、NPC含めてみな一様に、呆然と眺めていた。

そんな中で、タックルされた日向は、反撃と言わんばかりにユイの身体を卍固めにし、

「お前はこんな時に……何キレてんだよ!」

「ご、ごめんなさい! 次からは頃合いを見計らいますからあ!! イタタタタタタ!!」

「「「ら! ユイ君を苛めてるんじゃない!!」

ユイのことを巩固めに行っている日向に向かって、来ヶ谷が何時もよりも明らかに数倍は速いだろう速度で日向の元へと近付いていき、

そして……ズバツと腰に差していた模造刀で一閃。

力強いその一撃は、別の意味で日向を昇天させていた。

「……うわあ」

その間にも、誰も球を捕りにいこうとはせず、結局ランナーは一掃し、試合はそこで終了。

「……大丈夫だったか？ ユイ君」

「は、はい。大丈夫でしたけど……えつと」

「来ヶ谷だ。君とは同学年に当たるな」

「それじゃあ……来ヶ谷さん？」

「ん、なんだ？」

ユイはおずおずと、来ヶ谷に尋ねる。

「あの……この手は一体、何なんでしょう？」

腰の辺りに当てられている手。

ユイは何となく、自分は不味い状況に立たされているのではないかという錯覚に陥った。

そしてそれが……決して錯覚なんかではないことを、後々悟ることとなる。

「何。お姉さんは先程日向氏にやられたであろう部分を癒してあげようとしているだけだよ……」

「その割には手付きが妙にイヤらしいのですが……」

「気のせいだ……ああ、なんで日向氏はこんなにも可愛い子に暴力を奮うことが出来るんだ？ 私だったらこうして愛でるといふのに」

「おい、今明らかに『愛でる』って単語が聞こえたぞ。明らかに危険だろそれ!!」

気絶している日向の安否を気にしつつ、尚且つ日向が消えずに済んで良かったと安堵しつつ、今日の前で起こっている謎の行動に、思わず音無はツツコミを入れていた。

そして来ヶ谷が、何喰わぬ顔で言う。

「これは一種の愛情表現だ。他意はない……ハアハア」

「荒い息で言っても全然説得力ねえぞ」

恭介が呆れながらに、そう呟いていた。

結局、試合はグダグダのまま終了し、日向チームも、ここで敗北となったのだった。

そんな事態を校長室から眺めていたゆりが、一言。

「二人共……消えてくれ」

episode 10 Favorite Flavor

「ついにこの時が来たわ」

窓から外を眺めながら、ゆりが小さくボソツと呟いた。

「何だ？ 何か始まるのか？」

ソファに座る音無が、ゆりに向かって一言そう尋ねる。

すると、緊張の面持ちで、ゆりはこう告げた。

「『天使』の猛攻が始まる」

「『天使』の、猛攻……!!」

その言葉を聞いた時の音無は、頭の中でたくさんの『天使』と自分達が戦っている構図が思い浮かばれる。

……猛攻というのだから、これくらいのことはあるのだろうと予測してのことだ。

しかし、そんな考えもやがてすぐに打ち壊されることとなる。

「猛攻って……どうしてなんだ!？」

「……テストが近いから」

「……あー、何故？」

思わず気が抜ける音無。

すると高松が、相変わらずメガネの位置を直しながら言った。

「考えてみればわかるでしょう。授業を受けさせることも大切ですが、テスト受けさせていい点を取らせること……それも大切なことです。『天使』にとつては」

「でもこのテスト期間……逆に『天使』を陥れる大きなチャンスとなるかもしれない」

高松の言葉に続くように、ゆりが言う。

「む？ それはどういうことかね？」

端っこの方で聞いていた来ヶ谷が尋ねる。

すると、ゆりが説明を始めた。

「『天使』のテストの邪魔を徹底的に行い、赤点を取らせまくる。そして、校内順位最下位に突き落とす」

「それが何になるの？」

大山の疑問の声があがる。

その言葉に答えるかのようにゆりは説明を続けた。

「名譽の失墜。生徒会長として彼女は威厳を保っていられるかしら？」

ツカツカと歩み寄り、そしてゆりはドサッと大胆に椅子に座る。

その後で野田が、

「それで弱くなるのか？」

「少なくとも教師や一般生徒達の見る目は変わるわ。その行いには、今までになかった変化が生じるはず」

まずは野田の質問に答える。

それからその説明に被さるように、松下が尋ねた。

「どんなだ？」

「さあ。そこまでは私には読めないわ」

「それでは意味がないのでは……？」

おずおずとした動作でクドが言う。

ゆりはその言葉をに対して、

「いえ、『天使』を陥れることでどのような変化があるかを知るのは重大な情報にも繋がるわ」

カーテンを閉めながら、ゆりはそう答える。

やがてカーテンを閉めきった時には、質問にも答えきることが出来た。

そして何時ものようにスクリーンが現れて、そこにはお馴染みの戦線マークが回転しているような映像が映し出された。

「さて、まずは今回の作戦の参加メンバーを発表する。『天使』と同じクラスでテストを受ける根回しは既に出てきているわ」

「じゃあメンバー全員が固まっちゃった方がいいんじゃないか？」

藤巻がそう提案してみると、ゆりの表情は不機嫌そうなものへと変わり、
「『じゃねえか？』じゃないわよ！ミスは許されないのよ。作戦がバレたら私達はすぐ
にでも『天使』とは別の教室に移されて、赤点仕事を施せなくなるのよ？」

藤巻の意見をそうアツサリと切り捨てた後に、

「そこで今回のメンバーは……高松君・竹山君・大山君・日向君・音無君」

「また俺かよ！」

ゆりからメンバーを発表されて、驚きの声をあげたのは音無だった。

「僕のことにはクライストと」

「見た目が普通そうな人を集めただけよ」

「何故だ……何故私は参加メンバーに入っていない？」

来ヶ谷が尋ねるようにそうボヤいていた。

そんな来ヶ谷にゆりが一言。

「貴女が頭がいいからよ。真面目にテストを受けたりしたら、それこそ消えるファク
チャーになりかねないし」

「ふむ……それも一理あるか。それにお姉さんが入ってしまったと、テストがテストどころでは済まなくなりそうだからな」

「その前に……貴女学年が違うでしょ」

来ヶ谷・クドの二人は高校二年生。

対するゆり達は高校三年生なのだ。

もちろん授業を受ける教室だって違う筈だし、テストを受ける教室だって違う筈だ。

「……あ、来ヶ谷さん、能美さん。今回の作戦に参加してくれるかどうか棗君にも聞いてくれないかしら？ 楽しいことが起きると言えばきっと参加してくれると思うから」

「恭介氏をか？ 了解した」

「……わ、わふ。分かりましたです」

ゆりにそう頼まれた来ヶ谷とクドの二人は、OKの言葉を述べた。

「それじゃあ……オペレーション、スタート！」

そしてゆりは、高々とそう宣言したのだった。

*

「テストだと？」

空き教室に、恭介は来ヶ谷とクドの二人に呼び出された。

そして来ヶ谷よりそう話を切り出された。

来ヶ谷の説明が終わった後で、

「それで、恭介さんにはその教室と一緒にテストを受けて欲しいのですが……」

「うげえ……テストは受けたくねえな」

あまり勉強というものが好きではない恭介にとつて、テストを受けるといふ行為がどれほどまでに辛いことだろうか。

だが、来ヶ谷はそう返ってくるのは既にお見通しだという表情を作り、

「どうやら今回のテスト期間中、彼らは中々に面白そうなことをしでかすみたいだが？」

「ほほう……面白そうなことだと？」

少し話に乗ってきた恭介。

来ヶ谷は更に言葉を繋げた。

「そもそも今回の作戦の内容は『天使』がテストを受けるのを邪魔することだ。彼らがどのようにして邪魔をするのか興味はないか？」

そう言った後で、来ヶ谷は笑顔を消して、先程とは打って変わって反対の、あまり乗り気でないような表情になり、

「……ただ、今回の作戦で彼らのやろうとしていることはあまりいいこととは言えない。いくらなんでもテストの為に努力をしてきた人間の邪魔をするなど、あまり褒められたことではないことは恭介氏も知つての通りだろ？」

「……ああ、まったくもってその通りだな。つまり、俺は観察も含めて立華と同じ教室でテストを受ければいいんだな？」

「ああ」

来ヶ谷がそう答えると、恭介は、

「……分かった。それじゃあ俺もその教室でテストを受けよう」

「助かる、恭介氏」

こうして、恭介もまた奏やゆり達と同じ教室でテストを受けることとなったのだ。た。

※

そして、テスト当日。

「席はくじ引きでその場で決められるわ。いい、『天使』の前の席を狙いなさい」

ゆりは一同に向かってそう告げると、とりあえず後ろの方に並ぶ。

その前に、音無達がバラバラに並ぶという仕組みだ。

「まずは俺だな……16。全然駄目だな」

日向はどうやら奏とは見当違いな場所を引いてしまったらしい。

場所と言えば窓側から三列目の前から四番目。

続く大山は廊下側から二列目の前から四番目。

奏の斜め後ろという位置だが、工作するには無理がある場所だ。

高松は窓際後方二番目という中々のベストポジション。

とは言っても別に居眠りするわけでもないのどほぼ無意味に近かった。

音無は廊下側から三列目の前から三番目。

近いとも言えず、遠いとも言えない。

続くゆりは……。

「やったー！ 一番よ!! ……つてアホか!!」

引いたくじの数が一番だったことに素直に喜んだが、場所ではえば窓際の先頭。

一番奏より遠い位置にいた。

「もう……誰か近い席を取った奴はいないの!?!」

痺れを切らしたゆりが思わずそう叫んだその時だった。

「僕、『天使』の一つ前の席ですが」

竹山がくじの番号を見せつつ、ゆり達に向かってそう告げる。

そのくじに書かれている番号を見て、ゆりはガッツポーズを見せて喜んでいた。

そんな中現れて来たのは……恭介だ。

「お、棗もこの恭介でテストを受けに来たのか。ゆりに呼ばれてか?」

音無がそう尋ねると、恭介はこう答えた。

「まあな。面白そうなおこちが起きるって言われたからこつちに来た」

それはある意味では本心でもあるが……あくまでも本当の目的はそれではなかった。『天使』のテストを妨害する……すなわち赤点を取らせまくる方法として彼らがどのようなことをするのか。

実は恭介自身彼ら戦線メンバーが何をするのか知っていたわけではないので、そう答える他なかった。

音無はそんな恭介の返答に満足すると、

「それじゃあお前も今回の作戦に参加しているのか？」

と尋ねる。

しかし恭介は、首を横に振り、

「いや、参加するつもりはない。今回は傍観させてもらう。面白いことがどんなことか、この目で拝見させてもらうことにするよ」

「……そっか。それじゃあ早くくじを引きにいけよ。ゆりには俺から伝えておくからさ」

「分かった」

音無はそう告げると、戦線メンバー達が集まっているところに向かう。

それを確認すると、恭介はまず奏の方をチラツと見てから、くじを引きに行く。

「……!!」

一度目を瞑ってから、カッと目を見開いて、そのくじに書かれている番号を見た。そして黒板に書かれた場所に座る。

「……よつ、立華」

「……棗君」

その席は、奏のちょうど真後ろだった。

奏は恭介が自分の席に座ったことに少し驚きを見せるが、その後で表情を元に戻した。

……とは言っても外見上でそれを判断するのはかなり難しいのだが。

「気をつけろよな。アイツらは今回のこのテストで何かを企んでやがるからな。くれぐれも、用心するように」

「……うん」

まず恭介は奏に注意するように伝えておいた。

それから、

「後、トイレに行ってくる」

「……それは私に確認をとることではないわ」

「だよな。まっ、とにかく行ってくるから」

そう伝えると、恭介は席を立ち、教室から出て行った。

ちようどその時、ゆりを中心に集まっていたメンバー達が、話をしている最中だった。「それで、具体的にはどのようなようにすればよろしいのでしょうか?」

高松がゆりに尋ねる。

するとゆりが、一度辺りを見回した後に、説明を始めた。

「いい? まずテストを受けて貰うわ。その後でみんなの気を引くアクションを起こして、視線がそつちに向いている時に、竹山君が解答をすり替えて欲しいの」

「解答を……ですか? でも解答用紙は……」

「その時に二枚とっておけば問題ないわ。そしてその紙には何かアホ解答を書いておいて欲しいの。で、その時にアクションを起こすのは……日向君、お願いね」

「うえ!! 俺かよ!!」

心底予想外という表情を浮かべて、日向は思わずそんな反応をとる。

そんな日向にゆりは、笑顔で告げた。

「何のために貴方をメンバーに入れたと思ってるのよ」

「……まさか、そんな道化師役を演じさせる為に俺を……!!」

日向が絶望にうちひしがれている時に、竹山がとあることを尋ねてきた。

「ところで……すり替える方の解答用紙に、名前をどう書けばいいんですか?」

瞬間、彼らは固まった。

いつも『天使』としか呼んでいない彼らにとっては、その質問は答えることが不可能な問題だった。

そこからは、アホな会話が続いた。

「……『天使』？」

「アホか。生徒会長……とか」

「まあそれでもいいよね。どうせテストの答案だつてまともに解けてないわけだし……」

「いやいや、自分の名前すら書けないなんてどんだけアホなんだよ！ ていうか、今まで名前を知らずにいたお前達の方が驚きだよ!!」

アホなことしか言わない高松・日向・大山の三人に加え、今まで『天使』の名前を調べようともしなかったゆりに、耐えきれなくなった音無がとうとうツツコミを入れた。

「知るタイミングがなかったのよ……それじゃあ音無君、『天使』の名前を調べてきてよ」「はあ!? ……つたくしやうがねえな」

音無はゆりに命令されて、即座に行動開始をする。

目指すは生徒名簿があるだろうと思われる職員室。

だが、教室を出る前に、音無は何者かに裾を引っ張られた。

誰なのかを確認する為に音無がその方向を振り向くと、

「どうしたの？ テスト始まるわよ？」

そこにいたのは『天使』だった。

まったくもって予想外の来訪。

思わず音無は声を張り上げそうになり、それを抑えると、

「あーその……ちよつと緊張してきちゃって」

とりあえずそう理由を告げるが、しかし『天使』は音無の裾を離さない。

……このままでは職員室には行けないが、音無の頭の中では、別のことが思い浮かんでいた。

「（いくらなんでも名前位書いてやらないと可哀想だよな……というか、『20Vの電流を流した時の電圧は何A?』『電車の車掌さんA』なんて答えがあああああ!!）」

頭を両手で抱えて、音無は動揺を見せる。

それを見た『天使』が何を勘違いしたのか。

「そんなに緊張しているの？」

「へ？」

そう言うってから、『天使』は更に励ましの言葉を繋げた。

「大丈夫よ、落ち着いて……えっと」

名前を呼ぼうとして、『天使』はどうやら音無の名前を知らないらしい。
なので音無は、

「ああ、音無」

「音無君……」

そして、これはチャンスだと思い至った音無は、『天使』の名前も聞いてしまおうということにした。

「俺もアンタの名前……知らない」

「私？ 立華」

「下の名前は？」

「下？ ……奏」

若干身を乗り出して、奏は音無に名前を告げる。

この時音無は……美しい名前だと素直に考えていた。

文字通り、音を奏でるような、綺麗な名前。

「ありがとう、おかげで少し落ち着いたよ」

「そう……それじゃあ、テスト頑張つてね。貴方なら、出来ると思うから」

「え？ あ、ああ……」

若干奏の言葉に疑問を感じた音無だったが、ともかくこれで職員室に行かずにミツシヨンを達成することが出来た。

とりあえずゆり達の所に戻り、奏の名前を告げると、

「……ああ、そういえばそんな名前だったわね」

「なんだよ、知ってたのかよ」

「別に」

「……？」

何故かゆりの表情は、音無の目には不機嫌そうに見えたのだという。

※

テストはこうして幕を開けた。

それぞれが必死に問題を解く中で、音無は何故かスラスラと問題を解くことが出来ていた。

それこそ、自分でも疑問に思ってしまうくらいに。

「あれ……俺、記憶もないのにどうしてこんなにもスラスラと問題が解けるんだ？」

だが、同時にゆりに言われたことも思い出し、慌てて音無は、今まで解いていた解答を消し、

「(真面目に解いてたら消えちまうんだったな……)」

心の中で、そう呟いていた。

同じ頃、恭介は別の意味で悩んでいた。

「あくどう書こうかなあゝ少しは真面目に回答しないと呼び出しくらうかもしれないし、だが最後まで真面目に解くのも面倒だしな。よし」

科目が数学であるのにも関わらず、恭介は最後の方の問題になっていくにつれて段々と文章が多くなり、数字が皆無となっていく。

計算問題だけはとりあえずまともに解いておき、最後の方の途中式を書くようなところには、適当に文字を埋めるようなことだけはしておいた。

「これでよし、と……」

キーンコーンカーンコーン。

そしてチャイムが鳴り、テスト終了の合図が響く。

「はい、じゃあ解答用紙を集めて」

教師からその声が聞こえると共に、生徒達は溜め息混じりに解答用紙を後ろから前へと流していく。

日向はそんな中で身体を震わしていた。

「くっ……くっくそっ!!」

そして次の瞬間。

勢いよく自分の席から立ち上がり、窓の方を指さしながら、叫んだ。

「な、なんじやありゃああああああああああ!! グラウンドから、超巨大なタケノコがニヨキニヨキとおおおおおおおおおお!!」

「「……………」」

一般生徒は、当然のごとく日向の言葉を無視した。

その言葉を聞いていた戦線メンバー＋恭介は、思わず固まってしまった。恭介と音無は、心の中でこう呟いたという。

「(アホ日向)」

「ふぐう……!!」

恥ずかしさのあまり、日向は勢いよく自分の席に座った。

「つたく、仕方ないわね……」

ボソツと呟いたゆりが、机の下で何かを操作する。

それは……ボタンみたいなものだった。

ゆりは片手でそのボタンをぼちつと押すと、

「うわあっ!」

ボゴツ!!

日向の椅子が何かの力により浮上し……そのまま天井に激突した。

「ぐはああああああああああああああああああああ!!」

「……………うわあ」

これには恭介ですら日向の方を振り向いた。

何が起こってるんだというような表情を浮かべた後、

「……………立華、あれは何だ?」

「……………さあ」

前の席にいた奏にそう尋ねていたという。

*

「おいゆりっぺ! 何なんだよあれ!!」

休み時間。

思わぬ襲撃を受けた日向がそう言いながらゆりの方まで近付いていくのを、恭介は目撃した。

自分の前の席では、次の科目に向けて勉強をしている奏がいる。

しかし恭介は特にすることがなかった。

最初からテストを真面目に受けにきたわけではないので、別に勉強する必要性は考えていなかったからだ。

かといって、目の前で勉強している奏の邪魔をするのも何だか気がひける。

そんなことを考えていた、その時だった。

「ゴリアー！ 喧嘩するなあああああああ!!」

ゆりが一番端の席から、大きな声で叫ぶのが聞こえてきた。

理由はともかく、どうやら喧嘩していたのは日向と竹山の二人のようだった。

「……」

カタツ。

奏は軽く立ち上がり、ゆり達の方へ歩こうとする。

しかし、そんな奏のところに、

「スマン！」

という断り文句と共に、慌てた様子で音無が近寄ってきた。

そして、意味不明なジェスチャーを混ぜながら、必死に言った。

「答え合わせに揉めていた！ 日向が0点だったことが分かった！ 万事OKだ！ 心配かけて悪かった！ もう大丈夫だ！」

「……そう」

「……そう」

領きながら、奏はゆっくりと自分の席に座る。

その様子を眺めていた戦線メンバーは、小さく安堵の溜め息をついたという。

*

二時間目、世界史。

竹山がゆりの指示の元で、『宇宙人に侵略されたことにして』解答している中、恭介はいつしかやった一問一答形式のような形で答えを埋めていく。

例えるなら、『太陽王と呼ばれたのは誰でしょう？』という問題に対して、『俺』と答えてみたり、『カノツサの屈辱について説明しなさい』という問題に対して、『あの時は本当に屈辱的だった。就活で東京に行く途中で迷いこんだ森の中で、たくさんの野うさぎを見つけたんだ。俺がその野うさぎに近付くと、そいつらは俺に「変態」と告げた……あれほどまでにカノツサ（野うさぎの名前）からの屈辱を受けたのは初めてだったな』などと、もはやただの笑点をやってみせたりとやりたい放題。

そんな風に解答していたのだが、いつの間にか終了を示すチャイムが鳴り響き、「はい、後ろから前へ流して」

スーツを着た女性教師が、生徒達に向かってそう言う。
そんな中で、高松は、

「……やるしかありませんね」

と決意を見せ、ゆっくりと椅子から立ち上がった。

「ど……どうしたの？ その君」

女性教師が高松に向かってそう尋ねると、

「先生、実は私……」

するとバツと上半身を覆っている服を脱ぎ出して、一言。

「着痩せするタイプなんです!!」

「……」

教師は何も答えない。

もちろん、一般生徒は振り向かなかつた。

ただ、恭介のみは『真人並に筋肉あるな』と頭の中で考えていたのだが。

「……どうですか?」

「分かったから座りなさい」

「………はい」

そのまま黙って、高松は椅子に座る。

そしてその瞬間。

高松の座っていた椅子が、先程の日向同様に浮上。

ただし、今回ののは回転が加わったバージョンで、やはりそのまま、高松は天井に激突した。

「……ああ、なるほどな。身体を張ったギャグをやろうとしているわけか」

恭介は、ボソツとそう呟いていた。

※

「……つたく、よくもまああんな浅はかな案を遂行出来たものね」

とうとう飽きた恭介は、ゆり達の近くに寄ってきて、その話を聞いていた。

しかし、未だに彼らが何をしているのかは掴めていない。ただ、天井に吹き飛ばされ場面を見ているのは……何となく楽しかったのだが。

「今回も首尾は大丈夫ね」

「抜かりはありません。そろそろクラ」

「じゃ、次は大山君ね」

「やっぱり来たかあああああ！ 僕持ちネタなんてないよー！」

竹山の言葉は無視して、次にゆりが指名したのは、大山だった。

大山はかなりオーバーに混乱していたが、そんな大山に、ゆりが救いの手を……。

「大山君の席は『天使』の斜め後ろだったわよね？」

「な、ならネタをやらなくてもいいの？」

「ええ。『天使』に告白してくれたら」

「うん！ ……え、何だつて？」

余計に大山の立場が悪くなっていた。

そんな大山を、ゆりは更に地獄へと突き落とそうとするように、ニヤニヤ顔でこう

言った。

「だから『天使』に告白するのよ。『こんな時に場所も選ばずごめんなさい。貴女の事がずっと好きでした！ 付き合ってください！』って」

「ええええええええ!!」

「うわあ……それはキツいな」

先程までは肉体的ダメージのみで済んだのだが、今度は精神的ダメージの面もかなり大きい。

そう言う意味でも、今回は大山が可哀想だなと恭介は考えていた。

……もちろん、だからと言って代わる気はないし、見て笑わせてもらう気満々だが。

「なんだよ……告白するだけでいいのかよ……なんかズルいなあ」

「そんなあ！ 日向君達は肉体的ダメージだけで済んだかもしれないけど、僕のは精神的ダメージの方も受けるんだよ！ それに僕にとっては初めての告白なんだよ！ しかもフラれるって分かってるんだよ……」

「いいじゃねえかよ。ちようどいい練習になつて」

最後の方は、もはや涙声になっていた。

そして大山は、更に抗議の言葉を述べる。

「僕は日向君とは違って本気の恋しかしらないんだ！」

「なんだと!? それじゃあまるで俺が遊んでばかりみたいじゃねえか!」

またしても口論が始まり、痺れを切らしたゆりが、

「ゴラア! テメエら喧嘩するなああああああ!!」

またしても、叫んでいた。

その声に反応するように奏が立ち上がり、そんな奏の所に、またしても音無が慌ててフオローを入れに行った。

「スマン! ゆりが情緒不安定だ! 理由は昨日夢の中に日向が出て来て、『今日の俺と昨日の俺が同じだと思ふなよ。気を付けな☆』と忠告したことによる。そして今、それが証明されちゃったところなんだ」

「……日向君は二人いるの?」

奏の天然スキル、発動。

「え? あ、まあ……」

「三人以上いるかもしれない?」

「へ? あ、あり得る……」

「お気の毒に……」

心底心配するような表情を浮かべて、奏がペコリと頭を下げる。

何となく話が変わる方向に向かっていることを自覚しながらも、音無は更に言葉を繋げ

た。

「心配かけて悪かった。けど、もう大丈夫だ」

そう伝えると、奏は椅子に座った。

一連の流れを見ていた恭介が一言。

「……これで、いいのか？」

※

次のテストの時間。

「はいそこまで」

教壇にいる教師により、そんな言葉が告げられる。

大山は、自分が動かなければならないこの状況に対して、恐怖からか、身体が勝手に震えてしまう。

そして大山は、タイミングを見計らって、

「立華さん！」

ガタツ！ と勢いよく立ち上がり、立華の名前を呼ぶ。

そして、そのままの勢いに任せて、顔を赤くして、言った。

「こんな時に場所も選ばずごめんなさい！ 貴女のことはずっと好きでした！ 付き合ってください！」

「それじゃあ時と場所を選んで」

奏は、一発でその告白を断る。

分かっていたこととは言え、大山の心には……深いダメージが与えられたという。

「そこ、座れ」

「……はい」

大人しく大山は自分の席に座る。

その表情は、かなり寂しそうなものであり、見ている方が格別辛いものであった。

「あくあやっちゃまったなあ」

遠くの席で、日向が笑顔を見せていた。

その表情には、次はお前が吹き飛ぶ番だという気持ちが込もっていたとかいないとか。

「これでお前も……ガハアツ!!」

……しかし、予想に反して吹き飛んだのは日向の方であった。

回転付き+天井に頭からダイブ付き。

日向は、首から上を天井に突き刺すような形で、しばらくの間ぶら下がっていたという。

*

「ちよつと待てゆりっぺ!」

「何よ! 近づかないでよ!」

怒りの形相を浮かべて、日向がゆりに近付いて来る。

その表情があまりにも見ていられないものだった為か、ゆりは近付くと言う拒絶の反応を見せていた。

「……大丈夫だ。きつとこの先いいことあるから。失恋の痛みなんてすぐに忘れてしまえ」

「うう……そんなにすぐに忘れることなんて出来ないよ……」

恭介は、先程奏に大々的に告白をした大山を慰めていた。

大山は余程のショックからか、涙を見せていた。

泣き止む様子は……今のところ見られない。

「今回も首尾はバッチリよね?」

「抜かりはありません。それよりもクラ……」

「さて、次は音無君、頼んだわよ?」

「どうどう俺かよ……けど、俺も大山と同じで持ちネタなんてないぜ?」

どうやら次は音無の番となるらしい。

音無も、大山と同じような理由を述べたが、

「他の人達はもう既にやってるのよ？　なら貴方だってやらなくちゃ平等にはならないわ。何なら、大山君みたいに『天使』に告白してもいいけど？」

「……いや、同じネタを二度もやったって意味ないだろうから、やめとくよ」

本当のことを述べてしまえば、心に深い傷がついてしまうのが堪らなく辛いからというのが一番大きかったのだが、もはや言うまでもあるまい。

「それじゃあ音無君、何か考えておいてね」

「あ、ああ……」

何をしてても、恐らく自分は天井に吹き飛ばされる。

音無は頭の中でそう考えていた。

すると、いつの間にか隣に来ていた日向が、音無の肩を叩いて、一言。

「ドンマイ親友……諦めて飛べ、そして天井に激突しろ」

「くっ……やっぱりそういう結論に達するか……」

どうにかしてでも、音無は自分だけは吹き飛ばされたくないと考えていたのだった。

*

そして、テスト終了後。

「それじゃあ集めて下さい」

「(どうする……結局何も考えてなかったけれど、こんな時は一体どうしたらいい……そ

うか！ アレを使えば……」

そう思い付いた音無は、球技大会の時に拾った例の仮面を取り出した。

それを自分の顔に装着して、席から立ち上がり、

「は……はりやほれうまうー！」

ほとんど棒読みながら、とりあえずそう叫んでみた。

……当然、一般生徒達は振り向くことはない。

……諦めて飛ばされる覚悟を決めた音無が、先生に言われる前に椅子に座ろうとし

た、その時だった。

「うまうー！」

「!？」

何故かもう一人、その仮面を被った謎の人物がいた。

その人物は、仮面をつけている音無の方まで歩み寄ると、

「うまうー！」

「あっ……」

仮面を取り上げて、そのまま窓の外に……投げた。

もう隠す必要もないだろうが、そこにいたのは、先の球技大会にて突然姿を現し、突

然姿を消した、あのマスク・ザ・斉藤だった。

しばらく教室内を奇妙な動きを見せながら歩いて行き、そして自分の席に座った。

「「「……………」」」

その後は、しばらく無言の時間が続いた。

誰も話さず、誰もマスク・ザ・斉藤に反応せず。

そしてしばらくした後で……マスク・ザ・斉藤も天井に吹き飛んだ。

日向と同じく天井に首から上を突き刺す形となったのだが、肝心の仮面は……下に落ちていた。

*

「…………お疲れ様です、恭介さん」

妙に疲れたような表情を浮かべている恭介を見て、美魚が思わずそう言葉を漏らしていた。

夕食時、食堂の席の一角で話しをしていたリトルバスターズメンバー達。

話の内容は、当然テストについてだった。

だがそれよりも、帰って来た時の恭介の表情が明らかに窺れていることに対して、他のメンバー達は反応を示さないわけにはいかなかった。

「いや……テストって思いの他辛いことなんだなって思ってたよ」

「何だよ恭介。お前にしては珍しく、筋肉が足りてないか？」

「そんなの今はどうだって良いわよ」

今にも自分の筋肉を自慢しようとしてきた真人に対して、沙耶が心底面倒臭そうな表情を浮かべながら、その動きを止める。

「わふ〜！ 筋肉に相談ですな？」

「おおそうだと！ 流石はクー公だぜ」

「いや、筋肉はどうでもいいだろ。今は」

呆れながら、謙吾がそう答えた。

そんな中、事情を知っている来ヶ谷が恭介に近寄って、

「……恭介氏、彼らはどのような動きを見せていた？」

小さな声で、そう尋ねた。

恭介は、

「ああ、とりあえずアイツらが吹き飛びまくってたな。後、俺も」

「……………」

遠い目をする恭介に、来ヶ谷は何も言えなかったという。

※

数日後。

恭介と音無は、珍しく話し合いながら歩いていった。

もちろん理由は、あの日のテストのこと。

「しかしお前もなかなかギャグのセンスつてものが分かってるような分かってないよ
うな……」

「しようがないだろ。あの時はあれしか思い浮かばなかったんだからよ」

『あれ』とは、以前音無が装着した仮面のことを差す。

具体的に述べるのなら、マスク・ザ・斉藤のマスクのこと。

「あの時ご本人が登場してなかったら、吹っ飛んでたのはお前だったんじゃないか？」

「ご本人って……あの中身は間違いなくおま……」

「あれ？　もしかして立華か？」

「え？」

音無の発言を遮るようなタイミングだったので多少信憑性が薄かったが。

どうやらそれは本当のようで、何故か職員室から出てくる奏の姿を、音無と恭介は見
ていたのだった。

その表情は、やはり無表情。

だが、何か普通ではない事態が起きたような、そんな表情をしていた。

「どうしたんだよ、立華。何かあったのか？」

だから音無は思わずそう尋ねていた。

……奏は、そんな音無の問いに対して首を横に振ると、そのまま立ち去ってしまった。

「……もしかしたら、お前達のせいで呼ばれたのかもな」

「え？ それって……」

やがて恭介が、とあることを音無に言った。

「間違いないな。テストで全部赤点……もしくは0点のことで、教師達に呼ばれたんだろな」

「ま、マジかよ……」

つまり、戦線メンバーがやったことを、教師達は奏一人でやったと思いこみ、教師をバカにしているのかと怒ったということになる。

教師連中から見てしまえば、奏のやったことは、単に教師に対する一人きりの反乱にしかみられていなかったということだろう。

「でも教師は、そんなの天使自身じゃなく、誰かの仕事だつてわかるだろ？」

しかし音無からそんな疑問がわき出てくる。

それは当然のことだと思ふし、恐らくそう考える方が現実としては正しい。

しかし恭介は、何故教師達が何の疑いもなく、真つ先に奏を犯人扱いしていたのか……すでに理由は分かっていた。

「教師連中がNPCだったからだろうな。つまりはそこまで思考が至らなかったという

わけだ」

「……」

「生徒会長が不真面目な解答……教師を馬鹿にしたような解答を出してきた。ならその本人を呼び出す……これがアイツらの思考だ。教師としての最低限の行動とは思う」

そこまで恭介が言い終えた後に、音無は尋ねた。

「でも、『天使』……いや、立華は何の抗議もしなかつたのだろうか？」

「さあな。けど、お前だつたらどうする？ 各教科の担当の教師全員に向かつて、無実を

証明しようとするか？」

「それは……」

一つの科目ならともかく、奏の場合は全教科だ。

自分がやったのではないと、果たして言い続ける程の精神力を持ち合わせているだろうか？

「……なあ棗。もう一つ、聞かせてもらっても構わないか？」

「ああ」

真剣な表情で、音無はそう切り出す。

恭介が肯定の意を見せたことを確認して、

「……立華は、本当に『天使』なのか？ ましてや、本当にこの世界に、『天使』は存在

するのかわ？」

その問いに対して、恭介はこう答えた。

「……いるかもしれないし、いないかもしれない。ただ、俺は少なくとも、立華は俺達と同じ、人間だと思ってる」

恭介の言葉には、妙な説得力があった。

音無は、思わず恭介の意見を受け入れそうになったが、しかしそれは自分が……自分達が勘違いしていたことを認める結果になると分かっていた為、そのことを考えるのを止める。

そう考えてみると、立ち去って行った時の奏の背中が、何だか無性に寂しく感じられた。

*

その時、偶然にも日向はユイに会った。

つい先程まで行われていた作戦会議には（ちなみにオペレーショントルネードについての）、岩沢が来ていた為、ユイはこうして一人練習していたというわけだ。

日向がその教室の前を通り過ぎたのは本当に偶然で、その中に入ろうとしたのも本当に偶然だった。

「あ、先輩じゃないですか！ こんな時にどうしたんですか？」

「いや、誰かが練習してるなあと思って来てみたら……何だよ、お前だったのかよ」
『何だ』とはなんだ！」

「ゲフツ！」

飛び蹴りを鳩尾部分に喰らった日向は、しばらくその場に蹲ると、

「テメエ何すんだよ!!」

「先輩が変なこと言うからいけないんじゃないですか!!」

「何だと……!!」

そこから更に喧嘩に発展しそうになったが、先に日向の方からそれを止めた。

「やめだ、やめ。こんなことしてたら、夜のオペレーションに支障が出てしまいそうだ」

「そうですね……」

とりあえず二人は、床に座り込んだ。

自然と、その位置は隣同士。

特に意識したわけでもないのに、位置としては何故かそんな感じになっていた。

「んで、お前はボーカルに選ばれてから必死こいて練習ってたか？」

「はい！ 早く岩沢さんに追い付きたくて、皆さんが来るまでここで練習していいようかなと思いますして」

「ふ〜ん……岩沢からお前の話が持ち出された時は本当に大丈夫か？ なんて考えてた

けど、そんなに心配する必要もなかったんだな」

「失礼ですね。最初から心配する必要なんて有りませんよ。私だつてここまで歌つてきたんですから」

「どうだかなあ〜」

ニヤけたような表情を見せて、あまり信じていないような様子を見せる日向。

それに対してムツとしたユイは、

「あ〜！ その表情は信用していませんね？ そしたら、岩沢さんに特別に歌詞をつけ

ることを許された、今日私が初めて歌う曲を、先に聞かせてあげますよ！」

「え？ 岩沢が作曲した曲に、お前が歌詞をつけたのか？」

その一点を聞いて、日向はかなり驚いたような表情を見せていた。

ユイはしてやったりと言ったような表情を見せて、

「どうですか？ 驚きました？」

と、自慢気に言った。

しかし、日向はこう言う。

「ま、どうせろくな歌詞をつけたわけじゃないんだろ？ 所詮ユイだからな」

「ムキ〜！ 文句を言うなら歌を聞いてみてからにしてください！」

多少ムキになりながらも、ユイは立ち上がり、壁に立て掛けてあつたギターを手に取

り、そして……歌い始めた。

曲名は、『Thousand Enemies』。

「……」

聞いていて、日向は少し驚いた。

目の前でギターを持って歌うその少女が、こんなにも感情を込めて……歌えることがこんなにも嬉しいんだということを身体で表現するかのような歌い方をしていた。

岩沢が作曲した曲を、歌詞が殺していることもなかった。

見事に歯車が噛み合った、一つの完全体となっていた。

時折ギターの音が少しおかしいかなと思ったが、全体的な評価をするなら……それはいい曲となっていた。

何より、歌声もすっかりしていて、リズムに遅れていない。

「……うん」

日向は、いつの間にか聞き入っていた。

ユイが歌っているんだということを把握していながらも、聞き入ってしまった。やがてその歌も終わり、ユイが日向に尋ねた。

「……ど、どうでしたか？」

真剣な表情を浮かべて、ユイは日向を見る。

日向は、素直に感想を述べた。

「ああ……何だかお前らしくて、とつてもいい曲だったと思うぜ?」

「本当ですか!」

喜んだユイは、その場でびよんぴよんと飛び跳ねて、嬉しさを表現している。

そんなユイに、日向は言った。

「歌については問題なしだな。けど、ギターの音が時々はね上がったたりしてるぜ?」

「なっ……その位目を瞑ってくれてもいいじゃないですか!!」

「そういうわけにもいかねえな。ガルデモは相当人気高いから、致命的なミスなんて出
来ないぜ?」

あまりバンドとかには詳しくない日向だったので、こんなことを言うのはあまりよく
ないのではないかと思っていたが、それでも日向は、何故か知らないが、ユイにそうア
ドバイスをしていた。

膨れっ面を浮かべるユイだったが、どうやら直そうと頑張る決意をしたようだ。

「さて、そろそろ俺は行くわ」

今まで床に座っていた日向は、立ち上がり、扉の前に立つ。

しかし、そのまま出ていくかと思いきや、扉の前で一度ユイの方を振り向き、それか
ら言った。

「じゃあな、ユイ！ 今日では遠慮はいらないぜ。ガルデモの新ボーカルの力を見せてやれ！」

そして日向は教室から出ていく。

去り行く日向の背中に向かって、ユイは言った。

「はい！ 全力で頑張ります!!」

※

「さて、いよいよ新生ガルデモのライブが始まるのか」

食堂に集まった恭介達は、ボソツとそう呟いていた。

しかしそんな呟きに確実に答えるように、

「ですね。私も少しばかり楽しみます」

「岩沢さんと例の女の子のツインボーカルって話だからね。少し期待かも」

美魚と沙耶が、食券を買いながらそんなことを言っていた。

買った食券は、飛ばされないように財布の中に投入。

そのままポケットの中に入れて、準備完了。

「ところで恭介……」

「なんだ？ 謙吾」

「……」で、謙吾が恭介に言葉をかけていた。

恭介は、その言葉に対して反応を見せる。

そして謙吾は、尋ねた。

「立華が生徒会長の座を降ろされたというのは……本当か？」

「……ああ」

短く、恭介はそう答えた。

実は、テストの一件によって怒りを見せてしまった教師達が……奏を生徒会長から辞任させたのだ。

いや、『辞任』というよりは、『解雇』と表現した方が正しいだろう。

「そうか……あの子が狙っていたのは、このことだったのか」

来ヶ谷が、短くそう呟く。

そして、止められなかったことを……少しばかり悔やんでいた。

「確かに私も、自分の死については疑問を抱いているし、神がいるなら反逆したいと思っている……しかし。今回の一件は、本当にただのいじめではないか……」

来ヶ谷は、神に反逆したいと言った少女が可哀想だと思ったのが理由の一つとなり、戦線のメンバーとなった。

しかし、今回の一件は明らかにやるべきだったのか分からないもの。

例え一度は刃を向けた少女であろうとも、来ヶ谷の中では、奏は敵として認識されて

いなかったのだ。

しかし、ゆり達が行ったテスト工作が……奏を生徒会長の座から引き摺り降ろしてしまつた。

『天使』だなんて言われている奏も……果たしてこのことを流せるのだろうか？

「……とりあえず、この話は重いから、ここでおしまいだ。来ヶ谷も、今さら悩んだつて解決することじゃないし、お前は出来る限りのことはやってくれた」

恭介は、今の話を無理やりにも終わらせる。

せつかくのライブなのに、楽しくなければ意味がないと思つたのだろうか。

ただ……そう考えている恭介こそ、一番後悔していると言えるだろう。

何せ彼は、その場にいたのだから。

「さて、そろそろ席取りにでも行くか……というわけで、真人、沙耶を引き摺つてあそびまで行き、ランキングバトルを申し込め」

「また無理難題を……まあいいだろう。その程度なら俺の筋肉にかかれば他愛のないことだからな。」

恭介に言われて、カレーの食券を購入した真人が、それを先程沙耶達がやっていたように財布の中に仕舞い、そしてポケットの中に財布を突っ込むと、問答無用で沙耶をど真ん中まで引つ張つて行つた。

「イタタタ！ 何すんのよー！」

当然の如く、沙耶は怒り心頭だ。

そして真人は、沙耶のことを指差して、宣言した。

「朱鷺戸沙耶！ お前にランキングバトルを申し込む！」

その間に恭介達は、真人達の近くにより絶好の場所を確保する。

その周りには、騒ぎを聞いて駆けつけたNPC達が数多く立っていた。

「上等じゃない……この私を引き摺ってにおいて、ただで済むと思ってるんじゃないわよ！」

その言葉を合図に、周りから様々な武器が投げ込まれていく！

「よっしゃ俺はこれだ！」

勢いよく叫んで真人が受け取ったのは……ウナギパイだった。

「ハア!? またウナギパイかよ!!」

対する沙耶の武器は……メリケンサック。

「……あれ、これって何かの再現じゃね？」

「ああ、間違いなく一番最初のランキングバトルの再現だな……ここまで綺麗に似るとはな。これで相手が鈴だったら完璧じゃないか」

真人の言葉に答えるように、恭介は言った。

何故か首を縦に頷かせているが、この際それは無視することにしよう。

「それじゃあ……バトルスタートだ!!」

何時ものように恭介が宣言し、

「……何事だこれは？」

その宣言を聞いた岩沢達ガルドメンバーが、恭介の元に近寄ってきて、そう尋ねてきた。

そんな岩沢達に、恭介が言う。

「まあ、盛り上がる為の前座みたいなものだ。お前達はスタンバイしながらでいいから、ちら見でもしていてくれ」

「ま、まあ……分かった」

若干戸惑うような形で岩沢が答えると、ガルドのメンバーはそのまま準備に取りかかった。

一方で、真人と沙耶のランキングバトルも、始まりを告げていた。

*

筋肉とプロテインだけが友達さ

井ノ原真人

V S

自虐クイーン

朱鷺戸沙耶

「失礼ね！ 自虐クイーンって何よ！」

「筋肉とプロテインだけが友達さ、か……いい響きだぜ」

「貴方本当にそれでいいの？」

*

「もうこうなったらヤケクソだ……うりや!!」

真人の攻撃。

真人はウナギパイで沙耶を叩いた。

「そんな攻撃喰らうわけないじゃない！」

ミス！

沙耶は身体を捻ってそれを避けた。

「お返しよー！」

沙耶の反撃。

先程の真人の攻撃を避けた勢いを利用して、真人の鳩尾を思い切り殴る。

「グハッ！」

真人に300のダメージ。

「アーハッハッハッハッハッハッハッハッ!! 最高ね!!」
沙耶の攻撃。

沙耶は狂気を纏わせた表情で、真人を殴る。

「グハア!」

真人に500のダメージ。

「この野郎……よくもやりやがったなああああああああ!」

真人の攻撃。

真人はうなぎパイで沙耶を叩いた。

「ちっ! くっ!」

沙耶に3のダメージ。

沙耶に4のダメージ。

真人のうなぎパイが真つ二つに折れた!

「ああああああああ! うなぎパイがあああああああああ!!」

「さて……これでおしまいね?」

沙耶の攻撃。

沙耶は真人のありとあらゆるところを殴りまくる。

「ガバツゴボツゲベエチヨギツ!!」

クリティカルヒット!

真人に9999のダメージ。

「うぐわああああああああああ!!」

真人は倒れた。

「よっしや勝ったあああああああああ!」

沙耶、WIN!!

*

「貴方にはこれがお似合いよ」

そう言つて沙耶が真人に付けた称号は、『巨大なるアホ』だった。

「うわあああああああああ! 絶対に嫌だあああああああ!」

「あうう……耳に響くよ」

真人の叫び声を聞いて、近くにいた小毬とクドが、耳を塞いでいた。

「うるさい、少し静かにしている」

「いふっ!」

刀の鞘の部分で真人の鳩尾に喰らわせる来ヶ谷。

先程までの沙耶とのランキングバトルで疲れているだろうその身体に、更に制裁を加えるこの肝っぶり。

そしてやりきったような笑顔である。

「あ、ありがとう……ゆいちゃん……」

「ゆい、ゆいちゃんと呼ぶなど前から言ってるだろ」

小毬にそう言われて、来ヶ谷は顔を赤くして力弱く否定する。

そんな中に、

「呼びました？」

ギターを持ったユイが、小毬のところまで近寄ってきていた。

そして来ヶ谷は気付く。

「(そうか。この子の名前は『ユイ』。つまり彼女の近くにいて、なおかつ小毬君の近くにいると……)」

来ヶ谷は、そう考えた為に、

「君はもうすぐライブがあるだろう。だから早く準備しにいくとよい」

「それもそうですね。それじゃあ今日は楽しんで行ってくださいね！」

笑顔でそう告げると、ユイは岩沢達のところに戻っていった。

そんな後ろ姿を見て、小毬が一言。

「可愛いよね〜ユイちゃんは」

「……もう勘弁してくれ」

「姉御、タジタジですな」

疲れた表情を見せる来ヶ谷に、葉留佳がそう言葉をかける。

それとほぼ同時に、食堂の電気がフツと消える。

「どうやら始まるようだな」

謙吾の呟きを肯定するかのようになり、明かりがつけられ、ギターやドラムの音が聞こえ始める。

ガルデモの新ボーカルとして入ってユイの、初めてのライブが幕を開けた。

※

「……おかしいわね」

ゆりはボソツとそう呟いていた。

ライブは好調。

作戦は順調に進んでいると思われる。

しかし、肝心なことが進んでいないような予感がして、ならないのだ。

そんな中でゆりに何かを伝える、高松。

高松は手を振って、入口を見るようにゆりを誘導する。

それに合わせて入口を見たゆりは、

「なっ……?!」

本来ならあつてはならない光景を、目の当たりにしてしまった。そこには……『天使』がいたのだから。

「外は何をやつてるのよ!?!」

思わずゆりは叫んでしまう。

もちろんライブの盛り上がりによつてそれは下まで聞こえてこないが、無線越しに遊佐には声が届いていたようだ。

『どうしますか? 作戦を中止にしますか?』

という連絡が入ってきた。

しかし、ゆりは『天使』の行動が気になった為、

「ちよつと待つて」

そう言つて、一旦待つように指示を仰ぐ。

『天使』は、ふらふらと人混みの中を歩き、やがて券売機の前まで到達した。

「様子がおかしい……?」

その様子は、どこかおかしかった。

それこそ、見てわかる程の、明らかなる不調。

何かに対してショックを受けているような、そんな表情だった。

ゆりは双眼鏡を使つて、『天使』が購入した物を見る。

そして、かなり驚きを見せていた。

「あれは……全校生徒が一切手を出さない、激辛の麻婆豆腐!? どういうこと? 何であんなものを頼んだりしたの? 私達に食べさせて一矢報いようとしているの?」

『天使』の意図が分からず、ゆりは混乱を見せる。

だが、そんな中で遊佐から連絡が入る。

『ゆりっぺさん。ライブの方の盛り上がりが最高潮に達しましたが……どうしますか?』

「へ?」

遊佐に言われて、ライブの方を覗き込んでみれば、ユイと岩沢によるダブルボーカルの様子が確認できた。

新ボーカルのお披露目ということもあり、どうやらNPC達の盛り上がりもいつもよりもさらに高い段階まで来ているようだ。

……先頭の方には、見知った顔もいるような気がしたが、ゆりはそこは無視した。

「……回せ」

『了解しました』

やがてゆりは、短くそう指示を出す。

そして……巨大な扇風機によって、生徒達の食券が巻き上げられていく。

……それは、『天使』の持つ食券とて例外ではなかった。

「……どういふことなの？」

そんな様子を見て、ゆりは一言、そう呟いていた。

食券を手放す時の『天使』悲しそうな表情が、ゆりの脳裏にしつかりと焼き付いていたという。

*

「……おっ」

何時ものように食事を始めようと思った音無だったが、そこに何処から現れて来たのか、レンジを手にしていた葉留佳が、音無の背後に立っていた。

声の後ろから聞こえてきた為にそれに気付くことが出来た音無は、

「……食いたいのか？」

そう、短く尋ねてみた。

すると、

「いいんですか!?! いやー、無理矢理食べさせてもらうような形となって何だか申し訳ないような気持ちになりますなー」

そう言いながら、葉留佳はレンジで麻婆豆腐を一口分掬う。

「(まあ、毒味してもらおうのも悪くないかな)」

心の中ではそんなことを考えていたという音無。

そして、赤すぎる麻婆豆腐を食べた葉留佳の感想は……。

「か……辛いいいいいいいい!! な、ナンデスかこのカラサハ!!」

辛さのせいなのか、所々葉留佳のセリフが片言みたくなっていた。

……音無は、とんでもないものを引き当てたと思いつつも、自分のレンゲで一口分掬い、そして……口に入れた。

「か……辛っ!?!」

葉留佳によるオーバーリアクションということも多少は考えていたらしい音無は、その麻婆豆腐のあまりの辛さに、思わず気を失いかけた。

しかし、コップの中に注いでいた水を飲みきることで、どうにかその辛さを逃がすことが出来た。

……だが、その麻婆豆腐は辛いだけではなかった。

「あれ? けどこれって……」

「なかなか……」

二人は顔を見合わせて、一言。

「旨いかも?」

そんな時に、カレーをトレイに乗せた日向と……たった今音無が食べたものと同じ麻

婆豆腐をトレイに乗せた恭介が現れた。

「……棗、お前それ、自分で選んだのか？」

音無は思わずそう尋ねてしまう。

すると恭介は、なにくわぬ顔で、

「ああ、そうだけど……それがどうした？」

「……いや、何でもない」

音無は何かを言いかけたが、途中でそれを止めた。

気になりつつも、恭介はレンゲで一口分を掬って、口の中に入れようとする。

「[[……]]」

「……なんだよ」

三人分の視線を受けている恭介は、何だか食べづらくなっていた。

なので、とりあえず恭介は音無に尋ねてみる。

「お前の麻婆豆腐は、今回の作戦での戦利品か？」

「……まあそんな感じだが、今回は『天使』の様子がおかしかったから、攻撃しなかった」

「へ？」

てつきり戦線メンバーなら、むしろそれをきっかけとして神への手がかりを掴もうとしてくるのではないかと考えていた恭介だけに、音無の発言には、葉留佳でさえ驚きを

見せていた。

音無の言葉を継ぐように、日向が付け加える。

「コイツ、『天使』の細かい表情の動きまで感じ取ったんだぜ？俺達には何も分かんなかったけど、音無一人だけが、『様子がおかしい』って言ったんだ」

「へえ……」

少しばかり音無に感心する恭介。

だが、もう一つ気になることがあった。

「しかし、生徒達の間でも滅多に注文されることのない麻婆豆腐なんて、一体誰が……」
日向がその疑問について呟いた、その時だった。

「それは『天使』が買った食券よ」

「え？」

恭介達のテーブルに、ゆりが近付いて来て、一言そう言った。

そしてゆりは、更にこう言葉を付け足した。

「あの子は生徒会長を辞任させられたことに対してショックを受けて……自分を慰める為に、自身の好物である麻婆豆腐を購入したってわけよ」

「あ……」

音無と恭介は、同時に思い付く。

それは……奏が一人で、周りに誰もいないような四人テーブルで、一人ただ黙々と好物である麻婆豆腐を食べる、そんな光景を。

生徒会長を解任されたことで、生徒達からの信用だけでなく、興味すら失ってしまった彼女が、ただ自分を慰める為だけに、一人麻婆豆腐を食べる、一人の少女の細やかなる幸せ。

「(そんなささやかな幸せまで、奪っちまった……俺)」

音無は、心の中でそう呟き、そして……もう一度だけ、奏が一人きりで麻婆豆腐を食べる光景を、思い浮かべた。

そんな時だった。

コツコツと音を立てて近付いてくる、七・八人の男子生徒を率いる……生徒会副会長こと、直井が現れて、そして宣言した。

「そこまでだ。いろいろと容疑はあるが……とりあえず時間外活動の現行犯として反省室に連行する」

帽子を直し、それから更にこう言った。

「僕が生徒会長になったからには、貴様らに甘い選択はない」

そう告げると、今度はバックにいる生徒達に向けて……言った。

「……連れて行け」

episodell Family Affair

「何なんだよアイツは……」

夜が明けて。

反省室より出された音無達は、悪態をつきながら廊下を歩いていった。

戦線メンバーはもちろん、近くにいたりトルバスターズのメンバーまでもが巻き込まれたこともあって、全員のテンションは一段と下がっていた。

「生徒会副会長の直井が会長に選ばれるとはな……ゆり、これからどうするつもりなんだ？」

恭介がそう尋ねると、ゆりは神妙な面持ちをしながら、答えた。

「そうね……直井君は恐らくNPCだから、攻撃するのは駄目ね……」

「とすれば、お色気作戦いっちゃいますか♪」

真剣に考えているゆりの側で、自らの身体を擦り寄せるユイ。

だが、そんなユイを見て、日向が一言。

「そんなに小さな胸じゃお色気なんて無理だろ」

「何いい!? 見たことあんのかゴラア！」

即座に日向に近づき、抗議を始めるユイ。

だが、日向はまったく動じずに、

「見ただけで分かる」

そう、一言でぶつちぎった。

この言葉にさらに火がついたユイは、

「揉んだことあんのかゴラア!!」

と、自らの胸を揉むようなしぐさを見せて、日向に言った。

構わず、日向は無視。

「痴話喧嘩か……」

「お熱いカップルなんですナ。ね、姉御♪」

「そうだな……日向氏が少し妬ましいくらいだな……」

「……姉御、その手に握る刀をどうか鞘にしまってください。危ないデスから」

今にも日向に斬りかかりそうな程の勢いの来ヶ谷を、葉留佳は必死に止める。

そんな彼らを見無視して、ゆりが言った。

「とりあえず、まずは行動を起こしてみましょ。それで、相手がどう動いてくるのか検証

してみるのはよ」

「なるほど……具体的に何をするつもりなんだ？」

今度は恭介が尋ねる。

するとゆりは、

「まずは授業を受けているフリをしてもらうわ。真面目に授業を受けると消される可能性があるから、授業には参加しないこと。各自教室に入って自由に行動しても構わないから」

「まあ……そうして敵の動きを見て行くしかないよな」

音無が同意を見せる。

珍しく、廊下を歩くゆりの表情は……あまり晴々としていなかった。

*

次の日。

ゆりに言われた通り、音無達は授業に参加していた。

音無の制服のズボンの中には、昨日ゆりより受け取った無線機が入っていた。

理由を聞いても漠然とした答えしか返ってこなかった為に、音無はその理由についても少し頭の中で考えていた。

「……」

一方で、恭介は昨日校長室にてゆりと交わした会話を思い出していた。

その中でゆりは、『「天使」はもう動かない』と言った。

つまりは、奏と無理に戦うことはないということだ。だが、何処か納得がいかなかった。

普通に考えてみれば、もう戦いは終わったということになるが……果たして本当に終わったのだろうか？

実はまだ戦いは終わってなんかいないのではないかと、このことを考えていた。

だが、そんなことを考えている恭介は……何だかなりアホなことをしていた。

「……なあ日向、アイツは何をやってるんだ？」

遠くにいた音無が、恭介の行動を見て、日向に尋ねる。

日向は、何が何だかよく分からないと言ったような表情を浮かべて、言った。

「さあ……机の上に大量の漫画本が置いてある限りを見ると、授業中に漫画を読む生徒を演じているんだろうが……」

「……持ち込みすぎだろ、漫画本。机の上が漫画で埋め尽くされてるぞ。あんなんでどうやって言い訳するつもりなんだ？」

音無と日向は、机の上に大量の漫画本を置いている恭介を眺めて、そう話していた。他のメンバー達の様子も見てみる。

大山は満面の笑みを浮かべながら机の上に置いてあるポテトチップスを食べている。

……恐らく大山にとっては、これも一種の冒険なのだろう。

続いて椎名は、後ろで箒と定規を手の上に乗せて、バランスをとっていた。

その横では、ひさ子・TK・松下・藤巻の四人がテーブルを合わせて、麻雀をやっていた。

「ドラドラ親萬！」

「くっそ……またひさ子の一人勝ちかよ……」

「Oh no……」

「女子相手にここまで手こずるとは……無念」

じゃらじゃらと麻雀牌をかき混ぜるものだから、黒板に字を書いていた教師も、

「その一角……もう少し静かに」

と、とりあえずの忠告をしていた。

それに対して、

「ああ、スンマセン」

と藤巻が謝罪の言葉を述べるが、もちろん静かにする気など一欠片もなかった。

野田は机を二つくっ付けて、その上で優雅に居眠り。

……もはや居眠りとは言わず、単に寝ているというべきだろう。

高松と真人は、何故か上半身裸で、腕立て伏せをしていた。

「その筋肉……美しいですね」

「へっ……ありがとうございます」

その横に並ぶように、流石に服までは脱がなかったが、謙吾が笑顔で腕立て伏せをしていた。

「楽しいな、友と一緒に筋トレをするのは！」

「ええ……同じ筋肉仲間としては、光栄です。ですが、貴方も服を脱いでみたらどうでしょう？」

「そうだぜ謙吾っち。もう恥ずかしがることは何もないぜ？」

端から聞いていれば危険な会話ですら、この三人は自然とやってのけていた。

そんな三人の会話を聞いて、悶絶する人物が約一名。

「……………ご馳走様でした」

鼻血を若干足らしながら、何かの小説を読んでいたらしい美魚がそう呟く。

しかし最後の方で高松・真人・謙吾の三人の会話を脳内変換してしまい、今に至るというわけだ。

更に別の場所では、来ヶ谷と沙耶の二人が、将棋をやっているのが確認出来た。

ただ、どう考えても来ヶ谷の方が有利に見えた。

「これで終わりだな……」

「ちよつと待ちなさい。まだ他にも何か手が……なああああああいい!!」

頭を抱えて、沙耶が叫ぶ。

「どうやら勝負に負けたようだ。」

「そうよ、将棋なんてもの今までやったことがなかったから弱いに決まってるじゃない！でもそれなのに貴女に勝負を挑んだのよ！滑稽でしょ？笑えるでしょ？笑えばいいわ！アーハツハツハツハツて!!」

「アーハツハツハツ」

「本当に笑うな!!」

もうムキになっている沙耶を見て、日向が一言。

「……アイツ、かなりアホだろ」

更にアホな子が、この教室にはもう一人いた。

「先生、トイレ!!」

先頭に座る生徒——ユイが、元気よく手を上げたと思ったら、立ち上がり、教室を出ていく。

彼女曰く、『一分おきにトイレに行く生徒』らしい。

「……あ、戻って来た」

すぐに帰ってきたユイは、椅子に座ったと思ったら、

「生徒、トイレエ!!」

「I, I I be back」

と言つて脱出して行つたのは、きつと気のせいではないのだろう。

他のメンバーもいつの間にか脱出していて、ただ唯一脱出していなかったのは……
ずっと机の上で寝そべっている野田と、ポテトチップスを机の中に突っ込んだ大山、そ
してだべっていた日向と音無。

「来たぜ、直井文人様」

日向は音無に向かつてそう告げる。

そんな中、直井は寝転がっている野田の所まで近づき、

「……貴様、何のつもりだ」

「……」

野田は寝ているのか、答えるつもりはないらしい。

「……いいだろう。コイツを反省室まで連れて行け」

男子生徒達に直井がそう命令した瞬間。

勢いよく立ちあがり、生徒の内の一人を倒した後で、どこから出したのか分からない
ハルバードを向け、

「何を反省しろというのだ!?!」

そう、叫んだ。

だが、野田のハルバードを見て、近くにいた女子生徒が驚きの声を挙げる。
「…………お？」

「授業中に堂々と居眠りをしていて、その上生徒を恐喝しておいて、よくそんなことが言えますね…………ある意味滑稽です」

「何だと…………!!」

そして今にも野田は直井に飛びかかろうとしていた。

もしそうなってしまうてはまずい事態に陥ってしまうと考えた日向と音無は…………慌てて野田を取り押さえて、そのまま教室の外へと連行した。

「な、何故逃げるといふのだ!! 俺に戦わせろおおおおおお!!」
去り際に、連れてかれた野田がそんなことを言っていたらしい。

※

昼休み、屋上にて。

別に規則で屋上に来てはいけないなどのことは記載されてはいないため、神北小毬は今日も屋上に上がり、お菓子を食べていた。

今日は珍しく一人で食べているわけではなく、

「…………いいのでしょうか？ 私が同席させてもらっても」

「全然OKだよ〜むしろもつとたくさんの人にこの場所を知ってもらいたいかな。生き

ていた頃の学校だと、屋上にかかるのは校則違反だったけど、ここだとそうではないから」

「……そうですか」

相変わらずの無表情でそう答えるのは、ゆりと無線機を通じてやり取りをすることが多い少女……遊佐だった。

両脇には、小毬からもらったお菓子がドンと置いてあり、今彼女はワッフルを食べていた。

「……美味しいですね、このワッフル」

「でしよ〜？ 甘くて美味しくて、幸せな気分になるんだよ〜？」

「……幸せな気分、ですか？」

「うん〜！ 甘いものを食べるとね、不思議と笑顔がこぼれるんだ〜。遊佐ちゃんも、笑顔になつてるのに気付いた〜？」

「え……？」

言われて、遊佐は初めて気付いた。

いつの間にか……自分が笑顔になつていてということに。

「私……笑ってる」

「うん、いつもの遊佐ちゃんも可愛いけど、笑ってる遊佐ちゃんもつと可愛いと思うよ

く？」

「……神北さんだつて、可愛いじゃないですか」

顔を若干赤くした遊佐は、恥ずかしさを隠す為なのか、それでも本心からの言葉を言う。

「あううう……なんだかそう言われると、ちよつと恥ずかしいかも」

「……私も、こんな感じで恥ずかしかったんですよ。ですが、同時に嬉しかったです」

「……そっか」

二人とも顔を赤くして、互いの顔を見つめる。

……心臓が少しトクンとなった気がしたが。

バン！ と扉が開かれて、そこから誰かが入ってくるような音が聞こえてきた。

「!？」

二人がいる場所はちょうど死角。

見つかることはないだろうが……二人はこれが、あまりよろしくない事態だと考えた。

「……何が起きてるんだらう？」

「……分かりません。ですが、何かよからぬ事態が発生しているのは事実です。今は迂闊にここを動かない方がいいでしょう」

二人は身を隠して、何者かが立ち去っていくのを待つことにした。

……しばらく静かなる時間が流れる。

だが、その内信じられない声が聞こえてきた。

「ぐはっ！」

「!?!」

誰かのうめき声が、聞こえてくる。

一人だけではない……少なくとも二、三人はその場において、しかも何者かにやられている。

「これってもしかして……いじめ?」

「……いえ、いじめではないでしょう。恐らく……いじめなんかよりもっとひどいことが……」

明らかに異常事態が起きていると判断した二人は、見つからないようにそつと様子を窺うことにした。

すると、そこで起こっていたのは……。

「おらっ！」

「ぐふっ!!」

一人の生徒が、何人かの生徒を蹴ったり殴ったりと、暴力を加えている場面だった。

それはまさしく……一方的な暴力。

ある意味では、反撃出来ないことをいいことに行っている、リンチだった。

「ひ、酷い……どうしてこんなことを……」

「……あれは、ひよつとして」

小毬が呟いた所で、遊佐が何かに気付く。

それは……たった今生徒達に暴力をふるっている人物についてだった。

そして、その人物は……。

「あれはまさか……生徒会長代理、直井、文人……」

「え？」

帽子を被り、一般生徒の制服を着ている、一人の男子生徒。

その正体は、まさしく彼……生徒会長代理を務めている少年、直井文人だった。

「どうして彼が……彼はNPCだったのでは……まさか……!!」

「ど、どういうことなの〜?」

遊佐が小さな声で呟くのを聞いて、小毬も小さな声で尋ねる。

すると遊佐は、やはり小さな声で言葉を返した。

「ひよつとしたら……直井文人はNPCではなく、私達と同じ人間である可能性があります。とにかく、あの人達が去って行ったら、ゆりっぺさんにこのことを報告しに行き

ます。神北さんもついて来てくれますか？」

「う、うん……」

不安そうに頷く小毬を見て、遊佐が一言、こう言葉をかけた。

「大丈夫です。絶対に、危ない目には遭いませんから」

その言葉は、小毬の胸にしっかりと響いたようだった。

*

「ふう〜」

授業と授業の間の休み時間。

恭介は、どうしても小腹が空いてしまった為に、食堂にやって来ていた。

食券を購入して、おばちゃんにそれを渡し、そして品物を受け取る。

その内容は……麻婆豆腐・ライスセット。

「あの日偶々注文したこの味が忘れられなくて困ってたんだよな……まあ、口の中が赤く腫れて、食いきれるかどうか分かったものじゃないが……」

とりあえず恭介は、適当にその辺の席に座り、早めの昼食をとることにした。

まずはレンゲで麻婆豆腐を掬って……一口。

「……辛い!!」

相変わらず、それは辛かった。

そのままの勢いで、ご飯を口の中に放り込んでいく。

「……辛いけど、やつぱり旨いな、これ」

そんな感じに、恭介が麻婆豆腐の感想を述べていたら、

「……あれ、先客がいたのか」

「……貴方も、麻婆豆腐を食べに？」

そこに現れて来たのは、トレイの上に真つ赤な麻婆豆腐を乗せて、それを両手で持っている、奏と音無の二人だった。

どうやら彼らも、この時間を使って麻婆豆腐を食べに来たようだ。

恐らく音無が、奏のことを誘ったのだろう。

しかしここで、恭介は気になった。

「音無……どうしてお前は、立華を食堂に誘ったんだ？」

「え？ ……何でだろうな。何となく、誘いたくなっただよ。立華に、関わりたくなっ
て思っただ」

「罪滅ぼしのつもりか？」

「え……？」

恭介の表情は、真剣なものだった。

彼の言う『罪滅ぼし』。

それは間違いなく……先日のテストの一件のことを指しているのだろう。

どう答えようかと音無が黙っていると、

「……まあいい。どのみち音無がそこまで器用な人間には見えないからな。本当に何となくで立華のことを誘ったんだろうな……おっと、そういえば忘れてたな」

ここで恭介は、大分前に立華と交わした約束を思い出し、ポケットの中から財布を取り出す。

そして、小銭を何枚か取り出すと、それを奏の前に差し出して、

「もう買っちゃまつてるから、食券を買ってやる段階までは至らなかつたが、その分の金くらしいは払うぜ。何せあの時、校長室までの道のりを教えてくれたお返しを済ませてなかつたからな」

「あ……あの時の約束、まだ覚えてたんだ」

「当たり前だろ。一度交わした約束を忘れるもんか」

恭介は、胸を張ってそう宣言する。

だが、そんな恭介に奏が申し訳なきように、一言言った。

「けどこの麻婆豆腐……音無君に奢ってもらったものだから」

「……そうなのか？」

恭介が音無にそう尋ねると、

「ああ。俺が奢ってやるからって言ったんだ。だからこの麻婆豆腐も、俺の金で買ったんだよ」

「なんだ……音無も太っ腹なんだな」

「お前程のお人好しでもないけどな」

「そういうお前の方が、俺よりもよっぽどお人好しだぜ?」

「そうか? ……なら、そういうことにしとくよ」

そう言うのと、音無と奏の二人はようやくと椅子に座る。

音無は恭介の隣に、奏は音無の正面に。

「……さて、頂きます」

一度音無がそう呟くと、レンゲで麻婆豆腐を掬い、口の中に入れる。

すると、口の中に、麻婆豆腐の辛さがすぐに染み渡ってきた。

「か……辛っ!」

しかし、二人の前には、そんな麻婆豆腐を平然とした表情で食べ続ける奏の姿があった。

そんな奏を見て、恭介は思わず一言洩らした。

「しっかし本当によくこんな辛い麻婆豆腐を食べれるよな……」

「本当だぜ。けど、普通棗みたいにご飯と一緒に食べるものなんじゃないか?」

音無が、恭介の言葉を引き継ぐような形で、奏にそう尋ねる。すると奏は、

「そうなのかしら……けど、これは、旨いわ」

そう言つて、もう一杯麻婆豆腐を掬つて、それを口の中に入れた。

「なんというか……立華つて、辛い物が好きつてわけじゃなくて、麻婆豆腐が好きなんだな」

音無が納得したような表情を見せてそう発言すると、奏は不思議そうな表情を浮かべて、

「……私、麻婆豆腐が好物なの？」

そう、音無と恭介に尋ねていた。

「いや、俺達に聞かれてもな……」

当然、答えられる筈もなく、二人はそう言葉を返すのみ。

奏はまたレンジで麻婆豆腐を救うと、それを目の前まで持つてきて、左右に揺らしながら、

「初めて知つた……」

奏は、そう呟いた。

その時。

「……立華さん」

男子生徒の声が聞こえる。

その声を聞いた恭介と音無は、後ろを振り向いた。

……そこには、帽子を直す仕草を見せる、直井の姿があった。

「こんな時間に何をしているのですか？」

「みりや分かるだろ。食事だ」

音無が、どうやら先程麻婆豆腐を食べた時に腫れたらしい口で、そう直井に言葉を返す。

そこには、食事をしていて何が悪いという気持ちも籠められていた。

だが、直井はそんな気持ちすらも跳ね返すように、ただ一言こう告げた。

「休み時間の食堂の利用は校則違反だ」

「……は？」

思わず恭介と音無は、目を丸くしてしまった。

そんなことが校則で決められているなんて、二人はまったく知らなかったからだ。

「……忘れてた」

「ええ!？」

そして奏は、その事を知っていたようだ。

だが好物である麻婆豆腐の威力に負けてしまい、こうして音無と一緒に食堂に来てしまったということだろう。

奏は、恭介も音無も驚く程のスピードで、麻婆豆腐を完食する。

それを眺めた後に、直井は一言。

「……連れていけ」

※

ドン！

重い扉が閉まり、そんな低い音がする。

中には、ベッド・洗面所・トイレなど……そこはまさしく独房だった。

扉は鋼鉄製であり、いくら音無がタックルして扉をぶち破ろうとしたところで、その扉が開かれることはなかった。

「くそっ……！ 休み時間に麻婆豆腐食ってたからって、これはないだろ!!」

音無の意見は、正しかった。

いくら何でも、休み時間に校則違反を犯してまで食堂で食事をしていたからって、このように個室に閉じ込めるのはなんとも筋違いなことであった。

まるで他に別の目的があって、それを遂行する為に自分達を閉じ込めたのではないか。

恭介の頭の中では、そんな思考が展開されていた。

「しようがないじゃない……それで反省になるんだから」

奏は音無の言葉に答えると、そのままベッドの上に乗っかる。

「……何してるんだよ、立華」

その行動が意味することが分からず、音無は思わず尋ねてしまっていた。

奏は、一度欠伸を洩らした後に、こう答える。

「何って……寝るのよ？」

「はあ？　寝る!?　この状況でよくそんな選択肢が出てきたな!!」

音無には、奏の考えがイマイチ理解出来なかった。

それは恭介として例外ではなかったが、恭介の場合は言葉には出さずに、心の中で留めておくのみであった。

「しようがないじゃない……他に何かすることがあるの？」

「そ、それは……」

確かに、こんな独房みたいな部屋ですることなんてほとんどなかった。

そして、恭介と音無が何かを言うことなく……奏は『お休みなさい』と言ってから、僅かな時間で直ぐに眠りについてしまった。

「……寝るの早いな、おい」

「立華って……実はかなり天然だったのか？」

思わずそう呟いてしまった、音無と恭介なのだった。

*

「で、今日俺達まで集められた理由を教えてください……ゆり」

校長室。

そこでは、主力戦線メンバー以外にも、リトルバスターズのメンバーも揃っていた。もちろん、ガルデモのメンバーも全員揃っていて、部屋の中は結構一杯一杯だった。

そして今、謙吾がゆりに自分達まで呼び出した理由を尋ねていた所だ。

「……まずは遊佐と神北さん、報告お願い」

校長の椅子に座るゆりが、遊佐と小毬にそう告げる。

すると二人は前に出て、辺りを見回した。

「遊佐さんと……神北さんですか？」

「わふ……何の関係があるのでしょうか？」

美魚とクドが、目を丸くしながらそう呟く。

それもその筈で、この二人のペアで呼ばれるようなことなんて、ほとんど検討がつかないのだから。

「それじゃあ話すね……」

「私達が……屋上で見てきた、生徒会長代理である直井文人さんの、真実を」
そして二人は、全員に話し始めた。

屋上で見てきた、直井による一般生徒を暴行する一面を。

見てきた光景を、決して何処かで欠如してしまうことなく、鮮明に述べていく。
やがて話がすべて終わり、最初に口を開いたのは、

「ひでえ……何て野郎だ、直井文人って奴は」

唇を噛み締めながら、日向がそう呟く。

本来ならそこで突っかかる筈のユイも、流石に今はそんな空気ではないことを悟り、
無駄に口を挟むことはなかった。

「なるほど……直井文人はそうやってこの世界に居続けたと言うことか」

「へ？ どういうことだ？」

来ヶ谷の呟きの意味が分からなかった真人は、思わずそう尋ねてしまっていた。

これに対して、高松がメガネを直しながら答えた。

「本来、生徒会副会長を務めていた身であった直井文人は、模範的行動を行ってきたこと
もあって、それが蓄積して、消えてしまう筈です」

「ところが実際はそうではなかった。つまり直井文人は、表で生徒会副会長を演じ、裏で
は暴力を働いて、そうやってこの世界でのバランスを保ってきたのよ」

引き継ぐようにゆりが言うと、頭を掻きながら、野田が一言。

「えつとつまり……だから何なんだ？」

「簡単に言ってしまうば……直井文人はNPCなんかではなかったということね」

「!？」

ゆりの言葉に、真人と野田が驚いたような表情を見せる。

他のメンバーは先程のゆりと高松の説明の段階で気付いていた為、驚きの表情までは至らなかった。

「だけど、もしそうだったとしたら……彼の目的は一体何なんだ？」

壁に寄りかかる岩沢が、その場にいる全員に問いかけるかのような口調で、そう呟いた。

流石にそのことを説明するのはこの場にいる全員にとって不可能なことであった。

「それともう一つ……」

「まだあるの？」

ゆりがもう一つの話を始めようとした時に、沙耶がそう尋ねてきた。

ゆりは、そんな沙耶の質問に答える。

「ええ、もう一つの方も重大なことよ……」

そこで言葉を一旦止めて、ゆりは組んでいた足を解し、両肘を机の上に乗せ、両手を

顔の前で組む。

そして、深刻な表情で、告げた。

「音無君と棗君の行方が分からなくなってるのよ……」

「な、何い!？」

真人が叫ぶ。

他のメンバーも……これにはさすがに驚きの表情を見せていた。

「どういうことだ?」

「言葉通りの意味よ。二人とも行方が分からなくなったのよ。授業の後から姿を見せてないでしょ?」

「た、確かにその通りですナ……私はてっきり何かを企んでるのかと……」

「君は一体何を考えてるんだよ……」

葉留佳の言葉に、岩沢が若干呆れがちにそう言った。

「いなくなる前の音無君・もしくは棗君の姿を見た人はいない?」

ゆりが全員に向かってそう尋ねる。

しばらく時間が経った後、関根が手を挙げて、

「私、棗君が食堂に入って行くのを見たよ。ちよつとしてから、音無君と『天使』も食堂に入ってしまったから、ひよつとしたらそれが原因で生徒会長代理に……」

「……可能性はあり得るわね」

ゆり達も、休み時間の食堂の利用が校則違反だということは知っている。

そして、理由は知らないが音無は奏と一緒に食堂に行ったという。

ということとは、何かと理由をつけて何処かに幽閉されている可能性すら出てきた。

「それじゃあ居場所は反省室か？」

「そう考えるのが一番妥当だね……よし、これから作戦会議を始めるわ」

来ヶ谷の言葉に肯定の意を見せると、ゆりはカーテンを閉め、いつものように作戦会議を開く。

「今回は二チームに分かれてもらうわ。棗君・音無君・『天使』の三人を探しに行くチームと、生徒会長代理を探しに行くチームよ。三人を見つけ次第、こちらに回ってきて欲しいの。そして生徒会長代理を探しに行くチームは、見つけ次第事情を聞く。いいわね？」

「ああ、問題ないぜ」

「ゆりっぺの言うことなら、俺は何でも聞く」

「つたく、相変わらずゆりっぺにゾッコンだよなお前は……」

「L o v e r……」

藤巻・野田・日向・TKの四人が反応を見せる。

ゆりが見回してみれば、全員賛成とのことだ。

「それじゃあチーム分けを発表するわね……あ、今回はリトルバスターズのメンバーも参加してもらうけど、いいわね？」

「異論はない」

ゆりが確認を取ると、謙吾がいち早く反応を示した。

今回に関しては自分達の問題でもあるので、参加せざる負えないのだ。

「それじゃあチーム分けを言うわね……神北さん・西園さん・能美さん・三枝さん・ガルドモの五人・遊佐・竹山君は三人を探しに行つて欲しいの」

「任せてください。後、僕のことにはクライ……」

「護衛として来ヶ谷さんとTKについて行つて貰うわ……二人とも、それで問題はない？」

「うむ。承知した」

「Me too」

来ヶ谷とTKが肯定の意を表したところで……。

「それじゃあ行くわよ……オペレーション、スタート！」

そしてゆりは、高々と宣言したのだった。

※

しばらく無言の時間が続く。

奏が眠ってしまったてから、音無と棗の間でも会話は途切れていた。理由は簡単で、何となく疲れるからだ。

「……………」

その時、恭介が何かに気付いたようだ。

「どうした？」

「いや……………今この部屋全体が揺れたような気が……………」

ズウン。

今度は音無の耳にもはつきりと聞こえてきた。

間違いない……………揺れている。

「地震？ ……戦闘か？」

「戦闘……………ということは、助けか!？」

音無は、上で起こっているだろう事態を予測して、興奮してしまっていた。

ひよつとしたらここから出られるかもしれない。

そんな期待が、彼らの中で広まっていたからだ。

「……………そうだ! ……この無線機で……………」

「……………」

音無は、ズボンのポケットの中から小型の無線機を取り出す。
そして、

「ゆり、俺だ！ 閉じ込められた!？」

恐らくは無線機越しにいるだろうその人物に向かって、そう叫ぶ。

しかし……反応はない。

一連の流れを見守っていた恭介が、一言こう呟いた。

「……壊れてるな、その無線機」

「……くそっ！」

ガン！

大きな音を立てて、無線機が壁に激突し、そのままベッドの上に着地する。

そして、何かないかと、音無は部屋の中にある、ありとあらゆる物を物色し始める。

……だが、どれも頼りになりそうなものはない。

若干諦めかけていた、その時だった。

『……君、……無君。音無君、聞こえる!？』

壊れていたと思われていた無線機から、そんな声が聞こえて来たのだ。

その声を聞くと、音無は慌てて無線機に手を伸ばし、

「聞こえるぞ。ゆり！」

だが、向こうには音無の声は届いていないらしく、

『音無君がこれを聞いていると信じて話すわ……よく聞いて。直井文人はNPCではなかったの』

「!?」

「そんな……馬鹿な……」

驚く二人に説明するように、ゆりは直井のことについて説明をする。

ある程度説明した後に、

『抑止力であった「天使」が失脚したことで、彼は自由を手に入れた。まだ目的は分からないけど……こつちではすでに戦いが始まっている。事情を聞こうと思つて近付いただけなのに、結果戦闘になつてしまったわ。そしてその戦いは……貴方が今まで見たことのないような、酷いものよ。彼は私達が一般生徒に手を出せないことを知っている。だから人質にだつて何だつてするのよ。それはもう、戦いなんかじゃない。一方的な暴力』

「……」

ピクツと、恭介の耳が動く。

だが、ゆりの話はそんな恭介の微妙な反応すら無視して、話を続けた。

『私はね、「天使」は幽閉されていると思うの。私達がかつて入れられた反省室は、すで

に探させたわ。けど見つからなかった。多分もつと嚴重で、誰にも見つからないような場所に閉じ込められてると思うの』

「流石だな……素晴らしい勘をしてるぜ」

恭介がそう呟く中、ゆりの話は更に続く。

『ねえ音無君。私は思うの。貴方今、「天使」や棗君と一緒にいるんじゃないかって。お願い、「天使」を連れて来て。この酷い戦いを終わらすには……「天使」の存在が必要なの』

懇願するような声で、ゆりは言う。

無線機越しでも分かるような、明らかに困っているその口調。

そして、先程の言葉を肯定するかのように聞こえてきた、戦線メンバーの悲鳴。

「!?!」

『時間がないわ……グラウンドに来て。これから私も出る。じゃ、健闘を祈るわ』

ブツ。

無線は、そこで一方的に途切れた。

その後で、ほんのわずかな時間だけ訪れた……静寂の時間。

そしてそんな時間を打ち破ったのは。

「くそっ……何だって俺はこんな場所にいるんだよ……畜生……!!」

そう言うってから、音無は奏を起こそうとする。

……だがそんな音無の動きを、恭介が止めた。

「なっ!? ……ど、どうして!?」

理由を求める音無に、恭介はこう告げた。

「お前……今の無線を聞いて、思わなかったのか?」

「な、何を……」

「お前らが今まで立華にやってきたことも……明らかなる一方的な暴力だったってことに」

「!?」

音無は、ハツとした。

「そうだ……戦線のメンバー達がやってきたことは、現在直井達がやっていることと何ら変わりはない。」

つまり直井は……戦線が行ってきたことを再現しているようなものなのだ。

「確かにこの状況を打破するには『天使』と呼ばれる立華の協力は不可欠だ。だがその前に、お前はやるべきことがあるだろ」

「な……何を?」

「……立華に、謝るんだよ。今までのことを全部な。立華に話を振るのは、それからだ」

「……ああ、分かった」

恭介の言葉に同意を示した音無は、やがて決意を決めたような表情を浮かべ、奏を起こした。

「立華……聞いて欲しいことがある」

「……何？」

起きたばかりだからなのか、眠そうに目蓋を擦る奏。

音無は、そんな奏に対する感想を持つ間もなく、奏に言った。

「今まで悪かった……その、いくら何でも女の子一人を一方的な暴力で攻め立てるなんて、正直俺はどうかしてた」

「……別にいいのよ。私が勘違いさせるようなことをしてきただけなんだから」

「勘違い……ああ、俺はずっとお前のことを敵だと思ってきた。それは違うことがようやくと分かったんだ……本当に、済まなかった」

頭を下げて、音無は奏に謝る。

……しばらく奏は何も言わなかったが、音無の肩に手を置いて、

「……いいのよ。私は貴方のおかげで……こうして生きてくことが出来たのだから」

「え？ それはどういう……」

その言葉の意味を尋ねる前に、恭介が奏に向かって言っていた。

「それで立華……お前の力を貸して欲しいんだが……構わないか？」

「……おかしなこと言うのね。助けて欲しいのは私達の方なのに」

「ああ、それは分かっている。けど、ゆり達が今、直井によってすでにヤバいところまで来てるんだ……どうにかしてアイツらを救ってやりたい……だから、今一度、お前の力を貸してくれ」

「……」

恭介の、頭を下げながらの言葉を聞いた後で、奏は無言で立ち上がり、

「……今度、食堂で麻婆豆腐」

「ああ、前回の分も合わせて後二回は奢ってやるよ」

「……Hand sonic」

やがて奏は、小さくそう呟く。

すると、腕から刃が現れて……それを使って扉を斬る。

……が、それは無意味に終わる。

岩石がぶつかるとような激しい衝突音こそしたものの、扉には傷一つついていなかった。

「駄目か……」

「しょうがないわ。だってこれは、あくまで自衛用だから」

「自衛用、か……」

恭介は小さくそう呟いていた。

自衛用という言葉が表している意味……それは敵意がないこと。

奏は、相手が武器を作って攻撃し始めたから、仕方なく自分も武器を開発したのだ。

つまりこの少女には、最初から敵意なんてなかったということになる。

「そっか……立華には、味方になってくれるような人が一人もいなかったのか……けど、一人位はいたっていいだろうに……あ」

そこまで呟いて、音無は自力で気付く。

それは以前恭介が、奏本人から言われて恭介自身が考えた……この世界の仕組みにも繋がった。

「……立華。他には何か用意してないのか？」

恭介が、奏に向かってそう尋ねる。

すると奏は、

「……あるわ」

そう言った後に、刃を上に向けて、

「Hand Sonic Version 2」

瞬間。

腕に生えていた刃が形を変え、更に長くなった。

「高速性に特化した薄いフィルムが特徴」

「他には……?」

「Version 3」

すると今度は、三個の刃先がついた槍みたいなものになった。

「……無粋ね」

「カックイイじゃん」

音無が親指を立てて、奏にそう言った。

更に奏は、もう一つのバージョンを出現させる。

「Version 4」

瞬間。

ドン！ という効果音が似合いそうな程、結構な大きさの、華みtainなものが現れた。そして奏は一言。

「華の形にしてみたのだけど……果たしてこれは可愛いかしら?」

「いや、結構禍々しいというか……」

「……待てよ。行けるかもしれない」

素直に感想を述べた恭介とは裏腹に、音無は何かを思いついたよう

な表情を見せて、そして奏に言った。

「ひとつ……試して欲しいことがある」

奏はその言葉を聞いて、刃を一旦引つ込ませる。

その後で音無は、奏の耳元で何かを告げる。

やがてその言葉に同意を示した奏は、扉の前に立ち、

「……Gird Skill Hand Sonic」

まずは腕から刃を出現させる。

その後で、

「……Version2」

刀身を長くした、バージョン2が出現。

奏はそれを……扉にあるわずかな間に差し込む。

ガキン！ という音が、中に響く。

気にせず奏は、

「Version3……Version4」

どんどんバージョンを上げて行く。

やがて扉は、少しずつだが悲鳴をあげてきていた。

「よし………行ける!!」

そして音無がそう叫んだ、ちょうどそのタイミングで。

扉はバァン!! という音と共に、ぶっ飛んだ。

「よっしや!」

「このまま脱出だ!!」

恭介・音無・奏の三人は、扉が壊れたことでようやくやっと独房の中から脱出出来た。

後は、ゆり達がいる場所を探しに行くだけだった。

「しかし……一体何処から外に……?」

とりあえず校舎の外に出ようと考えた恭介達は、必死に走っていた。

しかし、向かうところ検討外れな場所ばかり。

「くそ……このままだとみんなが……」

音無がそう呟いた、その時だった。

「な……何!」

突如目の前に現れて来たのは、銃を持つ男子生徒三人だった。

しかも、一般生徒……つまりはNPC。

「ど……どういうことだ? 一般生徒があんな武器をどうして……」

混乱する音無達を他所に、男子生徒達は一斉に銃を放とうとして、

「……遅い!」

「Y a h h o !」

ズバッ！ ドゴツ！

刀で斬るような音と、誰かが殴ったような音が聞こえてくる。
そして、その先にいたのは……。

「待たせたな、恭介氏」

「来ヶ谷か！」

「それにTK！」

「私達もいますよ、先輩方！」

そう言いながら、刀を持つ来ヶ谷と、踊っているTKの前に現れたのは……捜索チームの面々だった。

「お前達まで……どうしてここが？」

「詳しい事情説明は後ですヨ」

「地上では、とんでもないことになってるです！ ハリーアップなのです！」
慌てるような口調でそう答える、葉留佳にクド。

「うう……『天使』と一緒にというのが少し怖いですが、今は我慢します」
若干怖じ気ついている様子のユイだが、今はそれどころではなかった。

「出口はあつちです……急ぎましょう」

「……………ああ」

美魚の言葉に、恭介と音無が頷いた。

*

「……………なんだよ、これ」

雨が降る校庭。

恭介達がそこにたどり着いた時に、一番最初に見た光景は……………広範囲に渡る、血の海だった。

その上に転がる……………何十もの死体。

時期に復活するとはいえ、この状況は、まさしく地獄絵図だった。

「……………お前達は一旦中に避難してろ。後は俺達がなんとかするから」

「わ、分かった……………」

いち早く恭介の言葉に頷いた岩沢は、ガルデモメンバーに加わえて、小毬達も連れて校舎の中へと戻る。

その場に残ったのは、奏・音無・恭介・来ヶ谷の四人。

TKは、護衛という意味を込めて、岩沢達と共に中に入って行った。

そんな中、うめき声をあげる人物が一人。

「う……………」

「ひ、日向あ！」

真つ先に、音無が駆け寄る。

その間に、三人は他に起きている人物を探す。

……だが、どうやら他の人物は起きていないようだった。

「謙吾……真人……」

「……二人共息をしていない。恐らくやられた後だろう」

倒れている二人に近づき、様子を見た後に、恭介と来ヶ谷は冷静にそう判断する。

それと並行して、日向と音無が会話をしていた。

音無は、日向の頭を優しく持ち上げる。

日向はそんな音無に身体を預けて、一言。

「真つ先に俺のところに来るなんて……コレなのか？」

「冗談言ってる場合かよ！」

いつもは音無がやっているネタを、今度は日向がやってみせる。

しかし、音無はそんな場合ではないと分かっていたため、そう言葉を返していた。

そしてその時……直井が恭介達の方を向いて、少し近付く。

その後で、力弱く笑い、そして直井は言った。

「彼処からどうやって出た？」

「……扉を破壊した」

奏は、一言そう返すだけ。

しかし、それだけで直井は、事情を把握した。

「どれだけ時間をかけて作ったと思ってるんだ……生徒会長代理として命ずる。大人しく戻れ」

直井は、銃口を向けながら、奏にそう言い放つ。

「こんな状況だ……立華・棗・来ヶ谷。それが正しくないことくらい分かってるよな？」

「ああ……」

「重々承知している」

音無の言葉に、恭介と来ヶ谷が同意を示す。

奏に至っては、無言で『Hand Sonic』を出現させていた。

そんな彼らに、直井は言い放つ。

「逆らうのか？ ……神に」

「は？」

「誰が……何だつて言うんだ？」

その言葉に、一同は思わず呆気にとられる。

来ヶ谷に至っては、そんなことまで尋ねてしまっている程だった。

「僕が神だ」

その質問に答えるかのように、直井は言った。

「ハア？ 頭イカれちまったのか……？」

日向がそう呟くも、構わず直井は続けた。

「愚かな……ここが神を選ぶ世界だと誰も気付かなかつたのか。生きていた頃の記憶がある。皆一様に酷い人生だっただろう……だがそれこそが、神になる権利だ。生きる苦しみを知っている僕らだからこそ、神になる資格があつたんだ」

「……神になって、どうするつもりだ？」

恭介がそう尋ねると、直井は平然とした表情で、或いは不敵な笑みを浮かべて、言った。

「……安らぎを与えよう」

「俺達にかよ！」

「むちやくちやしてくれてんじゃねえかよ!!」

「抵抗するからだ」

倒れている日向と、そんな日向を支える音無が、直井に向かって否定的な言葉を述べる。

しかし直井はその一言を言った後で、更に言葉を続けた。

「君達は神になる権利があると同時に、生前の記憶にもがき苦しむ者達だ。なら僕は、そんな君達に安らぎを与える神になる」

ツカツカと、血だまりの中を、直井は歩く。

そして歩みを止めた直井は、その場に倒れていたゆりの髪の毛を掴み、無理やり身体を起こした。

「ゆりー！」

音無が、ゆりの名前を叫ぶ。

直井は、抵抗をしないゆりの身体を掴むと、こう言った。

「岩沢まさみの件を覚えているか？ 生前彼女は声を失い、歌の道を諦めざるをえなかった。そして酷い家族環境の中、彼女は惨めな死を遂げた……だが彼女はこの世界で夢を叶えた。あの時はそこにいる棗恭介が邪魔をした為に成仏こそしなかったが、それでも満足はした筈だ」

音無は、今すぐにゆりの側に駆け寄りたい衝動に襲われた。

怪我こそ少なく、身体の方の心配は無用だった。

しかし問題は、ゆりの『存在』の方。

「ちっ……!!？」

恭介が近付こうとしたが、その動きは、銃を持つNPC達に阻まれた。

来ヶ谷も音無も同じ状況となっていることに、ようやく気付いたのだった。

「それが……どうしたって言うのよ」

「君は今から成仏するんだ。幸せな夢と共に」

直井の言葉を聞いて、ゆりは反論を述べた。

「貴方は私の過去を知らない……!!」

だが、直井はそう指摘されても崩れなかった。

むしろ、そんな回答が返って来ることを、始めから予想していたのではないかと思わせる表情を浮かべて、言った。

「知らなくても出来るさ……僕がこの世界で用意してきたのは、『天使』を閉じ込める為の牢獄だけじゃない」

そう言ってから、直井はこう、結びの言葉を告げた。

「催眠術だ」

「!?」

言われて、音無達は周りにいるNPC達を見回す。

見れば、その瞳はどれも虚ろで、焦点が定まっているようには見えなかった。

「さあ、目を閉じるんだ。こんな世界でも、幸せな夢は……見れるんだよ」

そう命じる時の直井の瞳の色は……赤くなっていた。

その瞳を直視してしまったゆりは、次第に瞳を閉じていく。

「嘘……まさか……そんな……こんなことって……」

そしてそのまま、ゆりは瞳を、閉じた。

*

目を覚ませば、そこは白い空間だった。

およそ物と呼べるようなのが、何も置いていない……まるで無の空間。

しかし、ゆりの目の前には、腰の辺りまでの大きさしかないような子供が三人立っていた。

内一人が男子で、二人が女子。

ゆりはこの三人に見覚えがあった。

「ああ……あの子達だ」

この子達は、ゆりの妹弟。

かつて生きていた時に、目の前で強盗に殺された……ゆりにとっては大切な存在だった者達。

そんな彼らは、ゆりのことを見上げて笑っていた。

……だが、当然彼らは生きている筈がない。

「違う、これは幻……本物である筈がない」

戸惑いを見せるゆり。

その内……その戸惑いは、やがて罪悪感へと結び付く。

彼らの笑顔を見ているのが……辛くなってきた。

「(やめて、そんな笑顔を見せないで……私、守れなかったのよ？ 目の前で貴方達を見殺しにしたのよ？ それなのに、どうして……?)」

やがてその子達の内の一人が、ゆりに向かって……笑顔で、こう言った。

「あのね……お姉ちゃんが私達のお姉ちゃんでもよかった」

瞬間。

ゆりの頭の中で何かが崩壊する。

怨まれてもいい筈なのに……。

罵声を浴びせられてもいい筈なのに……。

聞かされた言葉は、『お姉ちゃんがお姉ちゃんでもよかった』という言葉。

ゆりは頭を抱えて、

「そんな……そんなああああああああ!!」

白い空間の中で、葛藤に打ち負けてしまわないように……そう叫んでいた。

*

「駄目だああああああああああああ!!」

動くのは、音無が速かった。

地面を勢いよく蹴ったかと思いきや、直井の頬を、拳で一発殴った。そして、叫ぶ。

「そんな紛い物の記憶で消すなああああああああああああああああ

あああ!!!」

「……」

恭介と来ヶ谷は、固まった。

音無が直井のことを殴ったことに関して、だ。

NPCの方は奏が何とかしてくれた為、問題はなかった。

ただ、音無が直井を殴りに行ったことは……彼らにとって少々予想外だった。

そんな中で、音無は直井の胸ぐらを掴みながら、自分の想いを、ぶつけた。

「俺達の生きてきた人生は本物だ！ 何一つ嘘のない人生なんだ！ 皆懸命に生きてきたんだよ！ そうして刻まれた記憶なんだ!! 必死に生きてきた記憶なんだ!! それがどんなものであろうが、俺達が歩んできた人生なんだよ!! それを結果だけ上澄みしようだなんて……!!」

そして音無は、今自分が一番言いたかったことを、直井に言った。

「お前の人生だって……本物だった筈だろおおおおお!!」

言われて、直井は思い浮かべる。

自分が……かつて生きていた頃の、出来れば思い出したくはない……自らの記憶を。

※

——兄が死んだ。

陶芸の名手の家に生まれてしまった少年——直井文人。

彼は双子の弟だった。

兄は幼いころから才力を発揮し、後継ぎとして世に名前を知らしめていた。

一方で、弟であった——文人は、部屋にこもって一人で遊ぶ毎日だった。

——親からも誰からも期待されない、意味のない人生。

いつしか文人は、そんなことを考えるようになった。

だが、ある日……二人で山の中にある木に登っていた時のことだった。

一本の枝が、激しく揺れて……二人はそのまま、地面へと真つ逆さまに落ちた。

文人は下が草だったこともあって命は助かった。

……しかし、兄は運悪く、下にあったのが岩石だった為に、そこに頭をぶつけて……

血を流したまま、息をひきとった。

——死んだのはお前だ。

そう、空は告げていた。

……文人は、空に浮かぶ太陽を見ながら、こう思った。

——そう、生きてる僕は兄なのだ。

この日以来、文人は兄とすり替わった。

死んだのは……弟である『文人』ということになった。

そして、彼にとっては『意味のある人生』が始まった。

しかし……現実は厳しかった。

怪我の治療と言うことで世間から離れて、リハビリと言う名の厳しい修行が続く。

「恥を知れ！……こんなもの……作ってきおって!!」

父親の罵声を聞く毎日だった。

文人が作り上げてきた作品が、父によって放り投げられて……粉々に散っていく。彼が作ってきたものは、『形』をとらずに、どんどん捨てられていく。

それは自分の存在を認めてくれないような気がして……同時に、彼は知った。自分の兄が……追い付きもしないような、かなり高い所に居たのだという事実を。

だが、彼はその事実を知っても尚、挑み続けた。

自分の人生を……意味のあるものに変える為に。

——もう、一人で遊ぶ毎日になんて戻らない。

文人は、心の中で、固くそう誓ったのだった。

そしてその努力が実ったのか……彼は展覧会で見事入賞を果たしたのだった。

『兄』としては全然駄目な結果だっただろうが、『文人』にしてみれば、今現在出せる自分の最高の力だった。

そんな時、隣に立っていた父親が、文人に話しかけてきた。

「何だ？ お前……泣いているのか？」

「!? ……バカな」

強がり、文人は否定する。

……だがこの時、事実文人は泣いていた。

「自分が今まで積み重ねてきた努力は……決して無駄ではなかったことが分かったからだ。」

「まったく……バカな話だ。わしに恥をかかすな！ ……なんたる結果だ」

相変わらずの罵声。

だが、それは何時よりも柔らかかった。

これを聞いて、文人は思った。

——よかった。厳しい父について、これからも修行を続けていこう。そして日本一の

陶芸家になろう!!

……その矢先の話だった。

父親が、床に臥せったのだ。

医者からは、回復の見込みはないと言われた。

もう轆轤を回すことも、文人に陶芸を教えることも、文人を叱ることも……なくなつた。

文人が布団に横たわる父親に食事を与えると……ニツコリと、微笑むのだった。

——僕の人生の意味は、こんな腕じや工房は持てないし、一人立ちも出来ない。ずっとこの人の世話をしていく人生なの？ ……ねえ、神様!!

そう考えた時、文人は同時にこうも考えた。

——あの時死んだのは、本当に僕だった。あそこから頑張ってきたのは兄で、ここにいるのも兄で、父と兄しかいなかった。僕の人生は……偽りだった。この世界に、僕は存在しなかった。

*

「お前の人生だつて、本物だった筈だろお！」

叫びながら、音無は直井の身体を……抱いた。

直井からの抵抗は、特になかった。

音無はさらに言葉続ける。

「頑張ったのはお前だ！ 必死にもがいてきたのもお前だ!! 違うかあ!!」

「……何を知った風な」

「分かるさ！　ここにお前もいるんだから……!!」

そう言つて、音無はさらに直井を抱きしめる力を強める。

直井はそんな音無に……尋ねる。

「ならアンタは認めてくれるの？　この僕を」

すると音無は……真剣な表情で、こう言つたのだつた。

「お前以外の何を認めろつて言うんだよ。俺が抱いてるのはお前だ！　お前以外いない

……お前だけだよ……!!」

「!？」

瞬間。

直井の頭の中に……たつた今さつき思い出した記憶の、さらに前の記憶が流れ込んでくる。

それは木に登つて、一個の渋柿を取ろうとしているところ。

兄と二人で、一個の渋柿を取ろうとしている情景だつた。

木の下には父親がいて、

「取つたつて渋柿じゃぞ？」

聞こえていたが、二人はそれをやめない。

……しばらくして、その渋柿を取ったのは。

「やった！ 兄さんに勝った!!」

渋柿を父親に見せて、喜んでるのは……弟の文人の方であった。

しかし、喜んでいた為にバランスを崩し、文人はそのまま地面に落下した。

幸い、低かったのもあつて怪我はなかったが……その手の中には、

自らの手で取つた渋柿が、ちゃんと握られていた。

「渋柿ごとときで何を……」

おかしそうにそう言つて、父親は文人達に背を向けて、歩き始める。

だが、少し歩いた所で立ち止まり、それから文人に向かつて、言つた。

「だが……文人もやりおる」

「!!」

それは……文人にとって一番聞きたかつた言葉。

自分の存在を認めてくれた、そんな言葉。

かつて自分に父親が言つてくれたように……音無もまた、自分の存在を認めてくれた。

「……」

恭介は、そんな光景を、遠くから眺めているしかなかった。

音無と直井は、そのまま抱き合う。

雨はいつの間にか止んでいて、空には虹がかかっていた。

水たまりの中に、一滴のしずくが、ポチャンと音を立てて落ちたような気がした
……。

episode 12 Reconciliation

次の日。

音無は校長室に行く為に廊下を歩いていた。

その途中で……まるで待ち伏せでもしていたのではないかというタイミングで、

「音無さん♪」

「な、何だよ……直井……」

帽子を被った男子生徒、直井文人が音無の目の前に現れた。

「お、お前……昨日までとは打って変わって違うキャラになってないか？」

「え、そうですね？」

この日、音無は人間というのはたった一日だけでも、恐るべし変化を遂げることが出来るんだということを悟ったという。

「それで、俺に何か用か？」

笑顔を見せる直井に若干ひきながらも、音無は直井に尋ねる。

すると直井は、

「音無さん……僕も、僕も戦線に入れてくれませんか？」

「え？」

意外なことであった。

まさか昨日までは敵対していた人物から、仲間に入れてくれないかと言ってきたものだから。

思わず音無は、直井のオデコに手を当てて熱を測ろうとしてしまったが、その手の動きは、即座に止まった。

「でも、一体どういう風の吹き回しだ？ 一度は俺達と敵対してたんだぞ。皆からの恨みを買うかも知れないぜ？」

「構いませんよ。僕は音無さんの側にいられるのでしたら、どんな場所にだっていられますから……それが例え、ゴミ共の巣窟だったとしても」

「ご、ゴミ共の巣窟って……あのな」

音無が何かを言おうとした時、直井が音無の手を掴んで、そして泣き顔でこう言った。「お願いです、音無さん……僕を、どうか僕も仲間に入れてください！」

「仲間に入れるって言ってもな……リーダーは俺じゃないし、勝手な真似は出来ないんだけどなあ」

音無が戦線のリーダーを務めているわけではないので、いくら直井が音無に頼み込んだとしても、それはまったく無意味なことであった。

……訂正、無意味ではないが、力は弱かった。

「まあ、俺からゆりの方に話は伝えておくけど、その代わり、どんな返答が返ってきてても文句を言うんじゃないやねえぞ？ もちろん、催眠術を使って相手を操るのもなしだ。いいな？」

「は、はい！ よろしくお願いします、音無さん！」

音無が前向きな返答を返したことで、直井の表情は柔らかくなる。

同時に音無は、面倒臭いことになってしまったとも考えていた。

いくらなんでも、こうして直井と約束してしまった以上、ゆりに話を持ち出す必要が出てきてしまったということだ。

何を言われるのかを想像して……音無は小さな溜め息をついた。

そんな中でも、直井は未だに音無の手を握っていた。

目を輝かせて、まるで何かを訴えているような感じだ。

生憎直井と音無は以心伝心な関係ではないので、直井が考えていることを、音無が理解出来る筈がなかった。

だがそれ以前に……音無は思っていた。

なので思い切って、直井に言った。

「なあ……そろそろ離れてくれないか？ なんかこの場面を見られたら、変な誤解を受

けそうだから」

ここは一般生徒も通る廊下だ。

今は授業中の為問題はないが、いつ誰がやってくるか分からない上に、NPCの噂と言うのは大変回りが速い。

ましてや戦線メンバーかリトルバスターズの誰かに目撃されたとなると……何となく自分の印象が崩れてしまうのではないかと考えていた。

だが、そんな音無の考えは直井には伝わらなかつたらしく、

「何ですか？ 別に問題があるわけではないですし、僕は音無さんのことを大変尊敬していますから、今更催眠術でどうこうするなんて考えは持っていませんよ？」

「いや、そうじゃなくてだな……」

その先を言おうとした所で、音無は動きを止めてしまった。

何故なら……。

「？ どうしたんですか、音無さん？」

何も気付いていない直井は、ただ呆然と音無の顔を眺めているだけだった。

しかし、そんな直井の後ろには……。

「……」

「お、お前は確か……西園だったよな？」

本を一冊抱えていた少女、西園美魚が、そこに立っていた。

どうやら目の前で起こっている状況を見て、驚いているようだ。

その証拠に、抱えていた本が落ちても拾おうとはしていないし、先程から何も喋って
いなかった。

「……これはその……違うんだ。直井とどうこうあるわけじゃなくて……」

必死に弁明する音無。

だが美魚は、音無の想像していた回答とは、まったくベクトルが違う方向の反応を返
した。

「……直井×音無……いいです」

「……は？」

思わず直井までもがポカンとした表情を浮かべてしまっていた。

何故か顔を赤らめて、鼻血を出している美魚。

理由がよく分からない音無が、美魚に尋ねようとしたのだが。

「い、いえ。お邪魔になるのも悪いです……私はこれで行きます」

そう告げると、本を拾い上げて、それから去り際に一言。

「……」馳走様でした」

そのまま美魚は、走って何処かへ去っていった。

「だああああああああああ！ 絶対に今の誤解されたよなあ!」

頭を抱えて叫ぶ音無に、直井が一言。

「いいですよ、僕は……音無さんとなら、勘違いされたとしても問題ありません」

「こっちは大問題だつての!!」

その後、秘密裏に女子達の間でとある一冊の本が流行つたのだが……それはまた、別の話である。

*

「いいわよ、別に」

「……へ?」

宣言通り、ゆりに直井の話を持ち出してみた音無。

ゆりは二つ返事で、それを受け入れた。

「ど……どうしてだ? 仮にも一度は俺達を壊滅させようとしたような奴だぞ? そんなに早く許していいのか?」

「別にいいじゃない。今はもう違うんだから」

「まあ……それはそうだけど」

前までとは違い、直井には敵意がなくなつたのは確かだ。

しかも、以前は戦線メンバーに敵対していたとはいえ、動力源は同じだ。

なら、同じ目的を持っている以上、仲間にしても問題ない。

それが、ゆりの意見だった。

「それに、直井君は音無君に説得されてから、すっかり音無君になついちやつてるみたいだしね」

「ほっとけ」

褒められた気がしないので、音無は突き放すような感じでそう吐き捨てた。

「それじゃあ俺、その旨を直井に伝えてくるな」

「ええ、お願いね」

そう告げると、音無は校長室から出ていった。

「……直井君には、少し協力してもらいたいこともあるしね」

誰もいなくなった校長室で、ゆりが一言、ボソツとそう呟いた。

※

音無が直井に報告しに行こうとしていたら、何やら廊下に人だかりが出来ているのを見つけた。

気になった音無がその中を覗き込んで見ると、

「言わば……双子対決デスな」

「愚かな……僕に対決を申し込むとは。僕は神だぞ?」

「いやいや、見させてもらいましたよ？ 音無君に抱き着いて泣いている場面を」

「……貴様、今この場で抹殺してやろうか？」

「やれるものならやってみろ！ 先に言っておくけど、ハルちゃんには小細工は通用しないヨー！」

輪の中央にいたのは、直井と葉留佳だった。

しかし音無は、どうしてこの二人が争っているのか、皆目見当がつかなかった。だが、

「三枝は双子の妹だったんだ。それで、直井とかいうやつも双子の弟だろ？ どちらも双子の下の方というキャラが被ると、三枝が言い出してな……」

「なるほどな……つて棗！ いるならあの二人を止めろよ！」

偶然そこにいたのか。

はたまた自分からこの場所に來たのかは置いといて、何故かは知らないが、恭介が音無の隣にいた。

……よくみれば、何かを片手に持っている。

「……その、手に持っているのはなんだ？」

思わず音無は尋ねていた。

すると恭介は、それを音無に見せながら、答える。

「これか？　これはな、今から始まるランキングバトルの武器だ」

「武器って……どう考えてもただの漫画本じゃねえか。それにランキングバトルって……」

「まあ見てれば分かるって」

そう言うと、恭介は人だかりの中に戻って行った。

音無も、なるべく見える場所まで移動し……そして凄まじい光景を見た。

「……うわあ」

空中に舞う、たくさんのガラクタ達。

どうやらそれは、恭介の言うところの武器らしい。

二人はその武器の正体を見ずに、片手で何かを掴んだ。

「ほうほう、ビー玉セットデスか……私の十八番ですナ」

葉留佳が手にしたのは、たくさんのビー玉が入ったビニール袋。

果たして誰がこんなものを投げ込んだと言うのだろうか。

対する直井が手にした武器は……。

「……なんだこれは、カメラ？」

恐らくは、一眼レフのカメラだった。

何故かは知らないが、そのカメラには『富○フラッシュ！』と彫られていた。

直井は、その文字は気にせず、葉留佳を睨む。

対する葉留佳も、真剣な表情で直井を睨んでいた。

……敢えて言わせて頂こう。

この二人の勝負は、例え決着がつこうがつかまいが、正直どうでもいいということ。」「それじゃあ……バトルスタートだ！」

何故かいつの間にか指揮を取っている恭介の声が廊下中に響き、戦いの火蓋は切つて落とされた。

*

リトルバスターズの騒音係

三枝葉留佳

VS

自称神（笑）

直井文人

「騒音係ってなんですか!?!」

「自称じゃない……僕は神だ」

「『（笑）』って書いてありマスけど?」

「誰だ! こんな称号を考えた奴は!?!」

*

「二度神を崇めるとよい」

直井の攻撃。

カメラを構えて、葉留佳を撮影した。

「ハイチーズ！」

パシヤツ！

ミス！

葉留佳はノリがよかった為、その撮影によつてダメージを与えることが出来なかった。

「フツフツフツ。混乱するといいいですよ」

葉留佳の攻撃。

葉留佳は袋の中からビー玉を何個か取り出し、地面にばらまいた。

「同じ過ちは二度も犯さない……!!」

直井の攻撃。

今度はフラツシユをたいて……葉留佳を撮影した。

「うわっ！」

眩しさの為か、思わず葉留佳は目を閉じてしまった。

そして、地面にばらまいたビー玉のせいで足を滑らせ、

「イタッ！」

葉留佳に200のダメージ。

「くう……なかなか。だけど、諦めませんよ！」

葉留佳の攻撃。

葉留佳はさつきよりも量の多いビー玉をばらまいた。

「ふっ……愚かな」

直井の攻撃。

だが、

「うおっ！」

ビー玉で足を滑らせ、直井は二回転んだ。

直井に300のダメージ。

直井に250のダメージ。

「これがハルちゃんの実力……!!」

葉留佳の攻撃。

葉留佳は先ほどよりもさらに多くのビー玉を地面にばらまいた。

「ふっ……同じ手は二度も喰らわない!!」

直井の攻撃。

カメラを構えて葉留佳を撮ろうとして、

「うわあっ！」

ズルツ！

地面にばらまかれていたビー玉のせいで、三回転ぶ。

直井に300のダメージ。

直井に400のダメージ。

クリティカルヒット！

直井に700のダメージ。

「そ、そんな……バカな……」

「ハルちゃん大勝利♪」

三枝葉留佳、WIN!!

*

「貴方のような人にはこんな称号がお似合いですよ」

葉留佳は真剣に考えるような素振りを見せて、そして直井にこの称号をつけた。

直井は、『ゴッド・ザ・斉藤』の称号を手に入れた。

「斉藤!？」

思わず遠くにいた音無は驚いてしまう。

何せ斉藤という名字を聞いたのは……これが二度目だから。

「ほう……三枝の奴、斉藤という名前を直井につけるとはな。なかなかセンスあるじゃねえか」

「いやいや、センスあるとかないとかの問題じゃないだろ」

呆れたような口調で、音無は恭介にツツコミを入れる。

「さて……そろそろ俺は行くわ。お前はもうどうするんだ？」

「まあ俺もこの場にずっといるわけにもいかないし……このままここにいと、直井の奴に絡まれそうだし、別の場所に移動することにするよ」

「だったらお前も一緒に来ないか？」

「え？ どこに？」

音無が恭介の向かう場所を尋ねると、恭介は笑顔で、こう言ったのだった。

「立華のところだよ。これからちよつくら昼休みに一緒に食堂で食事でもどうかって誘うつもりだが、お前はもうどうする？」

「あ、えつと……行くよ」

少し迷った音無だったが、やがてすぐに肯定の言葉が出た。

それを確認すると、恭介は、

「よし、そうしたらまずは立華の所に行かなきゃな」

こうして音無と恭介の二人は、奏の所に向かったのだった。

*

「よう、立華」

「……棗君に、音無君？」

教室に来た時、奏はいつものように教科書を見ながら授業の予習をしていた。

そんな時に、恭介が言う。

「昼休み、俺達と一緒に食堂で飯でも食いにいかないか？ 発案者は音無なんだけどよ

……」

「え？ それはおま……」

「なあ、どうだ？」

奏は少し迷う素振りを見せる。

「ここでもうひと押しと言わんばかりの表情で、恭介が言った。

「あの日の約束も果たしたいした……おごってやるよ、麻婆豆腐」

「……分かった。昼休み、食堂で」

それだけを言うと、奏は再び教科書に目を向ける。

目的は果たされたという表情を浮かべる恭介と、イマイチ状況把握がうまくいって

ない音無。

しかし恭介は、そんな音無を置いて、

「それじゃあ、また後でな……ほら、お前も」

「え？ あ、ああ……また、食堂で」

「……うん、分かった。音無君・棗君」

奏はそう言つて、無表情のままだったが、恭介と音無の二人に手を振つた。

だがこの時、音無は少しだけ感じていた。

何だか……奏が嬉しそうだな、と。

「気付いたか？」

「え？」

ちようどいいタイミングで、恭介が割り込んでくる。

音無は、そのタイミングのよさに少し驚きながらも、

「どういうことだ？」

やつとのことで、恭介にそう尋ねる。

すると恭介は、

「立華はな……お前といると、少し表情が和らぐんだ。気付いてたか？」

「え？ それって一体……確かにあの時、嬉しそうな感じはしたけど……」

「まあ、後は自分で気付けつて所だな。お前も時期に、自分の想いに気付く時が来るさ……それが別れの時でないことを俺は祈るけどな」

「？」

イマイチ恭介の発言の意味が理解出来なかった音無だったが、いつまでもこの場にいるのは無用と思ったのか、廊下を歩き出す。

無意識に、昼休みが訪れるのを楽しみにしながら。

※

ところ変わって、ガルデモが練習している教室。

本日は、珍しくその部屋に客が来ていた。

今は授業中なので、この部屋に彼女達以外の人物がいる方が珍しいのだが、その辺りは問題なかった。

何故なら、その客もまたガルデモのメンバーと同じく、戦線メンバーの一員なのだから。

「（へえ……ユイの奴、意外とボーカルやってんのな）」

青い髪の青年——日向は、短く心の中でそう呟いたのだった。

ただ、彼がここに来るのだから、今回は初めてだった。

だったら何故今日に限ってここに来ているのかと言えば、

「いきなり俺の所来て、新曲出来たから感想聞かせろ、ね……」
曲のタイトルは、『Little Braver』。

直訳、『小さな戦士』。

作曲自体は岩沢が担当、作詞をユイが担当した、合作曲の一つであった。
日向は、この歌を聞いて……若干ユイに対する印象が変わったという。

楽しそうに歌っているが、しかし歌唱力についてはなかなかのものだった。
ただ一つ、問題があるとすれば……。

「やっぱりユイは、ギターがヨレヨレだな」

ひさ子より言われる、そんなセリフ。

それは確かに、ユイの心にグサツと刺さっていた。

「うくん……どうもリズムが合わなくなっちゃうんだよね」

「あくそれ分かるかも」

入江と関根も、そんなことを口にしていた。

しかし、ユイは反論を述べる。

「で、でもライブではそれなりに頑張ってるじゃないですか！」

「だけど、なんか違うんだよなあ……ちよつとドラムとしても心配だなあ」

ユイの言葉を聞いて、入江がそんなことを洩らす。

それに対して、岩沢がフォローするような形で答える。

「……心配しなくてもいい。ボーカルとして、ユイは頑張ってるから」

しかし、その言葉はユイの心を和らげるものであると同時に、ユイが抱えている悩みをなくすには足りなかった。

「だからな、お前はギターを使わない方がいい……」

「何を!?」 岩沢さんはギターもボーカルも両立してたじゃないですか!!」

ひさ子の言葉を聞いて、ユイがとうとうキレかかってしまう。

喧嘩口調のユイに、ひさ子の口調も厳しくなる。

「岩沢はどっちももうまいからな。さらに言えば作曲もうまい。確かにお前はボーカルとしてはいいと思うし、作詞の方もまあまあいいと思う。けどギターは駄目だ。今すぐギターはやめるべきだ」

「うう……もういいです!!」

「「あつー」」

椅子に座る日向の横を走り去り、そのままユイは教室を出て行ってしまった。

……教室の中に、気まずい空気が流れる。

「……俺、ユイを追いかけてくるよ」

椅子から立ち上がり、日向がそう言うと、

「ああ……よろしく頼む。ユイをどうにか出来るのは、多分日向しかいないから」
「どうにかって……まあ、多分ユイと一番話してるのは俺だろうけどさ……こういうのは音無の得意分野じゃないのか？」

岩沢の言葉に、日向が呆れながらそう言った。

すると、意外にも関根の口からこんな言葉が聞けた。

「人には適材適所っていうものがあるんだよ」

「そして日向は、ユイの慰め役がぴったりってことだな……私もちよつと言い過ぎた部分があると思うから、そのことも伝えといてくれ」

「スポーツスマンかよ……まあいいや。俺、ちよつくらユイを探してくる」

ひさ子の頼みを聞くことにした日向は、扉を開けて、教室から出て行く。

一旦廊下を見回して、

「……こつちなな」

教室を出て、左の方向へと歩みを進めて行った。

*

「お、いたいた」

ユイはすぐに見つかった。

中庭で一人ポツンと座り込んでいたからだ。

日向は後ろから近づき、

「よっ、ユイ」

そう、話しかけた。

「日向……先輩……」

一方で、ユイからはいつもの元気が感じられなかった。

よほどひさ子から言われた言葉がショックだったのだろう。

「何だよ、そんなにしよぼくれてよ……お前らしくもないじゃねえか」

「そうですか？ ……そうかもしれないですね」

体育座りをして、うつむいているユイ。

日向は少し考えた後で、その横に座る。

少し驚いたユイだったが、やがて元の体勢に戻った。

「まあ……何だ？ ひさ子も悪気があって言ったわけじゃないんだし、その……元気だ

せよ、な？」

「……」

「あ……えつと……」

その先の言葉が繋がらなくなってしまふ日向。

しばらくの間、そのおかげで沈黙の時間が続く。

「……あのさ、日向先輩」

「……ん？」

そんな中話しかけたのは、ユイだった。

ユイは、日向にこう尋ねた。

「私って……ガルデモのお荷物なのかな？」

「は？」

「ギターは駄目だし……ボーカルだって、認めてもらえているのかどうか正直微妙な感じだし……入江さんからはリズムが取りにくいなんて言われるし……やっぱり、私が音楽活動をやるっていうのは、無理だったのかな？」

「……」

「私、生きていた頃に、テレビで見たロックバンドに憧れてたんだ。だからガルデモの皆さんに憧れて……追っかけをやってるだけじゃ満足できなかつたから、とうとう自分でも志願したんだけど……やっっちゃいけないことだったのかな……私、最初の一步から、間違ってたのかな……」

「……バカ野郎、そんなことねえよ」

「え？」

落ち込むユイを励ますように……というよりは。

何処か、間違った所を正すと言ったような口調で、日向は語り始めた。

「それは違うぞ、ユイ。夢というのは、追いかけて追いかけて、そして掴み取るものなんだよ。自分には合わない夢だから追ってはいけないとか、そんなこと全然ねえんだよ。確かに人には適材適所がある。けど、それとこれとはわけが違う。最初の一步が間違ってただと？ むしろお前の最初の一步は確実に合ってるよ！ 俺が保障してやる……ユイはボーカルは美味いし、作詞だつてうまい。ギターはこれから練習していけば何とかなる!! 人つてのはな、やらなきや何も始まらないんだよ。諦めたら本当に、何もかもを諦める羽目になるぞ!!」

「で、でも私……」

「でもじゃない！ やつてみたら案外うまくいく場合だつてあるじゃねえかよ。失敗するのを恐れて、夢なんか掴みとれるか!!」

「!？」

かつて夢を追いかけていた日向だから、言える言葉だった。

それは、確かな言葉だった。

迷っているユイの心を動かすには、十分な言葉だった。

「……だからお前は、お前なりに頑張ればいいんだよ。結果も大事だが……その過程も大切なんだからな」

「……何でだろう。日向先輩の言葉が、説得力があるように聞こえるのは」

ユイは、若干軽くなったような感覚を得て、思わずそう呟いた。

「当たり前だろ。少なくともお前よりは長い年月を生きて来たんだからよ」

「長い年月って……一年しか差がないじゃないですか」

「その一年がわりと重要だったりするんだぜ？」

自慢気に日向は言うが、どうもユイは納得いかない様子だった。

「どうだか……そのわりには頭では私とたいして変わらないですよね？」

「なんだとお!？」

怒りかけて、いつものような会話の流れに戻りつつあることに、日向は気付いた。

だから日向は、こう言ったのだった。

「それでこそいつものお前だよ……ユイ」

「……そう、ですか」

またしても、しばらくの間沈黙の時間が訪れる。

だが、今回の沈黙に関しては……どこか心地よさすら感じられるものであった。

※

「あ、相変わらず辛いよな……この麻婆豆腐」

昼休み。

食堂で麻婆豆腐を食べる生徒達が集まる、一つのテーブルがあった。

四人がけのテーブルに三人で座る、一人の少女と二人の少年。

名前をそれぞれ、立華奏・棗恭介・音無という。

全員が麻婆豆腐を食べていて、恭介だけはライスつきだった。

「辛いけどはまるんだよな……この味」

「……うん」

音無の言葉に、満足そうに頷くのは奏だった。

どうやら麻婆豆腐を食べている時の彼女は、表情も穏やかになり、感情表現が豊かになるようだった。

「しっかし、棗もよくもまあ立華とかわした約束を覚えてたものだな」

そう話しかけてきたのは、音無だ。

位置から言うと、奏の隣に音無が座っていて、恭介は音無の前の席に座っている。

理由はよく分からないが、何故かこういう席の座り方になっていた。

「私も思った。あれは社交辞令かと……」

奏は、音無の言葉に続くようにそう呟く。

すると恭介は、笑顔でこう答えて見せた。

「何言ってるんだよ。男なら一度かわした約束は絶対に守るべきなんだよ。男に二言は

ねえってよく言うだろ?」

「へえ……なるほど。棗らしいや」

「だろ? もっと褒めてもいいいぜ?」

「調子に乗ると痛い目見るぞ」

「釣れないやつだな、お前は」

笑いながら、音無と恭介はそんなことを言い合う。

そんな様子を……奏はただ麻婆豆腐を黙々と食べながら眺めていた。

「まあ、しかし何だ? ……こういうのって少しいいよな」

「え、どうしてだ?」

恭介の言葉を聞いて、音無がキョトンとした表情を見せて尋ねる。

すると恭介は、その理由をこう説明した。

「だってよ、いつもは敵として戦ってるお前達だけど、今はこうして一緒に食事してるんだからな……言うなれば、三大勢力の懇親会ってか?」

「あのな……三大勢力って言っても、俺は別に立華のことを敵視してるわけじゃないぞ?」

「分かってるよ。敵視してるやつが、わざわざ一緒に食事を取ろうだなんて思わないことくらいよ」

恭介は、やはり笑顔でそう言ってみせた。

そして音無も、やはり思う。

「(藁つて……本当に凄い奴だよな。何でか知らないけど、コイツが言う言葉には説得力があるというか……何を言っても、正しく思えてしまうというか……)」

「それに、立華はこう見えて……というか、普通に美少女だからな。もしもこれで二人きりとかの状況になってしまったら……俺、ちよつと緊張しちゃうかもな」

さらに付け加えるように、そんな言葉を言う恭介。

だが、音無はこれには多少の違和感を感じずにはいられなかった。

そしてその違和感の正体を、やがて音無は思いついたのだった。

「まあ、確かに立華は可愛いし、目に入れても全然毒じゃないぜ？(ちよつと容赦ないよ
うな所はあるかも知れないけど) けど、お前、まさか……」

「……何だよ」

音無にジトツとした目つきで睨まれて、さすがの恭介でも少し驚く。

奏はただ単に黙々と麻婆豆腐を食べているだけ(しかしその表情はどこか笑顔だった)。

そんな奏をかばうような仕草をしながら、音無は言った。

「やっぱりお前、ロリコ……」

「ちよつと待て！ お前どうして今その結論に達した？ それじゃあ何か？ 俺は立華がこんな体型だから可愛いなと思って、思わず襲いたくなるような欲求を我慢しきれなくなつて異常性癖者だとしても言いたいのか!？」

「違うのか!？」

「ちげえよ!!」

素で驚く音無に、恭介は強めのツツコミを入れる。

だが音無は、すぐに次の言葉を言った。

「けど、この前のお前の動きといい、三枝からの証言といい……照らし合わせるとやっぱり、ロ……」

「絶対にその先は言わせないからな！ 断じて俺は違うぞ!!」

全力で否定する恭介だったが、ここで何かに気付く。

「……今、三枝って言ったか？」

「あ？ ああ……アイツがこの前校長室に来て、『恭介さんには、「ロリコン」か（21）」って言うのと抜群の効果が得られマスよ』なんてことを言ってきたぞ?」

その言葉を聞いた恭介は……残った麻婆豆腐をご飯の上にかけて、それを一気に口の中に流しこむ。

これには奏も少し驚いているようで、音無に至っては、信じられないものを見るよう

な目で、恭介を見つめていた。

「ふう……はて、ほれはひよっほようひはえきあかは、ちよっふあいつへふう（訳きて、俺はちよつと用事が出来たからちよっくら行ってくる）」

中にいろんなものが入った状態で恭介は音無と奏にそう告げて、そしてそのまま、恭介は何処かへ歩き去っていった。

途中、

「ゴホゴホッ!!」

なんて咳が聞こえてきたような気がしたが、音無はそれを全力で聞かないふりをしたという。

そして残された、音無と奏。

「あ……えつと……」

話が合わない為に、奏に何を話したらいいのかイマイチ分からない様子の音無。

とりあえず戦線での話をしたらいいのか、それとも今時の流行についてか（もつとも、自分達は既に死んでいる立場の為に、そんなものは皆無に等しいが）、はたまたまつたく別の話題か……。

「……何？」

「ああいや……その……麻婆豆腐、旨いか？」

結局、前にもしたその質問に戻った音無。

だが、前とは違う部分もあった。

「……ええ、美味しいわ」

「……そっか」

そう言った時の奏の表情が、何処か笑顔を感じ取れるような気がした。

※

日には変わって。

校長室の中は、何処か賑やかになっていった。

松下は何故かTKとダンスの練習をしていた。

理由は……不明だ。

大山と椎名は、いつの間にか増えている犬のぬいぐるみ(ゼンマイ付きなので動く)を

眺めていた。

「可愛いぬいぐるみだね」

「……浅はかなり」

「え」

椎名の言葉を理解することが出来ず、驚きの声をあげてしまうのだった。

野田は部屋の中だというのにハルバードで素振りをしていた。

そのすぐ近くには、刀の手入れをしている藤巻が……。

「うおっ!? 危なっ!!」

藤巻の頭の上を、野田の持つハルバードが通過する。

下手をしたら、藤巻はそのハルバードの刃で頭を切られていたかもしれない。かつた。

「あ、危ないじゃねえか!!」

「あ? ボサツとしてるテメエが悪いんだろうがよ」

「なんだと……野田! テメエ表に出ろや!!」

「いいだろう……売られた喧嘩は買ってやる! テメエのようなノロマが戦線にいると、ゆりっぺが迷惑するからな!!」

売り言葉に買い言葉。

二人はにらみ合いながら、そのまま校長室から出て行ってしまった。

そんな中でも、松下はまだTKと踊っていた。

「ううむ……難しいな」

時折そう唸っては、再び努力する。

しかし、どう頑張ったってTKに追いつけないのは見て分かる通りだった。

そんな中で、ピンク色の髪の少女は、青髪の少年の腕を掴んで、何やら要求していた。

「ねえ、新技かけさせてくださいよ、名付けて……百二十字固め!!」

……もうお分かりだと思うが、ユイである。

ユイは日向に新技をかけさせて欲しいと頼みこんでいるのだが、当の本人はまったくの無視。

というか、眼中に入れないように必死に目を逸らしているようにも見えた。

何しろ、肯定したら……次に自分に訪れるのは『死』だからだ。

いくら復活するからと言って、痛いのは勘弁したいところ。

だから日向は、シカトを決め込んでいたのだ。

「ねえ、新技、新技」

昨日までの落ち込みっぷりは何処へ消えたのやら。

能天気ユイ、ここに登場と言ったところだろうか。

「う、もういい！ 大山先輩にかけよつと」

とうとう諦めたユイは、その後で大山の所へと向かう（ちなみに、大山には拒否られた）。

それを確認すると、日向はようやくと口を開いた。

「しっかし本当に変な奴らばっかり集まってくるよな……ここ最近」

隣のソファアームに座る少年の方を見て、日向はそう呟いた。

その呟きは、少年の耳にも届いたように。

「……貴様、それは僕のことを言っているのか？ 僕は神だぞ？」

帽子を被り、文庫本を読む少年……直井文人は、本から目を離し、日向の方を睨んだ。というか、戦線メンバーは、直井がこうして当たり前のように校長室にいるという事態を見て、誰一人として疑問に思わなかったのだろうか？

いくらゆりが入隊を認めているからと言っても、多少の違和感を感じてもよいだろうに……彼らにとつては、そんなことはもうどうでもいいみたいだ。

「神ねえ……よく言うぜ。音無に抱きついて大泣きしてたくせによ」

「誰が泣いたって……？」

「うおっ!」

禁止ワードを言ってしまったらしく、怒りの形相を浮かべる直井が、一瞬にして日向の近くにまでやってきていた。

思わず身体を後ろに下げて、日向は逃げようとした。

だがその前に、

「泣くのは貴様だ……」

そう告げると同時に、直井の目が赤く光る。

日向はその目を、まともに直視してしまっていた。

直井は更に言葉を続ける。

「さあ、洗濯バサミの有能さに気付くんだ。洗濯バサミにも劣る自分の不甲斐なさを、嘆くがいい……」

その後で、カランと何かが落ちるような音が聞こえてくる。

日向がその音のした場所を見てみると……そこには一つの洗濯バサミが置かれていた。

それを見た日向は……頭を抱えて、まるで情緒不安定な人間のように混乱しながら、言った。

「洗濯バサミ……挟める……挟んで落ちない……洗濯物が汚れない……素晴らしい！クリップ代わりに紙を挟んだりとか、応用も効く、使える……!! それに比べて俺はなんなんだああああああああああ!!」

「……ふっ」

叫びながら、かなり落ち込んでいる様子の日向を見て、直井は勝ち誇ったかのような表情を見せる。

だが、そんな直井の首根っこを、後ろから何者かが掴み、そして一言。

「お前なあ……催眠術を腹いせに使うな」

「あ……音無さん♪ おはようございます」

先程までとはうって変わる、直井の態度。

それもそのはずで、直井に言葉をかけてきたのは、音無だったからだ。

「挨拶はいいから……それよりも、これは一体どういうことだ？」

「あつちからふっかけてきたんですよ。僕は出来るだけ穏便に……」

悪びれた様子もなく、いかにして自分は悪くないかを表現する直井。

しかし音無は呆れた目つきで、ソファアの前で跪いている日向を見て、

「どこが穏便だよ……大の男があんな風に跪いているんだぞ？」

そんな日向の近くでは、クドが必死に慰めている姿があった。

「わふ……大丈夫ですか？ 日向さん」

「ああ……クドリヤフカ君。どうして君はそんなにも殺人級の可愛さを出すことが出来

るんだい？ お姉さんの理性がはじけ飛んでしまいそうだよ」

頭を撫でているクドを見て、来ヶ谷が鼻血を出しながらそう言っている。

「……浅はかなり」

「というか、まずは鼻血を拭いてください」

椎名がそう呟き、竹山が来ヶ谷にハンカチを差し出しながらそう言った。

そんな時だった。

ガチャツと扉が開き、そこからゆりが入ってくる。

そして、

「音無君、直井君、話があるの。ちょっと来てくれない？」
「俺達か？」

音無と直井の二人を、とある場所に呼び出したのだった。

episode 13 Alive

教員棟三階、空き教室。

音無と直井は、ゆりに連れられてこの教室までやってきた。

「何だよ、こんな所に呼び出して」

直井と音無が扉の前に立ち、横に並ぶ。

最初に言葉を発したのは……音無だった。

ゆりは窓から外を眺めるような素振りを見せていたが、やがて音無が話しかけると共にその方向を向き、こう言った。

「直井君、音無君の失われた記憶を戻して見せて」

この言葉に対して、直井は何故か敵意をゆりに向ける。

そして、

「僕に命令だど？ ……さつきから貴様、何様のつもりだ!!」

ゆりの方を指さしながら、直井はゆりに対してキレた。

どうやら自分のことを神だと思っているらしい直井は、誰かに命令されるのを極端に嫌がるらしい。

しかし直井は、今や戦線のメンバー。そしてゆりはそんな戦線のリーダー。

どちらの方が立場が上かは、一目瞭然だった。

「テメエのリーダーだ！ 上司だよ」

「あうっ！」

ポケットの中に突っ込んでいた手を引っこ抜いて、直井の頭をパシンと音無は叩く。

叩かれた直井は、短い悲鳴をあげて、頭を抑えた。

それほど重い一撃でもないが、叩かれると頭を抑えるのは人間として当然の条件反射だった。

「おとなしく言うことを聞け……って、俺の記憶!？」

直井にそう言った後で、音無は驚く。

その理由は……話の中に突然自分の記憶についてのが現れてきたからだ。

いきなり呼び出されて何の話題が出るかと思っていたら、まさかの自分の話題に関してだ。

それで驚かない人間はそう多くはないだろう。

「そうよ、貴方の記憶」

窓の方に近づいていた身体を動かし、ゆりは中央に置かれたテーブルの方へと歩みを

進める。

そしてテーブルの上に両手を置き、本題に入った。

「直井君の催眠術は本物よ。貴方の失われた記憶も取り戻せるはず」

「ふうむ……なるほど。それは僕の手で何とかしてみたいですね」

右手であごの部分を抑えながら、直井はそんなことを呟く。

だが……音無は身を乗り出して、反論した。

「ちよつと待てよ！ 勝手にそんなこと決めんなよ!!」

「どうして？ まさか忘れたままでいたいのか？」

「あ、それは……違うけど……」

ゆりの疑問は正しかった。

記憶を失った人間が、その記憶を取り戻すのを否定しようとしているのだ。

普通なら、失われた記憶を取り戻したいと考えるはずなのに……どうも音無は逆の言動をとっている。

これを聞いておかしいと思わない人間は、いないだろう。

だが、現に音無は記憶を取り戻すことに戸惑っていた。

その理由を、音無はこころの中でこう考えた。

「もちろん思い出したい。けど……この不安はなんだ？ それは……もしかして、俺の

記憶のせいで、この生活が終わってしまったんじゃないかと……え？ 俺は……俺はこんなにも……皆との生活を気に行っていたんだ。でも、過去を思い出してしまつて、それでも、これまで通り一緒に過ごしていけないのだろうか？ でも、それでも

……)

「音無君？」

「え？」

途中で、ゆりに名前を呼ばれて、音無はようやくと反応を見せた。

じつと見つめるゆりの目は……かなり真剣味を帯びていた。

音無はそれに少し驚きながらも、

「あ、ああ……分かった」

戸惑いつつ、そう答えた。

すると、横にいた直井が、音無に少し近づきながら、

「どんな過去を見ても……どうか自分を見失わないで」

帽子を取り、徐々に音無に近づいて行く直井。

やがて直井は、音無の両手をしっかりと握り、そして語りかけるかのように、言葉を続けた。

「もし貴方がどうなつても、僕だけは、味方ですから……!!」

「……」

笑顔でそう言ってみせる直井の表情を見て、音無はジト目となっている。

その表情からは……『何言ってるんだコイツ?』という、明らかに

おかしい物を見るような感じがうかがわれた。

「……何か言ってください」

あまりにも音無が反応を示さないので、思わず直井は一言、そう言っていた。

その直後に、ゆりが言う。

「私も味方だから、安心しなさい」

「ああ、頼もしいよ」

笑顔でそう言う音無は、どこか清々しいようにも見えた。

「ええええええええええ!! 何この差?」

あまりにも自分とゆりとの扱いが違いすぎるので、直井はどこか不服そうな表情を見せていた。

しかし、その後で帽子をかぶり直し、

「……まあいいですよ。どうぞ座ってください」

相手が尊敬する音無ということもあって、直井はそれ以上は何も言えなかった。

音無に向かって、とりあえず座るように指示を出すと、自分も音無の向かい側の席に

座る。

何故か慎重に音無はパイプ椅子に座る。

ギシツという音を立てて、パイプ椅子が軽い悲鳴をあげた。

「では……始めます」

「……（コクツ）」

直井の言葉を聞いて、音無は無言で頷く。

直井の横には、腕を組んで音無の様子を眺めるゆりの姿があった。

音無はそれを確認した後で、直井の目をじっと見つめる。

すると……直井の目が、赤くなった。

催眠術が、これから音無にかかろうとしているのだ。

「……」

そして、始まる。

音無の……過去の物語が。

※

季節は夏。

窓からはひまわりの花が綺麗に咲いているのがうかがえる。

そして今、彼がいるこの場所は……とある病院の病室だった。

別に彼が何処かを病んでしまったわけではない。

病んでいるのは……彼——音無結弦の妹。

名前を、初音という。

音無……結弦は、左目を前髪で隠したような風貌をして、他人の目線から見てもれば、ただその場において、無駄な時間を過ごしているかのような感じを読み取らせていた。

一言で言うならば……彼からは、生きているような感覚はしなかった。

「お兄ちゃん、学校楽しい?」

そんな結弦に、初音はそう尋ねてきた。

結弦は、面倒くさそうに答える。

「楽しかねえよ。行ってねえから」

「行ったら楽しいかもしれないよ?」

「頭がよかつたら楽しいかもな」

結弦は、学校に行くのを嫌っている少年だった。

初音は、ベッドの上で上半身だけを起こして、結弦と話をする。

「俺バカだから……成績の悪い奴には、居場所のない所だ」

「勉強は楽しくない?」

「楽しいわけねえだろ……勉強だぞ?」

「友達は何？ 友達と遊ぶのは？」

「二人でテレビを見たり、ゲームをしてる方が楽しい。相手の趣味に強引に合わせなきゃいけないかったり、面白くもない冗談に笑わなければいけないかったり……疲れるだけだ」

この頃の結弦は、人づきあいというのが苦手であった。

話相手と言ったら、たった今日の前でベッドに寝ている、妹の初音だけ。

そんな初音は、笑顔でこう語る。

「私は勉強楽しみだなあ……友達作るのも楽しみ」

「……」

身体が弱い為、二年前から初音はずっと入院をしていた。

それだけに、学校に行つて友達を作るといふ経験も、一緒に勉強をするといふ経験もしたことがなかったのだった。

「ああ、そうだ」

この時、何かを思いついたらしい音無は、横に置いてあつたカバンを拾い上げ、中を探る。

その中から出てきたのは……茶色の紙袋だつた。

大きさは、何かの雑誌なら一冊は入るくらいのものだつた。

「……………いれ」

それは、結弦と初音の間でいつも行われていること。

袋の中身は……漫画雑誌だった。

結弦が初音の病室を訪れる時は、いつもこれを買って持っていくのだ。

「わあ………ありがとうお兄ちゃん」

そして初音は、結弦の本を受け取ると、いつも嬉しそうな顔でほほ笑むのだった。

*

「俺は、生きている意味が分からない」

生きがいを知らない。

他人に興味を持ってない。

誰とも関わらずに生きているのは……彼にとってその方が楽だからだ。

最低限生きていけるだけのバイトを続けて……それだけで、彼にとっては十分だった。

彼は工事現場で交通整理のバイトをしながら……自分が生きていけるだけのお金を稼ぐだけの、他には何も無い毎日を続けていた。

それでも彼は……初音には毎日会いに行っていた。

なけなしの金で、漫画雑誌を買いに行く。

いつも適当に、本屋で平積みになつてゐる物を買つて行くだけなので、彼にとっては、同じ雑誌を買つてゐるのかどうかも分からなかつた。

もしかしたら違う雑誌になつていて、話は続いていないのかもしれない。

でも……初音は、結弦が雑誌を与える度に、『ありがとう、お兄ちゃん』と、笑顔で、決まつてそう言つたのだつた。

結局、初音にとっては何でも嬉しいようだつた。

「妹はきつと俺とは違う。生きることには希望を持つてゐるし、生きる意味も、きつと見つけられる」

結弦は、そう考えた。

だが、初音はここ二年、ずっと入院してゐる。

「(かわいそうに……代わつてやれたらいいのに……)」

心の中で、時々結弦はそう呟くのだつた。

何の希望も持たない、生きる意味も知らない。

その蓮杖が、結弦を初音の病室まで連れてつていた。

*

季節は代わり、冬になつた。

生い茂つてゐた木は、葉をなくし、枝だけになつてゐる。

気温は大分下がった。

結弦にとつては、この時期のバイトは辛いものだった。

指先が傾がんで、裂けそうだった。

それでも彼は、生きる為にバイトを続けた。

「(生きる？ 何の為に?)」

時々、彼の頭の中でそんな思考が巡ってくる。

その度に、彼は頭の中でその考えを振り払う。

なぜなら、そのことを考えてしまつたら……今やっているバイトすら辞めてしまいうだったからだ。

「(これだけは続けなきゃな……食う為に、そして妹にプレゼントを買ってあげる為に)」

そしてバイトが終わった後で、結弦は公園のベンチに座り、空を見上げる。

空からは……粉雪がパラパラと降ってくるのが見えた。

そんな光景を見て、結弦はふと思いついたのだった。

「(そうだ。クリスマスは、医者に相談して、少しでも外に出られるようにしてもらおう)」

もうすぐクリスマス。

彼はそのことを思い出し……初音の喜ぶ顔が見たいと思った。

『ありがとう』という初音の笑顔が見たいと思った。

だから、そんなことを計画しようと思いついたのだ。

「(車椅子は雪が積もると使えないのかな……だったらおんぶでいいや。アイツ一人くらい、いくらでもおぶつて歩ける。それで、好きな店で好きなものを買つてやろう……出来れば、いいお店でケーキを食べさせてやりたい。だったら、もつと稼がないとな)」
そのことを考えついた結弦は、ベンチから立ち上がり……再び、歩き出した。

*

「初音、もし今度のクリスマスに出歩けるなら、何処へ行きたい？」

次の日。

早速結弦は初音にクリスマスマスの日に何処へ行きたいかを尋ねてみた。

すると初音は、マスクをつけたせいでくぐもったような声で、こう言ったのだった。

「街の大通り」

「あんな所でもいいのか？」

結弦にとつて、街の大通りというのは、単に人が多いだけの場所だと考えていた。

それだけに、そんな所に行つてどうするとかえが真つ先に思い浮かんだのだった。

だが、初音はその後で理由を述べる。

「だってね、全部の木に電気がつくんだよ？ 知ってる？」

「いや……クリスマスにわざわざあんなどこ行かねえし」

「すつごく綺麗なんだって……去年からそうだったんだって、先生がねえ、言ってた」

「へえ……」

楽しそうに話す初音を見て、結弦は少し嬉しくなった。

なるべくなら初音の願いを叶えてやりたい……そう考えた結弦は、

「んじゃ……そこ行くか？」

「行けるの？」

「行けるように掛け合ってみる。もし駄目でも、内緒で連れてってやるよ」

すると初音は、一度『本当？』と尋ねる。

結弦がそのことに対して肯定の意を示すと、

「やった〜♪ありがとうお兄ちゃん♪」

……これまでで、一番大きな『ありがとう』だった。

そして、その『ありがとう』を聞いた結弦は、絶対にこの願いを叶えてやりたいと思うようになった。

まずはお金をたくさん貯める為に……バイトのかけもちを始めた。

家では、寝るだけの生活になった。

疲れのあまりに……他に何もすることが出来なくなっていたのだ。
そして結弦は思う。

「(今は目的があるから働ける気がする)」

ただ一つ、結弦が心配していることは……初音の体調が、悪くなっていることだった。そのせいで、医者からの外出の許可は、当然降りなかった。

だから結弦は、面会時間が終わった後、病室に忍び込み、初音を夜の街へと連れ出した。

※

街の大通りは……今までで見たこともないほど絶景となっていた。

それこそ……この情景を、いつまでも見ていたい程だった。

雪が降っているということもあり、その光景は……どこまでも幻想的だった。

「すげえ……！ おい、見えてるか！ すっごく綺麗だぞ!!」

心なしか、結弦自身も興奮を覚えていた。

背中におぶさっている初音も、

「うん……凄く綺麗……」

弱々しい声で、しかししっかりと感動を覚えていた。

それが結弦にとっては嬉しいことだったのか。

「だな……凄く綺麗だ。俺も来てよかったよ。お前のおかげだ！」

嬉しそうに、そう語りかけるのだった。

そして、さらに言葉を続ける。

「さあて、これから楽しい時間が続くぞ？　まずはプレゼントだ。何でも買ってやる。兄ちゃん実は、この日の為にすげえ貯金貯めてきたんだぜ？　だからどんな高い物でも買ってやる。何が欲しい？」

すべては、初音を喜ばせる為。

初音を背中におぶる結弦は、これから訪れる楽しい時間を思い浮かべながら、そんなことを初音に向かって言っていた。

……自分自身も楽しくなかったのかと聞かれれば、恐らくは嘘になるだろう。

結弦も、こんなにも美しい景色を見れているのだから、少しばかり

テンションが上がっていたのかもしれない。

「まず店に入ろうか。宝石店でもいいぜ……あ、普通にデパートの方がいいか？」

「お兄ちゃん……」

「ん？」

その時、初音からそんな声が聞こえる。

結弦は、その場に一旦立ち止まり、初音の言葉を聞く。

そして初音は、一言……こう言ったのだった。

「ありがとうね……」

「あ……ああ！」

その言葉が嬉しくて。

結弦は、早く初音に楽しい想いをさせてやりたいと考えた。

だから、もう一度歩き出し、そして、矢継ぎ早に、

「買い物の後にもな、いいこと待ってるんだぞお？ 今度は夕飯だ！ よくわからない

けど、雑誌に載っていたいい店予約してあるんだ……」

大きなクリスマスツリーの方へ向かうように歩きながら、背中におぶさっている初音

に向かって結弦は言う。

その後も……彼は歩きながら、一人で語り続けたのだった。

*

「では、行きます」

「このまま一人であの家で暮らしていくの？ 寂しいだけでしょ？」

「大丈夫です、慣れてますから」

「そう？ ……本当に大丈夫かしら。困ったことがあつたらいつでもいっておいでね。

ご飯だっていつでも食べさせてあげるから」

「……はい、ありがとうございます。このたびは、本当にお世話になりました」

身よりが誰ひとりいなくなった結弦は、しばらくの間親戚の家に引き取られていた。

しかし結弦は、自分からその家を出ることにした。

理由は……このままいても、生きる意味を再び見つけることが出来そうになかったからである。

「(俺は……ちゃんと生きがいを持って生きていたんだ。生きる意味は、すぐそばにあったんだ)」

彼が気付かなかった……生きがい。

それは、妹の初音に、笑顔で『ありがとう』と言ってもらえることだった。

それこそが彼の生きがい……彼の生きる意味だったのだ。

それだけで、彼は生きていられたのだ。

しかし、彼はそれに気付かなかった。

「(バカだ俺……今頃気付くなんて……!!)」

今気付いても、失った後では……もう遅い。

「(そんな大切な存在だったのに……何もしてやれなかった……!!)」

募るのは、後悔ばかりだった。

大切な存在だったのに……彼女がいるだけで生きていられたのに。

結局彼は何もすることが出来ず……。

初音はただ、結弦の買ってきた漫画雑誌を病室で読む……そんな人生しか、送ることが出来なかったのだ。

「(そして……そんなアイツを失った俺の人生は……もう、終わってしまったのだろうか?)」

気付かない幸せに、満たされていた日々。

その時間は、もうすでに過ぎ去ってしまった。

後戻りのしようのない……幸せだった、ほんの一瞬の時間。

そして結弦は、思った。

「(もう俺には……何も残されていない)」

それは、もう彼には生きている意味がないということだった。

このまま生きる意味も見出せず……惰性する毎日を送ることも辞め。

彼は……自らの人生を、絶つてしまうかもしれない。

だが……そんな彼が、ただ目的もなく道を歩いていただけの彼は、

とある病院の前で繰り返し広げられている会話を、偶然耳にしていた。

「お世話になりました……!!」

「退院おめでとう」

「ありがとうございました♪」

それは、小さな女の子が、初音くらい年の女の子が。

両親に見守られ、看護師に頭をなでられ。

そして、退院の喜びを分かち合っている場面だった。

この場面を見た時……結弦の頭の中で、何かのスイッチが入った。

「（俺はもう一度……生きがいを見つけられるかもしれない。生きる意味を、見つけれられるかもしれない……この命を、誰かの為に費やせるのなら……!!）」

そして結弦は、本屋で大量の参考書を購入し、医学事典等も購入した。

そう……彼は、医者になることを夢見ようと思ったのだ。

その日からの彼は……人が変わったかのように、勉強し始めた。

学校では成績優秀生徒として名を連ねるまでに至った。

そうして、着実と自らの夢を叶える為に……毎日を生きて行くようになった。

だが……そんな夢すらも奪っていった、とある事件が起きた。

それは、彼がとある名門大学の受験の為に、電車を使っていた時のことだった。

外は雪が降っていて、真冬の受験シーズンの為か、電車内には何人か学生の姿も見受けられた。

結弦は、そんな電車の中でつり革につかまり、受験票を確認する。

そこには自分の顔写真と、『音無結弦』の名前が記されていた。写真から見受けられるように、彼は左目を覆っていた紙を切り、さっぱりとしていた。

「……………」

少し、電車が揺れたような気がした。

だが、気のせいだと考えた結弦は、そのままもう一度受験票に目を通す。

…………それは電車がトンネルに差し掛かった時の…………ことだった。

「!？」

起こってみれば、それは一瞬の話。

突然電車が、ガタン!! という音を発し、車体は大きく揺れ始める。

車内の電源は消え、パニック状態。

そんな中、結弦は…………手にしていた受験票が、宙に舞ってしまうのを見つけた。

それを取ろうと必死に手を伸ばしたが…………。

伸ばした手が、受験票を掴むことは…………決してなかった…………。

*

「……………」

過去を思い出した時。

音無は…………かなり落ち込んでいた。

そんな音無に、ゆりは尋ねる。

「……………思い出した？」

「……………ああ」

「素晴らしい人生だったとは……………言えそうにないわね」

辛そうに呟く音無の言葉を聞いて、ゆりは言う。

そして音無は、目の前にいる直井とゆりに向かって、言った。

「しばらく……………一人にしてくれ」

「……………」

その言葉を聞くと、ゆりは無言で部屋から出ようとする。

その際に、未だに椅子に座ったままその場を動こうとしない直井の肩を叩き、早く出ろと目で語る。

それを悟った直井は、音無を心配するような眼差しを浮かべながら、ゆりと二人、教室から出て行った。

ピシヤツという音がして、教室の扉が閉まったのを確認すると、やがて頭の中で、思考を始めた。

「(情性で生きて、無気力だった俺は……………自分の生きる理由を、お前に教えてもらって……………見つけて……………それで、夢半ばで死んだのか……………何も成し遂げずに死んだのか……………!!

そんなのつてねえよ……ねえよ……死にきれねえよ……!!」

そして音無は、最愛の妹の名前を……生きる理由を教えてくれた少

女の名前を……呟くのだった。

「初音……!!」

※

夕方の屋上。

一人たそがれているのは……ゆりだった。

音無のあれだけの落ち込みっぷりを見て、やはり記憶を思い出すと言うのが……辛いことだったんだなということを考えていた。

それもそのはずで、この世界に送られる人々というのが、生前に未練や後悔を残した者達だからだ。

音無自身にも、そんな過去があつて当然のことだったのだろう。

片手に持つKeyコーヒーのタブも開けないで、ゆりはフェンスに寄りかかって、ただ空を眺めていた。ちょうどその時のことだった。

「……」

「落ち着いた?」

ポケットに手をつ突っ込んでいる音無が、屋上にやってきた。

ゆりの質問に対して、

「ああ……」

と、短く答える。

「記憶が戻ってしばらくは心が不安定なものよ。貴方だけじゃないわ」

そう言いながら、ゆりはあらかじめ買っておいたもう一本のKeyコーヒを音無に渡す。

音無はそれを無言で受け取ると、

「俺は弱いな……お前の強さが改めて分かった」

呟くように、音無は言った。

しかしゆりはそれを柔らかに否定する。

「そんなことないわ」

Keyコーヒを軽く握りしめて、音無は笑った。

ゆりは尋ねる。

「それで、何か変わった？」

「ん？」

「気持ちよ。これからも戦線に居続けるの？」

その問いに対して、音無は即座に答えた。

「居続けるよ……このままじゃ死にきれねえし」

「そつ。貴方にも目的が生まれたってわけね」

「ああ……」

コーヒーのタブを開けて、それから音無は言った。

「改めて……よろしく」

「ええ……」

カツン、と缶と缶がぶつかり合う音がする。

その後で、音無はKeyコーヒーを一気に飲む。

「……」

ゆりは、そんな音無の姿を見て、優しげに微笑むのだった。

*

「そうか……音無の奴も記憶を思い出したのか」

そう呟いたのは、恭介だった。

廊下で落ち込んでいる様子の音無を見かけたので、すぐ近くにいた直井に真相を確かめたのだ。

すると、

「貴様か……そんなにも知りたければ教えてやる。音無さんは失われた記憶を取り戻し

て、今は落ち込んでいる所だ。むやみやたらと話しかけるんじゃない」

「分かってるよ……アイツが自ら喋りに来るまで、俺はアイツと会話しないからな」
先ほどの直井との会話が鮮明に聞こえる。

中庭で一人、恭介はただ呆然と芝生の上に座っていた。

「しかし……記憶を取り戻すことは、どれだけ辛かったんだろうか。俺なんかは最初からあつた記憶だからそこまでの苦労はなかったが、記憶がなくて、しかもその記憶が後悔ばかりの記憶で……思い出す時は、本当にどれだけ苦しかったことだろうか」

思い出したいくない記憶なら……無理に思い出す必要もない。

音無の記憶だって、本来なら思い出したいくない記憶だったろうに……。

忘れていられた方が、よっぽど辛い記憶もあることだろう。

しかし、恭介は同時に思った。

「忘れたいと思う記憶こそ、本当に大切な記憶なんだな……辛い記憶だから忘れたい。そう考えること自体間違ってるんだよな。だって俺達は、いつまでもこの記憶と共に生きて行かなければならないんだから……もう死んでるけどな」

最後に冗談を言うような口調でそう言ってみせた恭介。

しかし、彼の言うことは正しいことのように思えた。

辛い記憶だから忘れたいと思うこと……それは現実から目を逸らすのと同じこと。

つまり、逃げることとなんら変わりのないことなのだ。

今回音無が記憶を取り戻すと決意したことは、それだけ重大なことだったのだ。

目の前の現実から逃げないで、戦うことを決意したのだ。

「つまりアイツにも戦う目的が出来た……前みたくただそこにいるだけではなく、明確な意思が、アイツを戦線に残らせたというわけか」

これからは、音無自身も神に抗うことになる。

ただし、音無はもう『天使』……奏のことを敵だとは思っていない。

つまり……音無はこれから、何と戦うというのだろうか？

「無論……この世界の創造者でも探し出して、ソイツと戦うんだろうな。これから、長い戦いがアイツらを待ち受けることになるんだろう……」

「……何の話？」

「うおっと!? ……なんだ、立華か」

突然後ろから声をかけられたので、驚く恭介。

後ろを振り向いてみれば、そこには奏が立っていた。

奏は、不思議そうな表情で恭介を見つめると、

「こんな所で何してるの？」

「……見て分かる通りだ。たそがれてる」

「…………そう」

すると奏は、無言で恭介の隣に座ってきた。

思わぬ行動に、またもや恭介は少し驚いてしまうが、その後すぐに落ち着きを取り戻し、

「なあ立華」

「何？」

「…………音無が、記憶を取り戻したようだ」

「!! ……そう」

目を見開いたような感じがした。

恭介はそんな奏の小さな表情の変化も、見逃さなかった。

「何だ、気になるのか？ 音無の記憶について…………」

「…………いえ、そうじゃない」

「じゃあ何だよ」

「…………何でもない」

それだけを言うと、奏は無言になってしまう。

…………静寂の時間が流れる。

夕焼け空が、いやに恭介と奏の目の前で自身を強調するかのよう輝いている。

「まぶしいな……夕日」

「ええ……」

「お前……音無に対して何か言いたいこととかあるんじゃないのか？」

「……」

音無のことを話題に出すと、奏は無言となつてしまう。

ただ、頬が赤くなっている所から見ると、どうやら音無に対してなんらかの感情を抱いていることは確かだった。

「お前、顔赤くなつてるぜ？」

「……夕日のせいよ」

「……まあ、そういうことにしといてやるよ」

理由はよくわからないが。

この時の恭介は、奏との会話を楽しんでいるようにも、見えた。

episode 14 Fishing

「で、報告って何？」

いつものように、校長室にて作戦会議が始まった。

ゆりは校長の椅子に座り、高松の報告を聞く。

「本日の食券が不足しているとのことですよ」

「ふむ……それはなかなかまずいことだな。私達も空腹は感じるのだから、それはそれで辛いものがある」

来ヶ谷の言うとおりに。

この世界が例え死後の世界といえども、この世界の住人はお腹は空く。

飢えはしないが、空腹だけはどうしても感じてしまうのだ。

もつとも……生きていた頃の生活を再現している世界という点では、それも合致するのだが。

「どうする？ トルネードいつとくか？」

藤巻がそう提案する。

『トルネード』とは……音無が初めて戦線に入った時に行った『オペレーショントルネー

「緊張なんてレベルじゃないぜ？ モンスターだぞモンスター!!」

少し身体を震わせているクドに対して、音無は興奮したように言う。

そんな音無の姿を見て、呆れがちに日向は言った。

「ちよつと歩いた所に川があるだろ？ そこで食糧の調達だ」

「……」

先ほどまで好き勝手に想像していたクドと音無の二人が……固まった。

そして音無は、ようやつとこう尋ねる。

「そ、それってもしかして単なる川釣りなんじゃ……」

「そうだけど……それがどうかしたか？」

何を言っているんだ、というような表情で、日向は言う。

それに対して、音無は『ああ』とだけ答えた後、

「(また釣られてバカな想像してしまった……)」

と、心の中で呟いた。

「来ヶ谷さん……私、とんでもない勘違いをしていたようです」

「まあ……仕方ないだろう。あんなにも壮大なスケールのオペレーション名を言われてしまえば、勘違いすることだってあるだろう。それよりも、そんな勘違いをするクド

リヤフカ君は…… 可愛いぞ」

「むぎゅっ！」

可愛さのあまりに、来ヶ谷はクドの身体を抱き締めていた。

苦しさのあまりにクドが呻き声をあげていることに来ヶ谷は気付かない。

「……見境なしですね」

「言ってやるな。あれは来ヶ谷なりのスキンシップなんだよ……多分」

「にしてはかなり過度なスキンシップだけだな」

ユイの言葉に答えた日向のセリフに、音無は思わずツツコミを入れていた。

*

「ほう……川で釣りか」

その話はリトルバスターズのメンバーにも伝わってきた。

まあ、来ヶ谷とクドが戦線の中にいるのだから、直ぐに伝わるのも道理だろう。

「どうするのよ？ 私達も乱入するの？」

ワクワクしたような表情を見せて、沙耶が言う。

そんな沙耶の言葉を聞いて、来ヶ谷は言った。

「その件なら安心してくれても構わない。私達リトルバスターズが参加することは、もうゆり君には伝えてある」

「話が早いな、来ヶ谷」

「まあ、楽しいこと好きの恭介氏のことだから、話に出せばすぐに食い付いてくると思ってな。人数分の竿を準備するという点でも、前もって言うっておく必要もあつたからな」
「流石は来ヶ谷だぜ！俺のこと分かつてるじゃねえか！」

興奮したような表情を見せて、恭介は騒ぐ。

「……では、皆さんの分のサンドイッチは私に任せて下さい。もしかしたらお腹が空いてしまうでしょうから」

「ああ、頼んだぞ……西園」

美魚は食事担当となった。

当然、リトルバスターズのメンバー以外にも、戦線メンバーの分の食事も作るようになるのだが、美魚にとってはそこまで苦じやないだろう。

「うおおおおおお！俺の筋肉の出番だぜ!!」

恭介以上に盛り上がっているのは、真人だ。

釣りにそこまで筋肉が必要かどうかはともかくとして、とりあえず盛り上がる上では結構必要な存在だった。

盛り上がる人数が増えれば増える程、周りの人間も釣られて盛り上がるものだ。

その証拠に、

「うん！なんだか楽しくなって来たよお！」

「いつときですが、ハルちゃんは生前かなりの釣りマニアでしたから、絶対に負けないデスよ」

「わふっ!!? 三枝さんいつの間に釣りなんてやってたですか!?!」

「甘いね、クー公。私の実力は、かの釣り吉さんが認めた程の実力だよ」

「本当ですか!?!」

「安心しろ……葉留佳君の話は100%嘘だ」

「姉御お!! それはないデスよ!!」

「なに……本当のことを言ったままで」

葉留佳とクドがわけの分からないテンションで話していたことに呆れ、いつの間にか来ヶ谷は二人の会話を止めに入っていた。

「楽しみだね……さーちゃん」

「え、ええ……そうね」

流石に『さーちゃん』と呼ばれ慣れていない沙耶は、小毬がそう呼ぶ度に少し戸惑ってしまうのだった。

「それじゃあ……今回のミッションは、川でたくさん魚を釣れ、だな……!!」

恭介が高々とそう宣言すると、メンバー全員が声を合わせて、

「!!」
「!!」
「!!」
「!!」
「!!」
「!!」

と、拳を高く上げて、叫んでみせたのだった。

※

その日の昼ごろより、一同は行動を開始した。

授業中だが抜け出して、戦線メンバー＋リトルバスターズメンバーは川へと向かう。

途中でガルデモメンバーも交えつつ（実はすでにユイがメンバー調整をしていた）、そのまま川へ直行しようとしていた。

だが、そんな時に。

「……あ」

植物園の前を通る時。

音無は、その中央に、しゃがんでいる少女を見つけた。

その少女は麦わら帽子を被っていて、何やら花を眺めている様子だった。

「……そんな所で何してるんだ？」

自然と、音無は話しかけていた。

しゃがんでいた少女は、立ち上がって……手を広げる。

すると、その中にいた蝶が、何処かへ飛び去って行った。

その蝶の行方を音無が追っていると、

「草むしりとか、色々……」

短く、少女——立華奏は、そう呟いて見せた。

その声を聞いた音無は、首を奏の方に向ける。

そして……花壇とはいえど、花に囲まれている奏の姿を見て……一瞬、見惚れてしまっていた。

「そ、そうか……」

恥ずかしさのあまりか、少し頬を赤らめて、右手で頬を軽く搔く。

その後で、何かを思いついたような表情を浮かべて、

「そ、そうだ！ お前も来いよ！」

「え？」

当然、何処へ行くか目的地も伝えられていない奏は、そう答える。

そんな奏に説明するように、音無は言った。

「今からみんなで川釣りに行くんだ」

「川……？ あそこに近づくのは校則違反よ。危ないから」

いつもの口調で、奏はそう言う。

しかし、音無はそれでも諦めなかった。

「いいじゃねえかよ。お前だってもう生徒会長じゃないんだし、破ってやれよ」

「でも、生徒だから……」

それでも川に行くことを拒む奏。

少し考える素振りを見せて……音無は、何かを思いついたような笑顔になった。

「……………へっ！」

「……………」

奏に近づいたかと思うと、その手を掴み……引っ張って行った。

何の抵抗もしてなかった奏の身体は、音無によって引っ張られて行く。

その際に、麦わら帽子がその場に落ちたのだが、二人の内のどちらかが拾うことはなかった。

*

「「「うう……!!」」」

「あ……いや、その………」

音無が奏を連れて川まで来てみれば、戦線メンバーは全員で奏から離れて塊となり、警戒心を剥き出しにしていた。

それも当然だろうと思われる……何故なら、戦線のメンバーにとっては、奏は……『天使』は敵なのだから。

ただ、塊となっている彼らの陣形は、少し可笑しいようにも見えた。

リーダーであるゆりの背後に隠れているのは、百歩譲っていいとしても、前衛として

戦える筈の野田と藤巻が、一番後ろに隠れていた。

更に言えば、男子が女子の背後に隠れているという、何とも情けない姿を見せていた。「何だか見ていて情けないね……」

「みゆきち……それは言っちゃいけないと思うよ」

少し離れた場所で、ガルデモのメンバー（ユイを除く）と、リトルバスターズのメンバーが、呆れた表情で戦線メンバーを見ていた。

普段『天使』と戦うことのない彼女達は、特に怯える必要は何処にもない為に、平然としていた。

「まったく情けないぜ……筋肉が足りてねえからこんなことになるんだぜ？」

「同感だ」

「お前ら……二人揃ってアホだろ」

およそ今回のこととは何の関係もなさそうな話題を出しては、勝手に盛り上がっている真人と謙吾の二人。

そんな二人を見て、ひさ子は思わずそんなツツコミを入れていた。

「お前、なんて奴連れて来んだよ……」

最初に戦線メンバーの中で話しかけてきたのは、日向だった。

彼自身も怯えているような素振りを見せつつ、ようやつのことであつた。

「いいじゃねえか。混ぜてやろうぜ？」

「まあ……俺も音無の意見には賛成だ。お前達はどうだ？」

音無の言葉の後で、恭介が戦線メンバーに尋ねる。

リトルバスターズのメンバーも音無や恭介と同じ意見のようで、恭介の言葉の後でうんうんと頷いていた。

だが、野田が反論する。

「敵だぞ！ 我らが戦線の宿敵だぞ!!」

「アホですね☆」

「浅はかなり……」

その後で、ユイ・椎名が付け加える。

どうやら戦線メンバーは未だに奏を敵だと思っっているらしい。

「聞いてくれ！ もう無害だ……敵じゃない!!」

音無は必死に説得する。

「だがまがりなりにも元生徒会長だぞ!!」

だが、野田はまともな反論を述べる。

その後で、高松が付け加えるように言った。

「ちなみに、現生徒会長代理もいますが」

「その通りです……が、その前に僕は神です」

「わふっ!? 直井さんは神だったですか!？」

「能美よ……こんな奴の言葉をまともに信じるな」

素直に驚くクドに、謙吾が呆れながらそう言った。

「どうすんだよ、ゆりっぺ」

「……」

日向がゆりにそう尋ねる。

するとゆりは、一旦奏のことを一瞥して、少し考える。

そして……。

「もう生徒会長でもないし、??いいんじゃない?」

「「うええええええええええ!!」」「」

これには一同は全員で驚いた。

何しろ、『天使』に一番敵対しているはずのゆりが、まさか賛成するとは思っていなかったからだ。

「だ、大丈夫かよ……」

「何か凄いメンバーになりつつあるな……」

藤巻と日向が、そんなことを呟いた。

*

「そういえば私達……何も持ってきてきてないけど、大丈夫なのか？」

「あ、私もそれ思った！ どうなの？ 音無君」

「どうなのと聞かれてもな……」

岩沢の言葉に入江が反応したと思つたら、自分に話が振られるとは思っていなかった。音無は、運悪く回答を持ち合わせていなかった。

それをフォローするかのように、日向が言った。

「既にギルドに連絡が行ってるから大丈夫さ」

「ギルド？ ……どうしてギルドが話に出てくるんだ？ あそこは武器を作る場所だろ

うに」

日向の言葉を偶然聞いていた来ヶ谷がそう答えると、日向は言葉を付け足した。

「そういうマニアもあそこにはいるってことだよ」

「……マニア？」

その言葉が何を意味しているのか分からず、音無がそう呟く。

すると、葉留佳が何かに気付いたかのように言った。

「あの人……何をしていますのしょうか？」

「……さあ。私には分からないわ」

眩くのは、沙耶だった。

葉留佳が指差す先には、岩場に座り、麦わら帽子を被った青年だった。

よく見ると……釣竿を持っているようにも見えた。

瞬間。

「しゃあああああああああ!!」

「!!」
「!!」
「!!」
「!!」

驚きの声をあげる一同。

それもそのはずで、目の前にいた青年が……うまく魚を釣り上げたのだから。

「……彼は?」

「斉藤って奴だ。銃にも詳しいが、ギルドではフィッシュ斉藤と呼ばれる釣りマニアでねえ」

「斉藤……だと……!?!」

「何驚いてるんだよ、恭介」

岩沢が、若干呆れたような口調でそう呟いた。

それを無視するかのようには、日向の説明は続く。

「このオペレーターの時だけは、大量の釣り道具を荷車に積めて地上まで上がってくる」

「……あの距離をか!?!」

そうツツコミを入れて、そして一言。

「ただ釣りが好きなんだよ……」

「ようはアホですね☆」

ユイによる付け足しの言葉が入ったところで、

「よおし、始めるか!」

「おおおおお!」

松下の言葉を受けて、戦線メンバー十ガルデモメンバー十リトルバスターズメンバー十奏による川釣りが始まった。

※

そうして始まった、一同の川釣り。

こんなにもたくさん人が来ていることもあって、かなり賑やかなものとなっていた。

釣りというものは、本来集中力が必要となってくるので、もつと静寂な時間が流れるものだと思いきや。

「よっしや! 釣れたぜ!!」

「また釣れたのか? 恭介は釣りがうまいな……」

「まあな。まさみ、俺がコツを教えてやろうか?」

「あ、ああ……お願いしてもいいか?」

まず、恭介と岩沢は、謎の桃色空間（恭介は無意識に、岩沢は恭介のことを意識しつつ）を展開していて、近くにいた来ヶ谷が逃げてしまう程だった。

「恭介氏はああいったことを普通にやって見せるから凄いな……」

「ゆいちゃんは相手はいないの？」

「こ、小毬君……君は一体突然何を言い出すのだ？ それにその名前で呼ぶのはやめろと……」

「え〜？ ゆいちゃんは、ゆいちゃんだよ〜？」

「呼びました〜？」

小毬が『ゆいちゃん』と連発するものだから、今度はユイの方が来てしまった。

「う〜んとね、『ユイちゃん』に用があつたわけじゃなくて……『ゆいちゃん』に用事があつたの〜」

「……へ？ それって変わらないじゃないですか」

「あれ？ えつと……」

「つまり、君にはなく私に用があつたということだ」

小毬の説明だと、いつまで経つても誤解が解けないと考えた来ヶ谷は、ユイにそう言ったのだった。

するとユイは、

「ああなるほど！ 来ヶ谷さんは名前が『唯湖』だから、小毬さんに『ゆいちゃん』って呼ばれてるんですね？」

「うう……だからその名前前で呼ぶのはやめてくれ。あまり慣れてなくてな……」

「そうなのか？ だったら俺が呼んでやるよ……ゆいちゃく……」

「死ね」

ザン!!

いきなり現れて『ゆいちゃん』と呼ぼうとした藤巻を、来ヶ谷は腰にぶら下げている模造刀を使って……一閃。

藤巻はそのまま気絶し、恐らくしばらくの間は身体を動かすことはできないだろう。

「ふっ……」

「(うわあ、この人を敵に回すのだけは絶対にやめよう)」

ユイは、心の中でそう誓ったのだった。

同じころ、音無が普通に川釣りを体験していると、竿を持って立っている奏がいた。

何かを考えているようで、その表情はやはり無表情なのだが、何処か戸惑いを感じられた。

「……立華」

「……？」

だから音無は、無意識の内に奏に話しかけていた。話かけられた奏は、首を傾げて音無を見る。

「俺達は消えない。だから、仲良くしてもいいんだよ」

「……」

「ほら、みんなと一緒に釣りしよう」

「……うん」

音無の言葉に頷くと、奏は竿を後ろに思い切り振る。

すると……偶然後ろにいた日向の口に、

「イハハハハハハ！ 伸びる伸びる！」

「……ここからどうするの?」

「違う違う！」

どうやら釣りについてあまり詳しくないらしい奏に、音無はとりあえずある程度のことだけは教えることにした。

まずは日向の口に刺さった針を取る作業から。

「ふう……助かったぜ。俺、あっちに行ってみるから、『天使』のことはお前に任せませ」

「ああ……分かった」

釣り道具を持って別の場所へ移動する日向を見送った後、音無は奏の方を向いて、

「よし……まずはルアーか、餌を針の先につけるんだ」

「……うん」

言われて、奏は針の先に、うねうね動いている虫をつけた。

それを平然と眺める奏に、音無は思わず一言。

「お前……虫平気なんだな」

「次は？」

奏は次の行動を要求する。

音無は、竿を振るようなジエスチャーを交えながら、

「川に向かって竿をおもいつきり、振ってみろ！」

「……！」

奏は、言われた通りに竿をおもいつきり振りかぶって……そして、一気に振り下ろした。

すると、

「うおわあああああああああ！」

何か人らしきものが、空の彼方へと飛び去っていくのが目に映った。

それは確かに人であり……竹山であった。

鼻に餌をくっつけた状態で、何処かへ飛んでいっていた。

「た、竹山ああああああああ!!」

「クライストとおおおおおおおおお!」

キラ〜ン。

そして竹山ま……その言葉を残して、何処かへ飛んでいってしまったのだった。

「見かけによらず、筋肉があるんだな……俺も負けてられないぜ!」

「奇遇ですね、私もそう思っていたところでしたよ」

「そうか……実は俺もだ」

己の筋肉を自慢に思う、真人・高松・謙吾の三人衆が、奏が竹山を投げ飛ばすところを見て、変な対抗心を燃やしていた。

「つかお前……凄い怪力だな」

奏の横にいる音無は、驚愕の表情を浮かべつつ、そう尋ねる。

すると奏は、いつもの表情で、一言。

「オーバードライブはパッシブだから」

「……パッシブ?」

「もしかしたら……」

「?」

その時。

今まで黙っていたフィッシュクワイクが、奏の近くに寄ってきて、そして言った。

「もしかしたら、アンタならいけるかもしれないな」

「? ……何がだ?」

音無がそう尋ねている内に、奏はもう一個の餌をつけて、川の中に入れていた。

そんな動作をフィッシュクワイクは見つつ、話を続けた。

「主を釣り上げるってことだよ。ソイツはオペレーションネーム通りの化け物なのさ」

「……?」

音無が反応に困っていた、その時。

音無の裾を奏が引く姿があつた。

「……何か引いてる」

「え?」

瞬間、竿がビシツと悲鳴をあげたかと思つたら……突如として川の中央で巨大な竜巻が発生した。

それを見たフィッシュクワイクが一言。

「モ……モンスターストリーム!」

「え? ……これが!」

音無は、たじろぎながらそう尋ねる。

フィツシユ齊藤は、あまり冷静とは言えないような口調で、言った。

「本来モンスターストリームは主の怒りの証。これが起きたら即全員離脱!! だが……その子ならもしや……!!」

期待を込めてフィツシユ齊藤は言う。

しかし、奏の身体は……徐々に川に引きずり込まれつつあった。

さすがにこのままではまずいと思ったのか、音無は自然と身体を奏の方へ動かしていた。

「……マジでやんのかよ!! どんだけでかいんだよ!! 竿が折れるぞ!!」
奏の身体をしつかりと抱きしめ、川に引きずりこまれないようにする。

すると、音無の後ろにフィツシユ齊藤がやってきて、

「おいらの腕を侮つちや困る! 主にも耐えられる特別製だ!!」

「だとしても! このままじゃ絶対に無理だああああああああ!!」

さすがに主を釣り上げるとなると、三人じゃ人手不足だ。

そう考えている最中、

「!? なんだよ……主をやる気か!? 正気じゃねえな……!!」

最初に気付いた日向が、音無達のやろうとしていることに対してまずそう感想を持ち、そして。

「松下五段！ 肉うどん優先して回してやるから手伝え!!」

「おうよ!!」

日向は松下を呼び、どンドン音無達に加勢して行く。

「おいお前ら……俺達も行くぞ!!」

「「おおお!!」」

恭介の指示のもと、リトルバスターズのメンバーも主を釣り上げるのに協力することとなった。

どうすればいいか迷っているガルデモメンバーに、

「お前達もついてきてくれるか!?!」

「恭介が行くのなら……私だつて行くさ! 行くぞ、みんな!」

「ま、マジでか!?! しょうがねえな……関根、入江! 私達も行くよ!!」

「う、うん!!」

次第に人数は増えて行き、やがてその場にいる全員が主を釣り上げる為に全力を出すことに。

後から来た人は前の人を支えるように。

順番に後ろについて行く。

「せゝの!!」

音無の声に合わせて、全員が引っ張って行く。

その規模は……もはや並半端なことではなかった。

「うおおああああああああああああああああああああああああああああ!!」

「!? 今だ!!」

フィッシュ斉藤の合図を聞いて、奏が動いた。

タン、とりズムをとったかと思うと、そのままの勢いで……上に飛んだ。

「つ、釣り上げやがった!」

「俺達ごとかよ!!」

「どっちがモンスターだよ!!」

「ねえこの状況!!」

「まずいですね……」

上から順番に、日向・藤巻・野田・大山・高松の順番。

メンバーとして参加していた人達が、上空に舞い……そして、その下には大きく口を

開ける、川の主が。

「わ、わふ!? かなり大きいです……」

「てか……これはまずいんじゃないか!」

素直に川の主の大きさに驚くクドに、さすがにこの状況はまずいと判断した恭介。

「このまま落ちたら食われるぞ!!」

「crazy for you!!」

「神は落ちない……うわああああああああああああああああ!!」

「浅はかなり……」

松下・TK・直井・椎名の四人の声と共に……一同は重力に逆らうことなく、真下へと転落する。

だがその先には……大きな口を開けた川の主。

このままだと、確実に彼らは食われてしまう!!

「」「」「」「食われるうううううううううううううううううう!!」「」「」「」

「助けなきや……」

一番川の主から遠い位置にいる奏が、落ちて行く一同を見てそう呟く。

すると、

「Gird Skill Harmonics」

上空にて奏は分裂し、そして真下に落ちながら、両腕から『Hand Sonic』を出現させる。

そして、川の主を……上空で捌いてみせたのだった。

捌かれた川の主は、当然空中でバラバラとなり……下の岩場に肉片が散らばっていつ

た。

*

「川に釣りしに行つた後は料理とはな……」

「なんとというか、慈善事業をやっている感じだな」

「確かにあれだけの魚なんて食いきれないけどよ……料理は俺の苦手分野だぜ」

並んで包丁で魚を捌きながら、恭介・謙吾・真人の三人が呟く。

同じように、別の場所でもこんな話し声が聞こえてきた。

「まるで慈善事業だな……」

「戦線どころか、何かの奉仕団体になつてるぞ」

野田の言っていることは、正しかった。

音無の発案によつて、あまりに余つた川の主の肉を一気に調理して、一般生徒に分けることにしたのだ。

グラウンドの中央で調理をして、そこにはいつの間にか行列が出来上がっていた。

「でも、戦う相手もいなくなつちやつたし……戦線でもなくなつちやうのかな？」

大山がそう呟くと、

「んじゃ一体何になるつてんだよ？」

藤巻がそう尋ねてきた。

苦い笑顔を浮かべて、大山が一言。

「うーん……死なないうようにぐうたらしてますチーム？」

「なんだよそりや……」

藤巻が小さな声でそう呟いた。

「まさかこんな時間が訪れるなんて思ってもみなかった……」

隣で調理をしている奏を眺めて、音無は心の中でそう呟く。

そして、いつの間にか音無は奏に対して言葉が発していた。

「なあ立華……下の名前でもいいか？」

「どうして？」

その質問は、当たり前のようにも聞こえた。

何せいきなり『下の名前でもいいか』なんて聞かれたのだから。

その理由を、音無はこう言った。

「親しくなったからだよ……」

「なった？」

「なったじゃないか。一緒に釣りに行って、一緒に料理して……それに、最初から思っ

たんだよ、綺麗な名前だなんて……」

「……」

奏は、何も言わなかった。

ただ黙々と手を動かして、しかし音無の言葉を無視しているわけでもなかった。そんな奏に、更に音無は言葉を付け加える。

「好きだよ……お前の名前」

「……」

「『奏』って、音を奏でるって意味だろ？」

「貴方がそうしたければ、どうぞお好きに」

音無の言葉を遮るかのように、奏はそう言った。

そんな奏に、今度は自分の名前を教える。

「俺の名前は結弦。弦を結ぶって書いて結弦。そう呼んでくれていい」

「……うん」

小さく、奏が頷いた。

それを見て満足した音無は、

「じゃあ……奏。聞いて欲しい頼みがあるんだ」

「何？」

「これからも……みんなと一緒にいてくれ」

それは、音無の心からの願いだった。

それに対して奏は、

「どうして?」

と尋ねるばかり。

音無は、その理由を説明した。

「もう誰とも戦って欲しくないから……みんなと楽しく過ごして欲しいから。その……それに……俺もお前と一緒にいたいからな」

顔が赤くなつていくのを、音無は感じていた。

身体が少し温かくなつていくのを感じていた。

やがて奏は、少し考える素振りを見せた後に、

「貴方がそう言うなら、そうする……」

「……約束だからな」

「……うん」

奏は、少し何時もよりも感情が籠った声で、音無の言葉に頷いた。

「……ふっ」

そんな彼らを見て、恭介は柔らかい笑顔を見せていた。

episode 15 Ranking Battle

「ランキングバトル？」

ゆりは、目の前でニヤけている恭介に対して、そう尋ねる。

話の始まりは、ゆりの眩きだった。

「……暇ね」

奏が敵ではなくなってから数日が経過した。

今では校長室にいて、何人かと関わり合っている程だった。

とは言っても、奏は授業に出ている為に、校長室に来る時間は放課後からとなっていた。

更に、リトルバスターズのメンバーも、ちよくちよく校長室に来るようになっていた。奏と戦わなくなったことから、恭介がもういいだろうと、とりあえず校長室には来るようになったのだ。

話を元に戻すが、恭介はゆりのそんな眩きを聞いて、こう言ったのだった。「だったらランキングバトルでもやらないか？」

そして、現在に至る。

「ランキングバトルって……前に僕と三枝がやったあの戦いのことか？」
「その通り」

直井の言葉を聞いて、恭介がそう答えた。

ある程度ランキングバトルの説明をした後（何回かランキングバトルのシーンを載せている為、説明は省かせて頂いた）、恭介はそれをここにいるメンバーでやらないかという事になった。

ただし、ただ戦うのでは面白くないということ、

「ルールは多少変えさせて貰うぞ。まず参加メンバーを二つのチームに分け、校内に散らばってもらう。相手に遭遇したところで、バトルしてもらおう」

「けどそうなると武器はどうするんだ？」

「それはチームを決め次第、この場で使う武器を決める。実は既に何個か武器になりそうなものを持って来てるんだ」

そう言つて、机の上にある様々な武器を見せる。

エアガンやメリケンサック、バットなどの明らかなる武器から、けん玉・アイスの当たり棒・タオル・うなぎパイなどの、一見明らかに武器になりそうにはないものまで、その種類はまちまちだった。

「さ、これが武器か……俺の武器とかは使つてはいけないのか？」

「私物を武器にするのは禁止。だから、野田のハルバードや来ヶ谷の模造刀も使用禁止だからな」

「うむ、それは分かっている」

「ちつ……分かったよ」

「まあ……いいか」

恭介の言葉を聞いて、来ヶ谷・野田・藤巻の三人が答えた。

「なるほど……それは面白そうね」

「だろ？ だからお前の銃も使用不可能になるわけだ……その前に、銃は確実に辞めろ。死なない程度にとかの手加減が出来ないからな」

「分かっているわよ……で、チーム分けはどうするのかしら？」

「もちろん、俺とゆりの二チームだよな。リトルバスターズのメンバーはこっちに、戦線メンバーはゆりのところに」

とりあえず、まずはチーム分けからだ。

恭介とゆりが各チームのリーダーとなることが決まり、恭介のチームは、真人・謙吾・沙耶・来ヶ谷・美魚・クド・小毬・葉留佳を含めた、合計九名。

対するゆりのチームは、音無・日向・ユイ・高松・松下・椎名・奏・藤巻・岩沢・直井を含めた、合計十一名。

「奏……お前も参加するのかよ」

「……棗君にどうしてもって言われたから」

「棗……お前って奴は」

ボソツと音無は、そう呟いていた。

ちなみに、他のガルデモメンバーは、こういうことはあまり得意ではないと言って、メンバーから外れていた。

「時刻は夜の9時。言われた通りの場所に散らばること。状況は常に遊佐から無線を通じて伝わることになっている。だから、この無線機を各自所持してもらう」

そう言うと、恭介は先ほど遊佐から受け取った無線機を参加メンバーに渡す。

それから、全員に向かって言った。

「それじゃあ……健闘を祈る！」

※

PM09:00。

戦いは、ついに幕を開けた。

「そんなわけで、今回は日向先輩と一緒に行動することになりました」

「……ハア」

「いきなり溜め息をつくな!!」

ユイが日向に話しかけるや否や、日向は溜め息をついていた。

二人の手には、それぞれ武器が握られていた。

ユイの方は、竹トンボ。

日向の方は、爪切り。

「どうしてまともな武器を引かなかったんだよ!! よつぽど運が悪かったんだな!!」

武器はクジによつて決められた為に、運がなかった彼らの手には、まともな武器が用意されていなかった。ちなみに、どうしてこの二人が一緒に行動しているのかと言うと、時間短縮の為に二人一組で行動することが常とされたからだ。

そして、振り分けられた結果、この二人が一緒になったというわけだ。

「これじゃあ真っ先にやられそうだな……」

「大丈夫ですよ。いざとなったら日向先輩を置いて私だけでも生き延びてみせますから」

「それ一番やつちやいけないことだからな!!」

日向がユイにツツコミを入れていたら、

「ふむ……君は日向君か」

「あゝ! 日向君とユイちゃんだね」

「……しまった。ユイ君と言えばその可能性もあり得たんだった」

来ヶ谷は、多少この状況となったことを後悔していた。

「何がともあれ……今は君たちを倒すのみだ。言っておくが、今回は手加減は出来ないぞ」

「分かっているっての」

「そんなじゃ行くぞおら!!」

「二人ともよろしくね」

こうして、二対二の真剣勝負が始まった。

ついでに言っておくと、小毬は絵本、来ヶ谷は二人分はあるだろうと思われる程の大きさの毛布だった。

*

歌舞伎町の紅蠍座

来ヶ谷唯湖

&

歩く衝撃映像

神北小毬

V
S

ただの野球バカ

日向

&

ミーハー系メタルバンド

ユイ

「歩く衝撃映像って……」

「まあ……その通りですよね」

「そうだな……」

「ゆいちゃんそんなこと言わないでよ」

「まとめられた!」

「……はじめていいか?」

*

「さてと……まずは俺の攻撃だな」

日向の攻撃。

日向は小毬の爪を極限まで切る!

「あううう……」

小毬に200のダメージ。

小毬は深爪になった!

「どんな効果があるんですか？」

「……いや、特に深い意味はないらしい」

「……バカだろ、日向君」

「えつと……とりあえずいつくよ〜！」

小毬の攻撃。

小毬は手にしている絵本を読み始めた。

「……熊さんのお母さんは病気になってしまい……」

「……なんだよ続きを読んでくれよ!!」

続きが気になるあまりに、日向に300の精神的ダメージ。

「わ、私もだ……」

横にいた来ヶ谷にも、250の精神的ダメージ。

「私の番ですな……」

ユイの攻撃。

ユイは竹トンプを飛ばした。

「ほう……」

「痛い〜！」

来ヶ谷に240のダメージ。

小毬に300のダメージ。

「さて、お姉さんの実力をとくとご覧に入れて見せようではないか……」

来ヶ谷の攻撃。

来ヶ谷は毛布を使って、自分の身体毎ユイの身体を包んだ。

「え？」

「さあ……お姉さんといいいことをしようではないか」

「え？ ……キヤア！ 何処を触って……ヒヤア!!」

……ユイ・来ヶ谷両者共に戦闘不能（ユイは精神的ダメージによってHPが0に、来ヶ谷は満足のあまりに昇天してしまい）。

「んなアホな……」

日向の攻撃。

日向は爪切りで小毬の爪を極限まで切る。

「痛いよ〜」

小毬に300のダメージ。

「お話の続きだよ……」

小毬の攻撃。

小毬は先ほどの絵本の続きを読んだ。

「……………こうして熊さんは、無事にお母さんを助けることが出来ましたとき、おしまい♪」
「うう……………なんていい話なんだ……………涙のあまりに戦う気すら失せてくる……………」

日向に9999の精神的ダメージ。

日向は倒れた。

「やったく勝ったよ〜！ ……私一人になっちゃったけど」

神北小毬、WIN!!

*

「次行ってみよ〜!!」

小毬は、とりあえず毛布にくるまったままの来ヶ谷・ユイ、涙ぐんでいる日向をその場に置いて、その場から移動したのだった。

「うう……………もうイヤ……………」

「まだまだ夜は始まったばかりだぞ」

「いや、だから……………」

二人の夜は、まだこれから始まるのだった。

「何これから何かが起きるような言い方をしないでくださいよ!」

「ふつ……………本当に始まることを、君はまだ知らないだけだ」

「だから始まらないですって!」

ちなみに。

称号の変化は次の通りである。

日向↓『ノリのよいバカ』

ユイ↓『被害者A』

来ヶ谷↓『危険な香りする姉御』

※

続いてこちらは、真人・謙吾ペア。

二人は何やら奇妙な動きをしながら前へ進んでいた。

「筋肉筋肉く!!」

「筋肉筋肉く!!　ワハハハハ！　楽しいな真人よ!!」

「おうよ!!」

両腕を自らの身体の前で左右に動かし、奇妙な踊りをしながら前へ進む二人。

夜の校舎内だからいいものの、ここがもし昼間で、NPC達がたくさんいる中だったとしたら、かなり目立っていたことだろう。

「……何だか、少し戦いにくい相手だな」

「それでもありませんよ。同じ筋肉仲間なんですから、私達も全力でお相手するのみです」

「……俺は筋肉仲間になった覚えはないんだが」

そんな会話を繰り返り広げるのは、松下・高松の二人だった。

松下の手にはけん玉が。

高松の手にはブーメランが握られていた。

まだまともな武器である。

一方、謙吾はハリセン。

真人は……清涼スプレーだった。

「ついに決着の時が来たようですね……」

「おうよ……ここで会ったが十年目」

「百年目だ」

「……決着つけてやらあ!!」

「「ま」まかした!?!」

こうして、謙吾・真人 VS 松下・高松の戦いが始まった。

*

巨大なるアホ

井ノ原真人

&

情熱あふれる剣士

宮沢謙吾

V S

好みは肉うどんです

松下

&

見よ、この美しい肉体（仮）

高松

「（仮）ってなんですか」

「それ以前に、好みは肉うどんなのか……」

「うおおおおおおおおおおおおお！ 俺の称号が前の時から全然変わって

ねえ!!」

「どんまい……だな」

*

「まずは俺からだな……」

謙吾の攻撃。

「マーーーーー……………ン!!」

高松に200のダメージ。

「ぎやあああああああああああああああああああ！ 目が……目があああああああああああああああ
あああ!!」

謙吾に200のダメージ。

「ぐわっ！ これ、範囲広すぎだろ!!」

真人に200のダメージ。

「やりますね……ですが、これでも喰らってください!」

高松の攻撃。

高松はブーメランを思い切り投げた。

「ほっ!」

ミス!

謙吾はハリセンを使ってブーメランの軌道を変えた。

「ぐわっ!」

真人はスプレーで向きを変えようとしたが、無理だった。

真人に500のダメージ。

「いや、スプレーで方向を変えるなど、無茶な話だろ」

「うるせえ!」

「まあよい……今度は俺の攻撃を喰らうといい」

謙吾の攻撃。

謙吾はハリセンで松下と高松にツッコミを入れた。

「なんでやねん!!」

「お前こそなんでだ!!」

ミス!

松下にダメージを与えられない。

「くっ!」

高松に400のダメージ。

「少しまずいか……?」

松下の攻撃。

松下はけん玉を使って真人に攻撃した。

「畜生!」

クリティカルヒット!

真人に800のダメージ。

「後は頼んだぞ……謙吾……」

真人は倒れた。

「真人おおおおおおお!!」

「ということは、自動的に私の出番となるわけですね」

「くそっ……」

高松の攻撃。

高松はブーメランを謙吾目掛けて思い切り投げた。

「真人バリア!!」

「あぶっ!!」

謙吾はとっさの判断で真人を盾にした。

「謙吾……そりやねえぜ……」

真人は息絶えた。

「ま、真人おおおおお!!」

「……いや、やったのはお前だからな」

「真人をこんな目に遭わせて……覚悟は出来ているんだろうな？」

「いえ、ですからそれは貴方が……」

「ふざけるなああああああ!」

謙吾の攻撃。

(理不尽な) 怒りでパワーアップした謙吾が、ハリセンで二人にツツコミを入れる。

高松↓『筋肉フエチ』

*

続いて、こちらはゆり・岩沢ペア。

「それにしても……よく岩沢さんがこんなことに参加してくれたわね。遊びのようなものと言つてもいいかもしれないけど、これも立派な戦闘よ?」

ゆりは、エアガンを調整しながら岩沢にそう言った。

木刀を持つている岩沢は、そんなゆりの言葉に対して、こう答えた。

「なんとなく面白そうだったからね。私もつい参加したくなつたってわけさ」

「……棗君がいたからかしら?」

「なっ!? ……ど、どうしてそこで恭介が!!」

「ふうん……『恭介』ねえ」

「……誰にも言わないでくれよな」

顔を赤くして、岩沢がゆりに懇願する。

するとゆりは、

「分かつてるわよ。誰にも言わないわ」

「……助かるよ」

そんな会話を二人でしていたところに。

「見つけましたです！」

「でかしたわよ、クド！」

物陰から二人の少女が現れた。

一人は水圧がかなり大きい水鉄砲を持った、沙耶。

もう一人は、折り畳み式の傘（これを使って殴ることも可能）を持った、クド。

「貴女達に勝負を申し込むわ！」

「いいじゃない……いっちょやりますか！」

そして、ここに沙耶・クド VS ゆり・岩沢の戦いが始まった。

※

将来の夢は普通のお嫁さん

ゆり

&

恋するボーカルは無敵少女

岩沢まさみ

VS

自虐クイーン

朱鷺戸沙耶

&

みんなのマスコットキャラクター

クド

「また私の称号なの……?」

「マスコットキャラクターですか……」

「こ、恋するボーカルってなんだ!」

「オーディオコメンタリーネタをやってくるとは……やるわね」

*

「と言うわけで、私の先攻よ!」

ゆりの攻撃。

ゆりはエアガンでクドを撃った。

「わふっ!」

ミス!

開かれた傘によって攻撃は防がれた。

「あんな使い方ありなの!」

「今度は私の番よ……」

沙耶の攻撃。

沙耶は水鉄砲を一発撃った。

「ちっ！」

ゆりに200のダメージ。

「木刀か……とりあえず殴ればいいんだな？」

岩沢の攻撃。

岩沢は木刀でクドを殴った。

「ひゃあ！」

クドに250のダメージ。

「いざ勝負です……!!」

クドの攻撃。

クドは畳んだ傘で岩沢をつついた。

「なんの！」

ミス！

岩沢の木刀によって攻撃は弾かれた。

「こんな感じでもいいのか？」

岩沢の反撃。

クドの鳩尾を木刀で殴った。

「わふっ!？」

クリティカルヒット!

クドに980のダメージ。

「わふっ……痛い。です……」

クドは倒れた。

「これで相手は貴女一人ね」

「くっ……貴女には負けない!」

「いい度胸じゃないの。似た者同士だからと言って手加減はしないわよ!」

ゆりの攻撃。

ゆりはエアガンで沙耶を撃った。

「私を甘くみないでよ!」

ミス!

沙耶は華麗な動きで弾をすべて避けた。

「か、かわされた!？」

「本物の銃を使って修羅場を乗り越えてきたのよ……そんな弾なんか当たらない

じゃない!」

沙耶の反撃。

「これでも喰らえ！」

沙耶は横薙ぎに水鉄砲を連続して撃ち続けた。

「ちっ！ びしょ濡れじゃない！」

ゆりに300のダメージ。

「あらあら大切な服が台無しね。おかげで下着が丸見えよ？」

「え……!?!」

「落ち着けゆり！ この周りには私達以外誰もいない！」

岩沢の攻撃。

「よくもやってくれたな……!!」

岩沢は、木刀を……投げた!?

「使い方としては間違っていないけど、武器を手放すなんて滑稽ね。アーハツハツハツて

ね!!」

沙耶は水鉄砲の本体を使って軌道をずらす。

木刀はそのまま真上へ。

「さて、これで貴女は終わりよ……!!」

沙耶の攻撃。

沙耶は岩沢に向けて水鉄砲を放とうとしたところで……。

「ぐえっー！」

「……………」

先ほど自らの手で弾いた木刀が上から落ちてきて、沙耶の脳天に直撃。

クリティカルヒット！

沙耶に9999のダメージ。

「なんて…………不覚…………」

沙耶は倒れた。

「何だ…………これで終わりなのか？」

「何だか少しだけ納得のいかない終わり方ね…………」

ゆり・岩沢まさみ WIN!!

*

「とりあえず、こんな称号でもつけておこうかしら」

「そうだな…………それじゃあ先行こう、ゆり」

「そうね。まだ敵は校内に潜んでいるわ」

ゆりと岩沢は、クドと沙耶の二人をその場に置いて、先を急ぐのだった。

クド↓『ある意味悲劇のヒロイン』

沙耶↓『自虐する自滅王』

*

「さて、俺はこうして一人で行動しているわけだから、誰かに襲われたらヤバい状況になるわけだが……」

校舎を一人でうろついているのは、恭介だった。

人数的な関係上、誰かしら一人で行動する必要があったわけだが、白羽の矢が当たったのは、どうやら恭介だったようだ。

「まずいな……誰かに合流したいところだが」

そんなことを願っていた、ちょうどその時だった。

「恭介さくん！」

「ん？ この声は……神北か!!」

ちょうどよいタイミングで、恭介は小毬と遭遇し、

「……あら、ちょうどいい所に次の獲物が」

「恭介か……悪いけど、恭介だからと言って容赦はしないよ」

ちょうどよいタイミングで、ゆりと岩沢に遭遇した。

「ちつ……タイミングがちょうどよすぎるな。おい神北！ すぐに戦闘に入るから武器の準備しとけ！」

「は、はい！」

恭介は小毬に指示を出すと、小毬は自らの武器である絵本を取り出す。

それを見た恭介は、ポケットの中からスパーボールをいくつか取り出した。どうやらそれが恭介の武器のようだった。

「一気にいくぜ……!!」

そして、戦いの幕は上がった。

*

もはや変態の領域に達したロリコン

棗恭介

&

歩く衝撃映像

神北小毬

V S

将来の夢は普通のお嫁さん

ゆり

&

恋するボーカルは無敵少女

岩沢まさみ

「負けない限り称号が変わらないのね……」

「その通り……って、だから俺はロリコンじゃねえってのに！」

「恭介……お前……」

「まさみ……変な勘違いだけはしないでくれよな！」

「……大変だねえ」

*

「まずは私からね」

ゆりの攻撃。

ゆりはエアガンで小毬を撃った。

「はわわー！」

ミス！

小毬は絵本でそれらを防いだ。

「今度は私の番だよ」

小毬の攻撃。

小毬は絵本を読み始めた。

「……象さんは、ついに追い詰められてしまいました」

「……続きが気になるな」

「え？ そろっ？」

ミス！

ゆりにダメージを与えられなかった。

岩沢に200の精神的ダメージ。

「恭介、覚悟！」

岩沢の攻撃。

木刀を振り上げて、思い切り恭介に斬りかかる。

「ほいっ」と

ミス！

恭介にダメージは与えられなかった。

「さて、いよいよ俺の出番だなっ」と！

恭介の攻撃。

恭介はスーパーストーンを何個か地面に向かって投げて、跳ね返る要領を使って二人に

攻撃した。

「さすがは棗君ね……」

「くっ……!!」

ゆりに300のダメージ。

岩沢に400のダメージ。

「絵本で封じられてしまうのなら、狙うは恭介君ね！」

ゆりの攻撃。

ゆりは恭介に向かってエアガンを撃った。

「……ふっ」

「え!？」

ミス!

なんとさつき投げたスーパーボールが跳ねている状態を保っていて、それがエアガンの弾の軌道を変えていた。

そしてその弾は、岩沢に向かって飛んでくる。

「くっ!」

岩沢に300のダメージ。

「結構厳しい状況ね……」

「今度は私だよ」

小毬の攻撃。

小毬は先ほどの絵本の続きを読んだ。

「……微妙」

「はううっ!!」

クリティカルヒット!

小毬に700の精神的ダメージ。

「そんな……このお話が否定されるなんて……」

小毬は倒れた。

「この調子で恭介も……!!」

岩沢の攻撃。

岩沢は木刀を……恭介目掛けて投げた。

「へっ!」

ミス!

恭介はそれをうまく避けた。

「なっ……!?!」

「上に弾くなんてヘマはしねえよ!」

恭介の攻撃。

恭介は新たにスーパーボールを二個投げた。

「ちっ!」

「くうっ!!」

ゆりに400のダメージ。

岩沢に350のダメージ。

「後は任せたよ……ゆり……」

「岩沢さん!？」

岩沢は倒れた。

「許さないわよ……棗君!」

ゆりの攻撃。

ゆりは恭介目掛けてエアガンを撃った。

「ちっ!」

恭介に350のダメージ。

「まだスーパーボールは残ってるんだよ……!!」

恭介の攻撃。

恭介は更にスーパーボールを二個投げた。

四個のスーパーボールがゆりを襲う。

「ほっ!」

ミス!

ゆりには当たらなかった。

ミス!

ゆりには当たらなかった。

「キャッツ!」

ゆりに300のダメージ。

ゆりに450のダメージ。

「()まで……か……」

ゆりは倒れた。

「結局また俺一人か」

恭介、WIN!

*

「とりあえずこれをつけといてやるか……」

恭介は、倒れている三人をきちんと壁に並べると、新たな称号をつけて、その場から離れていった。

近付いてくる何者かの気配に気付くことがないまま……。

ゆり↓『至らないリーダー』

岩沢↓『葱を持つボーカロイド』

小毬↓『打ちひしがれたメルヘン少女』

※

「普通にみおちんとはぐれちゃったなあ」

ボソツとそんなことを呟いていたのは、葉留佳だった。

どうやら先ほどまでは美魚と共に行動していたようだったが、ちよつとトイレに行っている隙に何処かへ行ってしまったようで、暗い学校の中、1人きりとなってしまうのだった。

「お化けとかは何とか大丈夫デスけど……やっぱり夜の学校というのは少し怖いデスな」

いくら葉留佳と言えども、少女であることには変わりない。

1人きりで校内を歩いているという事実を再認識して、少し怖がっている様子だった。

そのせいで、身体が少し固くなっていた。

そんな時だった。

「リベンジしに来ました、三枝さん」

「そ、その声は……『ゴッド・ザ・斉藤』……!!」

「直井だ、直井文人だ!!」

指を差して素直に驚く葉留佳を見て、直井は思わずそう言っていた。

葉留佳は先ほどの身体の固さが嘘のように身体が動いていた。

「ふう……やっぱり誰かと一緒にいるというのはいいものデスな」

「ふっ……なんだ？ 夜の学校を1人で歩くのがそんなに怖いのか？」

「そりや怖いですよ。私だって女の子デスから……こんな時に理樹君がいれば気が紛れるんだけどなあ」

「……理樹君？」

聞いたことのない名前が出てきて、直井の頭に疑問符が浮き出てくる。

葉留佳は、そんな直井に説明した。

「理樹君は私達が生きていた時に一緒に行動していた男の子デスよ。一緒にいると楽しくて……からかいがいがあったっけなあ」

「……今はそいつのことは関係ない。神であるこの僕にひれ伏すがよい」

「あ、やっぱり戦う展開にいつちやう系？」

「当たり前だ。早く戦いを済ませて、僕は音無さんのところへ行かなければならないんだ！」

「なるほど……直井君はやっぱりホモでしたか……」

ニヤケながら葉留佳が直井に向かってそう言った。

すると直井は、青筋を浮かべながら、

「貴様……この場で殺す」

「ひゃ〜かなり怖い！」

葉留佳は何時もの口調でそう答える。

対して怖がっている素振りを見せていないのは見え見えだった。

ちなみに、葉留佳はフライパン（殴って使うことを許可されている）、直井は霧吹き（中身はコーラ）を持っていた。

*

リトルバスターズの騒音係

三枝葉留佳

V S

ゴッド・ザ・斉藤

直井文人

「この名前をどうにかしたいものだが、僕が勝っても意味ないんだよな……」

「デスな。だから大人しく負けてくれないかな？」

「それは無理な相談だな……僕は神だからな」

*

「まずは私の攻撃からだよ！」

葉留佳の攻撃。

葉留佳はフライパンで思い切り直井の頭を叩いた。

「ぐはっ！」

直井に300のダメージ。

「やるな……だが、これでも喰らうがよい！」

直井の攻撃。

直井は霧吹きでコーラを吹き出した。

「うわっ！ 目に入った！」

葉留佳に300のダメージ。

「こうなったらハルちゃん本気を出しちゃいマスよ！」

葉留佳の攻撃。

葉留佳はフライパンで直井の頭を殴った。

「ちっ！」

直井に400のダメージ。

「神に対する侮辱……それがどれほど無礼なことであるのか。その身にしかと刻み付けてやる」

直井の攻撃。

直井は霧吹きでコーラを吹く！

「そんな攻撃は私には効かないのデスよ」

葉留佳はそれをフライパンで防いだ。

「ちっ！」

「私の勝ちデスよ……!!」

葉留佳の攻撃。

葉留佳はフライパンで直井の頭を殴った。

「ぐはっ！」

直井に500のダメージ。

直井は倒れた。

「終わりましたナ……」

三枝葉留佳、WIN!!

*

「お前にはこれがお似合いだ……なんちって♪」

そう言いながら、葉留佳は称号をつけるのだった。

直井↓『ハルちゃんを敬う会終身名誉会長』

*

「遊佐、残りのメンバーの様子を教えてください」

『現在、恭介さんチームが、恭介さん・宮沢さん・西園さん・三枝さんの残り四名、ゆりっぺさんチームが、音無さん・立華さん・椎名さん・藤巻さんの、同じく残り四名です』

「意外と少ないな……情報ありがとよ」

『どう致しまして。音無さんと立華さんの健闘を祈ります』

「ああ、頼むぜ」

そこで無線は途切れた。

そして音無は、隣にいる奏の方を見て、

「なあ奏……楽しいか？」

「……割りと」

「そっか……それならいいんだ」

ここ数日の奏は、何となく表情が生き生きしているようにも見えた。

みんなからも『立華さん』とか『奏さん』とか、『天使』という名前はあまり使われなくなってきた。

そのことが、音無にとっては堪らなく嬉しかった。

「……どうしたの？ 何か面白いことでもあったの？」

「いや、何でもないんだ……ただ、こんな時間が来るとは思わなくてな。ちよつと嬉しいだけだ」

「……そう」

奏は、自らの手にする武器を眺めながら、そう呟いた。

「ところで……奏の持つてるその武器は……」

「レンゲよ」

奏の武器は、よく中華料理を食べる時とかに使われるような、白いレンゲだった。

その武器を見て、音無は頭を抱えた。

「こんな武器で勝てるのかよ……」

「結弦こそ……それって、タオルケツトよね？」

「ああ……こんな武器でどう戦えってんだよ」

自分の武器を見て、悩む音無。

ちなみに、タオルケツトは毛布と同じく、相手を包むという戦闘法がある。

他にも、頭をゴシゴシと擦るように拭くなど。

「……どうやらお前達を倒せばある程度決着がつきそうだな」

そんな二人の前に現れてきたのは、ハリセンを持つている謙吾と、

「……くんばんは」

「あ、ああ……こんばんは」

何故かそんな謙吾と一緒にいる美魚だった。

しかもその手には、いつぞやのB〇本が。

「三枝さんとはぐれていた所、偶然お会いしましたので……」

理由を美魚はそう述べたが、今音無が気にしているのはその部分ではなかった。

「どうして西園がそんな本を……てかタイトルに『日向×音無』って書いてあるのは気のせいか?!」

「気のせい……ではありません」

「なあんだ気のせい……じゃないのかよ!?!」

うっとりとしている美魚に、音無はツツコミを入れる。

その後で、心の中でこう呟いた。

「(コイツ……明らかに異常だ)」

「それでは始めるぞ!」

謙吾の言葉を合図に、戦いが始まった。

*

つい最近記憶を取り戻したばかりの色男

音無結弦

&

クールビューティーな元生徒会長

立華奏

V S

情熱あふれる剣士

宮沢謙吾

&

文学少女と禁断の恋

西園美魚

「禁断の恋ってなんだよ……」

「美しい愛は私の得意分野です」

「持つてる本を見る限りだと明らかに説得力がないんだが……」

「……頑張るわ」

*

「一番手は大事だぜつと！」

音無の攻撃。

音無はタオルケットを謙吾の頭に被せて、上から一気に擦った。

「イタタタタタタタタタ!!」

謙吾に250のダメージ。

タオルケツトで前が見えない!

「くっ……!!」

謙吾の攻撃。

前が見えない状態で謙吾はハリセンを振り回す。

力加減が分からなかったのか、手から離れてしまい、ハリセンが何処かへ行ってしまう。

「じゃあ行ってくる……」

奏の攻撃。

奏は素早い動きで、レンゲを謙吾の口に突っ込んだ(レンゲは元々口の中まで料理を運ぶ際に使われるので、間違っではない)。

「グホア!!」

クリティカルヒット!

謙吾に9999のダメージ。

謙吾は唇を切った。

「地味に……痛かった……ガクッ」

謙吾は倒れた。

「奏……やっぱりお前は凄いと思う」

「では次は私が新たな世界へご案内致しましょう……」

美魚の攻撃。

美魚は『日向×音無』の本を音読し始めた。

「ぐわああああああああああ!! 止める、止めてくれええええええ!!」

音無に500の精神的ダメージ。

「……?」

ミス!

奏にダメージを与えられない。

「もう駄目だ……心が折れそう」

音無はショックを受けているため、一回休み。

「続いて私の番ですね」

美魚の攻撃。

美魚は続きを音読した。

「もう……これ以上は……!!」

音無に300の精神的ダメージ。

「……………?」

ミス!

奏にダメージを与えられない。

「……………終わりにするわ」

奏の攻撃。

奏はレンゲを美魚の口の中に突っ込んだ。

「ふがつ!」

クリティカルヒット!

美魚に890のダメージ。

「なんて……………チート……………ガクツ」

美魚は倒れた。

「よっしゃ! よく頑張ったな、奏!」

「……………(コクツ)」

音無結弦・立華奏、WIN!!

*

「とりあえずコイツらの称号か……………よしっ。立華、お前が決めてくれ」

「私が? ……そうね、これにするわ」

そして奏が称号をつけた謙吾・美魚をその場に置いて、二人は別の場所に移動したのだった。

謙吾↓『慌てんぼう侍』

美魚↓『歪んだ性癖を持つ少女』

※

「相手は後四人か……」

呟くのは、恭介だった。

現在、偶然合流した葉留佳と共に、今は校内を練り歩いている最中だった。

「一番注意するべきは音無と立華のペアだな。椎名と藤巻のペアは、何とかなるだろうし」

「あれ？ どうしてその二ペアになってると分かるんですか？」

「勘だよ……と言った方が格好いいが、実は勘じゃない。一応立華がいる環境に慣れ始めているとはいえ、他の戦線メンバーは未だにぎこちない様子だ。だからペアを組むとしたら、音無しかいないと思ってるな」

「なるほどなるほど……恭介さんはかなちんのが好きだから、そんなことまで分かっているんですね？」

茶化すように葉留佳は言う。

だが、恭介は特に慌てる様子もなく言った。

「ああ。友達として好きだよ。立華はそれだけ人を惹きつける魅力があるんだよ」

「……さすがは恭介さんデスな。邪な気持ちなんてそんなに持たないんデスね。てつきりロリコンだからかなちんのことが……」

「だからロリコンじゃないって何度も言ってるだろ!!」

恭介はその部分を否定することをしつかり覚えていた。

だが、その後で小さく溜め息をつき、

「……まあいい。今はこういう楽しい時間が流れていけば。こうして立華を交えて遊ぶなんてことを誰が想像してたんだろなあ。少なくとも戦線メンバーは誰一人として想像してなかったと思うぜ」

「私もちよつと想像がつきませんでしたよ」

葉留佳もさすがにそこまでは考えついていなかった様子だった。

そんな会話をしている最中に、

「おつと……最後の二人発見つと」

「……これで終わらせる」

椎名・藤巻ペアと遭遇した。

「さてと……無事に二人とも生き残ろうぜ、三枝!」

「分かってマスよ。それじゃあ……行きマスよ!!」

そして、この四人の戦いが……幕を開けた。

*

もはや変態の領域に達したロリコン

棗恭介

&

リトルバスターズの騒音係

三枝葉留佳

V S

可愛い物好きの忍者

椎名

&

実は一番影が薄い

藤巻

「ちよつと待て! 一番影が薄いつてどういうことだよ!?!」

「……浅はかなり」

「はは……もう、何でもいいや」

「ついに恭介さんが壊れてしまいましたよ」

*

『な、棗さん!!』

「ん? 遊佐?」

これから戦いが始まろうとしていた時に。

無線機より遊佐の声が聞こえてきた。

恭介だけにではない。

その場にいる全員の無線機から聞こえてきた。

しかも、遊佐の声は珍しく……動揺していた。

「何だよ、今から戦いが始まろうとしている最中によ……」

藤巻が面倒くさそうに言葉を返す。

だが、遊佐は慌てた様子で、こう言った。

『ゆりっぺさんが……ゆりっぺさんが危険な目に……!!』

「何!?!」

ここで突然、ゆりが危険な目に遭っているという連絡が来る。

そのことに、何らかの疑問を感じずにはいられない四人。

遊佐の言葉は続く。

『とにかく玄関のところまで来てください!!』

「あ、ああ……分かった!」

無線はそこで途切れた。

「それじゃあこの戦いは次回までお預けつてことで……」

「分かっている。それよりも、今は早く……」

「ああ。ゆりつぺの所へ行くぞ!!」

四人は、すぐさま戦いを止めて、玄関まで向かった。

*

「ゆりつぺ、誰にやられた!?!」

玄関まで来てみると、そこには傷だらけのゆりを介抱している来ヶ谷と、その周りに野田・日向・松下など。

先ほどのランキングバトルで敗れた者達が集まっていた。

「お、おい日向……これは一体何事何だ?」

近くにいた日向に、恭介は尋ねる。

すると日向は、

「どうしたもこうしたも……俺達がここでだべっていたら、いきなり傷だらけのゆりが来てよ……てつきりランキングバトルでの傷かと思っただが、それにしちゃ様子がお

かしすぎると思ったんだ。んで、さつき野田が誰にやられたって聞いてたんだよ。そしてその答えが……」

「……『天使』……」

「『天使』？ ……まさか立華のことか!？」

恭介は驚いたような声でそう言う。

確かに……彼ら戦線メンバーと戦闘するような人物というと、奏以外にあり得ないだろうが、違和感を感じた。

なぜなら、奏は自ら刃を戦線メンバーに向けようとはしないからだ。

まずは口頭で。

抵抗して来たら、実力行使。

実力行使も、相手が明確な殺意を向けない限りは攻撃はしないのだった。

「何より、立華のそばには音無がついていたはず。そんなことってあり得るのか……?」「ああそうだ! 奏はずつと俺と一緒にいた!!」

校舎から出てきたのは、音無と奏の二人だった。

これで、奏がゆりを攻撃したという事実はなくなつた。

しかし、ゆりは『天使』に攻撃されたと言う。

それがはたしてどのような意味を持つのだろうか。

「…………!!」

「え？」

ゆりが、とある方向を向く。

全員がその方向を見てみれば……。

「う、嘘……だろ？」

「そんな……バカな……!!」

驚きの声をあげたのは、恭介に野田だった。

月を背景に、彼らを見下ろしているその姿は、まさしく……。

『天使』……」

そこには、立華奏の姿をした、もう一人の存在がいた。

episode 16 Dancer in the Dark

屋上に立つ少女は、そのまま恭介達がいる所まで……一気に飛び降りてくる。ドン！ という激しい衝突音こそしたが、その少女はまったくの無傷だった。「みんなで夜遊び……なら、お仕置きね」

「?!」

その瞳は、奏の物とは違い……赤かった。

まるで明確な殺意でも示しているかのような、鋭い目つき。

見ているだけで、身体が硬直しそうだった。

その姿は、『天使』というよりも……。

「墮天使……地に落ちた天使とでも言うべきか？」

ボソツと恭介が呟いたが、もちろん誰の耳にも聞こえてこなかった。

「……」

右腕をあげる、少女……いや、墮天使。

するとそこから、奏がいつも使う、『Hand Sonic』が出現した。

それを出して……ゆり達の方へと斬りかかる。

「!!」

「おっと」

来ヶ谷に介抱されていたゆりは、その来ヶ谷を払いのけると、ポケットよりナイフを取り出して、墮天使と戦う。

ナイフと『Hand Sonic』がぶつかり合う度に、周りに火花が散る。

「これは一体、どういうことですか……?」

「『天使』は……立華は無害じゃかったのかよ!?!」

美魚が驚いたような声をあげて、藤巻が叫ぶ。

そんな中、心の中で音無は思う。

「(違う……アイツは奏じゃない。奏は無抵抗な俺達には、刃を向けたりはしなかった……!!)」

前述した通り、奏は無抵抗な彼らに刃を向けることはない。

攻撃するのは、相手が明らかなる攻撃意識を持っている時だけ。

つまり……こちら側から攻撃しない限り、奏は攻撃することはないのだ。

しかし、目の前にいる墮天使はどうだろう。

攻撃をする意思を持たなかったにも関わらず、恭介達に問答無用で斬りかかろうとし

たではないか。

「くうっ！」

ゆりと墮天使の接近戦では、明らかに墮天使が押していた。

何せ奏と戦っている時とは違い、墮天使には明確な殺意がある。

その分でも、力加減なんかしてくれないからだ。

「きゃあああああああああああああああああああああああああああああ!!」

服が切り裂かれ、身体のいろんな部分から血が滲みでる。

『Hand Sonic』によつて切り裂かれるゆりの身体は、もうそろそろ限界に達し

ようとしていた。

「くそっ……ゆりっぺ! どうすればいい!!」

野田がゆりに向かつて叫ぶ。

ゆりの指示を待っているのだ。

しかし、今のゆりには誰かに指示を出すことなど出来そうになかった。

しばらく墮天使とゆりの戦いをじっと見ていた音無が……。

「みんな! 背円に取り囲め! 集中砲撃だ!!」

「あん? 何故貴様が命令している!?!」

音無が命令することが不満に思ったのか、野田がなにやら騒いでいた。しかし、そんな野田は無視して、音無は続ける。

『Distortion』で曲げられようが、いくらか当たる!!』

確かに、下手な鉄砲も数撃てば当たる。

その諺通りに、周りから一斉射撃さえすれば、その内の何発かは当たることだろう。

音無の判断は、正しい判断だった。

ただし、銃を持っていないリトルバスターズメンバー十岩沢・ユイは、遠くでその様子を見守ることに。

沙耶は銃を持っているので、戦闘に参加した。

「離れろ！ ゆり!!」

「!!」

音無の声を聞いて、一瞬のすきをついたゆりが、堕天使より離れる。

その瞬間に、音無は全員に指示を出した。

「撃てえ!!」

タンタンタンタンタンタンタンタンタン!!

乾いた銃声が、何十発と聞こえてくる。

堕天使に向かって四方八方から銃を撃つ。

保健室にて。

いつ墮天使が襲ってくるかも分からないので、TKと椎名が門番を担当していた。

保健室の中では、音無が終始落ち着きがなかった。

「奏は大丈夫なのか……かなり深い傷だろ？」

ベッドの上で眠っている奏を見て、音無が尋ねる。

ゆりは、腕を組んだ状態で、答えた。

「私達と同じよ。致命傷でも時期治るわ」

しばらく静寂の時間が流れる。

そして、その時間を打ち破ったのは、日向の一言だった。

「同じ奴が二人ってどういうことだよ……!! そんなわけ分かんない世界になっちゃまったのか？」

「……理由はあるわ」

「……どういうことだ？」

ゆりの呟きに、恭介が尋ねる。

するとゆりは、

「『天使』エリアでの侵入ミッション……覚えてる？ 彼女のパソコンに、スキルを開発するソフトがあったでしょ」

「スキルを開発するソフト? ……てか、スキルつてなんだ?」

「……この場合は『天使』使用する武器や能力のことです。右腕から刃を出したりするのも、そのソフトウェアで作り出したものということでしょう」

真人の疑問に答えたのは、遊佐だった。

「ああ……で、それがどうしたって言うんだ?」

音無が、ゆりに先の言葉を言うように要求する。

その要求に答えるように、ゆりが言った。

「その中に、見たことのないような能力がいくつかあった。その一つ……『Harmonics』って能力が発動してるのよ」

「ハーモニクス……? どんな能力なんだ?」

恭介がゆりに尋ねる。

すると、

「一体が二つに分かれる能力だったわ」

「要は分身……ですね?」

「その通りよ」

美魚が付け加えるように答える。

「分身デスか……そんな能力まで開発していたなんて……」

「わふ……立華さん凄いです」

素直に感心しているのは、葉留佳とクドだった。

そんな中、高松が言った。

「つまりは、それも『天使』自身がソフトウェアで開発したスキルということですか……」

「しつかし、そっくりそのままってわけじゃなかったみたいだぜ？」

「コイツと違って好戦的だ……何故だ!？」

藤巻、日向と続く。

音無は、大げさな動きを見せながら、まるで奏を庇うように言った。

「奏は自分を守る能力しか使わない……!! 刃にしたってそうだ! 跳弾させる為だ

!」

その時。

直井が呆れながら、こう言った。

「まったく、無能な集団だな……あ、もちろん音無さんは違いますよ?」

「基本アホな集団ですから」

自分のことは差し置いて。

ユイが直井の言葉に答えた。

「僕が可能性を一つ教えてやろう。川釣りしに行った時のことを思い出せ」

そう直井が提言したところで、謙吾が何かに気付いた。

「なるほど……つまり強い攻撃意識を持っている時に分身したから、こういうことになったのか」

「そういうことだ」

「なるほど……その時の本体の命令に従い続けているということか」

謙吾と直井の言葉を合わせて、恭介が一つの結論を出す。

そんな中でも、やはり音無は奏を庇うのだった。

「でも、奏が強い攻撃意識を持つことなんてない！」

「……どうでもいいけど、貴方、やけにあの娘を庇うのね」

流石にゆりが気付いたのか。

音無にそう尋ねていた。

まさかそのことを聞かれるとは思ってなかったらしく、音無は少し動揺しながら答えた。

「そりや……可哀想だろ？」

「……まあいいけど」

興味をなくしたように、ゆりが呟いた。

「それよりも、今問題なのは『天使』を如何にして消すかよね……」

呟いたのは、銃の手入れをしている沙耶だった。

「意図的に出したのなら、意図的に消すことも可能ではないのか？」

壁に寄りかかっている松下が、そう提案してみる。

しかし直井は首を横に振ってそれを否定する。

「いや、意図的に消せているのなら、『天使』はこんな目には遭っていないだろう」

「確かにそうだよね……」

小毬が同意する。

「恐らく、無意識での出現ね……だから彼女には消せなかった。刺し違えてでもやるしかなかったのよ」

「おいおいちよつと待ってくれよ！ あんなのが消えないなんて……あんなのが居続ける世界になるのかよ!？」

ゆりの言葉を聞いて、藤巻が慌てるように言った。

そんな藤巻を宥めつつ、ゆりは言う。

「今は見逃されてはいるけど、明日からはそうもいかない。模範的な行動から外れたら、すぐさま血生臭い戦闘に発展する」

「生徒会長でもないのに?」

大山の疑問はもつともな物であった。

もう奏は生徒会長ではないので、こんなことをする必要はない。

そのことは、恭介の頭にも思い付いていた。

だが、どうじにこんなことも思い付いていた。

「俺達を厚生させようという意思だけはあつたんだろうな。だから分身にもそれが継承された」

「その上好戦的ときた……」

「……最悪ね」

恭介と来ヶ谷の言葉を聞いた後で、ゆりが呟いた。

「対抗しようにも時間が無さすぎるぜ……」

「……少し、時間を頂戴」

「どうやって、その時間を作る？」

ゆりの言葉を聞いて、音無が尋ねた。

すると、ゆりはこう提案した。

「授業に出て、そして受けるふりをして。先生の話には決して耳を傾けないで。授業をまともに受けたら消える……分身にバレないように、とにかく別の作業に没頭すること。そして一日持ちこたえて。誰一人消えずに、再び会えることを祈るわ」

そして、その場は解散することとなった。

だが、その前に恭介が言う。

「待て。俺達が護衛に回ろう。ひよつとしたら襲撃される可能性もあるしな」

「……ええ、分かったわ。棗君・井ノ原君・宮沢君の三人でこの娘を見守っててくれるかしら？」

「お安い御用だぜ！」

「うむ……承知した」

「全力で立華を護衛する!!」

こうして、奏の見舞いを兼ねて、恭介・真人・謙吾の三人が保健室に残り、見張りをすることとなった。

※

「……なあ恭介」

「なんだ？」

みんなが授業を受けているふりをしている間、保健室で奏の側にいるのは、真人・謙吾・恭介の三人だった。

彼らはこうして、見張りをしているのだ。

そんな中、恭介に尋ねてきたのは真人だった。

「どうして護衛が必要だなんて考えたんだ？」

それは理由を聞いていなかった真人・謙吾にとっては、最初に浮かび上がってきた当然の疑問だった。

「ああ、それはだな……」

恭介がその質問に対して答えようとした、その時だった。

「バリッ!! とガラスが割れて、中に侵入してきたのは……」

「こういう風に、堕天使が保健室に侵入する可能性を考えてだ!!」

スツと、恭介がポケットの中から銃を取り出して、それを撃ちながら……真人と謙吾に言った。

恭介の手によって火を噴いた銃は、パァン! という乾いた音を鳴らし、堕天使の腕を確実に射抜く。

「きよ、恭介……どうして銃なんか?」

「沙耶から預かっていたものだ。ゆりからも護衛用にとあと二つ銃を持たされてる。ほれ、お前らの銃だ」

残り二つの銃をポケットの中から取り出すと、それを謙吾と真人の二人に向かって放り投げた。

慌ててそれを受け取る二人だが、奈何せん銃の取り扱いは慣れていない。

「お前達、銃が扱いにくかったら、自分の土俵で戦うんだな!!」

それは真人の右腕から繰り出され、空気すらも殴り倒すような勢いで、奏の鳩尾目掛けて勢いを増していく。

ここで例え墮天使が『Distortion』を使ったとしても、拳は捻じ曲げることが出来ない。

それを考えてか考えていないでの、真人からの攻撃だった。

「Gird Skill Delay」

しかし、動きを速くすることは容易かった。

墮天使は素早い動きで真人の目の前から消えると、ベッドで眠っている奏に近付いてきた。

「させるか!!」

だがそこには、真剣を持った謙吾がいた。

「藤巻とやらが置いてきてくれたらしくてな……案外使いやすいな」

謙吾は、鞘から真剣を抜いて、墮天使を睨む。

そして近付いてきたところで、

「ハアッ!」

墮天使に斬りかかった。

墮天使はそれを両腕の刃で受け止める。

その間に恭介が奏の身体を抱き抱えて、安全な場所へ。
だが、その時だった。

「……甘いわ」

「何? ……!?!」

ザクツ!

恭介の身体が、何者かによって貫かれた。

「な……何!?!」

「恭介が刺された!?!」

そのことに驚いた謙吾・真人は、背後より近付く堕天使に気付かなかった。

「が……は……!!」

合計、三人の堕天使がこの場にいたことになる。

「堕天使が……三人だと……」

その事実に驚いている暇もなく。

堕天使は、恭介の身体より離れた奏の身体を抱き上げると、恭介達を一瞥することもなく、そのまま立ち去ってしまった。

「くそ……立華……」

薄れゆく意識の中。

恭介は、奏の名前を呟いていたのだった。

※

「まさか棗君の言う通りの展開になるとはね……」

数時間後。

ゆり達が保健室に行ってみたところ……激しい戦闘をした後のような状態となっていた。
いた。

恭介・真人・謙吾の三人は床に血まみれになって倒れていたの、ゆり達がベッドに運んで寝かせた。

「この乱れようは拐われたとしか思えない……貴様、何をした？」

ゆりの方を指差しながら、直井がそう尋ねる。

「貴様って……プログラムを書き換えたのよ。もう一度あの娘が『Harmonics』を使えば、追加した能力が発動して本体に戻るはずだったのよ」

質問に対してゆりがそう答えると、高松が呟いた。

「そんなことが出来たんですか？」

「……不可能ではないだろうな。プログラムで自らの能力を作り上げているのだ。そのプログラムをこちらから組み換えてしまうことだって不可能ではあるまい」

来ヶ谷の返答を聞いた後で、ゆりは言った。

「でも敵の動きが予想以上に早かった。あの娘を隠されては打つ手が無いわ」
「どうするんだ？」

松下が尋ねると、ゆりはこう答えた。

「探すしかないじゃない」

「凶悪な『天使』の目を逃れつつ……ですか」

「授業を受けるふりだけでやつとだつたつてのによ……」

藤巻はボソツと呟いていた。

その呟きは彼にのみ当てはまるものというわけではなかった。

「陽動がどれだけでもつか……」

「陽動って……私ですか!？」

日向の呟きに対して大げさに驚くのは、ユイだった。

ユイは、流石に自分が話題に出されるとは思っていなかったようで、かなり驚いていた。
た。

「お前何の為にガルデモ入ったんだよ!」

「それは……岩沢さんに憧れて」

「ガルデモは陽動の為にあんだよ!」

「いやいや、あんな怖い相手に陽動なんて出来ないですつて!　そもそもお前人に命

令ばかりして、何様のつもりだ！」

ユイが慌てた様子でそう叫ぶ。

日向も、負けじと叫んだ。

「ここじゃお前の先輩だ！ てか逆ギレか!!」

「先輩かあ！ すみませんでしたあ！」

その後で、ユイはゆりの方を見て、敬礼しながら言った。

「あの……ライブ中漏らすかもかもしれませんが、頑張ります！」

「決意はありがたいけど、今はまだいいわ……まずは私達が今出来ることをしましよ」

「出来ることって……何を？」

美魚が尋ねると、ゆりはこう答えた。

「総員に到達。『天使』の目撃情報を至急集めてきて！」

※

「迅速に集められた情報から、幽閉場所はギルドの可能性が高いと分かったわ。となればその最深部ね」

体育館に集められた戦線メンバー＋彼らが情報を集めている最中に目が覚めた恭介・

真人・謙吾を含む

リトルバスターズメンバーは、ゆりの話を聞いていた。

しかし、今回のオペレーションが過激すぎるという点もあり、葉留佳・クド・小毬・美魚は自室待機、ガルデモのメンバーも、日向によって強制的に呼び出されたユイ以外は自室待機という形となった。

「あの爆破した場所にか？」

「そう。トラップも稼動したまま、もつとも危険でもつともここから離れた場所つてことね」

音無の疑問に、ゆりが答える。

「まあここに潜れつてかよ……」

「前回はほぼ壊滅状態だぜ……」

事情を知っている日向・藤巻は、そんなことをぼやいていた。

「ふん……何を臆しているんだ？」

そんな二人を見て野田がそう言った。

……しかし、彼は前回のギルド潜入作戦で真つ先に死んだ人間だ。

そのことを藤巻に指摘されて、もはや何も言えなくなつてしまつていた。

「皆さんの為に漏らしながらも歌い続けます……根性見せます!!」

泣きながら、敬礼しながらそんなことを言うのは、ユイだった。

そんなユイを見て、ゆりが言った。

「あんなのにかかっちゃ陽動も瞬殺よ。岩沢さん達にも伝えておいたけど、今回は陽動なし。正々堂々と行くわよ」

『天使』と戦いながら、か……」

「効率のいい方法はそれしかないだろう」

松下の呟きに答えたのは、恭介だった。

「どうやら今回の作戦を完遂するにはそれしかないとすでに睨んでいたようだ。」

「ふむ……恭介氏の言ってることも、ゆり君の言ってることも正しい。今回の『天使』は狂暴だ。だから、陽動なんてやった所で、全員がやられるだけ……ならば、私達で最深部まで潜り、何とか救出するのが一番だろう」

「そう……いい？ 作戦はギルドを降下して、その最深部にて無事『天使』のオリジナルを保護すること」

来ヶ谷の言葉に答えるようにゆりが言った後。

ゆりはいつもの言葉を、全員に向けて言うのだった。

「オペレーション、スタート!!」

そして、今回のオペレーションが、始まった。

※

「前のトラップはそのまま放置されてんな……ラッキー☆」

ギルド連絡通路地下4階。

日向の眩き通り、前回の潜入作戦にてメンバーが引つかかったトラップのすべてが、すでに放置されたままとなっていた。

つまり、鉄球やハンマー、床崩れや天井が落ちてくるトラップなどはもう稼働しないということだ。

一同にとつては、それは安心出来ることだった。

「あの……こんなところで『天使』に行くわしたら、どの道漏れそうなんですけど……」
不安そうにつぶやくユイ。

そんなユイを見て、日向がどうでもいいという顔を見せながら、一言。

「構わん」

「構ってくださいよ!!」

「なら……お姉さんが優しく介抱してあげよう」

「いえ、結構です」

後ろから迫ってくる来ケ谷を避けつつ、ユイがそう言った。

ユイに逃げられた来ケ谷は、とても残念そうな表情を浮かべていた。

「相変わらずだな、来ケ谷は」

謙吾がそう呟いた、その時だった。

「……おい、あそこにいるのって」

「……ええ、そうね」

恭介が、少し遠目の位置にいる何者かを見つけて、ゆりに尋ねる。

どうやらゆりも同じ意見のようで。

そこにいたのは……白くて長い髪を揺らし、赤い瞳で彼らを鋭く見つめる……『天使』、いや、墮天使だった。

「ひいひいひいひいひいひいひいひいひいひいひいひい!!」

「構わん」

「構ってくださいよ!!」

泣きながら日向に対してそう抗議をするユイ。

そんな二人の掛け合いを聞いた後で……ゆりが動いた。

「早速現れたわね……撃て!!」

ゆりは、全員に向かってそう指示を出す。

恭介達は、あらかじめ支給されたショットガンを使って、墮天使を攻撃しようとする。

だが、彼らよりも……墮天使の動きの方が圧倒的に速かった。

「!？」

地面を蹴ったかと思うと、あっという間に戦線メンバーを通り過ぎる。

その際に……銃器はすべて使い物にならなくなっていた。

「は、速い!？」

「まだハンドガンが残ってる!!」

そう言いながら、ゆりは手榴弾の安全ピンを引き抜いて、墮天使めがけて投げつける。

「Gird Skill Distortion」

眩きの方が速かったか。

それとも手榴弾の爆発の方が速かったか。

どちらにしろ、手榴弾の爆発によって、辺り一面に土煙が立ちこもる。

そのおかげで双方共に視界は良好ではなくなった。

だが、ゆりはそれをチャンスだと思った。

「各個射撃!!」

ハンドガンを取り出した戦線メンバーは、墮天使がいるだろう方向に向かって銃を撃つ。

「意外と速くけりがつきそうね……」

今の状況を見てゆりがそう眩いた、その時だった。

「ぐおああああああああああ!!」

「[[[!?!]]」

野田の悲鳴が聞こえる。

その悲鳴の正体が気になって、彼らが後ろを振り向いたら……。

「な……………!!?」

そこには、『天使』によって心臓を突き刺された野田の姿があった。

『天使』は、その野田を壁に投げつけると、戦線メンバーを睨みつけた。

「こ、これってどういうこと!?!」

「オリジナルか?」

「違う……………コイツも分身だ!!」

大山と日向の疑問に対して、音無がそう答える。

「何故もう一体いるんだ?」

「要は敵がもう一体いるってことですか……………」

呟く謙吾に、冷静に状況を解説する高松。

そして、血まみれになっている野田を見て、藤巻が一言。

「どうでもいいが、また真っ先にやられたな、アイツ……………」

「各個射撃!!」

ゆりは即座に命令した。

だが、そうなってくると……………後ろにいる敵が完全にノーマークとなっていた。

「後ろにいる敵はどうるんだよ!!」

「いいから!　まずは目の前の敵よ……!!」

銃を撃ちながら、ゆりがそう答える。

しかし、背後からこんな声が聞こえてきた。

「忙しそうね……」

「!?」

そこには、すでに立ちあがった……もう一人の墮天使がいた。

「ゆりっぺ!　もう残弾が!!」

「(勝ち目なんてない……!?)」

半ばあきらめかけていたゆりだが、辺りを見回していく内に……目

の前の墮天使を通り過ぎたところに、扉らしきものがあるのを発見した。

そしてゆりは、思いついた。

「入口を塞ぐわ。ついてきなさい!　行くわよ!!」

手榴弾を目の前の墮天使に目掛けて投げつける。

当然墮天使はその軌道をゆがめるが、爆風によって土煙がたち、何も見えなくなる。

その隙に……彼らはその扉を開いて、中へと入って行く。

「あと10秒!　間に合わなかった者は残していく!!」

10, 9, 8……。

ゆりによってカウントされる、10秒間。

その間に何とか逃げ切れるように、メンバーは全力で走る。

彼らを一扫しようとして、もう一人の墮天使も全力で近づいてくる。

そんな墮天使に向かって、ゆりは銃を撃ち続ける。

「7, 6, 5, 4……」

残っているのはゆり一人。

ある程度威嚇射撃をしたのち、ゆりも扉に向かって走り出す。

その先には、手を伸ばしながらゆりを待つ音無の姿が。

「3, 2, 1……0!!」

そしてカウント終了と共に、ゆりは扉を通って中に入ることに成功したのだった。

※

ギルド連絡通路地下5階。

そこに一同は、つかの間の休息がてら、今の状況を話していた。

「あんな狂暴な『天使』が二体……前の降下作戦より性質が悪いぜ……」

床に座り込んで、日向がそうぼやいた。

「だがボサツとしいられないぜ。何せ俺達が保健室の中で戦った墮天使の数は、合計

三体だったからな」

「さ、三体!?! ……じゃあ何か? もしかしてあんなのがまだまだいるってことになるのか!?!」

「しかしなんでそんなことが……」

真人の言葉に驚く藤巻に、冷静に理由を求めようとする音無。

そんな中で、恭介が言った。

「分身は『Hand Sonic』も『Distortion』も使えたんだ。だったら、『Harmonics』だって使えるはずだ」

「そういうことね」

その言葉に対して、ゆりも同意を示した。

そんな中、前に出てきて彼らを批判するのは、

「まったく低能な奴らだな……あ、もちろん音無さん以外ですが」
そう。

直井だった。

「何だと……!?!」

「落ち着け真人。今直井に突つかかった所で、状況が変わるわけでもない。ここは直井の話の聞こう」

今にも掴みかかろうとしている真人を、謙吾が後ろから止める。

そして直井は、

「僕が問題点をまとめてやろう」

「よろしく」

ゆりのことを指さした後に、そんなことを言った。

ゆりは呆れながらも、直井に説明を求めた。

「問題は二つある。まず一つは、何体分身が作られたのか」

「今現在だけでも、合計五体は確認できているわけだ……」

「分身が分身を作っているってことは……」

「数に限界はないってことだ」

謙吾が呟くと、それに続く形で直井が言った。

「じゃあそれってつまり……10体や20体……それ以上いる可能性もあるってことか？」

日向がそう呟く。

「うう……頭いてえ」

「……無理に聞かなくてもいいぞ、真人」

そろそろ頭を抱えてきた真人を労って、恭介が真人にそう言った。

その時、音無が何かを思いつく。

「待てよ……? でも、ゆりが能力を追加している。分身は本体に戻るようになったんだろ? 消えるのを待ってあげればいいんじゃないのか?」

確かに音無の言う通りだった。

ゆりが『天使』に能力を付け足して、『Harmonics』を発動したら、本体に戻るように設定したのだ。

だからもし分身がそれを発動した所で、結局は元に戻ってしまう。

そう考えていた音無だったが、

「いや、それこそが二つ目の問題……何だろ? 直井」

「ふっ……その通りだ。少しは貴様も役に立つんだな」

「そりやありがたい褒め言葉で」

恭介は、特に苛立ちを見せることなく、不敵な笑みを浮かべつつそう答える。

直井は更に言葉を繋げた。

「……もしその能力を追加するよりも前に、分身を大量生産をしていたとしたら……」

「……ちよっ、ソイツは……!!」

直井の言葉を聞いて、ようやくと分かった一同。

だが、未だに何のことだか分かっていない人物が一人。

「分からねえ……何を言ってるのか全然分からねえ……!!」

「うわあ……アホだ」

未だに頭を抱えている真人を見て、ユイがそう呟いた。

「ふっ。ようやく気付いたか愚民共……あ、音無さんは気高い貴族であります……」

どんな時でも、直井は音無に対するフォローを忘れない。

「いいか。僕達がここに乗り込んでくるのが分かっている、既に分身を量産し、ギルドに配置させていたとしたら」

「そりゃ……」

日向がその先の言葉を言おうとしたところで、

「Trap」

「そう……罠だ」

TKの言葉に、直井が反応した。

「既に背後に二体いるな……コイツらは消えることはないし、俺達に勝ち目なんてない」

「そしてこの先も、うようよいるだろう……」

恭介・直井の言葉を総合して、松下が出した結論は。

「閉じ込められたということか……」

逃げることも出来なければ、前に進むのも困難。

こんな状況で、果たして今回のオペレーションを完遂することは出来るのだろうか。「武器の補充も出来やしないんだぞ……殺られるのを待つだけじゃねえか……!!」

悪態をつくのは、藤巻だった。

「こんなことまでして何が目的なんだ……!!」

「最終的には完全なる服従でしょ。それが彼女の使命だもの」

日向の言葉に答えた後、ゆりはすつと立ち上がった。

「大人しく消えろってことかよ!?!」

「私達を一掃するには最高の作戦ってことね。まるで私達は『天使』の上で踊らされてるみたいじゃない……滑稽ね」

叫ぶ藤巻とは対象的に、自虐的に笑いながら小さくそう呟く沙耶。

「……行くわよ」

ゆりは全員に向かってそう指示を出して、そしてそれが、一時の休憩時間の終わりを意味していた。

*

ギルド連絡通路地下10階。

彼らの目の前には……またしても墮天使が立っていた。

「また現れたよ……」

「これでギルドの中でみた『天使』の数は三体目だね」

日向と大山の眩きの後で、ゆりが銃を墮天使に向ける。

だが、そんなゆりの構えていた銃を、手で降ろさせた人物がいた。

「……………え？」

「弾が、勿体無かろう……………」

横から現れたのは、松下だった。

松下はゆりが銃を構えているのを見て、前に出てきたのだ。

「お……………おい！」

「何する気だ？」

その行動の意味が理解出来なかった日向と音無の二人が、松下に向かってそう言っていた。

言葉にしなかっただけで、分かっている人物も何人かいたみたいだが。

その時だった。

「うおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

「!!」

墮天使目掛けて……………松下が勢いよく走りこんだ。

当然、墮天使は迎撃する為に腕から刃を出現させる。

だが、それよりも早く、松下が柔道の抑え込みの要領で、墮天使を地に伏せていた。だが、背中から墮天使の刃が。

そこから血をダラダラと流すも……松下の意識は未だに保たれていた。

「「「松下五段!!」」」

一同は叫ぶ。

そんな彼らに向かって、松下は言った。

「行け！ 俺の意識がある内にいけえええええええええ!!」

「何だよその死に際だけ格好いい奴みたいなセリフは!!」

日向が松下に向かってそう叫ぶ。

「急いで！ 今の内に行くわよ！」

「あ……ああ!!」

ゆりの指示の元。

一同は墮天使を組み伏している松下の横を通り過ぎる。

「耐えろよ松下五段!!」

藤巻が通り過ぎる際に、松下に向かってそう言葉をかけた。

一同が去っていった後で、松下は薄れいく意識の中、こう呟いた。

「後は任せたぞ……みんな……」

そして松下の意識は、ここで途切れた。

松下を中心として、その場には血だまりが出来上がっていた。

※

松下が犠牲となった後、一同はどうか危機を脱した。

「松下君の犠牲は無駄にしない……」

歩きながら、ゆりが呟いた。

その後で、一同に向かつて言った。

「彼のおかげで分かったんだけど、先に進むにはあれが一番いい方法なのよ。『天使』は身体が小さいからあれが一番」

「なるほど……いくら『天使』が馬鹿力でも、柔道の抑え込みなら通用するということか」
ゆりの言葉に続くように、来ヶ谷が言った。

「つまり、一体につき一人の犠牲で済む……ということですね？」

メガネをずらしながら、高松が言った。

「犠牲で済むって……!」

音無は何か言いたそうだったが、そこにゆりの言葉が被さった為に、無言になるしかなかったのだった。

「そして私達がオリジナルを助け出せれば、彼らも助け出せる……急ぎましょ」

その言葉の通り、彼らは前に進むしかなかったのだった。

「俺の筋肉を見せる時が来たようだな……」

「……いや、脱ぐの速いからな」

服を脱ごうとしている真人に、日向がそう突っ込んだという。

*

「四体目だが……マジでやるのか？」

目の前にいる墮天使を見て、恭介がそう呟いた。

その時だった。

「It's my turn」

「へ？」

手をポキポキと鳴らしながら、音無の横からTKが出てきて。

「Get chance and look!」

そう言いながら、TKは勢いよく墮天使に向かって走って行き。

「FoooooHaaHaaah!!」

そして、目の前で……飛んだ。

最終的には、墮天使を抑え込んで、心臓をグサリ。

「TKええええええええ!!」

「おいおいなんだよこの少年漫画の最終回みたいな展開は!?」

TKの名前を叫ぶ一同に、この状況に対してツツコミを入れる日向。

「いいから、どんどん行くわよ!」

ゆりの指示の元、一同はどんどん先へ行くこととなったのだった。

*

(ここからしばらく先は、登場人物達のセリフと、効果音のみでお楽しみ下さい)

「この肉体……魅せる時が来たようですね」

グサッ。

「高松うううううううう!!」「」

*

「へ……へへ……!! ビビってられるかってんだ……だりやああああああああ

!!」

ザシユ!

「グハッ!」

「藤卷いいいいいいいい!!」「」

*

「浅はかなり……浅はかなりいいいいいい!!」

ザクツ!

「「椎名ああああああ!!」」

*

「見せてやるぜ……俺のこの鍛えあげた筋肉をなあ!」

グサツ。

「「井ノ原ああああああ（真人おおおおお!!」」

*

「リトルバスターズ最高うううううう!!」

ザシヤツ!

「「宮沢ああああああ（謙吾おおおおお!!」」

*

「ええそうよ! ジャンケンで負けて犠牲者になったのよ! 滑稽でしょ。笑えるで

しょ。笑えばいいわ! アーハツハツハツて!!」

グチュツ!

「「朱鷺戸おおおおお!!」」

*

「さあ……お姉さんの胸の中に飛び込んでくるといい……!!」

ザグシャツ！

「「「来ヶ谷ああああああああああああ!!」」」

*

「さあ気付くんだ。お前はピエロだ。ほおら、あんなところに……寂しげな目をして
る女の子がいるよ……」

直井の瞳が赤くなる。

催眠術を大山にかけているのだ。

そしてその瞳を直視した大山は。

「ああー！ いっけなくい本当だ！ 僕が笑わせてあげ……!!」

ザクツ。

そのまま、墮天使に刺されてしまった。

「大山ああああああああ!!」

日向と恭介の叫び声だけが、響き渡る。

「お前最低な……」

「い、いや違うんですよ！ 聞いて下さい、言葉のあやです。次は僕が行きますから

……」

自分のことを指差しながら、直井はそう言った。

*

サクツ。

そして宣言通り、直井が墮天使に突っ込んでいき、心臓をグサリ。

「……」

「……おい誰か何か言つてやれよ」

無言の時間が流れた故に、日向からそんな一言が洩れる。

ユイは、首を振りながら、

「いや、私名前知らないですし……」

「知つても叫ぶ気分じゃないというか……」

恭介も、呆れたような表情を浮かべながら、そう言った。

「行きましょ」

このまま止まっても仕方ないと考えたゆりは、残ったメンバーにそう言うのと、先頭を歩き、先へと向かった。

*

「これで何体目よ……」

「分かんねえ……もう数えてねえよ」

大分進んだところで。

またしても墮天使が現れてくる。

もう何体目なのか数える気力すらなかった。

「今度こそ俺が行く」

「いや、俺の番だな」

「待て……俺の番だ。お前達は最後まで残れ」

音無・恭介の二人が進んで犠牲になろうとしたら、日向が二人を押し退けて、ゆつくりと前に出た。

自らが犠牲になるつもりなのだろう。

「どうして？」

音無が理由を尋ねると、日向はこう言った。

「あの子はお前達を必要としている……とりわけ音無をな。そんな気がするんだ。だからお前達は進むんだ。いいな？」

そうはつきりと、二人に言う。

「後もし……」

「行くんならとつとに行けやあああ！」

ゲシッ！

何かを言おうとした日向の背中を思い切り強く蹴ったのは……ユイだった。

蹴られた日向は、そのままの勢いで墮天使のところまで走っていき。グサリと、心臓を刺されて犠牲に……。

「待ってて……先輩！」

周りがキラキラと輝いているのではないかと思わせる程の表情でそう日向に言うユイ。

そんなユイに対して、音無が一言。

「お前……日向のことが好きなのか？ 嫌いなのか？」

「……どっちでもいいだろ、別に」

恭介は、思わずそう呟いていた。

※

そして彼らは、ギルド最深部爆心地に到着した。

「とうとうここまで来たか……」

「ああ、そうだな」

恭介の呟きに対して、音無が小さな声で返事を返す。

下を見れば、結構深い。

「ここから一気に最下層まで降りることになるわ。音無君・棗君・ユイの三人はオリジナルを探して。見つけ次第、『Harmonics』の発動を促すこと」

「……俺が戦った方がいい」

決意を秘めた表情で、音無がゆりに言うが。

「お前、さっきの日向の話聞いてなかったのか。立華はお前を特に必要としてるんだぞ？ アイツは俺も必要だとか言っていたが、俺はそこまで必要じゃないんだろうが……それに、このメンバーの中だと、相手に対して拮抗できるのはゆりだけだ。だから俺達は探す方に集中するんだ」

「わ、分かったよ……」

恭介にそこまで言われてしまつては、音無から反論を述べることもなうて出来なかった。

「じゃあ、私が戦います！」

比較的真面目な表情でユイがそう言ったのだが。

「弱過ぎて話にならないわ」

「話にしてくださいよ！」

ゆりのその言葉によつて一刀両断される。

「まあ……しようがないよな」

「憐れみの表情で私を見ないでくださいよ!!」

恭介が憐れみの表情でユイを見てくるので、ユイはそう懇願していた。

「これが最後の作戦になるといいわね……」

「だな……」

「あく待つてくださいよ！」

そして彼らは、一気に下へと降りて行った。

その途中で……。

「ふぎやつ！」

という短い悲鳴と共に、ガン！ という衝突音が聞こえてたが、音無達はその音を気にしている余裕がなかった。

「あれ、ユイは？」

下に降りきった後で、ようやくと彼らはユイがいらないことに気付いた。

しかし、理由を知る者は誰一人としていなかった。

「なんか、短い悲鳴だけ聞こえたが……」

『『天使』の餌食になったのかもしれないな……』

「可哀想に……でもすぐに助けに行くわ」

三人はそのままユイの行方を調べることなく、そのまま先へと進んで行った。

「また生き残ったのはこの三人ね……」

「そうだな……」

「前回と一緒だな」

ゆりの呟きに答えるように、音無と恭介が答える。

「そろそろ最後かしら？」

「そう願いたいけど……」

そう呟いたところで、物陰からゆっくりと、最後の一人と思われる墮天使が現れた。

その姿をジッと見ていた音無と恭介に、ゆりが一言。

「ほらっ、アンタ達はボサツとしないでオリジナルを探す！」

「あ……ああ！」

ゆりに言われて、音無と恭介は動く。

ゆり達から離れて、奏搜索へと向かった。

「……」

それを眺めた後で、ゆりは威嚇射撃をする。

その弾は、墮天使によって弾かれた。

「やっぱり……」

呟いた後で、ゆりは思い切り強く地面を蹴った。

走りながら、弾を撃っていく。

だが、それらは墮天使の腕から出現している『Hand Sonic』によって弾か

れる。

そんなことは、ゆりにとっては想定内のことだった。

近付いてきたところで、墮天使は刃をゆりの心臓目掛けて突き刺しにかかる。

ゆりはそれを身体を捻ってかわすと、墮天使の腕を掴んで、思い切り壁に投げつけた。

ドン！ という衝撃音と共に、土煙が舞う。

その中に、ゆりは更に銃弾を二発放った。

弾が切れた銃を投げ捨てて、ポケットの中から手榴弾を取りだし、安全ピンを引き抜いた後に……墮天使に向かって投げた。

ドオン！ と爆発音を奏でて、辺りは更に土煙が強くなる。

やがてそれが晴れてきたところで、墮天使はその場に立っていた。

「ちっ……しゅとーいー」

「……」

そう呟いたゆりだったが、墮天使が両腕を高く上げて、刃を重ね合わせたのを見て、

「！ 耳を塞いで！！」

「!?!」

慌てて音無と恭介の二人は耳を塞ぐ。

そして、

「Gird Skill Howling」

眩いた瞬間。

辺り一面に、あり得ない程の騒音が鳴り響いた。

岩を剥がし、ピリピリと地面が揺れる程、それは勢いが凄まじかった。

「な……なんだこれ!?!」

「耳が……!?!」

手で耳を塞いでいても、完璧には塞ぎきれていない様子だった。

だが、そんな中で……ゆりが不敵な笑みを浮かべながら、堕天使に近付いた。

「……!?!」

グサツ!

ゆりのナイフが、堕天使の腹部に突き刺さった。

驚きの表情を浮かべているのは、堕天使だった。

そのまま、堕天使の上に乗っかるように倒れこんだ。

「気絶……しない!?!」

しかし、その声はゆりには届いていなかった。

何故なら……。

「え? なんて? 耳栓してるからよく聞こえないのよ」

そう。

前に『天使』エリア……もとい奏の部屋に潜入した際に、既にその存在を知っていたのだ。

だからその対策として、耳栓を用意していたのだ。

「くっ……うぐっ……!!」

苦しんでいる様子の墮天使。

そんな墮天使に、ゆりが悪魔のような笑顔を見せていた。

「ほおら観念なさい。なんなら、もう一本のナイフで喉を掻っ切つてあげるわよ？」
そんな言葉を告げるゆりの表情は、素晴らしい程輝いていたという。

*

「どこだ……どこにいる……?」

その間、音無と恭介の二人は奏を探していた。

「いたか？」

「いない……!!」

「どうした!？」

その時、音無が何かを見つけたような声をあげた。

気になった恭介がそこまで行ってみると……そこには、布団の上に寝かされている、

「立華……無理を承知で頼むのだが、一つだけ使って欲しい能力がある……『Harmonics』だ」

申し訳ない表情を浮かべて、恭介がそう頼む。

その続きを、音無が言った。

「それを使ってくれたら、みんなが助かる！」

「……そう。分かった」

「使っても、身体はもつか？」

心配そうな表情を浮かべて、音無が尋ねる。

奏は、小さく頷いた後で、

「一回くらいなら……Gird Skill Harmonics」

そして、短くそう呟いた。

すると、奏の身体から、真上に分身が現れてきた。

それを確認すると、音無と恭介は、とりあえずポケットの中から拳銃を取り出す。

赤眼をした堕天使は、音無に向かってこう言った。

「プログラムの書き換えをしたようね」

タイムウエイトは10秒。

ゆりが書き換えたプログラムにより、10秒後には分身がすべて奏に戻る。

「ああ……すべてコイツの中に戻る」

それで、今回の事態は解決する。

そう……音無は考えていた。

しかし……恭介は、まったく違う考えをしていた。

「……待てよ。あれだけ冷酷な性格で、俺達を殺そうとしていた立華が、すべてこつちの中に戻っていいのか？ ……それって、ヤバいぞ！」

「……どういふことだ？」

「まだ分からないのか!! 分身は、ただの操り人形なんかじゃなく、それぞれがきちんとした性格を持っている。そしてそいつらは、俺達を殺そうとする程冷酷な性格の持ち主だ。それだけの数の分身が立華の中に戻ったりなんかしたら……」

「そう……そんなことが起きたら、ただで済むと思う？」

「……!! 待つてくれ!!」

そしてようやくとことこの重大さに気付いた音無は、墮天使に向かってそう叫ぶ。

しかし、無情にもタイムウェイトである10秒は過ぎてしまった。

「時間ね……」

よって、ゆりが書き換えたプログラム通り……すべての分身が、奏の中に戻る。

冷酷な性格を持った、墮天使がすべて……奏の中に戻る。

「!!」

辺り一面から、それぞれに配置されていた墮天使のデータが流れ込んでくる。

そしてそれは……奏の身体の中に、一気に吸収されていった。

「はあっ! うぐっ……あがあっ!!」

それはまるで、身体の中に一気に毒素を入れられるのと同じと考えてもらっていいだろう。

本体をウイルスが浸食していく……そちらの例の方が分かりやすいだろうか。

「くそっ……!!」

音無はそう悪態をついた後で、奏の身体をしつかりと抱きしめる。

そして、こう願うのだった。

「無事でいてくれ……奏!!」

「……頑張ってくれ、立華」

今二人に出来ることは、苦しむ奏を見守ることだけだった……。

s
episode 17 In Your Memory

「この子……一度にたくさんの意識と同化しちゃったんだってね」

「……ああ」

保健室にて。

ベッドの上で眠っている奏の周りには、音無とゆりの二人だけしかいなかった。

時刻は夜中。

保健室は電気がついていなくて、暗かった。

「……私のせいね」

「いや、ゆりはリーダーとして最高の仕事をしたよ。戦線の最大の危機を回避した」

落ち込むゆりを慰めるように、音無は言う。

音無は更にこう付け加えた。

「それに、誰も想像出来なかったさ。ギルドに大量の分身を配置して、待ち構えているなんてさ」

確かにその通りだった。

ギルドに大量に配置された、墮天使。

一体誰があんなことになるなどと想像出来ただろうか。

「それに、あれは奏の……」

言いかけて、音無は言葉を間違えたと思った。

だから音無は、途中で言葉を変えた。

「……冷酷な奏の考えた作戦で、それはやっぱり、奏だから……仕方がなかったことだと思っ
思う」

「そう……そう言ってくれると助かるけど……」

音無の言葉を聞いて、ゆりは少し救われたような感覚を感じた。

そしてゆりは、そのまま保健室を後にした。

「……」

しばらく、音無は口を開かなかった。

だが、少し時間が経過した後で、独り言ともとれるような言葉を、奏に向けて呟いた。
「なあ……病院なんてない。誰も病まないからって言ってたじゃないか……じゃあなん
で……起きてくれないんだ……畜生！」

悔しさだけが、音無の心の中に沸き上がってくる。

しかし、だからと言って、彼自身が奏に対してしてあげられることなど、何もなかつ

たのだった。

ただ一つ出来ることがあるとすれば……奏が起きることを……戻ってくることを信じて待つことのみ。

「お前だつて分かつてるんだろ？ 自分に出来ることは……立華が目覚めるのを信じて、待っていることだけってな」

「!?」

ガラツと扉を開けて中に入ってきたのは……恭介だった。

どうやら見舞いに来ただけらしいが、音無の姿を見つけて、話しかけないわけにはいかなかったようだ。

「元はと言えば、俺達がきちんと護衛をしていなかったことが原因だ。全力で立華を守ると言っておいて……結局俺は、また誰かを守ることが出来なかった……これでもリトルバスターズのリーダーやってるのよ……考えることが当たっても、相手が悪すぎた……」

「……棗は何も悪くない。むしろ奏の護衛を引き受けてくれて、感謝してるくらいだ。しかも、もし奏を守りきれていたとしても、結果は同じだったと思うから」

結論から言ってしまうえば、結局こうなることは避けられないことだったと言うことだ。

恭介があの時奏を護衛仕切れていて、その場でゆりの書き換えた通りのプログラムを発動させたところで、結果は同じ。

冷酷な性格の奏が、一気に奏の中に流れこんで来るだけの話。

「……ありがとな、音無。そして、済まなかった……」

「謝らなくてもいいのに……けど、一応許すよ」

「……立華が目覚めたら教えてくれ。もつとも、ちよくちよく顔を出しにくるつもりだけどな」

「ああ、そうしてやってくれ。その方が、奏も嬉しいだろうからさ」

音無の言葉を聞くと、恭介は苦しそうにしていた表情を少し和らげて、そのまま静かに保健室から出て行った。

*

場所は移って、校長室。

ゆりが保健室から戻ってきたところで、一同が深刻そうな表情をしていることには変わりがなかった。

「これまでにないことです」

そんな中、高松が話を切り出してきた。

「『天使』のあんな状態は初めてです……」

「このまま目覚めないことも……場合によつてはあり得るかもしれないな」

「……それこそイレギュラーな事態よ」

来ヶ谷の眩きに対して、ゆりがそう反論する。

そしてゆりは、更に言葉を付け加えた。

「彼女は絶対に目覚めるわ。いつか目覚めて……寝すぎただけという結果に変わる」

「その時の彼女は……どの彼女なんだ？」

隅の方で壁に寄りかかっていた椎名が、そんな疑問を口にする。

だが、一同にとつてはそのことよりも。

「し……椎名が喋った!？」

「これは相当重要な問題ってことだよ!!」

滅多に喋らない人物が喋った時。

人はそれを通常通りではないということを意識する。

今回とて、例外ではなかった。

「まさにそう……それが問題よ」

大山の叫んだ言葉を肯定するように、ゆりが静かにそう言った。

「……で、どっちの『天使』なんだ？」

「それは最初の『天使』だよ……一緒に釣りをした」

「だが俺達を襲った意識は、すべて好戦的で冷酷だった」

藤巻の疑問に答えた大山の言葉を否定するように、野田が言う。

それはまごうことなき事実であるだけに、そのことに関して否定は出来なかった。

「数でいけば100対1くらいだぜ」

「今何故意識を失っているのか……」

藤巻の言葉を聞いた後で、日向がとある一つの推論を述べる。

「多分そのたぐさんの意識が、アイツの小さな頭の中で……なんつつかその……ぐちゃぐちゃになって酷いことになってるからじゃねえのか？」

「じゃあ目覚めるとしたら……100の意識で目覚めることもあるの？」

そんな大山の疑問に、ゆりが答えた。

「割合で言えば、元の性格で目覚める可能性は約1%つてところね」

「……どうする？」

「手は打つてあるわ……竹山君を『天使』エリアに送りこんだ。マニュアル翻訳が出来る仲間と共にね」

日向の言葉に対して、ゆりはそう答えた。

「TKと松下は？」

「保健室よ……二人の見張り」

二人とは、奏と音無のことを指すのだろう。

日向は頭の中でそう考えていた。

「データをすべて消してログインパスワードを変え、すべての能力を封じるといふことか……」

ソファアの上で本を読んでいた直井が、そんなことを呟く。

その後で、直井はゆりの方を見て、

「だがそれも、一時しのぎでしかない……分かってるのか？」

「分かってる……いつか突破されて、またデータを打ち込まれる」

「ならマシン每破壊してしまえばいい！」

ハルバードを構えながら、野田が不敵な笑みを浮かべつつそう提案する。

しかし、ゆりはそれを即座に否定する。

「マシンはコンピュータ室の備品としていくらでも代わりはあるの。ソフトも同様」

一通り話がついた後で、

「ありゃ？ 今日皆さんは頭が良さそうですよ？ 何か悪いものでも食べましたか？」

ユイがそう問いかけたところで、一同は何も言葉を発しなくなつた。

そんな中で、ゆりは心の中で呟く。

「(後は天命を待つだけね……果たして、神は誰に味方するのか……)」

※ そしてゆりは、それ以上は何も考えずに、ただ経過を見守るだけにしたのだった。

DAY 1

「!!」

目が覚めると……そこは電車の中だった。

荷物置きとなつている柵が、何らかの衝撃でひしゃげているのが目に映つた。

そんな中、音無は時間が気になつた為に、ズボンの左ポケットの中から携帯電話を取り出す。

表示されていた時間は……『1月15日 01:23』。

彼が行く予定だったセンター試験の開始時刻を大幅に上回っていた。

「やべえ……過ぎてんじゃん……センター試験」

携帯電話を閉じて、ポケットの中に入れなおす。

それから音無はゆっくりと身体を起こして……そして、惨状を見た。

「……!!」

そこにいたのは、傷だらけの人達ばかりであつた。

ある者は頭から血を流し。

ある者は小さくうめき声をあげ。

ある者は……そのまま息絶えていた。

「つはあ！」

「!?」

音無が目の前に映る事実を把握するのに時間をかけていたその時。

隣の車両へ移る際に通る扉の近くで、誰かが寄りかかるような音が聞こえてきた。そこを見ると、一人の青年がそこにいた。

「お、おい！」

音無はすぐさま駆けつけていた。

しゃがみ込んで、

「だ、大丈夫か？」

「少し……ふらふらする……」

音無はその言葉を聞いた後で、青年の髪の毛を少しかき分ける。

みると、そこには傷跡があり、そこから血が流れ出ていた。

「額から血が出てる……」

布を破り、それで簡易的な包帯を作ることにする。

作りながら、音無は質問を重ねて行く。

「意識は？」

「大丈夫……」

「気分は？ 吐き気とかあるか？」

「ああ……大丈夫だ」

確認を取りながら、作った包帯を青年の頭に巻いて行く。

その手際の良さを見て、今度は青年の方から音無に尋ねた。

「何だ……アンタ医者か？」

「まさか……ただの学生だよ」

医学の道を目指しているとは言っても、まだ音無は高校三年生。

学生であることには変わりなかった。

「……立てるか？」

「ああ」

音無は青年に自分の肩を貸すと、何とかその場から立ち上がる。

そして、車内にいるのは安全ではないと考えた音無は、

「出よう」

「……ああ」

なんらかの衝撃でひしゃげている扉を蹴飛ばして、音無と青年は電車の中から脱出す

る。

そして、電車の外から惨状を確かめてみて……改めてことの重大さを把握していた。前方の通路は瓦礫によって埋め尽くされていて、脱出不可能。

「ひでえ……」

その惨状を見て、青年は呟いた。

「……そうだ、助けを！」

助けを呼ぼうとポケットの中から携帯電話を取り出すも……開けてみたらそこは圏外。

当たり前だ……何せここは地下なのだから。

「くそっ……！」

「駄目か……」

音無が悪態をついたことで、どうやら外部との連絡は不可能なんだと認識した青年。少し考えた後、音無はこう呟く。

「中に残ってる人達を助けよう」

「手伝おう……」

すると、青年も手伝うと言ってきた。

音無は、青年の身体を心配して、

「大丈夫か？」

「まだ少し身体がふらつくが……」

そう言った後で、青年は右手を音無の前に差し出して、

「五十嵐だ」

「音無」

パシッと、互いの右手を絡めて、握手を交わした。

時間にして、およそ数十秒。

その後で、青年——五十嵐が言った。

「……………急ごう」

「……………ああ」

そして二人は、もう一度車内に戻り、残された人達を外に避難させることにした。

二人で手分けをして、動けそうな人達を見つけたらその人達にも手伝ってもらって。

そうしている内に、避難作業は結構進んでいた。

「あ、ありがとうございます……ほら、鈴もお礼を言つて」

「うみゆ……………ありがとう」

その中に、音無同様に目立った傷が外見からでは分からない（所々切り傷が目立つところから、決して無傷と言うわけではないが）、まだ被害者の中では軽度な方の少年少女

がいた。

少年は、見るからにあまりパツとしない人物だった。

しかし、決して弱いわけではなく、何処か強固な意志を感じとることが出来るような人物だった。

少女は、頭に鈴の髪飾りをつけていて、先ほど音無に向かって頭を下げた時には、その場に響き渡るのではないかと思われる。

ただ、一つ難点があるとすれば……若干人見知りがある点だろう。

少年からは、『鈴』と呼ばれていた。

「あの……僕達も手伝っても構わないでしょうか？」

「でも……身体は大丈夫か？」

音無は何よりもまず、相手の身体のことを心配する。

しかし、二人は首を横に振って。

「問題ない」

「僕達は切り傷程度ですから……それに僕達……前にもこういった事態があつたんだ。その時の経験を生かしてここにいるみんなを助けたいんです」

「……分かった。俺は音無……お前達の名前は？」

少年の決意を聞いた音無は、二人の名前を聞く。

「直枝理樹です……ほら、鈴も」

「う、うん……棗鈴」

「二人ともよろしく」

そして理樹と鈴も交えて、乗客の救出活動は続いた。

そして……数分後には、生存者全員を電車の中から救出することに成功した。

ただその中でも……残念ながら息絶えてしまった人物も何人かいた。

「……これで全員か」

「お疲れ様、鈴」

「……少し疲れた」

理樹と二人で作業をしていたとは言え、見知らぬ人物達ばかりの中での救出活動は、鈴にとつては結構神経を使う作業だったのだろう。

しかし、そこを何とか頑張った辺り、どうやら精神的に成長しているのだろう。

「ありがとな、二人とも」

「どう致しまして……そちらの方は？」

音無と共にやってきた五十嵐を見て、理樹が尋ねる。

咄嗟に鈴が理樹の後ろに隠れようとしたが……その途中で、鈴は動きを止めた。

「ああ。こっちは五十嵐だ。一緒に救出活動を手伝ってもらってたんだ」

「五十嵐だ。よろしく」

「直枝理樹です……よろしくお願いします」

「棗鈴……よろしく」

五十嵐の顔をチラチラと見ながら、鈴は自分の名前を言う。

それを見た五十嵐は、優しげに微笑むのだった。

「それじゃあ俺……外に出れるか見てくるよ。必ず戻ってくるから。ライト借りるぞ！」

まだ出られる可能性のある後ろ側に向かって、音無は向かうことにする。

歩き去っていく音無の背中を見て、

「音無！」

「なんだ？」

「……絶対に助かろう！」

「……ああ!!」

五十嵐がそう叫んで。

その五十嵐の言葉に返事を返した後、音無は止めていた足をもう一度動かすのだった。

※

少し歩いたところに、行き止まりがあった。

そこには紛れもなく瓦礫があつて、どうやらこれのせいで脱出は完璧に不可能ということらしい。

もはや、助けが来るのを待つしかなかった。

「くそっ……!!」

音無が、この事態に対して悪態をついた。

その時だった。

「あ……が……!!」

突如として音無を襲う、謎の痛み。

それは腹部からであり、痛みの正体を知る為に音無が服を少しだけズラしてみると。

「……んだよ、これ!!」

白いはずのワイシャツが、その部分だけ赤く染まっていた。

瞬時に理解した……そこから出血しているということに。

「ゲホゴホ!!」

思わずその場に座り込み、音無は咳き込む。

持っていたライトは、その場に落としてしまった。

「く……そ……ハアハア!!」

音無に出来ることは、今はその痛みに耐えて立ち上がり、五十嵐達のところへ戻り、この事実を報告することだけだった。

*

「……お、音無！」

「音無さん！」

戻ってきた音無を見つけた五十嵐と理樹の二人は、即座に音無に駆け付けた。

そして、尋ねる。

「……出れそうでしたか？」

「……ちよつと難しい」

「そうか……」

その事実を知った二人は、思わず残念そうな表情を見せる。

「土砂で道が塞がっているのか……なら、私の蹴りでなんとか……」

「駄目だよ。変なことをしてしまったら、それこそ余計に助からなくなっちゃうよ」

「そうか……」

直ぐ様解決策を考えようとする鈴。

しかし、どうにかしようにも、そんな方法など見つかりそうにもなかった。

「……」

音無は、しばらくの間思案顔を浮かべる。

辺りを見回して、その後で、言った。

「みんな、聞いてくれ！」

「!?」

その声に反応する一同。

中には希望を持った人が。

中には絶望しきった人が。

中には苛立ちを見せる人がいた。

しかし、音無はそんな目線を気にせず、一同に向かって、言った。

「トンネルは、前も後ろも土砂で塞がっている。携帯も繋がらない。外との連絡も取れない。ここからは一心同体、一人だけ助かろうなんてことは考えないでほしい！食糧と水を集めて、平等に集めよう!!」

音無の言ってることは正しい。

それが、ここにいる全員が生き残る為の最善の方法だろう。

しかし、音無がリーダーシップを取ることに關して苛立ちを見せる人物もいた。

「ちよつと待て！いつからお前が仕切ることになったんだ！」

そんなことを言い出す青年がいた。

その青年に対して、五十嵐は言葉を返す。

「じゃあ誰が仕切る！ 怪我人の看病の指示を誰が取る!? コイツには医療の知識がある。まさか怪我人は放置なんてことはないよな？」

「そ、それはねえけどよ……」

そう言われてしまったら、これ以上反論を述べることは出来なかった。

それだけ、この状況が普通じゃないということだ。

そして音無が、希望を持たせる為なのか、自分に言い聞かせる為なのか。

全員に向かってこう言った。

「必ず助けがくる……それまでの辛抱だ。一緒に頑張ろう!!」

*

DAY 2

「喉が乾いたら言ってください！ 食事は定時になりましたら伝えます!!」

「気分が悪くなったら音無に言ってください!!」

少しでも音無にかかる負担をなくそうと、理樹や鈴、五十嵐の三人が働く。

そんな中で、音無も怪我人の介抱に回る。

「もう少しの辛抱ですよ……何かあったら、呼んでください」

「あ、ああ……」

電車の座席を一つくりぬいて、そこに寝かされる、恐らくは重傷だと思われる患者。

音無はその患者に色々と処置を施すと、その人物に向かつてそう言った。

処置してもらった患者は、小さくお礼の言葉を呟くのだった。

「音無」

そんな音無に、五十嵐はコップに入った水を差し出す。

音無は、五十嵐の所まで歩いて向かい、その水を受け取る。

そして、しばらく周りを歩きだした。

「……食糧は？」

「手作り弁当とお菓子が少し。飲み物はペットボトルの水とお茶が……五、六本つてと

ころかな」

「もって三日か……」

音無は、食糧の少なさを聞いて、思わずそう呟いていた。

「お前本当によく頑張ってくれるよな……けど自分の体力も温存しとけよな。真っ先に倒れるぞ」

「……ああ」

それは五十嵐の優しさだったのかもしれない。

音無は、その忠告を素直に聞き入れることにした……そんな時だった。

「ッくらテメエ!!」

「!?」

突如聞こえてきた怒声。

その正体を探るべく、音無と五十嵐がその方向を向くと……そこには、カバンの中に水を入れて、その場から逃げだす青年が一人いた。

その後ろを、何人が追っついていて、捕まえた時に、その反動で水が少しこぼれてしまった。

「ああ、水が!!」

「みんな落ち着いて!!」

「やめろ!!」

理樹と五十嵐の叫び声が聞こえて、五十嵐が水を抱えた人物を蹴りかかろうとしている青年を取り押さえて、何とかその場はおさまった。

音無は、ゆっくりりと倒れこんでいる人物に近づいて行く。

「な……何だよりリーダー様。俺を拘束でもしようってのかよ!」

男は、どうやらこの状況に対して混乱しているようだった。

だから、逃げられやしないと分かっただけで、水を持ちだそうなどということをしたのだ。

「好きにしろよ！ どうせもう誰も助からねえんだからな！！ なあ！！ みんなも分かってんだろ!？」

「……助かるさ。きつと……いや、絶対に」

そんな男に対して、理樹が言う。

その横では鈴も、

「そうだ。諦めたらそれで本当に終わりだ。私は諦めない。絶対に助けは来る」

だが、周りからは避難の声も聞こえてくる。

「綺麗事だ!!」

「今、その子が大切な水を!!」

「大丈夫だ」

そんな言葉を、音無は一言で解決した。

その後で、こう付け足した。

「今のは……俺の分だ。もう俺は、今後一切飲まないから。だから安心してくれ」

自分の身を犠牲にしても、音無は助けられる人を助けたいと思った。

その心は立派だとは思いますが、どうしてそこまで他人のことを想ってあげられるのだろうかと、五十嵐は心の中でひそかに呟いたという。

「だれかソイツを殴ってよ！ こっちの気が済まない!!」

「なら、私が成敗する……」

「ああ、頼むよ棗……」

決意を秘めた表情で、鈴が言った。

なので五十嵐はそんな鈴にそう告げた後に、音無の左肩に手を置いて、

「大丈夫だ。俺の分を二人で分けて行こう」

「済まない……」

「気にすんな」

ポンと肩を軽く叩いた後で、数人の男子に、

「よおし、コイツらをどっかに移動させるぞ。おい、テメエらも手伝え！」

そう、指示を出したのだった。

「それにしても、お前達は強いな……」

「何がですか？」

「心だよ。普通だったならこんな状況に陥ったとしたら、混乱してもいいだろうに。直枝

と棗はそんなことがない。だから、どうしてかかって思ってたよ」

普通、非常事態に陥った時、人は必ずしも正しい行動を出来るとは思えない。

時には本能的にその場から逃げだしたり、発狂してしまったりすることも多々ある。

しかし、理樹と鈴は違った。

自分の意思で、きちんとした行動が出来ていたのだ。

音無は、それを素直に感心していたのだ。

自分の中でも、少し焦りが生じてきているのを感じていたので、二人が本当に羨ましいと思ったのだ。

「前までの僕達だったら……こんな状況に陥ったらすぐに現実逃避していただろうし、僕自身もすぐに気絶してしまっていたと思います」

「……不服だが、理樹の言う通りだ」

鈴も、理樹の言葉に同意する。

「僕達は……とある人達のおかげで、ここまで成長出来たんですよ」

そう前置きを置いて。

そして理樹は、話を始めた。

※

理樹はナルコレプシーという病気を抱えていた。

それは、何の前触れもなく唐突に眠りについてしまうという病気だった。

そのせいで、授業中に突然眠りについてしまうこともしばしばあった。

仲間達のおかげで何とか生活に支障は来さなかったが、それでも何とか克服したいと思っていた。

鈴は極度の人見知りだった。

その上に、心も弱いままだった。

そのおかげで、見知らぬ誰かが話しかけると、すぐに物陰に隠れるか、理樹の背中に隠れてしまうのだ。

こればかりはどうしようもなく、結局鈴は人見知りを治すことが出来ないまま、高校生まで成長してしまっただった。

そんな中で、彼らにとある事件が襲いかかる。

それは修学旅行での話だった。

いや、厳密に言えば修学旅行の目的地へ向かうまでのバスでのことだった。

そのバスが事故に遭い……崖から転落したのだ。

理樹と鈴は真人と謙吾に命を助けてもらったも、理樹はその場でナルコレプシーを発症して、気絶。

鈴は理樹と一緒に逃げる道を選ぶことが出来ず……そのままバスは炎上。

そんな状態を見て、これでは駄目だと考えたらしい恭介は……真人・謙吾と共に『世界』を創り上げたのだ。

それは修学旅行が始まるまでの一学期を延々と繰り返し、そんな世界だった。

その世界で理樹と鈴は経験を積んで、精神的に成長した。

時期が来た時に、恭介の口より真実が告げられる。

そうして現実の世界に戻ってきた理樹と鈴は……自分達の力で、今度は恭介達を助けたと願った。

そして二人は……自分達だけで世界を創り上げ、修学旅行のバス事故にて、リトルバスターズの全員を救い出すことに成功したのだった。

*

「嘘みたいな話に聞こえるけど、本当の話なんです……」

「そうか……」

理樹の話を聞いた音無は、半ば信じられなかった。

それはまるで漫画のような話で、とてもじゃないが信用出来る話でもなかった。

しかし、それは理樹と鈴が経験した本当の話なのだ。

事実なのだ。

目を見て、音無は理樹が嘘をついていないことをくみ取り、

「分かった……信じるよ」

「信じてくれてありがとう……けど、恭介達のおかげで僕達が強くなれたことは事実なんです。それだけ分かってもらえれば、十分です」

「もしもソイツに会った時には、俺の方からお礼を言っておくよ。二人を強くしてくれ

てありがとう。おかげで負担が減ったってね」

「バカ兄貴にそんなこと言う必要はない……けど、言ったら喜ぶかもしれない」
少し顔を赤くしながら、鈴がそう言った。

音無と理樹は、そんな鈴を見て、思わず笑ってしまったのだった。

「なっ……!! 何で笑うんだお前達!!」

「だって……なあ？」

「だって……ですよねえ？」

互いの顔を見つめ合いながら、音無と理樹は笑い合う。

危機的状况に置かれた中で、思えば初めて笑った時だったかもしれない。

*

DAY 3

「音無!・音無!!」

「!?」

身体を休めていた音無は、五十嵐の焦るような声を聞いて起き上がる。

痛む腹部を押さえつつ、何とか五十嵐がいるところまで歩いてきた。

しかし、そこで目にしたのは……。

「!? くそっ!」

昨日音無が応急処置を施した青年が、目を瞑っていて、息もしていない様子だった。そして音無は感じる……目の前にいる人物が、このままだと死んでしまうと。

「音無さん!!」

理樹の叫び声が聞こえる。

しかし、音無の耳には入らない。

椅子に座らせているその人物に心臓マッサージを始めた。

「戻れよ……ハアハア……戻れえ!!」

叫びながら、息を切らしながら、音無は必死に心臓マッサージを続ける。

もう目の前で人の命を失いたくない。

必ず助きたい……!!

強固の意志は感じられたが、その意志とは裏腹に、その人物の意識は戻らない。

「……」

ポンと、五十嵐が音無の肩を叩く。

もうこれ以上は止めろという意思表示なのだろう。

「う……く……!!」

目の前で、またしても音無は人を死なせてしまった。

その後悔の念だけが、彼の心を支配していた。

「俺はあの日から……何を頑張ってきたのだろうか？ アイツ……初音に生きる意味を教えてもらって、それで、また人の命を目の前で失って……何も変わっちゃいない。俺は無力のままじゃねえか……あの時から、何も変わっちゃいないじゃないか……くそっ！」

心の中で、音無は自分のことを責めていた。

「……あの」

「鈴、今は声をかけない方がいいよ。その方が、音無さんにとつても気分が楽になると思うから」

何かねぎらいの言葉をかけようとした鈴を、理樹が止める。

「どうやら音無の心境を読み取ったようだ。」

「……」

音無は、かつて生きていた者の隣で体育座りで蹲ったまま、しばらくの間ショックのあまりに何も話すことが出来なかった。

*

DAY 7

一同の目が、虚ろになる。

立ち上がる気力すらなく、地面に横たわる者、壁に寄りかかる者。

それらのような人達しか見ることが出来なかった。

それまで何とか動くことの出来ていた人物達も、今では身体を起こすほどの気力すらなかった。

食糧・水は底をつき、彼らはここ数日何も口にしていない。

そんな状態が続いたのだ……体力が奪われて当然のことだろう。

「……」

そんな時、音無は少し前の話を思い出した。

それは妹の初音がまだ生きていた時の話。

どうして身体がよくならないんだろうかと音無が尋ねたら、初音は『ドナーがいればいいんだけどね』とだけ答えた。

そのことを思い出した音無は……。

「五十嵐……サインペン、あるか？」

「あ、ああ……」

力ない声で音無は五十嵐にそう尋ねる。

言われた五十嵐は、制服の胸ポケットからサインペンを取り出し、音無に渡した。

「……」

保険証を取り出した音無は、それを裏にして……そして、見た。

そこに書かれていたのは、臓器を提供する旨のこと……つまり、ドナーになるかならないかの意思表示だった。

音無は、すべての臓器に丸をつけ、その後で自分の名前を、それに署名した。

「まったくよ……」

一連の動きを見ていた五十嵐が、音無に向けてそう呟く。

その後で、自らも保険証を取り出して、

「……何しようよ、してるんだ？」

弱弱しい声で、鈴が五十嵐に向かってそう尋ねる。

五十嵐は、答えた。

「こうしておけば、自分の命がもし尽きても……それでも、その命が人の為に使われる。生きてきた意味が作れるんだ……」

別のサインペンを使って、五十嵐もそれに記入する。

それを見ていた理樹と鈴は……内心では絶対に助かると思っていないながらも、そんな彼の決意を見て、自分達もポケットの中より保険証を取り出して、ドナーの部分に記入をした。

すると、どうだろう。

周りの人達も、保険証を取り出して、臓器提供の意思表示をくださったではないか。

「なあ……やつばお前はすげえよ」

起きているのか寝ているのか分からない音無に向かって、五十嵐は言う。

「音無、見ろよ……あれだけ絶望していた連中がみんな、誰かに希望を託そうとしている。お前が、みんなの人生を……救ったんだぜ」

しかし、答える声はなかった。

代わりに、音無の手に握られていたサインペンが、カランと音を立てて地面に落ちる音が響く。

「なあ音無……聞いてんのかよ……音無……!!」

その時。

外からガラガラという機械の音が聞こえてくる。

助けが……到着したのだ。

「やった……僕達、助かったんだ……!」

「音無……私達は、生き残れたんだ……ぞ……」

理樹が素直に喜び、鈴がその喜びを音無と分かち合おうとした時。

音無の瞳は見開かれたまま、動くことを忘れてしまっていて。

そのまま音無は、息を……引き取った。

作業員による光が彼らを包んだのだが、その光はまるで、音無を現世からあの世へ送

る、送り火みたいに映ったと、理樹は感じていた。

※

「……」

いつの間にか夜は明けて、朝になっていた。

音無は、頭を撫でられるような感覚を感じて、目を覚ました。

最初に目に映ったのは……奏が音無の頭を撫でている所だった。

「奏え!!」

それで音無は理解した。

奏が、目を覚ましたということ。

「お前なあ……心配したんだぞ! 大丈夫か? 身体は平気か!」

身体を乗り上げて、音無は奏の身体を心配するような言葉をかける。

奏は、それらをすべて聞いた後で、

「壮絶な戦いだつた……」

「戦い?」

「貴方と約束した私が目覚めたのは、奇跡つてこと」

100の意識と1の意識。

1の意識が勝利したのは、まさに奇跡だったのかもしれない。

音無は、奏が最後にそう付け加えたことで、ようやくとその意味を理解することが出来たのだった。

「はあ……」

音無は、安堵の溜め息を漏らした。

そして音無は、奏に言う。

「なあ、俺……全部思い出したよ……死んだ時のこと」

奏に言った所でどんな反応が返ってくるのかは分からないが。

はたまた、はたして言う意味があるのだろうかと思いつながらも。

しかし音無は、このことを報告せずにはいられなかった。

「センター試験の会場に向かう途中、列車の事故に巻き込まれてさ。俺……医者になんりたかったんだ。誰かの為になりたい。『ありがとう』って言ってもらえるように生きていつて。そう思つて……結構必死に勉強したんだけどな……」

「……」

音無は、顔を下に向けながら、呟くかのように言う。

その後で、顔を少し上げて、

「でもさ……俺は最後に、この身体をドナー登録で残せたんだ。俺の身体は……誰かを助けてあげられたはずだ。そう信じる……」

「……」

「？」

ピトツと、頬に手の感触を感じる。

それで音無は、奏の方を見やった。

奏は、右手で音無の頬を撫でつつ、言った。

「きつとその『誰か』は、見知らぬ貴方に『ありがとう』って、一生想い続けるわね」
理由は不明だが、微笑んでいるのか、泣いているのか、嬉しいのか、悲しいのか。

あるいはそれらの感情がすべて混ざり合っているのか。

そんな表情を浮かべながら、音無に言葉をかけていた。

「……結弦？」

「何だ？」

「ならもう……思い残すことはない？」

奏は、これが最後と言わんばかりに、音無に対してそう尋ねる。

音無は、笑顔でこう答えた。

「そうだな……誰かをたすけられたなら、俺の人生は……そう悪いものじゃなかった。
そう思えるよ」

そう答えた後で、音無は何か気付いたような表情を浮かべて。

それから、こう言った。

「もしかして……俺は、消えるのか？」

「思い残すことがなければ……」

「……」

少し考える素振りを見せる音無。

そして音無は、その答えを……『思い残すこと』を見つけた。

「アイツらがいる」

「……そう。あの人達とずっと一緒にいたい？」

そんな問いに対して、音無は……本心から語った。

「そりゃ仲間だからな……居たいさ」

楽しいと思いはじめていた、戦線メンバーとの生活。

それらを手放すのは、音無にとっては苦痛にも近いことだった。

生前あれだけの騒ぎをすることがなかった音無にとって、ここでの生活というのは

……温かかったのだ。

だが、それと同時に……こんな想いまで抱き始めていた。

「でも……今は違う気持ちもある」

椅子から立ち上がり、少しだけ歩く。

歩みを止めた所で、音無は奏に言った。

「アイツらも、俺見たいな報われた気持ちになつてき……みんなで、この世界から去ればいいなつて。また新しい人生も悪くないつてき……」

「でしょ?」

「ああ……」

納得しかけて、音無は……。

「ん? ちよつと待て。お前はもしかしてこの気持ちを皆に知って欲しかったのか?」

「……知らなかった?」

そう言った後で、音無は奏に乗りかかるように言った。

「知らねえよ! つか俺、会った途端、いきなりブツ刺されたんだぞ!」

「だって……貴方が死なないことを証明しろつて言うから」

「……(なんて空回りをしてきたんだ。コイツとアイツらは……そしてコイツの不器用さと言つたら……!!)」

音無は、実は奏がとつともなく不器用なのではないかと思ひ始めていた。

しかし今はそんなことに構つていられる余裕もなく、さらに言葉をかける。

「真面目に授業を受けたら幸せなのか? 部活動をしたら満たされるのか!」

「だって……ここに来るのは皆、青春時代をまともに過ごせなかった人達だもの」

「あ？ そうなのか？」

「知らなかった？」

「知らねえよ！ つか……そんなこと、どうやったら分かるんだよ」

「見えて気付かなかった？」

「!？」

最後の奏の言葉をきっかけに、音無は驚きのあまりに……というか、何かに気付いた為に、思わず腰をおろしてしまった。

そう……ここは、この『死後の世界』は、若者達の魂の、救済場所だったのだ。

日向も、あのセカンドフライを捕っていれば、報われて消えることが出来たのだ。

もつとも、それはユイによって阻止されて、結局日向は消えることが出来なかったのだが。

岩沢も、自分自身の力でそれを達成して、報われて消えて行こうとしたところで……最後の最後に恭介がおせっかいを焼いてしまったのだ。

恭介の善意が、岩沢をこの世界から成仏させるという意味では……邪魔をしたことになつてしまった。

「（誰もここにいたくないんじゃない……人生の理不尽に抗っているだけなんだ。それを奏は、そうじゃない、と……理不尽じゃない人生を教えてあげたくて、人並みの青

春を送らせてあげたくて……ここに留まろうとする彼らを説得してきた」

だが、事實は皮肉なものである。

たったそれだけの話だったのにも関わらず……互いの信念を貫く為に対立し、やがて武器まで作りだしてしまつて……今では抗争の毎日である。

「どんだけ不器用なんだよ……お前」

「……知つてる」

「自覚はあるんだな」

「うん」

呆れながら言う音無の言葉に、奏は素直に頷いた。

その後で、ここう続けた。

「でももし……貴方がいてくれたら、出来るかもしれない」

「それは……手伝えつてことか？」

音無がそう尋ねると、奏は、ここう告げた。

「本当なら貴方は消えてるはず。でも貴方は残っている」

「お前の味方になれるのか……俺は」

「貴方が思い残していることは、そのことじゃないの？」

「!? ……そうかもしれない」

奏の味方になりたい。

そう……音無は思い続けていた。

そして、今この機会をきっかけとして、音無は奏の味方になることが出来る。

しかし、頭の中でゆりの過去の話を思い出して……それは、無理なんじゃないかと思
い始める。

だが。

「(けど……だからこそ、そんな記憶を永遠に背負い続けて行くこうとしているアイツだからこそ、救ってやりたい……!!)」

そう思つて、音無はさらにこうも思う。

「(出来るんだろうか……この不器用な『天使』と……頼りねえ……やつぱ無理か？ いや、だったら抗争は続くぞ。それに……あの時アイツだって言つてたじゃないか。『諦めたらそれで本当に終わりだ』って」

電車事故での鈴の言葉を思い出して、音無は奏の味方になることを決意する。

だが、彼らをこの世界から卒業させる方法が思い浮かばない。

戦線メンバーの味方でもあり、奏の味方でもいられる音無だからこそ……なんとかしなければならぬ。

それは分かつていても、やはり肝心なのはその方法。

「なあ、協力してくれるか？」

「……それはこっちのセリフじゃない？」

「そっか……そうだよな……（『天使』に何言ってるんだ、俺）」

そして音無は立ちあがり、奏に向かって、こう告げた。

「分かったよ、奏……卒業させよう。みんなを」

「……」

「なら、俺達も協力するぜ？」

「うん？ ……!？」

突如として聞こえてきた声に微妙な反応を見せるも。

次の瞬間には驚いたような表情を見せた。

なぜなら……窓から恭介が、ロープを使って保健室に入ってきたからだ。

「お、お前……一体どこから入って……!」

「そんなことはどうでもいいだろ。それよりも、今の話、聞かせてもらったぜ音無」

入ってくるなり、恭介はそんなことを言い出す。

……そもそも、外から入ってきたのにも関わらず、どうやって音無と奏の会話を聞き

とったのだろうか？

「……まさか、わざわざ保健室の扉の前で話を聞いて、それから屋上に上ってそこから降

りてきたとか言わないよな……?」

「さあ、それはお前達の想像に任せるよ」

「(絶対そうしたな、コイツ)」

心の中で、音無は思わずそう呟いてしまっていた。

「それよりも、俺にも……いや、俺達リトルバスターズにも手伝わしてくれよ。この世界から、死後の世界からみんなを卒業させてやるんだろ?」

「どうやら恭介は、自分が岩沢に対してやってしまったことを、今になって後悔しているらしい。」

自分のせいで、岩沢は報われることなく、今でもこの世界に縛られ続けている。

それがたまらなく悔しくて……早い所岩沢をこの世界から卒業させたい。

そんな思いも重なって、彼を突き動かしたのだろう。

「……ああ、そうだな。俺と奏で、今その事を決めただけだ」

「なら、俺にも付き合わせてくれよ……一人、俺の手でどうしても卒業させてやらなくちゃいけない奴がいるしさ」

「……分かった。お前達も協力してくれるのなら、頼もしいよ」

「ありがとよ……」

音無の言葉に、恭介は笑って答えた。

「それで……具体的なには何をやるの？」

話がとりあえずまとまったところで、奏が二人に尋ねてきた。

音無が提案する。

「まずはアイツらから、過去の話を聞き出さなくてはならない。でも、敵を失った今、ゆりの目を盗んで動くことは不可能だ」

「なるほど……つまり、つまり立華がもう一度生徒会長に戻って、アイツらにとつての敵になるってことか……」

「そして、俺達の指示通りに動いて欲しい」

「うん……私に向いてる作戦ね」

奏は、短くそう呟いた。

「また一人にしてしまうけど……ごめん。けど、すべてが終わったら……！」

その時、音無は自分の発言に対して違和感を感じた。

すべてが終わった時……それはみんながこの世界から卒業した時だ。

しかし、

「(終わったら……その時、その時……俺達はどうなるんだろう?)」

何も言えないまま、音無は固まってしまふ。

「……音無？」

「……あ、いや、すまない。少し考え事をしてしまってた」

恭介に問いかけられて、ようやくと音無は答えることが出来た。

音無は、その後で何かを思い出したかのように、恭介に言った。

「そうだ……棗。お前に言っておきたいことがあったんだ」

「言っておきたいこと……？」

「それと気になることも含めてだ」

そう前置きを置いてから、音無はまずこういう話題を出した。

「まずは言いたいこと……直枝と、お前の妹を強くしてくれて……ありがとな」

「……………は？」

身に覚えのないことを言われて、恭介は思わず哑然としてしまった。

何故なら、恭介が抱えている後悔というのが……まさに理樹と鈴を弱いままにしてし

まったことなのだから。

「どういう……ことだ……」

「言葉通りの意味だ。電車の脱線事故の現場で、俺は直枝とお前の妹に会ったんだ。ソ

イツらは、最後まで諦めないで、尽力を尽くしてくれた……けど、その時アイツらは言っ

てたんだ……棗が強くしてくれたんだってな」

「違う……俺はそんなこととした覚えは……」

「それと違和感の方を言うと、その時二人は、お前達も救ったって言ったんだ。けどお前達はここに……これって一体、どういうことなんだ？」

「そんなこと……こつちが聞きたい……!？」

その時。

恭介は、初めて死後の世界で沙耶に会った時のことを思い出した。

あの時、確かに沙耶は言っていた。

『同じ場所から来て、違う所から来ている』と。

それはつまり……自分達は違う世界からこちらに来ていないだろうか？

沙耶と自分達は、つまり違う世界の間……言わば、パラレルワールドから来ているのではないかという理論だった。

考えすぎなのかもしれないが、しかしそう考える他にどんな推論を立てると言うのだろうか。

「……なあ立華」

「何？」

「希にパラレルワールドから来る奴とかって……存在すんのか？」

恐らくは自分達よりもこの世界の仕組みに詳しいだろう奏に、恭介は尋ねた。

しかし返ってきた答えは、

「分からないわ……今まで見たことがないもの」

「そうか……」

前例がなければ、それを証明することは不可能だ。

なので、このことに関して無理に考えることを……恭介は止めた。

代わりに、

「で、まずは誰から成仏させるつもりなんだ？」

音無に、そう尋ねた。

すると音無は、少し考える素振りを見せた後に、

「……最初はユイがいいかと思う」

「……誰？」

分からないと言ったような表情で、奏が尋ねる。

恭介が答えた。

「岩沢と一緒に食堂でゲリラライブをやっていた、ピンク色の髪をしたボーカルの女の子のことだよ」

「……ああ」

その言葉で、奏はようやくと思い出したようだ。

「アイツ……いつも元気できあ、日向苛めて笑ってるしき……バンドのボーカルもやって、やりたいことやってき……もう十分報われているんじゃないかと思ってる」

「確かに……ほんの一押し、背中を押してやれば、ユイはここから卒業出来るかもな……」

恭介も、音無の意見には賛成だった。

ユイはこの世界にきて、もう十分好きなことをやれたと思う。

だから……後は背中をポンと押してあげて、ここから卒業させてあげるのみ。

そう……二人は考えていた。

「そう思うんなら、いいんじゃない？」

奏も、音無の意見に賛成した。

「賛成か？ よし……それじゃあそうしよう」

「後は……立華」

「何？」

今度は恭介からの提案だった。

恭介は、奏に対してこう言った。

「アイツらには冷酷な『天使』で目覚めたということにしてるんだから……それらしい武器も作ってみたらどうだ？」

「……分かった。後でやってみる」

「後……羽根生えないかな？」

「羽根？ 生やしてどうするの？」

それは当然の質問だった。

意味もなく羽根を生やせと言われても、どうしようもなかった。

それに対して、音無は答える。

「いや、見た目かっちょいいじゃん」

「……かっちょいいのがいいの？」

「その方が『天使』らしいかなあって」

「……考えておく」

奏は、肯定の返事を返した。

そして、一連のやり取りを聞いた恭介が、ボソツと一言洩らした。

「音無……それ、完璧にお前の趣味だろ」

episode 18 Goodbye Days

翌日。

校長の口から発表された、テストの偽装工作について。

それによって、奏が正式に生徒会長に復帰することが決定し、あの日テストの偽装工作に協力していたメンバーは、一人残らず反省室にて反省文を書くこととなった。

……もちろん、恭介も含めて。

「あくもう！ 何で僕がこんな目に……!!」

「それはこつちのセリフだったの。何で俺がこんな目に……」

反省文を書くことに不服な竹山がそう言った後に、恭介が言った。

暴かれる際に、奏は恭介のことは何も言わなかったのだが、まさかの日向からの裏切りがあつて、恭介まで連行されたのだ。

「あの錐揉み飛行は何だったんでしょか……?」

「だよなあ！」

「おや？ 珍しく気が合いましたね？」

「やらされた奴にしか分からねえよ。この気持ちは！ 俺達は錐揉み飛行仲間さ!!」

日向と高松が、二人してそんなことを言い出す。

そんな中、高松がノリよくこんなことを言い出した。

「おっと……私を脱がす気ですか？」

「おう、脱いでやれ脱いでやれ！」

「やめなさいよ、うるさいわね……」

高松を煽っている日向に向かって、面倒くさそうにゆりがそう言った。

すると日向は、すぐさま意見を変えて、

「そうだやめろ！ 気持ち悪い!!」

「どっちですか……」

これには、高松も頭を抱えるしかなかった。

「にしてもあの子……もうここ数日のこと、全部忘れちゃったみたいだったね……」

「当然です。100の方が勝ったのですから……我々を襲った方が」

「本当に一瞬仲間になれるかなって思っちゃったぜ……畜生！」

「……」

大山の疑問に答えた高松。

その高松の言葉を聞いて、悔しがる日向。

事情を知っている音無と恭介の二人は、彼らに本当のことを言えないもどかしさを、

心のどこかで感じていた。

*

その後、音無と恭介は、奏に会う為に教室へ向かう。

誰の邪魔も入らない場所が好ましいということ、屋上へと向かった。

「さて……まずは立華。成果の方はどうだったん？」

「うん……とりあえずやってみた」

「見せてくれ」

恭介が奏にそう言った後、奏は、

「Hand Sonic Version 5」

そう呟き、腕に例のごとく出現させた。

ただ、それはまるで……。

「うわあ……『天使』というよりは悪魔だな」

何か、どこその悪魔がつけていそうな手っぽくなっていた。

二本の刃がついており、それは本当に禍々しかった。

「貴方が言った通りにやっただけなんだけど……駄目？」

「いや、いいよ。すげえ嫌な感じだ」

音無がフオローしたつもりで奏にそう言った。

しかし、当の本人は。

「嫌って……」

「ああ、いや。凄くいい!」

「……はあ」

落ち込む奏を見て、思わず音無がフオローを入れる。

そんな二人を見て、思わず恭介は溜め息をついてしまった。

「で、立華は何をすればいいんだ?」

「ああ、こうしよう」

恭介の言葉を聞いて、音無はあらかじめ考えていた作戦を述べた。

「奏はアイツのバンドの練習中に現れるんだ。そしてこう言う。『他の文化部から騒音の苦情がきている』。そしてユイを指してこう言うんだ。『特にお前のギターが酷い。お前のせいでバンドが死んでいる。なのでしばらく、そのギターは没収させてもらおう』。そして、ユイのギターを取り上げて、奏がその場を離れる。もちろんユイは追いかけてくる。お前は逃げる。そして中庭まで来てくれ。そして俺が奏にぶつかるとする。奏は同時にギターを手放せ。そして俺がギターを受け取るから、奏はそのまま逃げろ。そうしてアイツと、二人きりになれる状況を作ってくれ。棗は、もしこの作戦が失敗しそうな時は、どんな手を使ってでもいいからフオローを頼む」

「まったくの策士だな、お前……まあいいだろう」

「……分かった」

音無による説明が終わった後で、二人はそれぞれそんな返事を返す。

そして、音無は二人に言った。

「よおし……練習が始まる頃を見計らってゴーだ！」

そして、三人は行動開始した。

*

一方その頃、ガルデモのメンバーは練習を始めていた。

ただ、今回の新曲はボーカルはユイだけということで、岩沢は彼女達の練習ぶりを眺めているだけである。

曲は順調に進んでいるかのように思えたが。

「ストップ！」

「？」

ひさ子がそう言葉をかけて、ドラム・ギター・ボーカルすべてが止まる。

その後で、ひさ子がユイのそばまで駆け寄ってきて、言った。

「そんなよれよれのリズムで続けるな。前よりはましになってるけど……まだ完璧とは言えないぞ」

「ふえええ？」

「ユイ……歌うか弾くかどっちかに専念した方がいいんじゃないの？」

「あくそりや言えてる。今のまんまじやちよつと酷いかな……」

入江と関根の口からもそんな言葉が洩れる。

しかし、ユイは言った。

「そんなあ！ 岩沢さん、弾きながら歌ってますよ！」

「そりや岩沢はどっちももうまいからだよ」

「う……」

本当のことを言われて、ユイは反論を返せなくなっていた。

だが、頑張つて次の言葉を言った。

「私だつて頑張つてますよお。みんな言うことキツすぎですよ！ ライブだつてちゃん

と盛り上がつてるじゃないですか……」

「確かにユイは頑張つてるし、ライブも盛り上がっている。けど、今回はユイだけのボーカルだ……今までは多少の失敗も音でかき消されていたけど、今回はそうもいかないだ。だからユイ、これまで以上の努力が必要だつてことだよ」

「い、岩沢さん……」

岩沢からもそんなことを言われて、とうとうユイは言葉を返せなくなってしまった。

そんな時に、ガラッと教室の扉が開かれた。

そして、そこから入ってきたのは……。

「て、『天使』?!」

奏が入ってきたことに、一同は驚きを隠せないでいた。

そんな中、奏はユイのことを指さして、言った。

「お前のギターのせいでバンドが死んでいる」

「「「「「……」」」」」

固まった。

思わず、メンバー全員が固まった。

指摘されたユイ自身ですら、思わず固まってしまった。

ようやくとの思いで言葉を発したのは、ひさ子だった。

「い、一瞬にして今のバンドの弱点を見抜いた!?!」

「やっぱりただ者じゃない!」

「音が分かるのよ……!」

関根と入江に至っては、奏を褒めるような言葉すらかけている。

「ほう……やはり『天使』だけはあるね」

岩沢までもが、感心してしまっていた。

「そんなあ！ みんなは気付いていないと思ってたのに!!」

「いや、ユイ……ライブを見ている客のことを何だと思ってるんだよ……」

呆れながら、岩沢がユイにそうツツコミを入れていた。

「というわけで、しばらくそのギターは没収させてもらう」

「え？」

ユイが状況を把握するよりも先に、奏がユイからギターを奪って逃走。

状況を完全に把握しきるまで、およそ10秒。

「あゝー！ 私のギター!! 待てやゴラア!!」

「あ、ユイ!!」

立ち去って行く奏の後ろを、ユイが追いかけて行く。

教室の扉は勢いよくバン！ と閉められて、残されたのは四人だけ。

「……ギター無しで練習してみようと思ってたのに」

「ユイの行動の方が早かったか……」

思わず、ひさ子と岩沢の二人は、そう呟いてしまっていた。

※

「音無、来たぞ」

「あ、ああ……本当に予想通りにことが運んだよ」

自分が考えた作戦なのにも関わらず、音無は多少信じられないと言ったような気分になっっていた。

だが、実際にギターを抱えた奏と、それを追いかけるユイがやってきているのだ。それを見て、動かないわけにはいかない。

「今だ、音無」

「ああ！」

タイミングを見計らって、音無は奏に近づき。

「あゝ悪いぶつかっちゃった！」

「わあ！」

二人ともほぼ棒読み状態でぶつかる。

しかし……奏がギターを手放す際、そのギターをかなり高い位置にまで上げてしまった。

「ちよっ……バカッ！ 高すぎるって!!」

音無は、高く上に上がったギターを落とさない為に、なんとか自力で落下地点まで向かう。

そして、キャッチ。

「あゝ！ 私のギターー！」

「ああ、無事だよ……つと」

半ば奪いさるような感じで、ユイは音無よりギターを取り返す。

その後で、音無に言った。

「先輩がギターを守ってくれたんですね『天使』から……つと、アイツはどこだゴラア！」
お礼を言ったと思ったら、今度は奏に対してキレている。

そんなユイの動きの移り変わりを見て、音無は言った。

「何が『ゴラア』だ……つたく、相変わらずお前、好き放題やってんな」

「へ？ 好き放題？ やってないよ好き放題なんて」

何を言っているんだという表情を浮かべながら、ユイが言う。

しかし、世間一般でいけば、ユイ程好き放題に暴れ回っている人物は、探そうと思つたら恭介位ではないだろうか？

「バンドのボーカルの座を射止めたじゃん。ギターまで弾いてさ」

「そんなの全然だよ。やりたかったことの一つに過ぎないよお」

「他にもあるのか……？」

思わず、音無は尋ねてしまった。

ユイは笑顔で答える。

「あるよ、いっぱい」

「いっぱいって……ちよつと待て。場所を変えよう」

この場では収まらないと思って、場所を移動することにした。

*

「で、他には何だよ」

場所を食堂前のベンチに移して、音無はユイの話の続きを聞くことにした。

ユイは、音無より受け取ったコーヒーを口にしながら、

「話さなきやいけないの？」

「話したくなかたらしいけどさ……」

無理に話は聞き出さない。

音無は、そんな信条を抱きつつユイに尋ねた。

しばらく考える素振りを見せていたユイだったが、Keyコーヒーを一口飲んだ後に、

「いいよ、話してあげる」

そう、話を切り出したのだった。

「私ね、やりたいこと人よりいっぱいあるんだ。どうしてだと思おう？」

「そりゃ……生きている時に出来なかつたからだろ？」

「そうそうその通り！」

ユイはその後で、自分の過去の話を交えつつ、説明を始めた。

「小さい時にさ、後ろから車ではねられちゃってさ、それでさ……身体動かなくなっちゃった」

あつけない感じで言うが、それはとてつもなく辛いことだっただろう。動きたくても動けない。

外に行きたくても、自力で動くことが出来ない。

歩けないというのは、死ぬよりも辛いこと。

生きているのに……行動範囲はベッドの上か、車椅子の上だけ。

不自由な生活程、人間を苦しめるものなのだ。

だが、ユイはそのことを後悔しているわけではなかった。

「完全に寝たきりだったんだよね……もう介護なしに生きてらんないの。お母さんに頼りつきりだった。お母さんに、凄く悪いことをしたなって……」

ユイは、自分が不自由な身体になってしまったことで、母親にいつも辛い思いをさせてしまっていたことを、後悔しているのだ。

もつとも、母親本人が本当に辛い思いをしていたのかはともかくとして、ユイはそう思っているだけの話。

「テレビだけは見れたからさ、音楽番組を見てバンドを見て、こういうのを自分でもやれ

「たらいいなあつて……」

「そっか……じゃあよかったじゃん」

「うん！」

笑顔で、音無の言葉に答える。

その笑顔を見た後で、音無はユイに尋ねた。

「で、後やりたいことはなんだ？」

「うん……野球中継も、よく見てたんだあ」

「野球だったら、球技大会でやっただろ？」

確かに、彼らはすでに球技大会にて野球をやっていた。

だが、ユイはやつただけでは満足出来ないらしく、

「あの時打てなかったじゃん！」

「……ヒットを？」

「ホームラン！」

「ハア!? それはなに……打たないと駄目なの？」

思わず音無は、ユイに尋ねるように言っていた。

ユイは、立ちあがって素振りをするような動きを見せながら、

「駄目だね! バンドがうまくなったら、ちゃんと野球の練習もしようと思ってるんだ

けど……ね！」

「(その両立はかなり大変だ……)」

心の中でそう呟いてから、

「一応聞いておこう……他には？」

「サッカー！」

「サッカー？」

「ブームだったじゃん！」

「確かにそうだったが……(多趣味すぎだ！ どの世界にバンドと野球とサッカーを

一緒にやろうとする奴がいる！)」

心の中でユイにそうツツコミを入れた後に、さらに音無は尋ねた。

「まさかまだあったりとかは……」

「プロレスかな？」

「(わけがわからない……どこの世界に！ ……つか、テレビで見たものばかりに憧れ

てるんだなあ)」

ユイが抱く多くの『やりたいこと』の内容を聞いた音無は、思わず小さな溜め息を漏らす。

その後で、決意を秘めたような表情を浮かべて、

「分かった……俺が叶えてやる！」

「ふえ？」

「まずはそうだな……手頃なところから、プロレスからか？」

「ふえ？ プロレス?!」

制服の上着を脱ぎながら、音無が言う。

ユイはそのことに驚き、

「技は？」

「ジャーマンスープレックス！」

「じゃ、ジャーマンスープレックスだって!? そんな派手な技が出来るか！ 間接技と

か出来そうな技にしろよ……」

音無がユイに安全策を出すか、ユイはそれでも引かなかった。

「だって……憧れだったんだもの……!!」

そこから始まる、ユイによるジャーマンスープレックスの素晴らしさについて。

音無はそのほとんどを聞き流して、その後でユイに言った。

「あーOK! じゃあやってみろよ!! その前に……ここじゃコンクリートで痛いから、芝生のある所まで移動するぞ」

音無は、怪我をするのもいやだと思っただけ。

二人はとりあえず、芝生のある所まで向かうことにしたのだった。

※ 場所を移動したところで、音無とユイは、ジャーマンスープレックスをやることになった。

「じゃあやってみろよ、ユイ」

「おっしやああああああ!!」

両手を挙げて、音無は覚悟を決める。

その背後から、ユイが音無の身体にしがみつき、そのまま地面に音無の身体をぶつけることが出来れば、ジャーマンスープレックスの完成だ。

「いいっよっとー!」

「うおっ!」

ユイは音無の身体を何とか上げる。

意外と力があることに気付いた音無は、これなら案外簡単に行けるのではないかと思っただが……。

「とりやああああああああああああああ!!」

「いつでええええええええええ!!」

ドシン!!

技は失敗し、音無は頭から地面に激突した。

「やっぱり女の子の私なんかには無理かな……」

「いや！ 出来そうでしたよ！ むっちゃ惜しかったですよ!!」

ここでユイが諦めてしまうと、作戦は失敗に終わってしまう。

それだけは何としても避けたい音無は、ユイにそうフオローを入れたのだった。

「え？ そう？ じゃあもう一回やっていい？」

「あ？ あ、ああ……」

無邪気な笑顔でそう言うユイに対して、音無は戸惑いながらも答えた。

最後まで付き合っただけあげないと、これはいつまでも終わらないからだ。

だが、音無とてそう何回も痛い思いはしたくないと思っていた。

いくら死なない身だからといっても、痛みだけはしっかりと感じるのだから。

「とりゃああああああああああああああああ!!」

そして、二回目の挑戦。

だが、またしてもそれは失敗に終わる。

「……もたない」

「わー！ 次こそは絶対に成功してみせますから!!」

「本当、最後だからな」

そして、三回目の挑戦。

当然、成功するはずもなく。

音無結弦、無駄に大ダメージ。

「……帰る」

「先輩いいいいいいいいいいいいいいいいいい!!」

さすがにこれ以上は音無の身体がもたない。

音無はそのまま帰ろうとしたところで、ふとあることに気付いたのだった。

「お前さ……もしかしてブリッジとか出来ないんじゃないかねえの?」

「で、出来ますよその位!」

「やってみろよ」

言われた通りにユイがブリッジをやってみると。

「あ、あれ?」

ブリッジの形になることはなく、そのまま地面に倒れこんでしまった。

そして音無は、瞬時に悟る。

「(やっぱり原因はこれだったのか。この為に俺は何度も意識が飛びそうに……)」

そして音無は、ユイに告げた。

「まずはブリッジの特訓だな」

「ふええええ？ つまんないー！」

「いいからやれ!!」

こうして、まずはブリッジの特訓から始まることとなった。

初めの内は、全然立つことも出来なかったのだが。

練習を積み重ねて行く内に、次第に立てるようになっていき。

数時間後。

「で、出てます……よね？」

「ぶるぶる震えてるが……まあいっか。よし、それじゃあやってみるぞ」

手足が多少震えていることに対して不安を感じる音無だったが、ユイにジャーマン

スープレックスをやらせてみることにした。

ユイは、ブリッジの状態から元に戻り、音無の身体にしがみつく。

そして、

「じゃあ……行きますよ!!」

「来い!!」

ユイは……音無の身体を持ち上げた。

音無は、心の中で呟く。

「(おお?)! 腕はお腹に回ったままだ。これは逃げようがない。これは完璧な……完璧

な……!!」

そして、最後には言葉にして叫んでいた。

「ジャーマンスープレックスだああああああああああああああ!!」

ドシン!!

地響きがして、音無は首の方から地面に落下する。

それでも、意識が飛ばないうちに、

「1, 2, 3……!! カンカンカンカン! 試合終了!!」

カウントを取り、ユイの勝利を宣言したのだった。

……いや、元から勝負などしていなかったから、その言葉を使ってユイがジャーマン

スープレックスに成功したことを宣言した。

「やった……やったんだ私……!!」

成功したことに素直に喜びを感じるユイ。

音無の身体から離れたかと思うと、

「やったああああああああ! バンザイ!!」

その場で飛び跳ねて、全身で嬉しさを表現していた。

ユイから解放された音無の身体は、そのまま芝生の上に倒れこむ。

「はあ……」

小さく溜め息をついた後で、音無は小さな声でボソツと呟いた。

「こんなのが後いくつ続くんだ……?」

そんな音無の呟きを無視するように、ユイは笑顔で、全身で喜びを見せるのだった。

「……音無、気を強く持て。そして、身体を大切にな」

「……何を言ってるの? 棗君」

物陰で二人の様子を見守っていた恭介は、思わず音無にそう助言していた。

隣にいる奏からのそんな疑問に対して、恭介は答えた。

「男にはな、時として曲げてはならない信念があるんだよ。例えば自分の身がどうなろうと、必ず成し遂げなければならぬことがある。音無にとつて、それが今なんだよ……」

「よくわからないけど……結弦を応援すればいいの?」

「まあ平たく言うとな、その通りだな……つと、そろそろ別の場所へ移動するぞ」

芝生から別の場所へ移動しようとするユイと音無を見て、恭介と奏は、その後ろを追うのだった。

※

続いては、ユイと音無による会合の結果、サッカーをやることとなった。

ただし、条件がなかなか厳しいものであった。

それは……ユイによる五人抜き（キーパー含む）シュート。

こんなこと、普通のサッカー選手でもなかなか出来ないことだった。

ちなみに、ユイがそれに憧れた理由が、『マラドーナだよ』の一言で片付いてしまった。そこで音無は自分を含めて五人のメンバーを集めなくてはならなくなつた。

というわけで、手軽なところというか、堅実に松下に頼もうとしたのだが。

いつもTKと一緒にいるのでTKの所に向かつてみれば、そこには松下の姿はなかつた。

「お〜いTK、松下五段知らないか？」

気になつた音無は、相変わらず廊下でもダンスを踊っているTKにそう尋ねたのだが。

TKは、踊りながら答えた。

「今の奴、俺のように踊れな〜い」

「そりゃあそうだろうな……」

ヘッドスピンをするTKを見て、音無は呟く。

常人でもここまでは踊れないのに、ましてや筋肉質な体系をしている松下など、TKのように完璧に踊れるはずがないだろう。

「で、今はどこに……」

「山籠り、in the mountain」

「山籠り？ またダンスとは正反対なところに行つたな……」

しかし、山籠りをしているということは、学園には来ていないということになる。

つまり、人員として呼ぶことは不可能ということだ。

「どうすつか……」

「それなら、俺達に任せときな」

「え……お前達は……！」

音無に近づくと、謎の三人組。

その三人組の正体は……。

「な、棗！」

「俺と真人、謙吾が仲間に入るぜ？」

リトルバスターズの男子組でお馴染みの、恭介・真人・謙吾の三人だった。

「け、けどただサッカーやるだけとは少し違うんだが……」

「大丈夫だぜ、音無とやら」

「へ？」

真人が何故か笑顔で音無の顔を見る。

その後を継ぐように、謙吾が冷静な顔をして言った。

「話はすべて恭介から聞いている。俺達リトルバスターズ全員が、お前の行動をバック

アップすることとなった。だから音無……ひとつ言っておきたいことがある」
「な、何だよ？」

「……必ず、完遂させろ。いいな？」

謙吾にそう言われて、音無は笑顔で答えた。

「……ああ！」

その後で、恭介があることに気付く。

「しかし、後一人どうすつか……TKでも……って、いないし」

五人目の選手としてTKを選ぼうとした恭介だったが、その場にはすでにTKがいないことに気付いた。

「……ユイとなると、関連する人物は……やっぱりアイツしかいねえよな」

音無は、一人だけ思い当たる節があるらしく、

「棗、今から俺がいう奴をサッカー場に連れてきてくれないか？」

「ああ、分かった」

そう言った後で、音無は恭介の耳元でその人物の名前を告げる。

名前を聞いた恭介は、口元をニヤつかせて、

「了解……それじゃあ音無は先にサッカー場に行ってくれ……おい、お前らも行くぞ

!!

「え？ お、おう」

「うむ……何だかよくわからんが、とりあえず恭介についていけばいいのだな？」
恭介の後ろをついていくように、真人と謙吾の二人もついていく。

「……大丈夫か？ アイツら」

三人を心配しながらも、音無はサッカー場へ行くのだった。

*

「あれ？ 先輩一人だけですか？」

サッカー場に行ってみると、すでにボールを持って、中央で待っているユイがいた。それに対して、やってきたのは音無一人のみ。

ユイの口からそんな疑問の言葉が出てくるも当然だろう。

「いや、棗がメンバーを集めているところだ。もうすぐ来るはずんだけど……」
音無も、本当に来るかはともかくとして。

とりあえず恭介達が到着するのを待つことにした。

そして、待つことおよそ2分。

「……お？ 来たぞ」

真人と謙吾が、とある二人の人物を連れて現れてきた。

「……あれ？ 棗は？」

その中に、恭介の姿は見当たらなかった。

とりあえず、音無が連れてきてくれと頼んだ人物はやってきたので、よしとすることにした。

「おいお前達……これは一体どういうことだ？ 『天使』がスポーツマンシップに則つて、正々堂々サッカー対決をしようと云つてたくせに、そこにいるのはユイじゃねえか」
「ふむ、なるほどな……つまりあの手紙は、普段怠けている俺達に怒りを覚えたユイからの挑戦状だったというわけか」

「なるほどな……その挑戦状、確かに受け取ったぜ！ この井ノ原真人が止めてやるよ！！」

「うまうー！！」

一目散にサッカー場まで駆け足でやってくる、真人・謙吾・謎の仮面の男の三人。

「……あの仮面は、まさか」

「えつと……とりあえず俺はキーパーにつけばいいんだな！！」

状況を把握した日向は、ゴール前まで走って行く。

ただ、音無は四人の中でひときわ目立つ存在を見つけってしまった。

その人物は……マスク・ザ・斉藤。

しばらく見かけないと思ったら、こんな所で見かけることとなったのだった。

「真人！ 先陣はお前に任せた！」

「おうよ!!」

なんだかんだでノリノリなこのお二人。

そんなメンバー達を見て、

「面白くなってきた……やっぱりサッカーはこうでない!!」

ユイもノリノリでボールを蹴り始めた。

そして、まずは一人目の壁……真人。

「どりゃああああああああ!!」

「はあっ！」

「ぐっおっ！」

これをタツクルで何とかかわすと、二人目に突入。

「あまり狼藉を働かれても困る……ここでその根性を叩き直してやろう」

「いや、宮沢さん……竹刀を持ちこむのは反則だから」

竹刀を構えて走ってきた謙吾に、ドリブルしながらユイはツツコミを入れる。

構わず、謙吾は竹刀でユイを斬りにかかる。

「アホかお前は!! それ完全にレッドカードだから！」

ゴールキーパーを務めている日向が、謙吾に向かってそう言う。

しかし、暴走する謙吾は止まらない。

「こんな試合にレッドカードもくそもあるか!!」

「じゃあ私も、こんな手を使ってもいいってことだよな?」

「へ?」

ユイは、ボールを高く上げたかと思つたら、謙吾の横をスルーして、その背中に飛び蹴り。

喰らつた謙吾は、そのまま地に突つ伏した。

一見ファールにも見えなくもないが、最初にルール違反(というか無視?)をしたのは謙吾の方なので、謙吾からは何も言えなかつた。

続いて第三・第四の壁、音無とマスク・ザ・斉藤。

「アンタ何しに来たんだよ!」

「棗恭介に呼ばれたからここに来た……うまうー!!」

「……いや、その声といい動きといい、完全に棗だろ、お前」

「そんなことはない……うまうー!!」

とりあえず二人でそんな会話をした後、音無とマスク・ザ・斉藤(中身は恭……)は、ユイのボールを奪おうと駆け寄ってくる。

……しかし、二人は本気で球を奪いに行くつもりはなかつた。

「これで四人抜きー！」

手加減している為、当然ユイは二人を抜くことが出来た。

そして、とうとうゴール前へ。

ユイはそこで一旦立ち止まり。

「最後は……テメエか！」

「くっ！」

ゴールだけはさせまいと、日向は構えを取る。

そんな日向を指さして、ユイは言った。

「殺してもゴールを奪う！」

「お前スポーツマンシップはどこいった!？」

「んなこと知るか！」

叫んだ後で、ユイはボールを蹴った。

「覚悟！ 必殺シュート!!」

「俺を殺したいのかゴールを決めたいのかツツコミどころが多いシュートが来やがったああああああああああああああああああああああああああああああ!!」

しかし、ボールは真正面。

このままいけば、日向が見事に止められるだろう……止めた後で無事でいられるかど

うかは不明だが。

だが、その時だった。

「……………え？」

突然軌道が代わり、ボールは真正面から左へと逸れる。

あまりにも突然の事態に、日向は対応できなかつた。

そしてボールは……………そのままゴールネットを揺らす。

「は……………入った？」

一番信じられなかつたのは、ゴールを決めた本人だった。

「やったああああああ！ 五人抜き達成だあ!!」

その場でピョンピョンと飛び跳ねて、ユイは嬉しさを表現する。

そんな中、音無はこころの中で呟いた。

「(キーパーも抜いてないしグダグダだったけど……………まあいいか)」

そして、ある方向に向けて親指を立てる。

その方向を見てみると、そこには奏が立っっていて。

『Hand Sonic』をボーガン代わりにして、ボールを狙っていたのだった。

※

お次は野球。

一応、音無が話を聞いた中では最後のスポーツだ。

「一応聞いておくが、どの辺まで飛んだらホームランってことにするんだ？」

「そんなの……フェンス越えに決まってるじゃん！」

平然と言い放つ割には、目標がかなり高すぎた。

これには、ピッチャーマウンドに上がった音無も、さすがに頭を抱えるしかなかった。サツカーやプロレスの時とは違って、フェンス越えホームランに関しては、小細工とかも無理だし、ちよつとの努力でどうにかなるものでもない。

筋力と技術力が大切となってくるのだ。

はたして、ユイにそれだけの技術力があるのだろうか？

筋力に関しては、先ほどのプロレスにて多少証明されたので、よしとするとして。

「とにかく……思い切り振ってみろ！」

やってみなければ始まらない。

とりあえず音無は、横に置いた球の中から一球選んで、投げてみる。

ユイは、飛んでくるボールを全力で当てにいった。

結果。

カン！ という軽い音がして、ボールは前に転がった。

「あ、当たった！」

ユイにしてみれば、人生発ヒット。

しかし、ホームランには程遠い一発だった。

「当たればいいってわけじゃないからな……もつとボールを良く見て、バットの芯で当たってみろよ！」

続く第二球は、ゴロに終わる。

「ボールの上を叩きすぎてる！」

第三球は、ピッチャーフライ。

「今度は下過ぎ！」

そして最後には、空振り。

空振った後に、ユイは苦笑いを浮かべた。

「もつと球をしつかり見ろ！ 目を瞑ってて当たるか！」

その後も、ユイと音無による野球は続く。

しかし、結局ホームランは一発も出ることもなく。

「駄目だ……疲れて握力が弱くなってやがる。また明日だな」

「ふえええええ？」

結局、ユイが疲れたのを理由に、その日は終わりとなったのだった。

※

その後も、暇さえあれば野球をやり続けた二人。

しかし、ホームランは一向に出ない。

「テヤツ！」

「掛け声だけデカくても、当たりは小さいぞ！」

「うっ……まだまだ！」

その後も、二人は野球を続けるが、ホームランは依然として出てこない。

「……」

球が転がって、グラウンドの外に出る。

その球を拾って、その後でユイと音無の二人を見た。

「……」

しばらく眺めた後、その人物はそのままグラウンドから離れていった。

「アイツは……」

その姿を眺めていたのは、恭介だった。

横には、奏の姿もあった。

「彼は……もしかして」

「だろうな……もしかしたら、今回はアイツがキーパーソンになりそうだな」

「キーパーソン？」

「……ああ」

奏の言葉に、恭介が答える。

その表情は、もちろん笑顔だった。

少年のような、心からの笑顔。

人を惹き付けるような魅力を持つ、そんな笑顔だった。

「そうだとしたら、今すぐあの人を連れてくればいいんじゃない……」

「いや、それはまだだ。まだアイツの出番ではない」

奏の意見を否定してから、恭介はこう言葉を付け加えた。

「アイツは最後までとつとかないといけない。音無には悪いが、多分最後はアイツの出番が来るだろうな……」

「……そうなの？」

「多分だけどな……さてと、俺もそろそろ動き始めようかね」

「え？」

恭介は、その場から立ち上がると、そのまま何処かへと歩き去ろうとする。

「何処に行くの？」

恭介がこれから向かう場所が分からない奏は、恭介に向かってそう尋ねる。

恭介は言った。

「ちよいとリトルバスターズのメンバーを集めて、下準備をするんだよ……とっておきのサプライズのな」

「……………」

不思議そうな表情を浮かべる奏。

イマイチ恭介の言った言葉の意味を読み取れなかったのだろう。

何せ恭介の言葉をすべて理解することは、いつも身近にいるリトルバスターズのメンバーですら難しいことなので、奏にそれを理解しろという方が難しかった。

そんな奏を置いて、恭介は校舎の中へと消えていった。

*

「ハアハア……ティツ！」

ユイは懸命にバットを振るも、当たることなく、空振りしてしまふ。

疲れているのもあり、辺りが暗くなってきたこともあり、ユイはバットに球が当たらなくなってきた。

そんなユイを見て、音無は判断する。

「暗くなつてボールが見えないな……また明日だ！」

「ふええええええ？」

不満そうな表情を見せるユイだったが、仕方ないと言ったような表情を見せて、ユイ

はバットとメットをベンチに戻して、グラウンドを去って行った。

その後で、音無は散らばったボールを片付ける。

拾ってはカゴの中に入れて……その繰り返し。

そんな中、何者かがグラウンドに入ってきて、ベンチに置かれていたバットを手にする。

そのままバッターボックスに入ったかと思うと、

「お前から何やってんの？」

「え？」

音無に声をかけた。

声のした方を音無が振り向くと、そこにいたのは……。

「よっー！」

日向だった。

日向はバットを持って、ただその場に立っていた。

そんな日向に、カゴに入っているボールを一つ取り出した音無が、尋ねる。

「お前もやるか？ 本気の野球」

「フルスイングか……最近してねえや。そういうのも……いいかもな！」

バットを構えて、それから日向は言う。

そんな日向の動きを確認した後で、音無はサイドスローからの一球を投げた。

そして日向は、その球をフルスイングして打った。

カキン！ と、金属バット特有の音を響かせたその球は、外野の頭を越えて、フェンスに当たった。

*

次の日。

この日も夕方頃まで野球を続けていた。

しかし、ここ数日毎日野球していたのが祟ったのか、ユイの体力は限界だった。

空振りした際に座り込んでしまい、バットを手放してしまった。

「……大丈夫か？」

心配した様子で、音無がユイに駆け寄ってくる。

そして、違和感を感じた。

「……お前、手見せてみる」

「……イヤだ」

一度は拒否するユイ。

しかし音無は、強引にユイの手を見た。

すると……タコが出来ていて、しかもそのタコのほとんどが潰れてしまっていた。

テーピングはしてあるが、そのテープには血が滲み出していた。

「(無理もないか……)」

音無が心の中でそう呟いたら、

「やっぱり無理だったんだよ……もういいや、この夢」

元気に、しかし明らかに諦めの言葉を、ユイは言う。

「諦めんなよ!」

「色々ありがとね……なんでこんなことしてくれたの?」

「それは……」

まさか本当のことを言うわけにもいかず、音無はその質問の答えを避けて、

「お前がやりたかったことだったんだろ? 最後まで頑張れよ」

「ホームランなんて冗談みたいな夢だよ。ホームランが打てなくても、こんなにいっぱ

い身体が動かせたんだから、もう十分だよ。毎日部活みたいで、楽しかったなあ」

生前満足に身体を動かせなかったユイにとって、こんなに身体を動かせたのは夢みたいな一時で。

それだけで、ユイは満足だった。

「……じゃあ、もう全部叶ったのか?」

そんなユイに、音無は尋ねる。

もうやりたかったことは全部やったのかと……。

「叶う？ 何が？」

「その……身体が動かせなかった時にしたかったこと」

「……ああ、もう一個あるよ」

「何？」

音無は、それがどんなことだろうと叶えてやろうと思った。

それでユイが報われて、この世界から卒業出来るのなら……十分に満足出来ることだったからだ。

だが、

「……結婚」

「え……」

ユイが言った言葉は、先程の音無の決意すらもねじ曲げてしまう程の威力を持つ言葉だった。

「女の究極の幸せ。でも家事も洗濯も出来ない、それどころか一人じゃ何にも出来ない迷惑ばかりかけてるこんなお荷物……誰が貰ってくれるかな」

ユイは、最後の最後に、自分の中では決して叶いっこないと思っっている夢を残していたのだ。

もちろん、音無だつて分かっている。

ここで、何の考えもなしに『結婚してやろう』と言うことは、それこそまさしくユイを傷つける結果に終わるだけだということ。

「神様つて酷いよね。私の幸せ、全部……奪っていったんだ……」

「そんなこと、ない……」

力ない声で、音無は言う。

うつむきながら言うその声には、自信がなかった。

ユイが言っていることは間違っていない。

何か悪いことをしたわけでもないのに、ある日突然歩けなくなってしまい、身体が動かなくなつてしまい、介護が必要な身体となつてしまった。

自由を奪われた。

語つてしまえばたった二文字、『動く』という自由すら奪われてしまった。

そして、それが更に、彼女が結婚出来ないというジंकスを生んでしまった。

不幸に、更に不幸か重なつてしまつていたのだ。

「じゃあ先輩……私と結婚してくれますか？」

だからこそ、ユイは真剣だった。

簡単な思いで『結婚する』と言つて欲しくない。

だからその表情は、真剣だった。
故に、音無は詰まってしまった。

彼は、ユイの話を最後まで聞いて……しかし、答えはひとつ、『No』だった。
女性に対して簡単に結婚するなんて言っただけではない。

今回のようなケースなら尚更だ。

確かに音無は、ユイのことは嫌いではない。

しかし……愛してもいなければ、覚悟もない。

「それは……」

『出来ない』。

そう続けようとした、その時だった。

「俺がしてやんよ!!」

「!?!」

グラウンドに響く、1人の青年の声。

その声は、まさかこんなところで聞けるとは思っただけで、いかなかった声で。

ある意味では待ちわびていた声でもあった。

カラン、とユイが持っていたバットが地面に落ちる。

そんな様子すらも気にせず、更に彼は言った。

「俺が結婚してやんよ。これが……俺の本気だ」

そこにいたのは……青い髪の青年。

日向だった。

「そんな……先輩は本当の私を知らないもん」

「生きてた時のお前がどんなでも……俺が結婚してやんよ！　もしお前がどんなハンデ

を抱えてでも!!」

「ユイ歩けないよ……立てないよ」

「どんなハンデでもつつつたろ!!」

「!?!」

弱音を吐くユイに、日向が叫ぶ。

日向のその目は……まさしく本気。

決意をした人間の目をしていて。

そして日向は、更に言った。

「歩けなくても、立てなくても、もし……子供が産めなくても。それでも俺は、お前と結

婚してやんよ！　ずっと側にいてやんよ」

「……」

ユイの顔が、嬉しさと不安が入り混じったような表情となっている。

だが、どちらかといえば嬉しさが勝ったような表情だった。

「ここで出会ったお前はユイの偽者じゃない。ユイだ。どこで出会ったとして俺は好きになっていたはずだ。また60億分の1の確率で出会えたら、そんな時またお前が動けない体だったとしてもお前と結婚してやんよ」

優しい口調で、日向はユイにそう言った。

しかし、その言葉を聞いたユイは、悲しそうに呟く。

「出会えないよ。ユイ、家で寝たきりだもん」

「俺、野球やってるからさ。ある日お前んちの窓パリンツて、打った球で割っちゃうんだ。それを取りに行くとき、お前がいるんだ。それが出会い。話するとき、気があつてさ。いつしか毎日通うようになる……介護も始める。そういうのはどうだ？」

日向のその言葉を聞いて、音無はその光景を想像した。

そして……微笑ましいと思ひ、思わず笑みを隠せずにいた。

ユイは、最後にこう尋ねた。

「ねえ、そんなときはさ。私をいつも一人きりでさ、頑張つて介護してくれた私のお母さん……楽しんであげてね」

その問いに対して、日向は短く、しかし確かな言葉を言った。

「任せろ」

「……よかった」

これで、ユイが抱えてきた後悔……未練は消えた。

身体が軽くなつていくのを感じる。

地面に足がついていないような、まるで空気になつていくような、そんな感じ。

だが、そんなユイに……。

「それでいいのかわ？」

「「え？」」

第三者の声がかげられた。

第三者……という表現は間違っているかもしれない。

彼は確かに、今回のことに対して関連していた、当事者の一人。

棗恭介が……そこにいた。

「ユイ。確かにお前の未練はなくなった。日向がそう言ってくれたから、母親の苦労が

減つたんだ。だから……今度はお前が幸せになる番だ」

「へ？ 私……幸せになる番？」

「何言ってるんだよ……棗」

イマイチ恭介の言っている言葉の意味が分からない、ユイと音無と日向の三人。

しかし、そんな三人を放っておくように、恭介が言った。

「お前の母親が楽になったんだ。母親想いなのはよくわかった……だから、今度はお前が幸せの時を感じる番だよな。それからでも、遅くはないんじゃないか？」

「……よく分からないけど。まあ多分そうなんじゃないかな？」

あまりよく理解はしていない様子のユイだったが。

そんなユイと日向の手を引いて、恭介がその場を離れて行こうとする。

「お、おい！ 何をする気だよ棗！」

後から音無もついて行く。

そんな音無や、たつた今恭介が手を引いているユイと日向に、満面の笑みを浮かべて。

楽しそうな笑みを浮かべて、恭介が言った。

「サプライズだよ！」

※

「ここって……体育館か？」

恭介に連れられて三人がやってきた場所は、体育館だった。

何故か扉は固く閉ざされていて、雰囲気も何処か敵かだった。

「おっと。日向とユイの二人はちよつとした準備があるから、先にあそこの体育倉庫に行ってくれ」

「体育倉庫？ ああ分かった」

「けど……本当に何するの？」

日向とユイの二人は、恭介にそう尋ねる。

しかし、恭介は笑顔でこう言うだけだった。

「行ってみてからののお楽しみだ。楽しみは最後に知るからこそ楽しいんだろ？ どんないことが起きるのか想像する時間もまた、楽しみの一つだ」

「は、はあ……」

恭介が何を言っているのか、三人にはイマイチ理解出来なかった。

だが、そんな中に。

「お二人とも、どうぞごちらへ」

「え？」

何故かユイと日向を迎えにきた、遊佐がいた。

その横には、小毬の姿もあった。

「私達がコーデイナートしちやいますよ」

「こ、コーデイナート？」

「遊佐、これは一体……」

「行ってみれば分かりますから」

無表情で遊佐が告げた後、小毬がニコニコと笑いながら、二人の手を引っ張る。

そしてそのまま、体育倉庫の方へと姿を消していった。

「……で、これから何が始まるんだ？」

耐えられなくなったのか。

今度は音無が恭介にそう尋ねた。

恭介は言う。

「まあ口で言うより、目で確認した方が早いだろう？」

そう言つて、恭介は扉を開いた。

そして……中の雰囲気は驚いた。

内装は、かなり変わっていた。

まるで、どこかの教会をイメージしたような、そんな感じだった。

体育館の中央には、レッドカーペットが敷かれていて、どうやら誰かがここを通るようになっていた。

それを囲むように、椅子が規則的に並べられていた。

「遅かったじゃねえか、音無」

「え？ ……藤巻？」

そこには、ゆりを除いた、戦線メンバーが全員着席していた。

戦線メンバーだけではない、リトルバスターズのメンバーもほぼ全員だ。

先ほど日向とユイを連れて行った遊佐と小毬を除くと、ほぼ全員集合と言ったところだろうか。

「棗の奴が集まれば言うから何が始まるのかと思えば……こんなのが始まるんだってさ」

「こんなのって……え？」

体育館の前の方に、文字が書かれた白い紙がかかっていた。

そこに書かれていた文字は……『結婚式』。

「まさか、棗……」

「俺達リトルバスターズのメンバーで何日かかかって準備したんだぜ？ 結構急ピッチ

だったけどな」

笑顔で語る恭介。

しかし、ユイが『結婚』という夢を語ったのは、ほんの数時間前の出来事だったはず。

なのに、恭介は今、『何日かかかって』と述べた。

これは一体どういうことなのだろうか？

「まあ、予想したことだな……準備が無駄になっちゃうかもしれないと内心冷や冷やしてたが、どうやらそんな心配は無用だったみたいだな」

「まったく……恭介氏の勘にも驚かされるな。こんなこと、恭介氏しかやろうと思わな

いだろう?」

椅子に着席している来ヶ谷が、呟くように言った。

「確かにな……けどよく体育館を使用出来たな」

「まあな。校長先生に直訴したら、二つ返事でOKもらった」

生徒が熱心に説得したということもあって、校長もOKを出したのだろう。

「さて、俺の方もそろそろ準備しないとな……ほら、なにやっつてんだよ音無。早く席に着席しろよ」

「あ、ああ」

恭介が壇上の方へ向かう。

そして、しゃがんだかと思えば、神父の格好へと早変わりしていた。

「……お前が神父をやるのかよ」

「意外と似合ってるわね」

音無がぼやき、隣にいた沙耶が純粹に感想を述べていた。

『両名の準備が整いました』

「よし。それじゃあ真人・謙吾。扉を開けてくれ。結婚式の幕開けだ!!」

遊佐からの連絡を受けて、恭介は真人と謙吾の二人にそう指示を出す。

そして、二人によって、扉はゆっくりと開かれて行った。

「[[[[[……]]]]」

その場にいる全員が、息をのんだ。

入ってきたのは、ユイと日向の二人。

それだけなら、何の変哲もない入場だった。

しかし、日向はタキシードを身に纏っていて、第三者が見たら完璧なる紳士だろう。

一方で……ユイの変化はすさまじいものだった。

「……綺麗だ」

それ以外の感想を見つけることが出来なかった。

普段は感じられない、女性としての美しさがそこにはあった。

ウエディングドレスを身に纏ったユイは、いつもの雰囲気を払拭するような美しさを感ずることが出来た。

ブーケはしっかりと、その手に抱えている。

後ろでは、長いドレスの裾を持ちながら入場する、小毬と遊佐の姿もあった。

ユイと日向が壇上に登ると、小毬と遊佐の二人も、席に座った。

それを確認すると、恭介はマイクを使って、言った。

「新郎に問います。そなたはいかなる時があっても新婦を守り、例え身体が動かぬとも、愛していくと、誓いますか？」

「……誓います」

実はここに来る前までは状況をうまく把握出来ていなかった日向とユイ。

だが、入る途中までに説明を受けて、日向とユイは、互いに考えは別だったが、納得はした。

だから、日向はこの状況に戸惑うことなく、冷静に答えることが出来たのだ。

「では新婦に問います。そなたはいかなる時があつても、新郎を愛し続けていくことを……誓いますか？」

「……誓います」

その後で、恭介は二人に言った。

「ではここに、誓いのキスを」

「……」

顔を赤くする二人。

何せ、こんなにも観衆がいるというのに、彼らの目の前で誓いのキスなんかさせられるのだから。

いつものユイだったら、恐らくこの場で暴れ回っていただろう。

しかし、今回は違った。

「……ユイ」

た。

ヘルメットを手にとり、日向は空を見上げる。

「日向!」

「……音無か」

そんな日向に声をかけたのは、音無だった。

「……なあ音無」

「何だ?」

「……アイツは、幸せだったんだよな。報われて、この世界から消えたんだよな? 満足して、それで……消えたんだよな?」

音無の方を向いての日向の問いに、音無はこう答えた。

「……ああ。多分そうだと……いや、絶対にそうだと思う」

「……そっか」

「……よかったのか?」

今度は音無からそんな言葉が返ってきた。

日向は、目に涙をためつつ、答える。

「よかったさ」

「……お前は、今度どうする?」

その問いに、日向は言葉をこう返した。

「俺も最後まで付き合うよ。この世界には、まだ心配な奴らがたくさんいるからな」
そう答えた後で、日向はもう一度空を見上げる。

そこに映る空は、綺麗としか言いようがない夕焼け空だった。

episode19 Last Live

場所は、いつもガルデモのメンバーが練習している教室。

その教室の中では、少し空気が重いようにも感じられた。

理由は一つ……ユイだ。

「あの時のユイの表情……少し前の岩沢の表情にそっくりだった……」

「……ああ、告知ライブの時のことか」

ひさ子の口から出たのは、そんな言葉だった。

話題に出された岩沢は、納得していた。

「ねえ岩沢さん」

「……なんだ、入江」

そして、入江が岩沢に尋ねた。

「その時って……どんな感じだったの？」

「……とにかく、気持ちが悪かったんだ。身体が軽くなって、地に足がついていないような感覚がして……」

「……それが、この世界から消えていく感覚」

岩沢の言葉を聞いて、関根が呟いた。

「さて、話は変わるけど、多分私達の出番はもうないだろうな……」

「え？ どうして？」

岩沢の呟きに、関根が尋ねる。

すると、ペットボトルの中に入っている水を飲んだ後に、ひさ子が答えた。

「『天使』が変わってしまったし、もうこれ以上陽動作戦なんてないだろうからね……
やったところで意味がない」

「え？ ゆりっぺの話だと『天使』は冷酷な方が目覚めちやつたんじゃないの？」

戦線メンバーの間では、そんな噂が流れていた。

それはもちろん、ガルデモのメンバーとて例外ではなかった。

「だからこそだよ。ゆり達が言ってた通り、冷酷な『天使』が目覚めたのだとしたら、いくら私達が陽動作をやったところで、瞬殺だよ」

「し、しおりん……私、それだけは嫌だよ」

「き、奇遇だね……私もだよ、みゆきち」

関根と入江は、互いの身体を抱き合いながら、そんなことを言っていた。

「そんなわけで、今日私達食堂でゲリラライブを行うことにしようと思うんだけど……」

「まあゲリラライブの方が私達にしてみれば似合ってるよね……でも、どうしてまたこ

のタイミングで?」

「それって、もしかして……」

ひさ子が岩沢に尋ねる。

すると、岩沢はこう言った。

「ガルデモラストライブだ!」

※

「ハア……一仕事終えた後のコーヒーは旨いぜ。しかし、Keyコーヒーは思ったよりも味がいいんだよなあ。音無がハマるのも納得がいくぜ」

ベンチに座り、恭介はKeyコーヒーを飲む。

ぐびぐびと、喉を鳴らしてコーヒーを飲んでいた（ホットではないので、こうして一気飲みをすることが出来るのだが）。

「にしても……あとどれだけの人を見送らなければならないんだ、俺達は……」

全員がこの世界から卒業するまで、彼らは見送らなければならないのだ。

ならば自分達が先に消えればいいのかもしれないが、それは無理だった。

この世界にいる人達を卒業させること……それこそが、今の恭介がもつともやりたいことなのだから。

「出来ることなら、救ってやりたい……救える限りの人達を、救ってやりたい」

いつまでも死後の世界に縛られているわけにもいかない。
恭介は、そう考えていたのだ。

「しかしどこの世界に行っても、難癖ある奴ばかりいるもんだな……一緒に過ごしててこんなに楽しい時間を共有できる奴らなんて、なかなかいないぜ？」

日頃の彼らの行動を思い返ししながら、恭介は呟く。

そんな時だった。

「……あ、恭介」

「まさみじやねえか。お前も自販機で飲み物を買ったのか？」

「……まあそんなところかな」

少し汗をかいている様子の岩沢が、恭介の隣に座る。

手に持っているのは、スポーツドリンクだった。

恐らく、先ほどまで練習していて、喉が渴いたからそれを購入したのだろう。

「何か辛気臭い顔してんな……どうしたんだよ。いつもの岩沢らしくないじゃねえか」

「そう？　そうかもね……」

恭介は冗談で言ったつもりなのに。

当の本人である岩沢は、どこかつらそうな表情をしていた。

いや、完全につらそうにしているわけではない。

その中には、決意も秘められていて……表現しきることは出来ないが、とにかくいろんな感情が入り混じったような、複雑そうな表情を浮かべていた。

「……岩沢、何か悩みがあるんだったら、俺が聞くぞ?」

「……ありがとう恭介。恭介になら、話してもいいかもしれない。けどその代わり、戦線のメンバーにも、リトルバスターズの他のメンバーにも、このことは内緒にしたい欲しい……あ、お前と一緒に行動している音無には教えてもらって構わないから。その代わり、私達の準備を手伝うように伝えておいてくれないか?」

「あ、ああ、分かった」

いつもとはどこか雰囲気が違う岩沢に、内心恭介は驚いていた。

しかし、今はそんなことで動揺している場合ではなかった。

岩沢の話に耳を傾けて、その悩みを聞いてあげるべきだと思った。

……それと同時に、とある一つの約束が恭介の頭を通り抜けた。

「(……俺と前にかわした、二人きりでのライブ。それを岩沢は、このタイミングでやろうとしているのか?)」

恭介はその約束を思い出した後で、そんな予想をたててみる。

しかし、予想とは違って、岩沢はこんなことを言い出したのだった。

「私達、ガルデモのラストライブをさ、今夜みんなには内緒で行おうと思ってるんだ」

「ラストライブ？」

意外過ぎるその言葉に、思わず恭介は聞き返していた。

対して岩沢は、真剣な表情でうなづき返したのだった。

「そ、それって……お前達、まさか今日で活動を停止するってことなのか？」

「その通り。ボーカルも一人いなくなっちゃったし、今後陽動作戦なんてこともないだろうからさ。出来る内にやつときたいんだよ。それに……その後で恭介とゆつくり話もしたいしさ。」

「俺と？」

岩沢の言葉が少し意外だと思った恭介。

恭介は、ふとこんな質問を試してみたのだった。

「……もしかして、前の約束の件か？」

「それもある。けど、もっと大切な話だ……聞いてもらっても、大丈夫かな？」

「……ああ、大丈夫だ。だとしたら待ち合わせ場所とかを決めとかなきゃな」

恭介は、特別断る理由もなかったのので、その申し入れを受け入れた。

その後で、場所を決めることにした。

「それじゃあライブが終わった後、学校の屋上に来てもらっても構わないか？」

「屋上か……うん、いいよ」

岩沢は肯定の返事を返した。

「しかし、いくら陽動作戦がないかもしれないからって、そんな性急にラストライブなんてやらなくても構わないだろうに……」

恭介は、そうぼやいていたのだが。

「……それが、お前達の望みでもあるんじゃないのか？」

「え？」

その言葉を聞いて、恭介ははっとしてしまった。

何故岩沢からそんな言葉が出てきたのか。

……答えは一つだった。

「知ってたのか……俺達がやってること」

「ああ。ユイの一件で分かったよ。恭介達が、この世界から私達を卒業させようとしていることをね。特に中心となっているのは、音無なんじゃないのか？」

「驚いたぜ。全部正解だ……ちなみに言うと、『天使』は今までの『天使』で……立華で目覚めたんだぜ？」

「それも知ってる。私達の練習中に入ってきた時、なんとなく雰囲気を感じた。あの時と、何にも変わっていないって」

岩沢は、ほとんど気付いていたのだ。

恭介や音無がやっていること。

奏は元のまままで起きたことなど。

「そんなわけだ。私は後、恭介と二人きりのライブさえやってしまえば、この世界でやり残したことはなくなってしまう。けどアイツらは違う。ボーカルを失ってしまえば、何もすることはなく、ただこの世界に居続けるだけになってしまう。それじゃあ駄目なんだ。だから私は、ラストライブという形で、アイツらもこの世界から卒業させてあげようと思ってるんだ」

「……なるほど。仲間想いの素晴らしいリーダーだな」

「恭介程じゃないけどね」

「よせよ。照れるじゃないか」

「もつと胸を張っても構わないんじゃないのか？ それだけの仕事を、恭介はやってきているわけだし」

「冗談を。俺はただ、楽しいことがあったら、アイツらをそこまで引つ張ってやってるだけの話だ」

しばらくの間、恭介と岩沢は、そんな会話を繰り返していた。

その後で、しばらくの沈黙の時間が訪れる。

「んじゃ、私は練習があるからそろそろ行く」

「ああ……ライブ、楽しみにしてるぜ」

恭介のそんな言葉に、

「……ああ！」

岩沢は、笑顔で答えた。

※

「うーん……何か微妙にテンポがずれるんだよなあ」

放課後。

ガルデモのメンバーが全員寮へ戻った後、一人練習をする少女がいた。

ズダダダダダダダン！ という規則正しいリズムを奏でる少女は、ドラム担当の入

江だった。

「最後なんだから……納得のいく演奏がしたいなあ」

そう呟きながら、入江は練習を重ねて行く。

そんな時に、一人の少年が教室に入ってきたのだった。

「ドラムの音がすると思って来てみたら、……入江だったのか」

「ふわあっ!? ってなんだ音無君か……」

いきなりの訪問者に入江は驚いたが、その正体が音無だったことに、内心安心していた。

だが、同時に知られては行けないと思っていた。

何せ今回のライブは、戦線メンバーにすら告知しない秘密のライブなのだ。

だから、それだけは絶対に守り通さなければ……。

「聞いたよ。今日でガルデモの最後のライブなんだって？」

「ありゃ？」

カツン、とバチが落ちた。

折角決意表明を見せていたところだったのに、その決意はたったの10秒で脆くも崩れ去ってしまっていた。

だがそれ以前に、どういった経路をたどって彼がライブのことを知ったのかを聞き取った。

「あ、あのさ音無君……どうやってその話を……」

「棗から聞いたんだよ。棗自身も岩沢から話を聞いたらしいんだ……大丈夫だ、もうこのことを知ってる奴は誰もいないから」

「……岩沢さん、自分で誰にも言わないゲリラライブって言ってたのに……」

「まあ、岩沢が棗に言ったのは、ある意味では棗のことを信用してたからなんだろうな……けど、いくらなんでもガルデモのメンバー四人だけで何から何まで準備するのは大変だろ？ そんなわけで男手として俺達にも教えたってことになるな」

音無の言葉は、ほとんどが真実で、しかし大切な部分が抜けていた。準備の為に必要だったというのは事実だ。

しかし、『ガルデモのメンバーをこの世界から卒業させる為』という、今回の一件で一番大切な用件が述べられていなかったのだ。

「そっか……それじゃあ楽器運ぶときなんかは、音無君達を遠慮なく使わせてもらっちゃおうかな」

「まあ……お手柔らかに頼むぜ？」

「任せて任せて♪ 一番重い物を持たせてあげるから」

「それは全然お手柔らかじゃないんだけど!？」

「冗談だっ♪」

幽霊騒動の一件以来、音無は入江と話す機会なんて全然なかった。入江の人間像というのがつかめていなかった。

だから、入江と話す時は少し戸惑いを見せてしまうのは事実だった。

「にしても、入江って本当にドラムうまいよなあ。お前ってやっぱり才能あるんじゃないかねえのか？」

「……違うよ。これは私がみんなに追いつきたい一心で頑張ってきたからなんだよ」

「追いつきたい一心って……もう十分追いついてるじゃないか。むしろ、お前プロの実

力あるんじゃないか？ ……って、プロに何言ってるんだか」

音無は、途中で自分の発言のおかしさに気付く。

しかし、入江はどこか落ち込んでいるかのような表情を見せるだけだった。

「……どうしたんだよ、入江」

気になった音無が、入江にそう尋ねる。

すると入江は、

「……私さ、みんなに追いつく為に必死に頑張ってきたんだ。最初の内はドラムだってそんなにうまく叩けなかったんだもん。だからその日からみんなよりも練習を重ねて、そしてようやくと今日まで辿りつけたんだ。だから決して、才能じゃないんだよ、私の場合は。ユイはその分、ボーカルとしての才能があったから、短い間だけでも、ほとんど練習なしにあそこまでうまく歌えたのかもしれないね……ギターの方はちよつとよれよれだったけど」

「かもな……悪い、さっきの発言を訂正させてくれ。お前はすげえ頑張ったんだな。その努力は、認められるに十分値することでもある」

音無は、入江の言葉を聞いて、先ほど自分が述べた言葉を変えた。

入江は、そんな音無の言葉を聞くと、

「……ありがと。今まで私そんなこと言われたことなかったからさ、なんかちよつと嬉

しいかなって」

「そっか……」

しばらく、二人の間には沈黙の時間が流れる。

互いに、何を言えればいいのか分からなくなったのだ。

やがて口を開いたのは、音無だった。

「そ、それじゃあ俺、行くから……」

「あ、うん……それじゃあまたね、音無君」

「ああ……じゃあな」

そう言うと、音無は教室から出て行った。

その後で、入江に聞こえないような小さな声で、ポツリと呟く。

「……頑張ったな、入江。もう報われても、いいんだぞ？」

「……結弦」

「ん？」

廊下を出た所で、音無は奏に出会った。

奏は、どうやら音無のことを探していたようで、額には少し汗みtainなものも窺うことが出来た。

「どうしたんだ奏。汗かいてるけど……」

「今日のライブの話、聞いてしまったのだけど……」

「あー……そうすれば、生徒会長として止めないわけにはいなくなるのか……」

つまりは、戦闘へと発展しかねない。

それだけは、音無としては何とも避けたい事態であった。

「どうすつか……」一応戦線メンバーには内緒のライブつてことになってるし、戦闘にはならないと思うんだけど……生徒会長としては見逃さないわけにはいかないんだろ？」

「……別に今回限りで見逃しても問題ないわ」

「え、いいのか?」

まさか奏の口からそんな言葉が聞けるとは思っていなかったので、音無は思わずそう言ってしまった。

奏は、別段表情を変えずに答える。

「構わないわ。だって……これもあの人達を卒業させてあげる為のことでしょ? なら、私は協力するわ」

「……そっか」

「その代わり、一つだけ条件がある」

「なんだ?」

そして、奏はこんな条件を出してきたのだった。

「私が食堂に来ていることがバレないように、結弦がサポートしてくれないかしら？」

「……え、それって」

「……私も、ガルデモの最後のライブ、見たいから」

無表情ながらもそう言った奏に、

「……ああ、任せろ！」

音無は、笑顔で答えて見せたのだった。

※

そして、夜。

夕食の為に食堂に集まるメンバー達。

その周りには、もちろんNPCの姿もあった。

「にしても変だな……なんだか真ん中のスペースが妙に空いているんだよなあ……」

「そうか？」

何にも知らない日向の疑問に対して、事情を知っている恭介は何も言うことは出来なかった。

ライブが始まる前にそのことを知られてしまえば、きっと何の目的もなしにライブをやるなどゆりに叱られてしまうと考えたからだろう。

だから恭介は、このライブのことを結局誰にも話さなかった。それは音無とて同じだった。

「しつかしこの麻婆豆腐は相変わらず辛いよな……」

「……そう？　こんなに旨いの……」

「いや、旨いのは確かなんだが……」

そんな音無は、頭に麦わら帽子を被った奏と一緒に、離れたところで麻婆豆腐を食べていた。

奏からの御所望で、先に夕食は済ませておきたいとのことだったからだ。

「……」

ゆりは、食堂の中央を見て、何を考えている様子だった。

その後で、無線機で連絡を入れてみる。

「遊佐。今日は陽動作戦はなかったはずよね？」

『ええ。というか、作戦を指揮するのはゆりっぺさんですよ？　私に聞いてどうするんですか』

「……それもそうね。にしてはおかしいと思ったのよ」

『何がですか？』

無線機からでもわかる、疑問の声。

それに対して、ゆりは答えた。

「それにしても、やけに真ん中だけスペースが空いてるなっと思っただけ……」

『一応岩沢さん達にも確認をとってみますか?』

「ええ、お願いするわ」

『了解』

そして無線機は切れた。

「……岩沢さん、貴女一体何をしようとしているの?」

ゆりはボソッと、小さくそう呟いたのだった。

*

場所は変わって、裏方。

ライブ前に、ガルデモのメンバー四人は集結していたのだった。

「いいか? 今日のライブは特別だ……何せこれを機に私達はバンド活動をやめるんだからな」

「しかし、こんな性急でよかったのか? あれから考えたんだが、もう少し時間をかけて

からでも……」

ひさ子からそんな言葉が洩れるが、

「……いや、これは私が決意したことなんだ。みんなと話しあわなくて申し訳ないとは

思うけど、それでも最後の私のわがままに付き合ってほしい」

「……分かったよ、岩沢さん」

「関根？」

最初に岩沢の言葉に答えたのは、意外にも関根だった。

関根は、岩沢の手を握ったかと思うと、

「私、思ってたんだよね……何事にも始まりがあれば終わりがある。私達のバンドだっていつまでも続けられるわけじゃない。今回が、その終わりの時ってことなんだって」
「それに、鉄は熱い内に打ってって諺があるしね。ずっと先延ばしにしてたら、その内最後のライブすらやらなくなっちゃうだろうしね」

関根の言葉を引き継ぐように、入江が言った。

そんな二人の言葉を聞いたひさ子は、小さな溜め息をついた後に、

「……分かったよ。みんなはもう覚悟を決めていたようだね。なら、私もここで覚悟を決めないといけないよな！」

「そうこなくっちゃ……ひさ子」

「へっ！ ならいつそのこと、成仏するような勢いで、思いつき力を込めて演奏しようぜ！ 失敗したって構わない。けど変に緊張してミスするよりは、自分が今出せる最大限の力を出して、ライブを楽しむんだ。成功させる為のライブじゃない。楽しむ為のラ

ライブを私達でやるんだよ！」

そんなひさ子の言葉は、凄く説得力があった。

この言葉に、岩沢自身ですら胸を打たれたくらいだからだ。

「……そうだね。今日は陽動作戦なんて名目じゃない。真正正銘のゲリラライブだ。ほとんどの人達が私達が今日ライブをやるなんて話を知らない。だから、今日は目いっぱい楽しもうじゃないか！」

「最後だから言うけど……いや、これで最後とは思わないよ！ この世界では陽動作戦が行われなくなるだろうから最後のライブになるだろうけど、ガルデモは永久に不滅だよね！」

「その通りだ関根！ このライブが終わって、例えば私達がこの世界から消えてしまったとしても……次もまた、バンドやろうぜ!!」

ムードは一気に盛り上がりを見せてきた。

ガルデモのメンバーのテンションはマックスだ。

そして、岩沢は宣言する。

「さあ、幕を開けようぜ!! 私達のライブの開幕だ!!」

*

突然、食堂全体の電気が消える。

「な、なんだ？」

「この感じ……まさか」

カレーを食べていた藤巻と高松が、いきなり電気が消えたことに対する違和感を覚える。

そして、その違和感の正体は、電気がついた時に判明するのだった。

「あ、あれは……ガルデモだ!!」

「嘘、何で!? 今日陽動作戦の指示なんて出してないのに……」

ゆりの驚きの声を無視して、入江がバチをタンタンと叩く。

そして、演奏は……始まった。

いつもの陽動の時とは違う、全身全霊をかけた全力のライブ。

陽動の時だって彼女達は本気なのだが、その時すらも凌駕するような、迫力ある演奏。

ドラムもいつも以上に大きな音を出していて、存在感をアピールする。

中でも岩沢の歌は、やはり凄かった。

高い歌唱力の上、彼女は今全力で歌っているのだ。

それこそ、ライブを楽しんでいるのだ。

「アイツ……あんなに楽しそうに歌いやがって」

「〜♪」

「……楽しいのか？ 奏」

何だかりズムを合わせているようにも見える奏を見て、音無は尋ねる。
すると奏は、

「……うん」

さぞかし楽しそうな表情を浮かべて、音無にそう答えたのだった。

そしてそんな表情を見た時……音無はガルデモの実力を思い知らされることとなったのだった。

奏にここまで楽しそうな表情を浮かばせる程、今日のガルデモの演奏は……素晴らし
いものだった。

「……恭介氏」

「なんだ？」

そんな中、来ヶ谷が恭介に尋ねる。

「これは……ガルデモのメンバーの判断なのか？」

「そうだ。少なくとも、俺は何も口出しはしていない……アイツらガルデモのメンバー
全員で、決めたことなんだろうな」

「そうか……なら、私から言えることは一つだけだな」

「何だ？」

その言葉が知りたくて、恭介は来ヶ谷に尋ねる。
そして来ヶ谷は言った。

「最後は全力を尽くせ……かな？」

「……へっ」

ライブは尚も続く。

『Crow song』の次は、ユイ作詞の『Thousand Enemies』。
ユイもガルデモのメンバーの一員として頑張っていたことを忘れない為だろう。
ラストを飾ったのは……『Alchemy』。

彼女達は、懸命に演奏をした。

それこそ、悔いの残らないような、全力の演奏。

「あれ？ 今まで演奏してて、こんな感じって味わったことあったっけ？」

そして彼女達は、徐々に自分達の身体に訪れている違和感を感じるようになる。

最初に気付いたのは……入江だった。

それは……この世界から『卒業』する直前だということを目指していた。

「(こんなに気持ちいいライブ……こんなに楽しいライブ……今まであったかな?)」

「(スゲエ……身体が、軽くなっていく……)」

関根とひさ子の二人も、後からそんな感覚を感じていく。

そして曲がすべて終わり、演奏もすべて終わる。

「……」

そこに残っていたのは、叩く人がいなくなったドラムに、弾く人がいなくなったギターが二つ、そして……マイクの前で完璧に歌いきった、岩沢だけだった。

※

そして、ライブが終わった後。

恭介は岩沢との約束通り、屋上にやってきていた。

空には月が高く昇っており、その輝きはまぶしかった。

岩沢は、そんな月を見上げている状態で、すでにそこに立っていた。

その身体には、アコースティックギターがかけられていた。

「しかし夜の校舎に堂々と潜入して……私達もそれなりに悪だな」

「食堂で勝手にライブ開きといて、今更何言ってやがるんだよ、まさみ」

「それもそうだな……」

導入の会話を少々した後で、その後の会話は続かなかった。

しかし、黙っていてもそれでよかったのだ。

これから岩沢がやろうとしていることが、恭介には理解出来たのだから。

「……恭介」

「何だ？ まさみ」

「最後のライブをやる前に……言っておきたいことがあるんだけど、構わないか？」

「……ああ、別にいいぜ」

恭介は、それを了承した。

岩沢は、少し沈黙の時間を加えた後で、ゆっくりと話し始めた。

「私さ、恭介にお礼を言いたいんだ。だから先にお礼から言わせてもらおう。ありがとう、恭介……お前のおかげで、私はこうして最後の仕事をやり遂げることが出来たんだ……アイツらをこの世界から卒業させるという仕事を、果たすことが出来た」

「俺は何もしてないぜ。お前が勝手に気付いただけだよ。だから俺達は、何もしてない」

「それでもだ。恭介達がやり始めていなかったら、私はこんなことを思いつかなかった。この世界で、アイツらを縛りつけたままにしていた」

岩沢は、どうしてもガルデモのメンバーをこの世界から卒業させたかったのだ。

どうせバンドをやるなら、生まれ変わってもう一度集結してから。

そっちの方が、いつまでも同じ人達を相手に演奏しているよりかはよっぽどいいと思っただからだ。

「本当なら私が一番最初に卒業してたはずなのに……結局最後になっちまったな」

「リーダーらしくていいじゃねえか。そっちの方が何か格好いいぜ？」

「そうか？ 別に格好なんてどうでもいいんだよ。ただ……私としてはちよつとこつちの世界にすぎたかもしれないかなって思ってたよ」

この言葉に、恭介は若干の疑問を感じる。

だが、それを尋ねることはしなかった。

「私さ……この世界で気になってしまった人が出来てさ」

「気になる人？ それって……好きになった人って解釈しても構わないのか？」

「……構わないさ。その人といると、心が軽くなってさ。その人にはたくさんお世話になった。たくさん楽しませてもらった。たくさん話もした……本当に、迷惑もかけた」

「……ソイツは幸せ者だな。お前みたいな美人に想ってもらって、本当に幸せ者だよな」
「そうだと思うのならそれらしく振舞ったらどうなんだ？ ……恭介」

瞬間。

恭介は固まってしまった。

いつもどこか楽しそうに、しかしその裏では冷静に物事を考えている恭介が。

何も言葉を発することが出来ず、ただただ固まってしまっていた。

「え……今、なんて……」

「……二度も同じ表現は使わないよ。ただ、本当にお世話になった……私のそばにいて

くれて、ありがとう……恭介」

「……」

顔を少し赤くしながら、岩沢が言う。

恭介は思った。

「（ここで俺が答えを出してやらなければ、岩沢はこの世界から卒業出来ない……なら、俺が出すべき答えは一つ……）」

そして、岩沢にこう言ったのだった。

「……ありがとうな。俺のことをそんな風に想ってくれて。俺、生きていた頃にそんな相手なんていなかったからさ、何と言うか、その……嬉しかったぜ。けど、残念だが俺はその想いに応えてやるのが出来ない。俺はお前のことを大切な仲間という間柄で見てたからな……いきなり男女間の仲にまでベクトルを変換できる程、俺も器用な人間じゃねえんだよ……それに、軽い返事で、それを受け入れたとしても……お前の為にならないいな」

「……やっぱり恭介は優しいし、説得力があるよな」

少しばかり、岩沢は涙を流していた。

「私は、恭介を好きになれてよかった……その返事が例えどんなものであろうとも、気持ちを支えられたから、もう十分だ。後は……ここで、私の作ったバラードを、恭介に聞

いてもらうだけ。それだけで、私はこの世界から卒業出来る」

「……ああ、その通りだ」

静かに、恭介は答える。

その後で、岩沢に言った。

「さあ、夜も無限じゃない。そろそろ始めようぜ？ スポットライトは、空から差しってくる月の光……これほど素晴らしいステージなんてないんじゃないか？」

「その通りだな。観客は一人だけど……むしろこっちの方が今はいい」

岩沢は、涙をぬぐった後で、ギターの準備をする。

……これから始まるのだ。

岩沢の、本当の意味での最後のライブが。

「本日は私のライブに来ていただき、誠にありがとうございます。これから演奏します曲は、『My song』という歌です。どうぞ最後まで、ご静聴よろしくお願い致します」

「……ああ」

そして、岩沢の歌は始まった。

その歌は、岩沢の人生を表したかのような曲だった。

岩沢の気持ちが込められた、いい曲だと恭介は思った。

「(岩沢の歌って感じがするな……)」

そして、ギターによる演奏と、岩沢による歌が終わった時。

「……」

その場には、最後に岩沢が使用したアコースティックギターが置かれていた。

恭介は、それを静かに広い上げて、そして空を見上げる。

空に昇る満月を眺めながら、恭介はこう呟いたら。

「……また会えた時は、きつと答えを出してやるからな。岩沢」

月の光は、満月を隠すように現れた雲のおかげで、遮られてしまった。

*

夜の校舎内。

響くのは、大山の悲鳴。

駆け付けた男子生徒——野田は、ハルバードを使って、大山を襲う謎の存在を斬った。

しかし……野田は奇妙に思った。

そして、呟いた。

「今……俺は何を斬ったんだ？」

その様子を眺めていた遊佐が、無線機を使ってこのことをゆりに報告する。

しかし、無線機から返ってきた返事は、こうだった。

『影？ もうちよつとちゃんと言明してよ』

これに対して、遊佐は言った。

「影としか説明出来ません。今駆け付けた野田さんが倒したところです。大山さん一人では危ないところでした」

その言葉に対して、遊佐に対する返答ではないのだが、ゆりはこう呟いた。

『危ないって……何が？』